

昭和49年7月20日印刷 昭和49年8月1日発行 8月号（第28巻第8号）毎月1回1日発行 昭和51年4月20日第3種郵便物認可 昭和52年4月21日読売大印特別許可認許第210号

奇譚クラブ



新しい風俗文献誌

奇譚クラブ

1974・8

THE KITAN CLUB

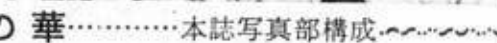
Published Monthly by
Akatsuki Shuppan
Osaka Japan



雑誌 2805—8

¥600

カメラ・ハント楽我記……辻村
女体緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三 隆



女体緊縛の華

・本誌写真部構成

非情な責めの終末	長井葉津子
両手吊りの晒し	中河恵子
柱縛りの完了	川路叢子
処女縛りとまどう	三浦純子
麻縄に身をゆだね	中河恵子
盗視するS Mの目	佐々木真弓
イルリガートルを前に	恵子
華麗な開股責め	中河恵子
開股の正面と背面	金原加奈子
難妻は縄を知りぬ	酒原好美
奪取の人身御供	酒原好美

緊縛女体の光と影

編輯部構成

ハリツケ晒し	愉悅のひととき	鏡の前での幻想	開股縛りの黒髪	奇責に乱れた花	M女二輪の花	亀甲縛り媚態	足吊りのある風景	猫の目のような女	日本式高手小手縛	責めてみたい騎眼の女
左近麻里子	川路真蔵子	前田真蔵子	中河恵子	渡部川恵子	中河恵子	絹川恵子	緒川恵子	シーラ・ゲニー	シーラ・ゲニー	

可憐な怪物……
ながし目の天使……
妖蛇の着になる……
酒蛇の洗礼……
奔弄されるまに……
海老縛りの妙味……
柱につながられた女……
痛さをこらえる異国の女……

長井葉津子
佐々木真弓
川路叢子
関谷富佐子
前田貞知子
川路叢子
長井葉津子
シラ・ケ丁

實の果の露観……
痛打の一瞬……
ホステス裸人生……

前田貞知子
関谷富佐子
佐々木真弓

◆本誌三百号突破記念◆

1

▽賞
金△

形式は、小説、創作、読物などのフィクションでも、告白、本誌、手記の形式で

入選作品	第一席	二十萬円	1篇
入選作品	第二席	十萬円	1篇
入選作品	第三席	五萬円	3篇
入選作品	第四席	三萬円	5篇
入選作品	第五席	二萬円	10篇
佳作優秀作品		一萬円	15篇
選外佳作作品		五千円	10篇

ン見フイクシヨト物白結構で手記の見聞記、
 実談やレポーン写真、ルポルタージュも大に
 歓迎されます。飲み交わす機会が、
 欲しい。それと、セーラー服のイメージが、
 っせいの如く、感想に手紙、更には論議、意図、戯曲
 なども、模倣を心から選んで、流儀に絶対的、排他的に
 まで野心的な新作に限りません。幾多のS.M.あ

△内容▽

作者の方は登竜門として試みて下さい。

奇譚クラブという題号のもとに発行を続け、

▽規定△

その間、風俗雑誌のバイオニアとしての幾多の辛機を具て奮めながら、読者の省察の里に

原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原稿を提出願います。

き御支援によって、二十数年の厳しい星霜を
よく耐えて今日に至りました。

一、入選作品は出来るだけ早く志上と掲載の
三百枚迄に制限致します。

一、本誌は異色ある風俗文献誌として生長し、いまや、今までの読者の方々の愛護をうけて、

入選と同時に規定の賞金を贈呈致します。尚
掲載の際、発表と支障ありと思われる箇所を

に
よる
数多
く、
Sの
Mの
文傑
献作
誌や
と力
して
が春
の本
誌花
の真
よう
がに

削除することもありますので予め御諒承願います。原稿は原則として返戻は申上げません。

二百号発刊を記念して、更に一層の内容の充

故、原稿御入用の方は前もって
 お願いいたします。

美と清新化を計りたく、皆様の作品に期待して原稿募集を企画しました。

懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿と区別するため、第一頁に「懸賞」とお書き

内容には、本誌に発表するにふさわしいものであれば、どのような傾向のものでも結構です。

住所（又は連絡先）は必ずお書き願います。

マゾヒズムに関連したものを始めとし

は、墓者の氏名を公開したり他へ洩したりなどは絶対に致しません故、御安心下さい。永続

各種ファッション、女斗美、女相撲、変装、生首狂

性のある奇くに作品を発表して、貴方の力量と手腕を、どうか発揮して下さい。

巴風俗、特異風俗習慣紹介、アブノーマル・

の六八、原稿の送付先は、大阪市住吉区大領町四
 曉出版株式会社編集部宛、必ず郵送

に属するものを取り上げて下さい。

込みは固くお断り致します。

100

三者関係のヒロイン

塚本鉄三・撮影

縄の衣裳

△玉木章子▽





フォト「マゾに溺れた美しさ」 △関谷富佐子▽……………古谷由美男……………(29)

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ……………(30)

『「盗」の味噛みしめる初夏の宵』……………塚本 鉄三……………(30)

〔告白〕ある「浣腸マニア」の体験……………(30)

「窃視と浣腸」……………品川須賀男……………(72)

連載小説『大 噴 火』 △第七十回▽……………千葉 青鬼……………(76)

私の近況報告……………(76)

「奴隷妻」を夢みる私……………笠井奈保子……………(84)

連載M派交友録(53) 『絞り取る男と女』……………鬼山 絢策……………(90)

女責め図絵の系譜『現代やくざ気質』……………南 彦造……………(104)

告白『浣腸責めの味を知った私』……………早坂 郁子……………(114)

連載・Mグループ作品『女の虜囚』(6)……………佐治 麻造……………(118)

尻打ちと緊縛プレイ考……………(118)

『ミズサワ・アンダーグラウンド』……………水沢 登……………(136)

連載・時代S小説『紫蘭の門』……………風流極道軒……………(144)

告白『SM開眼』……………中村恵美子……………(160)

夜のエトランゼ……………芳野 眉美……………(166)

体験告白『複婚の花嫁たちプレイ妻』……………瞳 耀太郎……………(174)

随想「私の「女王像」」……………平原 誠一……………(179)

S研放談・プレイ会顛末記……………(179)

前田真知子を囲むダベリ会……………塚本 鉄三……………(182)

前田真知子を囲む会と、その顛末……………塚本 鉄三……………(200)

読者通信……………編集部選……………(258)

カラー・フォト・セクション (十二態)

前田真知子	三浦 純子	矢島 靖子
玉木 章子	苗木 陽子	高村 浩子
藤田 明子	深田 菊子	

三者関係のヒロイン [塚本鉄三・撮影]

縄の衣裳☆奴隷のスタイル☆陶酔のながしめ	
☆玩弄の足挙げ☆鞭撻にあえぐ☆晒し者の自由	
☆惑溺の一瞬☆縄目にむせぶ☆観念したポーズ	玉木 章子
プレイ会の表情☆宙に浮く女体	
☆足指が曲がる☆開股責め序曲	
☆めくるめく思い	前田真知子
可憐な抵抗	高村 浩子
浣腸と縛り☆悦虐の叫び	深田 菊子
下半身の責め	笠井奈保子
むごたらしい縄目	中河 恵子
白豚の調教	苗木 陽子

イメージギャラリー

◎「朝の散歩、楽しい日課」岡たかし (98)
◎「雪責め」須坂旭 (138)
◎「初舞台、裸女さらし」須坂旭 (141)
◎「殺したい程、可愛い女房」岡たかし (150)
◎「白豚旦那、嫉妬に狂う、目下詰問中」岡たかし (155)
◎「アアこれが極楽だ」岡たかし (71)

目次フォト.....前田真知子・笠井奈保子



奇 ク サ ロ ン (217)

浣腸SMについて	竹迫 誠也
白豚・苗木陽子とメス豚	藤田 明子
論評・足にむせぶ豚三匹	山花 快孔
我がマゾの妄想	高浜 逸雄
縛り雑考 (ケモノの悩み)	河西 千恵子
獣の感想・再び感想と滞米記	甲斐 美紀
私の感想・再び感想と滞米記	幸村 十三
前田真知子の麗姿に眩惑	金沢 十三
「S研への夢」	西本奈輪好
夫婦間に加えて下さい	若山 巨彦
深夜のプレイ・フォトより	女斗 彦
裸女と女生首	東 一郎
華麗なツカさん	松坂のぼる
素晴しき「自縛女性」	小田原 一郎
「夫婦プレイ」の体験告白	九木戸 侯
最近のストリップ風景を見て	
関西ヌード見聞録	

まだ見ぬ黒崎麗子さんへ	城 章夫
「三月十七日」のこと	
南加津子さんに捧げる	大原 女生
編集部便り	辻村 隆
「我多控」	
女を愛する幻想画	柴 利好
逆吊り技法	小岩草 一郎
「矢島靖子」をいじめる会	岡崎 一郎
「結成試案」	
「同好会」を結成しませんか	塚本 鉄三
S研ニュース	青木 順一
女性入会者次々に登場す	出雲 弥太郎
ゴム衣通信	東山 映史
夫婦でS研に参加したい	江崎 足夫
最近の緊縛映画から	
「M男の告白」神酒奉戴	
ネクタイルをいただく	
七月号雑感	
躍進期を迎えた奇ク	
七月号「Aセックスの勧め」	
長谷田亀治氏に寄せて	



プレイ会の表情

〈前田真知子〉

奴隷のスタイル

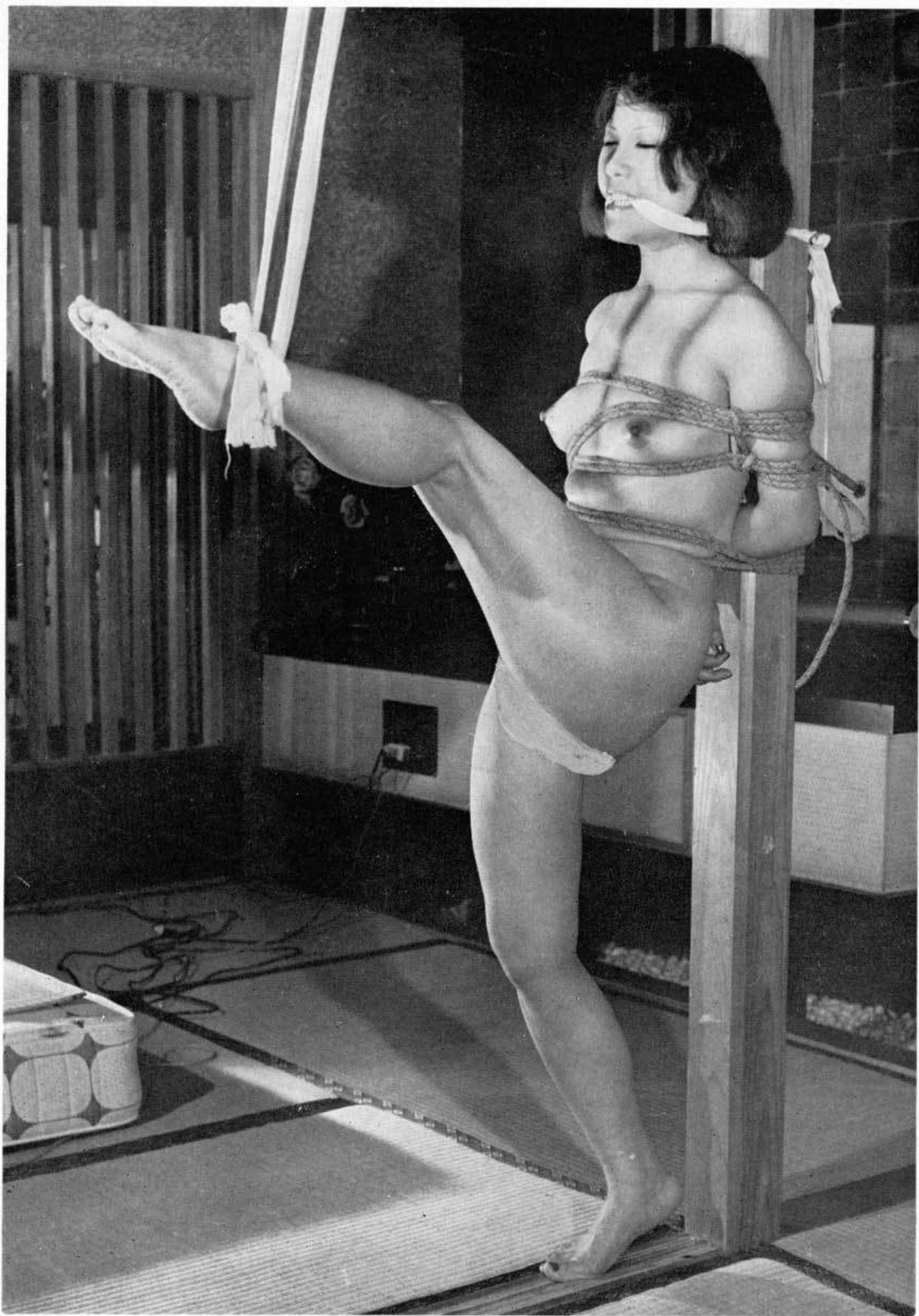
〈玉木章子〉



陶酔のながしめ



＜玉 木 章 子＞



玩弄の足挙げ

＜玉木章子＞

宙に浮く女体

＜前田真知子＞



可 憐 な 抵 抗

＜高 村 浩 子＞



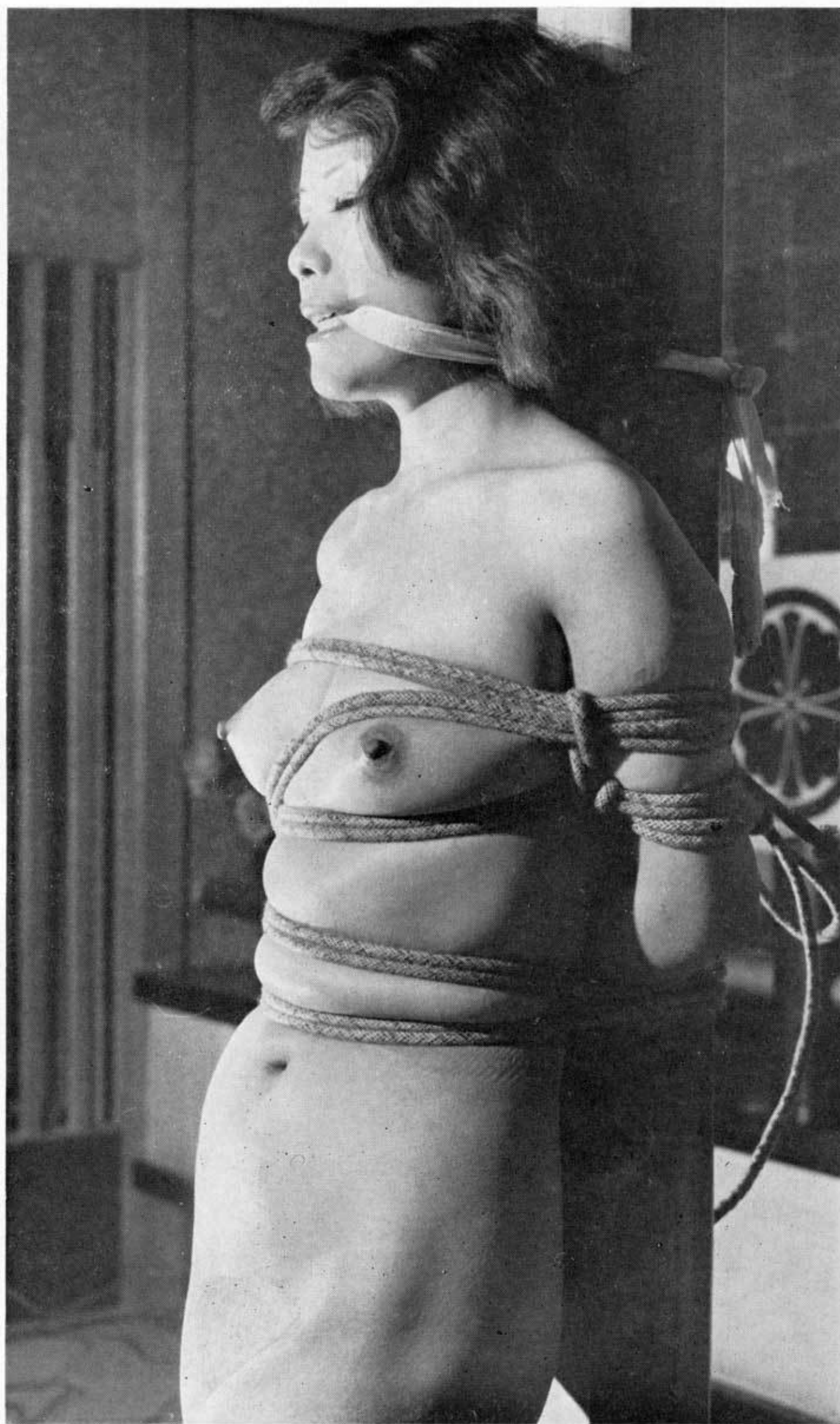


鞭撻にあえぐ

＜玉木章子＞

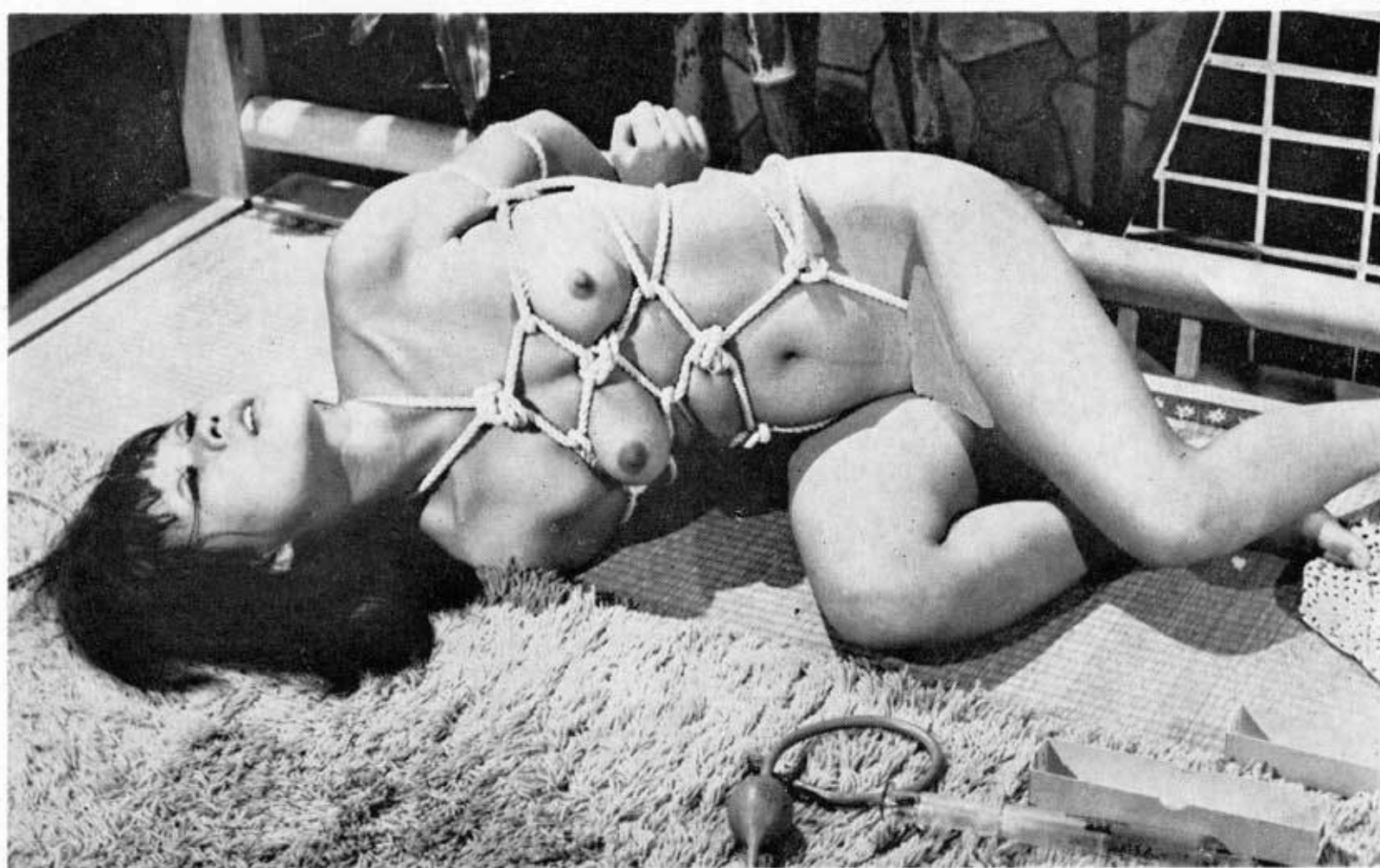
足指が曲がる

△前田真知子▽



晒し者の自由

＜玉木章子＞



浣腸と縛り

△深田菊子▽



下半身の責め？

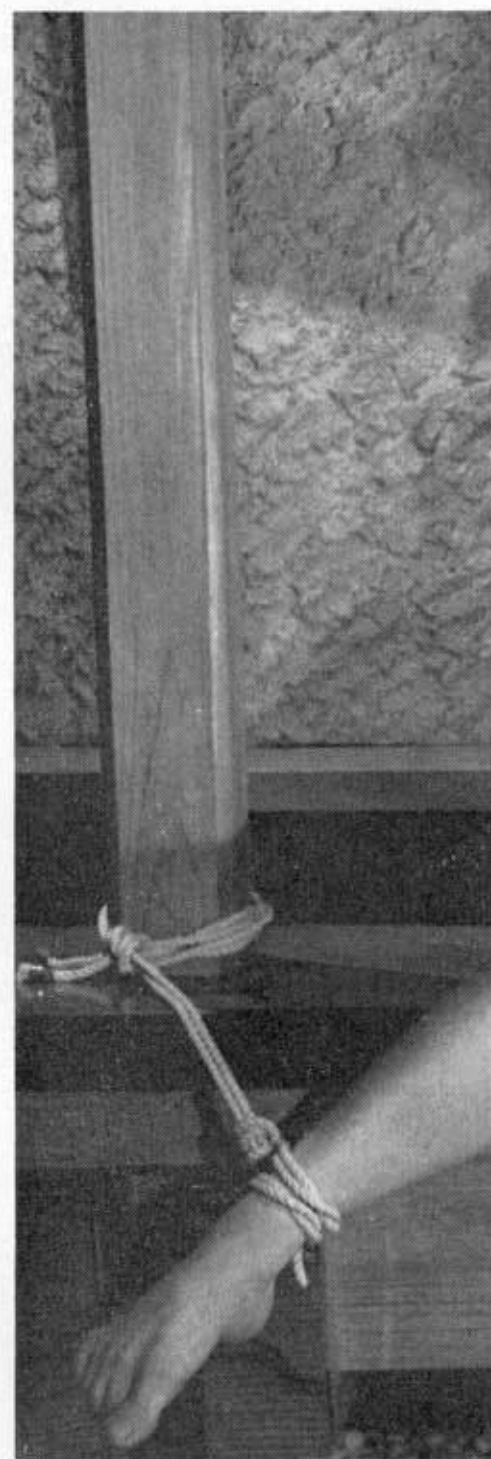


＜笠井奈保子＞



開股責め序曲

△前田真知子▽



惑溺の一瞬 <玉木章子>



悦虐の叫び

△深田菊子▽



めくるめく思い

△前田真知子▽

むごたらしき縄目。

△中河恵子▽



白豚の調教

△苗木陽子▽



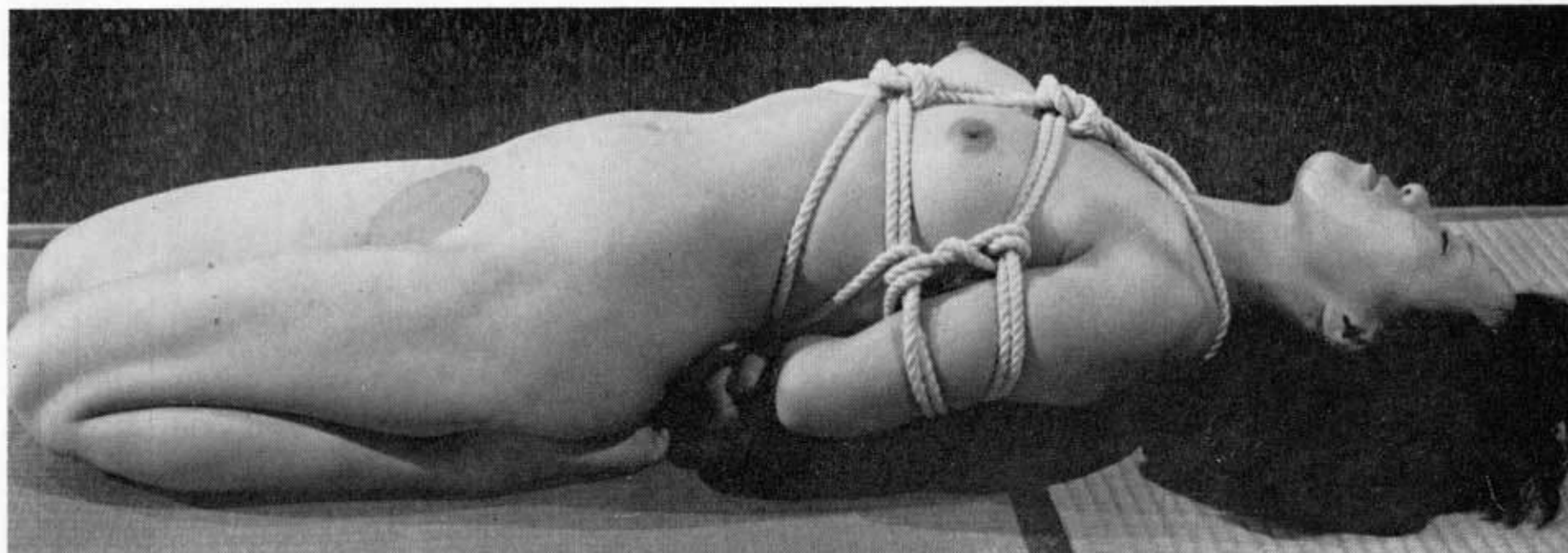
縄
目
に
む
せ
ぶ

△玉
木
章
子▽



観
念
し
た
ポ
ー
ズ

△玉
木
章
子▽



















奇

譚

ク

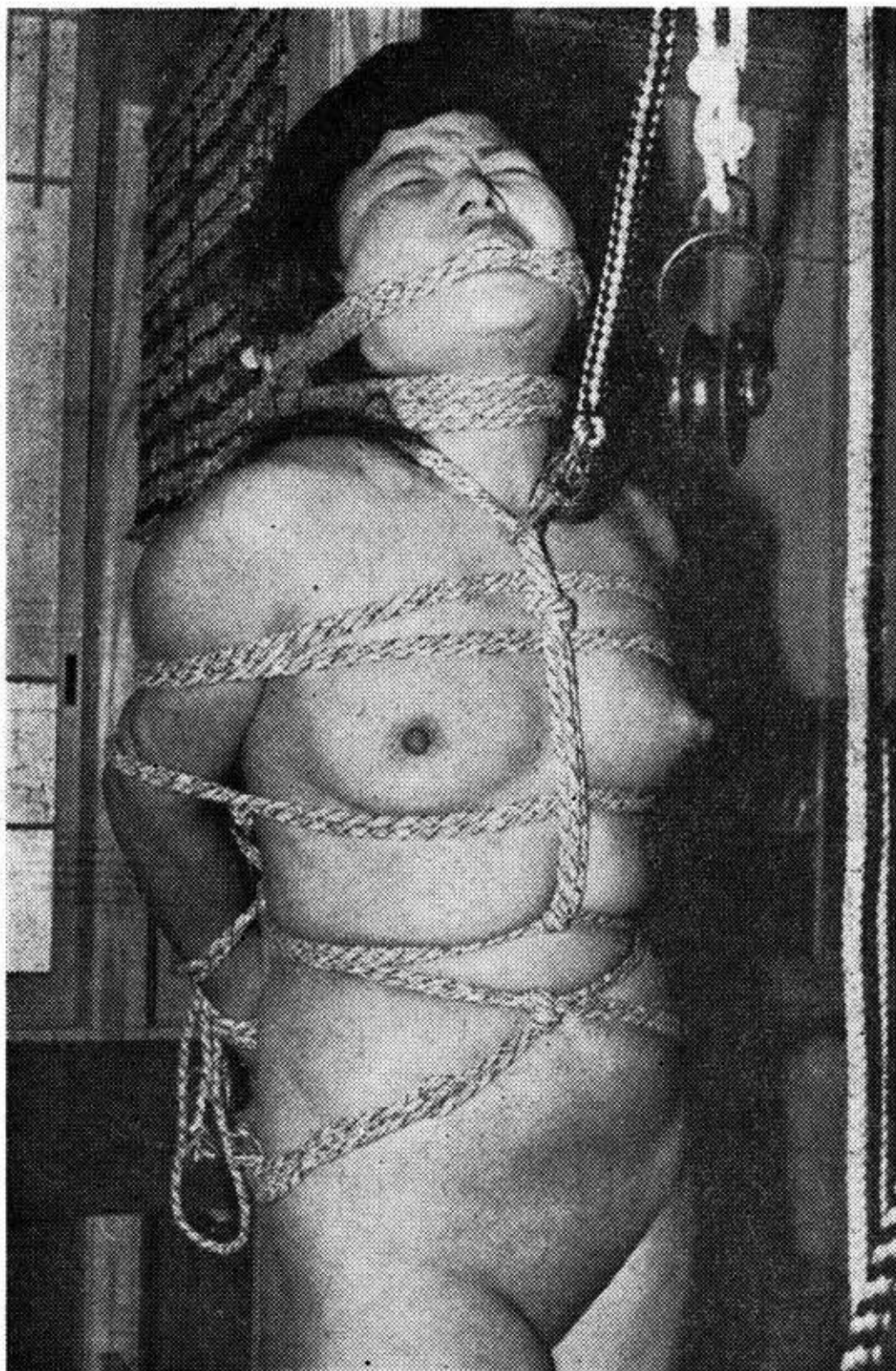
ラ

ブ

1974

8月号

<第28巻 第8号 通刊第318号>



…………マゾに溺れた美しさ…………モデル…………関谷富佐子…………

私の経験からすれば、女性には縄を見ただけで不審の念を抱き、縛らせてくれなどと言おうものなら、立ちどころに変態呼ばわりされるのがオチであった。最近ではSMブームのおかげで女性の間でも次第に理解されつつあるようだが、それでも、女性に軽く縛りの真似事をさせて貰うのでさえ大変なことだ。私は爛熟した女体が縄で厳しく縛られ、悦虐にむせぶ姿を見るのが大好きである。私の

満足するような激しい責めに耐える女性ということになる。やはりマゾ性のある人でないと駄目である。その意味で関谷富佐子さんなんか、私の最もひかれる美女である。その点で奇クの女性には皆魅力的だが、真のマゾを発露していると私に見えるのは、松本たえと苗木陽子、それに中河恵子あたりである。人は好き好きと言うが、私はマゾに惑溺した女性の姿をこよなく愛する。(古谷由美男・記)

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ

「一盗」の味噛みしめる初夏の宵

他人の関係 ― 藤坂弘氏と玉木章子の間

塚^{つか}

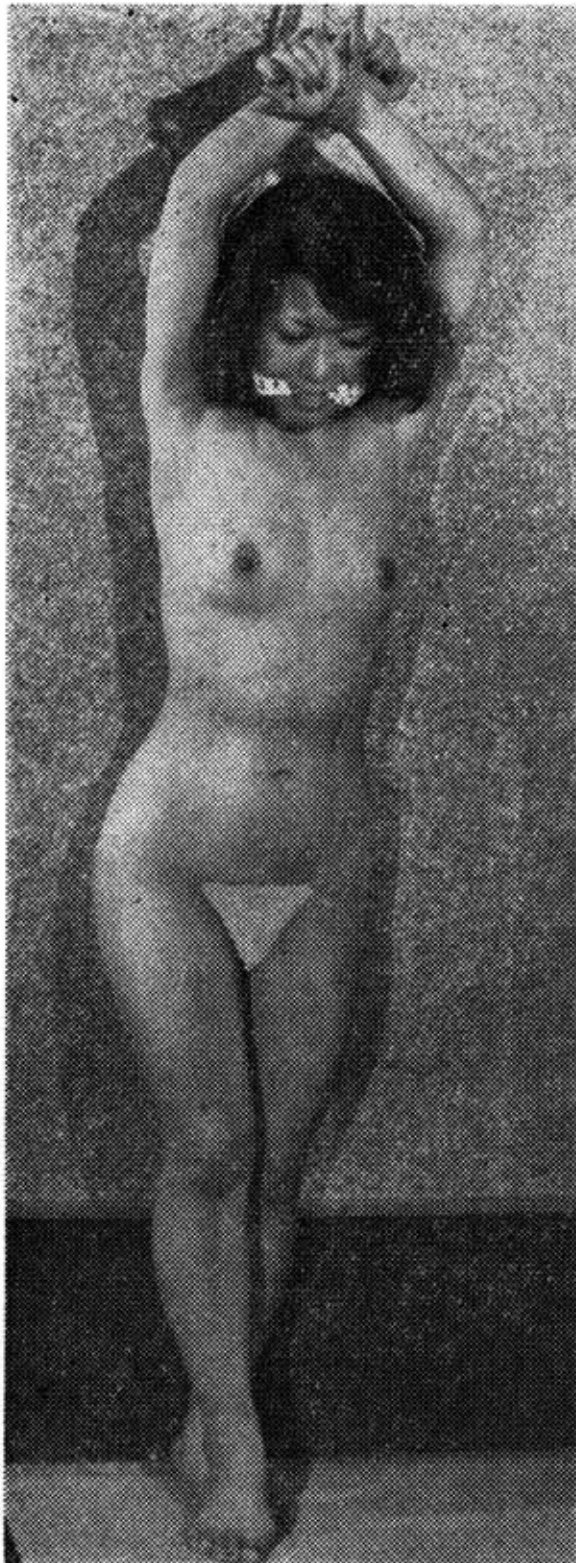
本^{もと}

鉄^{てつ}

三^{ぞう}

奇妙な三角関係

苗木陽子が鈍重で貪婪な白豚であるとすれば、玉木章子は野生味を帯びた敏捷なワイルドキヤットであった。きゅっとくびれた細いウエストが、私の粘っこい責めによって、すすり泣くように律動した。締めつけられれば締めつけるほど、その繊細な胴体は狂ったように喘いだ。つきたての餅のような、ふくよかで柔らかい彼女の足の裏が私の掌の中で微妙な動きを見せながら、ペディキュアした指を、くの字に曲げた。



私は、この幸福な男にあやかりたいと思っ
て、一度でもいいから彼に会ってみたいと考
えていた。いや、実際は、車の運転台にいる
彼を車窓越しにチラと見たことがある。

私が第二回目に、玉木章子を責めたときの
ことである。彼が待合わせ場所まで、親切に
も彼女を車で送ってきたのである。でも、彼
は挨拶をしようとして近寄った私を振りきっ
て車を発車させてしまったため、私は彼と言

葉を交わすことが出来なかった。

藤坂弘氏のことは、玉木章子を通じて、私は可成り詳しく知っているつもりだ。お喋りの彼女は、私が殊更、訊ねなくても、彼とのかことを何かと、よく話すからだ。だが、それと同時に、彼もまた、玉木章子を通じて、私のことは、よく知っている筈だ。

いわば、彼と私とは、△玉木章子▽という可愛い女性を間にして、「兄弟関係」にあるわけだからだ。

今だから、私も潔く告白しよう。

実は、玉木章子と△わけあり▽になったとき、彼女は私に言ったものだ。

「このことは、誰にも内緒にして……」

だから私は、今の今まで、一言半句も喋ったり書いたりしなかった。それが六月号で彼女自身が告白△飼育妻からプレイ妻へ、プレイ妻から奴隷妻へ▽の文中で、浮気の相手の中の一人として大胆にも私の名を挙げていたので、急に気が楽になった。

それは郊外のドライブインレストランで、彼女と二人で逢ったときのことだ。どちらから誘い合うということもなく、自然に、それが当然でもあるかのように、彼女は私の車に同乗し、そして私は、密室のアジトへと車を

走らせたのであった。

そこは洞窟のように天井が低く、小川が底を流れ、小さな橋がかかっていて、空地全体が、いやに湿っぽかった。

僅かに入口から射し込む淡い光だけが頼りだから、奥の方は、余程、目が慣れない限り手さぐりだった。これで、蠟燭でもつけければ江戸川乱歩の妖奇小説の舞台にでも出てきそうな処だった。

「いやに、気味の悪いところなのね」

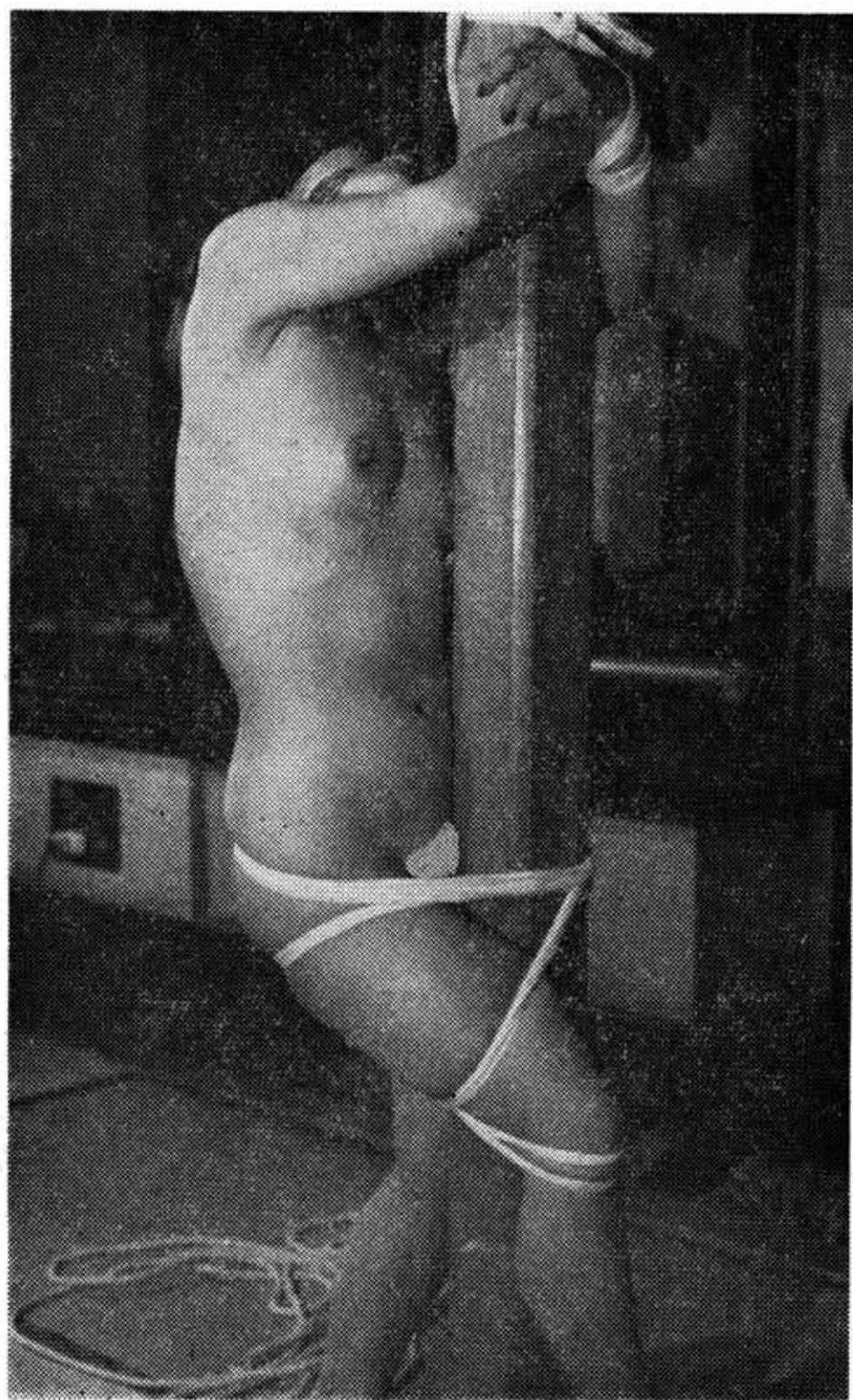
玉木章子は私のあとをついてきながら言った。その言葉さえ、低い天井に反射して、くぐもったような声になる。

「どう？ こんなところだったら……」

私は彼女の、か細い上半身を抱きしめる。

「まあ、こんなところで？ 私、怖いわ」

そう言って、私の両腕の中に全身で溶け込んできそうになる。



私は彼女を抱えて奥へ運ぶ。そこだけ畳一帖分ぐらい平坦になっていた。

嘗て私は小舟の上で致したことがあった。

そのときは気がつかなかったのだが、あとになって、いやにしみるなあと思って見たら左右の膝小僧が、すりむけていた。

今のこのアジトは、下が岩だから、膝小僧がすりむけるぐらいではすまない。

私は自分の着ている物を全部、脱ぎすててそこへ敷いた。次に、彼女の着ているものを脱がせて、その上へ重ねて置いた。

泥棒猫のように、他人の手活けの花を手折るのだから、こんな場所が似つかわしい。まさに「摘み喰い」の心境だ。

私は、ズボンのポケットに忍ばせてあった紐を手にしていた。

「ああ、括るのだけはよして。人が入ってきたら、どうするのよっ」

「キミは縄で縛られるのが好きじゃなかったのかい？」

「私、縛られるのって、そう、好きじゃないのよ。だって、痛いんですもの。でも、彼が好きなので、黙って縛らせているだけなの。だから、今日は括らないで……」

私は白くて、か細い章子の裸身を、ひしと

抱きしめていた。

「私、羞恥責めだったら、好きなの」

彼女は喘ぐように言った。

うす暗い穴倉。水の流れる音がする。

ひょっとしたら人が入ってくるかも知れない——という危惧に終始、気をつかいながら私は野獣になっていった。

穴居時代の人間も、こんな状態だったのだ

ろうか。目が暗さに慣れてくると、あたりのたたずまいが、よく見えた。

二人は、その洞窟の中に、三時間ばかりいた。縛りもカメラもないプレイだった。

私は玉木章子を、泥棒猫のように、藤坂弘氏の目をかすめて盗んでしまったのだ。

一盗、二婢、三妾、四妻——と、よく言われるが、その八一盗の味を私は噛みしめた





のだった。只の酒、奢りの酒ほど美味しいものはない。その只の女が玉木章子だったのだ。

据え膳でも、買った女でもない只の女だ。

こんなことを言うと、藤坂氏に怒鳴られるかも知れないが、泥棒猫の目の前に置かれた鯉節は、本当に美味の極なるものだった。

藤坂氏は、彼女の緊縛フォトが欲しいばかりに、危険を承知で、玉木章子を私に縛ら

せたのであろうか。無料で百数十枚の玉木章子の緊縛フォトを貰わんがために、その代償として彼女を私に提供したのだろうか。

或はまた、他の目的で、私に彼女をほしいままに弄ばせたのであろうか。

例えば、自分の最愛の情人である玉木章子を私になにされることによって、倒錯的な快楽を味わうとか、或はまた、数年に亘るかず

かずのSMプレイに依って到達したマンネリズムを打破するために、私を利用したとか、いったことが、まず考えられる。

それと、もう一つ、これは考えたくないことだが、藤坂弘氏が完全に玉木章子に倦きてしまった、別離のための方便として、私を使ったのではないか——という臆測だ。だが、M女として、貴重な存在である若き玉木章子は、またと得難い女性である。簡単に彼が手離す筈はないし、彼女もまた、彼と別れる気持など毛頭ないだろう。

そうしたことを訊いてみたくて、私は藤坂氏に逢ってみたいと思っていた。出来たら玉木章子と二人で△SM研究会▽に参加して呉れたらよいのだが、若し、二人一緒にでは嫌だというのであれば、彼だけでもS研の会合に出席してほしいものだ。奪うことの無責任さに徹しているつもりなのに、それに、それによって、玉木章子と「わけあり」になった、せめてもの罪ほろぼしにしたいのだ。

亜麻色の髪

新緑の明るい陽光を全身に浴びて、玉木章子は喜々として、やってきた。フジ色のTシ

ヤツに紺と白の縞の入ったサロペット、それにワークブーツというスポーティな服装で私の前に現われた。

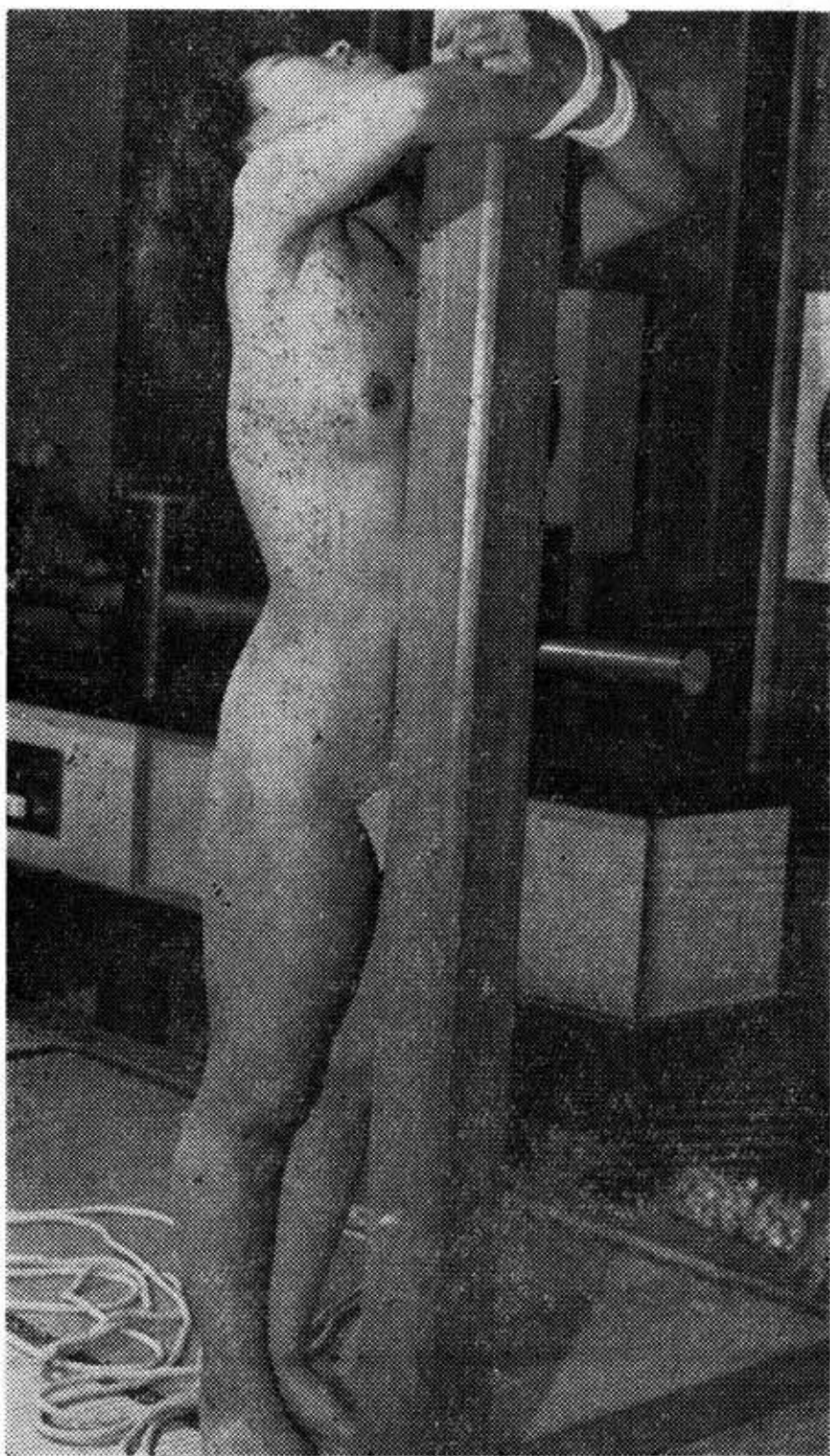
目の前が、急にパツと明るくなったような感じだ。手には、サロペットとお揃いの木綿のジャケットを持って私に寄り添ってきた。

これで玉木章子を責めるのは、私にしては第三回目になるのだ。

この前の第二回目の

ときには、強制浣腸に排泄責め、オシメ着用の排泄やクリップ責めをやって、彼女もまた彼の目を盗んで私と浮気することにマゾの欲求充足を計ったのだろうか。責められることに喜びを感じていることは、私にも、よくわかった。

今、目の前にいる彼女は、まるで旅にでも行くような軽快なスタイルで浮き浮きしている。倒錯とか、マゾとかいった暗さは、その風貌や服装からは微塵も感じられない。まる



で、高校を卒業したばかりのOLのように見受けられる若々しさなのだ。女性とは、まさに魔物であるということをしみじみと考えさせられる彼女の姿だった。

この若やいだ明るい玉木章子の姿を見てみると、この前、全裸のまま、私の目の前で股を開いて排尿してみせた、あの大胆にして奔放なM女の倅を窺い知ることには出来ない。

SMプレイの序曲は、やはり緊縛から始まった。縄はプレイのセレモニーに、欠かすこ

いて！」

私は、すばやく柱に回った手首を縛りつけた。それから、背中と柱とを一本の紐で、ぐるぐる巻きにして、足首も回してから縛りつけた。それから、お尻にオリブ油を、たっぷり、すり込んだ。

「あああ、何を、するのよ」

彼女は頭を振って悶えた。

軽くカールした亜麻色のソフトな髪が、私の頬に、ふりかかってくる。

とが出来ないものなのか。――縛りよりも、羞恥責めの方が、どちらかと云えば好き――と言っていた彼女だが、私はやはり、藤坂氏へブレゼントするフォトのことを意識していた。

全裸にした玉木章子は、羽をすっかり薙り取られた鳥のように、陽の当たったことのない白い肌をあらわにしていたよりなげだった。

「さあ、柱にしがみつ

私は、その柔かい髪の毛を驚掴みにする。

「騒ぐんじゃない！ お尻に、ちょっと、油を塗っただけなんだ」

私は片手で髪を引っばって彼女の顔をのけぞらしておいて、ちんまりと引き締まったヒップを片手で意地悪く撫でまわす。

油を塗るといふのは名目で、実は、お尻を掌で弄び、指先で摘んだり抓ったりして遊ぶのが目的だった。だから、当然、掌はお尻だけじゃなしに、脇腹から、お臍のまわり、そして乳房へと移っていった。

そこで、初めて彼女は、私の悪どい意図をさとったらしく、目の色が変わった。

真赤にマニキュアした指が、それがためにまるで蚕の這うように白く、うごめいた。

「ねえ、身体に傷のつくようなことはしないって、約束して。お願い！」

私が皮のムチを手にしただけで、玉木章子は脅えて、全裸の肢体を、うねうねと、くねらせた。柱を抱いて縛られた女―これこそ、絶好のムチ打ちの好目標なのだ。

私はピュッと鞭の素振りをくれた。

「ああ、ぶたないで、ぶたないで。ムチ打ち以外でしたら、どんなことでもしますから、ぶつのだけは勘忍して……」



「そうか、ムチ打ちが、そんなに怖いのか。それだったら、ムチで叩くのは勘忍してやろう。その代り、僕の言うことは、何でも聞くなって、約束をするね？」

「ええ、そりゃ、約束します。でも……」

「でもも、へったくれもあるもんか」

私は手にしたムチを投げ捨てると羽織って

いた浴衣を肌脱ぎになるなり、玉木章子の背後から抱きついて両手を胸に回した。

スベスベとした絹羽二重のような餅肌だ。

そのねっとりとした餅肌が、私の胸、腹に

へばりつく。えも云えぬ心地よさだ。

「藤坂氏が、よく、この素晴らしい女体を、僕のところへ寄こしたものだね。ホラ、このお

「っばいも、お臍も、みんな、こんなにして、弄ばれてしまふんだよ」

「いやよ、いやよ。くすぐったいわ」

「じゃあ、操るのだけは許してやろう。彼はなんと云って、キミを寄こしたんだい？」

「縛られた写真を沢山、撮ってもらって来いだって……言ってたわ」

「ただ、それだけかい？」

「それから、思いつき責められて来いって言って、ウフフと笑ってるのよ」

「責められるっていうのは、こういうことをされることかい？」

私は、章子のぐっと、くびれたウエストに両手を回し、お尻に頬を、くつつけた。

「いやよ。意地悪しないで……」

うねうねと、裸身をくねらせる玉木章子。

私は彼女の足首と胴を括っていた紐を解いた。両腕で柱を抱えたような格好の女体は、私の目と手の攻撃を、まともに受けて悶えながらも、今や、どうすることも出来ない。

「キミの鬚剃り姿を是非、見たいって、言う読者の方があるんだよ。どうだ、今日はひとつ、剃毛をやってみようか？」

「デイモウって？ それ、なになの？」

「わからないのかな。ほら、ここのおヒゲを

奇麗に剃ってしまふんだよ」

私の手は、お臍から下へ滑ってゆく。

「ああ、そんなこと、絶対にいやよ。私って凄く、うすいんですもの。惜しいわ」

「うすい？ 何を言ってるんだ。なかなか、立派じゃないか。これだけありゃ、まあ、普通並み以上だよ。そう卑下することないよ。ツルツルの尼さんにしてやろう」

「いやよ、いやよ。勿体ないわ」

「勿体ぶるなよ。すぐに生えてくるよ。それに、章子は外の風呂へ行くってわけでもない

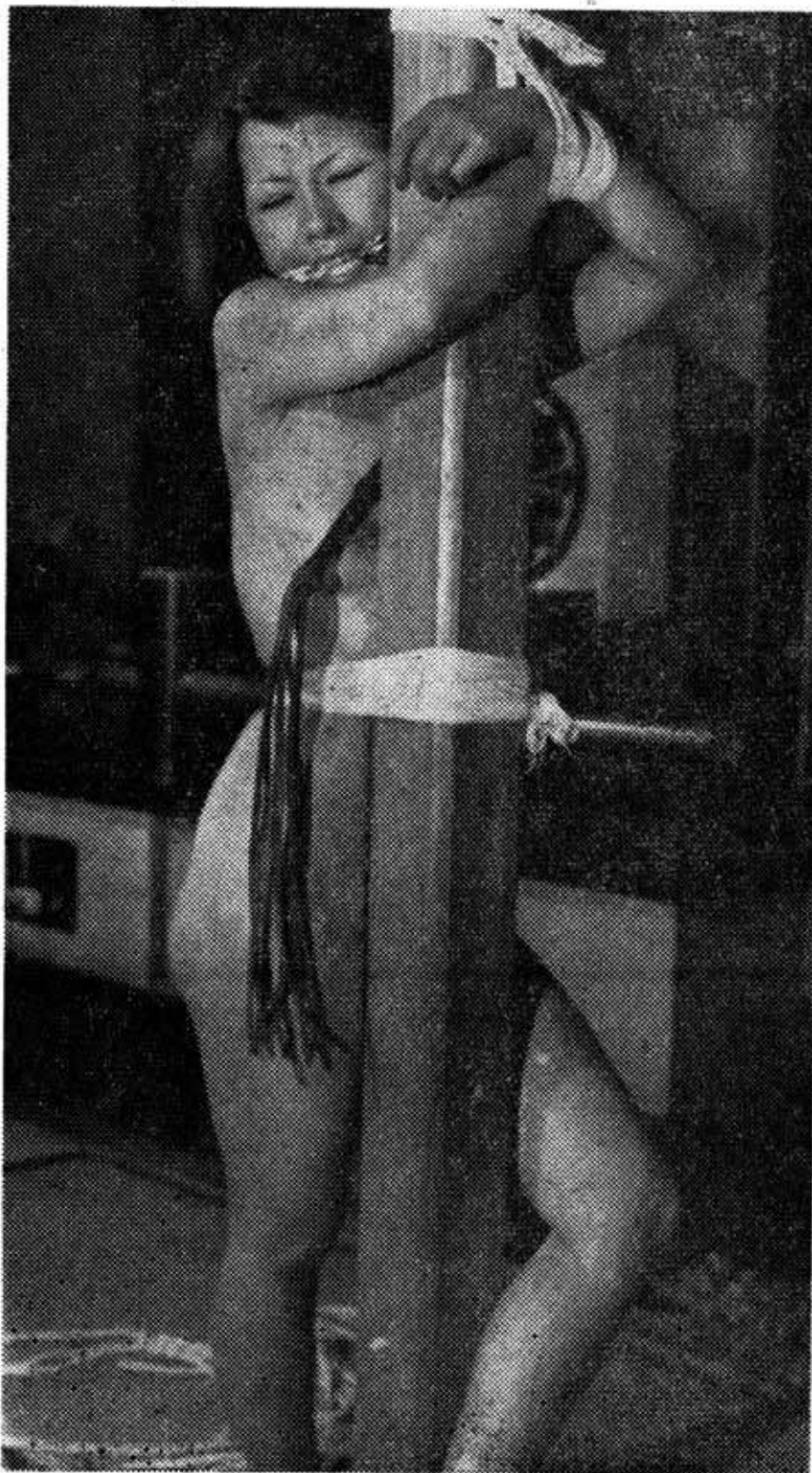
んだから、いいじゃないか」

「……でも、彼が、何と言うかしら」

「そりゃ、きつと喜ぶよ。たしか、3月号だったかに、小池明男とかいう読者の人が、章子の剃毛姿を、ぜひ見たいって書いてるよ。

だから、今日は一つ、そいつをやろうかと思つて、僕も期待して来たんだ。童女のようにすべすべした章子の緊縛フォトを見たら、きつと、藤坂氏も大喜びする筈だ」

「ひゃー、そんなの、されたことないわ。雑誌には、そんなこと書いてるけど、あれ、本





「当にやってしまうの？ 信じられないわ」

「本当だよ。こうやって、ほら……ね」

「あら、痛いじゃないの」

「ムチ打ちも嫌、剃毛も嫌じゃ、許されないよ。どっちの方を選ぶんだ」

「どちらも嫌なの。それ以外の責めなら、どんなことでも受けますから……」

「だったら、こんなことなら、いいの？」

「私の手は前から後へ、お尻を責める。」

「おおお、なぜ、そんなに、私の嫌いなことばかりするのよ。ゆ、許して……」

「なにを言ってるんだ。この前は、あんなに浣腸責めばかり、やらしたじゃないか」

「ああ、あのときは、そりゃ、覚悟してたも

の。仕方がなかったのよ。別に好きじゃなかつたけど、貴方が無理になさるんですもの」

「だったら、今日も覚悟するんだな。僕の目には、満更でもなかったように見えたが、無理に責められたから、仕方がないって、言うんだな。まあ、それもいいだろう。どうせ、みんな、やられるんだから……」

「ええっ、何て、言ったの？」

「何も言わないよ。それより、ぼつぼつ、三つの責めをやるとしようか」

私は章子の右足首に紐を結びつけると、ぐっと、水平になるまで鴨居に引き上げた。

「ああ、何をするのよ。痛いわ」

脚は水平より、まだ上にあがりそうだが、私はある魂胆があつて、そこで止めた。

「ね、ねえ、剃るのだったら、一番あとにしてよ。ね、お願い。私、そんな格好、これから、責められている間、ずっと、見られるのかと思うと、とっても恥かしいわ」

「そうか。だったら、こんなに、チョキン、チョキンは、いいって、わけなのかい？」

私は秘かに準備してきた洋鋏を用いる。

「ああ、惜しいわ。勿体なくって……」

「ほら、これが、章子の……だよ」

私は彼女の目の前に、それを見せる。チラ



ツと横目で見たまま、あわてて目を伏せる。そいつを部屋中に吹き飛ばしておいて、またチョキンチョキンとやる。

吊った右足が激しく揺れ、お尻がもぞもぞと、右に左にゆすぶられる。

私は鉄を捨てて、両手でお尻にとりつく。片足を吊られているので、彼女は、もう、どうすることも出来ない。

可憐なお尻は、私の弄ぶままだ。こじんまりと引締まった可愛いお尻だ。

なんとという魅力的なお尻だろうか。

水蜜桃のような真白くて水々しい双丘を割ると、中から香り高い菊花が押花のように出てくるなんて、全く可愛いものだ。

色といい、形といい、それに、細かいヒダがあるところなんかも、水蜜桃の種そっくりだ。菊の花の中の桃の種だ。この種のヒダが括約筋の締め具合によって、まるで微笑んでいるように見えるのだ。

ああ、なんとという可憐な菊の蕾なのだ。

アヌスには色素の沈着が少しもなく、小さな菊花の蕾も、まわりの皮膚の色と余り変りはなくて、美しい皺が四方に走っている。きゅっと軽くつぼめた剽軽なオチヨボ口^{ぐち}は今にも、何かを語りかけようとしているかの風で、嘗て、他人の手で責められたという痕跡は、さらさらない。

「ね、ねえ、ね。手がしびれてきたわ。ホラこんなに、指の色が変わってきたのよ」

見れば、マニキュアした爪が、真赤に輝いて見えるほど、指は青白くなっている。

「よし、それじゃ、紐はほどこいてやるが、これで責めが終ったと思うなよ。手のしびれが取れるのを待っている間も、そのまま、素裸でいるんだっ」

右足を無理に挙げさせられて、左足一本で立ったまま、もがきまわったから、体重が柱を抱えて括られた両手首に掛かったためなのだろう。手首には赤い縄のアトが二本宛、くつきりと残っている。

色が白いだけに、余計に目立つのだ。

紐を解くと、彼女は、くたくたと、くずれるように、その場へ尻餅をついた。

「わあっ、しびれた指が戻ってくるのって、たまらないわ。指の腹にチクチクと、針を刺

「されているみたい」

「章子が、あんまり暴れるから、紐が締まったんだよ。どら、見せてごらん」

私は、彼女のふくよかな手首を手で把って指先へかけて、軽くマッサージしてやる。

「だって、貴方が、変なところを見るからよ」

「変なところって？」

「そうよ。あんなとこ、片足を挙げさせといて覗かれたら、誰だって、暴れるわよ」

「フン、そうか。だったら、こういうことなら、いいんだろう」

私は、手にしていた彼女の手首を、ぐいと引き寄せて首に手を回す。ソフトなタッチのカールした毛髪が頬に、ふわっと触れる。

亜麻色のウェーブが揺れている。

「毛を染めているんだね」

「ええ、昨日、セットしてきましたの」

「今日、こんなにして、責められたら、折角のセットも台なしになってしまうナ」

「ええ、いいわ。どんなに乱れたって、かまわないって、覚悟して今日は来ましたの」

「こんなことをするなんて、藤坂氏は知っているのかい？」

「いいえ、ちっとも知りませんわ。彼は只、私が縛られて、写真を撮られるだけだとばかり思っていますわ。だから、このことは彼には内緒よ」

「そりゃ、僕も内緒にしときたいよ。だが、章子が六月号の告白で、あんなことを書いてしまったから、内緒になんか出来ないじゃないか」

「いいのよ、いいのよ。それより……」



「さっきから、ずっと素裸のままでいたというのに、彼女の肌は、いやに温かかった。」

「責め」は、かくまで女体を豊醇な酒壺に変えてしまうものなのか――。

私は、その甘美な妖酒をむさぼり飲んだ。

傷一つない真白い女体が、私の両腕の中で
えも云えぬ快い律動を、くり返していた。
私の掌は、彼女のスベスベした肌の、あら
ゆる個所を滑っていった。

夢のような「痺れ」の一瞬だった。

まさに、△一盗▽の素晴らしい味だった。

奪うことの無責任な快感の連続である。

「藤坂氏は章子に何て言ってたんだい？」

「思いつきり、いじめられて来いって……」

「ただ、それだけ……？」

「それからね」

「それから？」

「こんなことも、されて来いって……」

彼女は、私の両股の間へ、自分の片足を滑
り込ませてきた。

「ウフフフ、今のは冗談よ。でも、私って、

こんなに若いのに、空閨を守ってんのよ」

玉本章子の本性が、とうとう目の前にあら
われてきたって感じだ。

一盗の味よし

「羽化登仙」という言葉は、こんなときの気
持を言うのだろうか。

汲みせど尽きせぬ泉——それを私は、むさ

ぼり飲んで、まだ飲み足りなかった。

その飲み足りなさ、私に、やるせないば
かりの甘くて物悲しい余韻を与えてくれた。

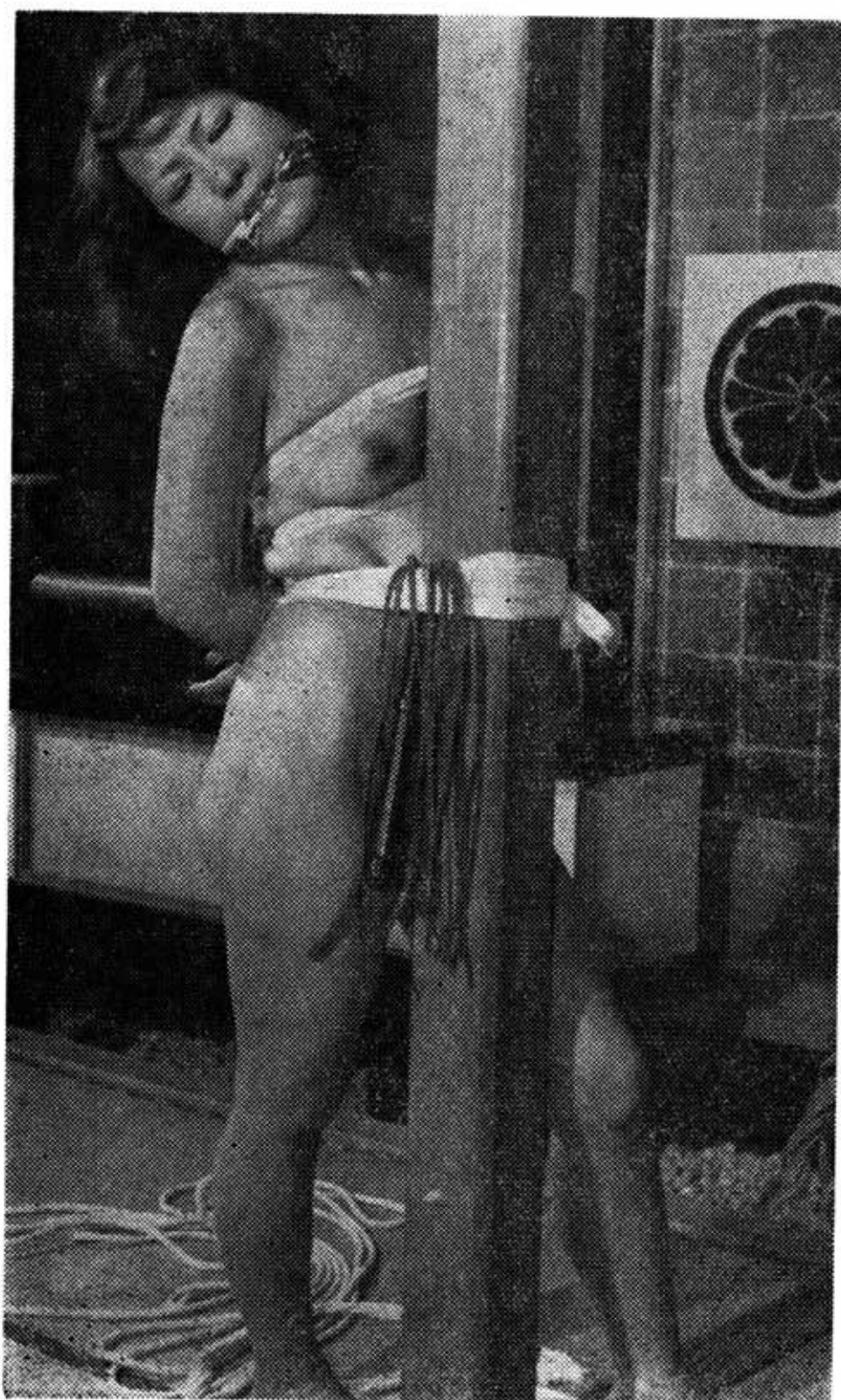
まだSMプレイの序の段階で、こんなこと
になってしまって、私は淡い悔恨の念に、さ
いなまれていた。

このまま、惑溺の泥沼の中に没入してしま
いたいという気持と、更に彼女の裸身の上に
あくなき責めの暴虐を加え続けてゆかねばな

らないという気持が互いに相剋していた。

もしも、カメラ・ルポを書かねばならない
という至上命令と、藤坂弘氏に玉本章子の緊
縛フォートを贈呈するという約束がなかったな
らば、私は、このまま、写真撮影をやりたく
なかった。野性的なワイルドキャットと、ほ
しいままに戯れていたかった。

腕の根元で私の首を巻いてくる、軽くて、
しなやかな腕。躍るように、よく跳ねあがる



のびやかな脚——。それはみな、若々しさに溢れていた。手も足も、生活の苦勞を味わっていない柔らかさを持っていた。

「私、この間、ベランダに、鉢植えのお花を植えるので、土を運んだの。そしたら、こんなに、手が荒れてしまっ……」

「マニキュアした指で、そんな土運びは無理だよ。ゴムの手袋をしたら、よかったのに」

「それが、あの、お医者さんが手術するときを使う薄いゴム手袋を買ってきて使ってみたの。そうしたら、すぐに破れてしまったわ」

「そりゃ無理だよ。炊事用の厚いゴム手袋で

やったらいいんだよ」

「あんなの、はめて、

お花なんか植えられないわ。だから、素手で

やったの。そうしたら

こんなに、手が荒れて

しまっ……」

「そうか、どんなに荒

れてしまったか、これ

から、僕がよく調べて

やろうナ」

私は章子の両の手首

をXの字に交叉させて



白晒の紐で、ぐっと縛って、余った縄尻で乳房の上と下を締め上げてから縄止めした。

彼女のお腹がびったりと柱にひつつくように向わせておいて、別の紐でヒップと柱と一緒に括って逃げられないようにした。

「チョキン、チョキンの断髪式とアヌスの点

検は済んだから、今度はムチ打ちだったね」

「ああ、ムチでぶつのだけは、やめて……」

「やかましいっ。それでも噛んでおけ」

私は上下の歯の間に布片を噛まして、ぎゅ

っと絞りあげる。唇の両端が喰いちぎれそう

に、その布片が喰い込む。

「うう、うう……」

途端に、章子の声が、くぐもってしまう。

私はムチを手にした。

彼女は、小鼻をピクピクと小刻みにふるわ

せた。縛られた女体の可憐さと淫らさが同居

したような章子の肌の艶々しさだった。

ピチッ

小じんまりした臀部にムチは炸烈する。

「ううう、うう」

力まかせに打っているのではないが、忽ち

にして彼女は呻いて、のけぞった。

胴が柱に括られているので倒れることはな

い。きゅっ、きゅっ

と柱で紐がすれて泣く。

「そらっ、お尻にムチ

が、ぶち当たるぞ」

私の掛声で章子が、

恐怖におびえて、のけ

ぞる様子が、まことに

嗜虐的である。

ホッと気を抜いたと

ころへ、ムチがピチッ

と当る。お尻が、ほん

のちよっぴり、ほのか

に赤くなる程度だ。や

はり、これは文字通りのSMプレイなのだ。お遊びなのだ。でも、この写真を見た藤坂氏は、きつと、相当、私がムチで叩いたと思うだろう。

実際は、私一人なのだから、ムチ打ちとカメラとを、同時に一人で操作する離れ業は出来ない。関谷富佐子に、ある時期に用いたように、三脚にカメラを据えておいてエヤレリーズを左手に持ち、右手に長いムチを持って女体を打撃しながらシャッターを切るという方法も出来ないことはない。

今日は重い三脚は持ってきていない。だから私は、ムチ打ちとカメラとを使い分けた。叩いて叩いて、叩きまくり、のけぞった表情の余韻が残ったところで、カメラを持ち替えて、あわててシャッターを切るのだ。

藤坂弘氏は、この玉本章子の責められている写真を、どのように見るだろうか。

私は二十数ポーズ撮影した彼女のムチ打たれポーズの写真の中で、会心の作を四つ切に引き伸ばして彼に贈呈したいと思う。額へでも入れて飾っておいて貰えるだろう。表情といい、ポーズといい、凄く迫力がある。

ただ、私が気狂いのようになってムチを揮ったのでもなく、また、章子が許しを乞うて



泣き叫んだのでもないことを、ここに告白しておく。あれほど、ムチ打ちはイヤだ——と言っていた章子のお尻を、ミミズ脹れになるまで、ぶちのめすということは、私には到底出来ない相談だった。

ムチに憧れ、ムチ打ちに陶醉した関谷富佐子にしても、私は血がにじむほど、ムチで叩くということは、とても出来なかった。

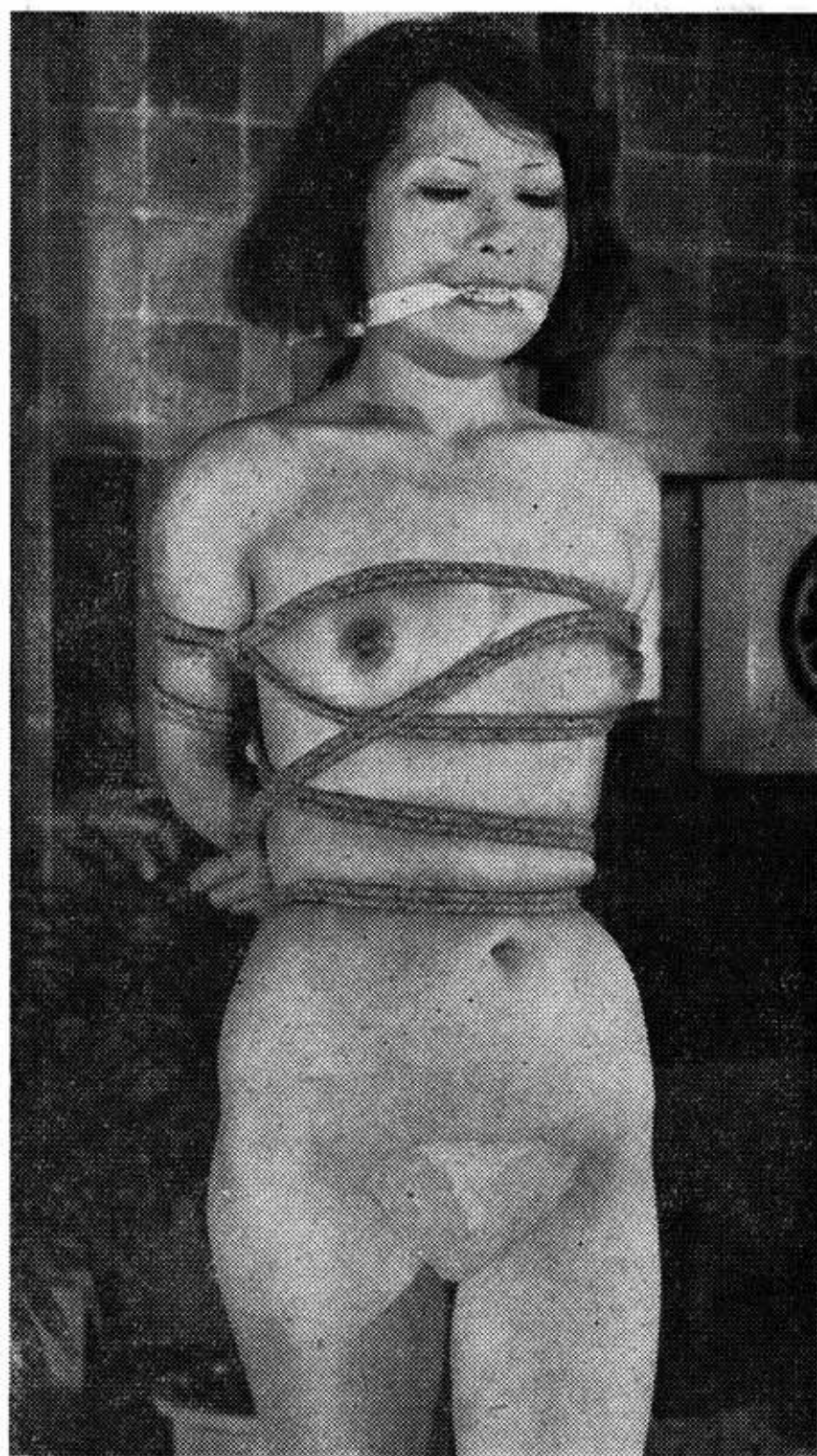
事実、実際に、皮膚が破れるくらい、激し

く叩かなくても、掛け声や予告的な恫喝で、充分に恐怖感を、そそることが出来た。

玉本章子の美しい緊縛肢体を撮影したいという私の念願は、一応、達せられた。

苗木陽子の、あの、ぶくぶくと肥え太った淫らなまでの臀部を見たとき、私は、一瞬、憎悪にも似た嗜虐心かられて、ムチを、その逞しい肉塊に、ぶち当てていた。

だが、その際に於いても、私は真剣に叩い



ていただけではない。初対面の陽子は、私に
対して、相当の恐怖感を抱いていたことは、
想像に難^{かた}くないが、私は十分に注意して当り
処を考え、手加減をしていた。

無茶苦茶に叩きまくっているように、見せ
かけてはいたが、実際は、彼女の許容範囲を
逸脱したような責めは加えはしなかった。

玉木章子の猿ぐつわを解き、胴を柱に縛っ
た紐を解いて、後手首と胸を縛ったままの小
柄な裸身を、私は膝の上に乗せた。

ペディキュアで爪を真紅にした足を掌で握
る。なんとという足の裏の柔らかさだろうか。

踵も指の裏も、黴も、まるで、真綿のよう
に、ふわふわとした、ふくよかさなのだ。

私は五本の足の指をぎゅっと握り締める。

手入れのよく行き届いた美しい足の指だ。

三日月型に爪を揃えて、長からず短かから
ず、切り整えてある。ペディキュアがルビー
のように輝いているので、足の甲の雪のよう
な白さと、ふくよかさが一層、目立つのだ。

小さな、まるまっつい踵が、つるつるとし
ていて、女盛りの花の脂が、こんなところにも
宿っているのかと思わせるほどの、なめら
かさなのだ。この足で、この体重を支えて歩
いていたのだろうか。

「ああ、なんで、そんなに、私の体ばかり、
眺めなきゃ、いけないの？」

「そりゃ、章子が滅法美しいからだだよ。だか
ら、こうして見つめたり、いじめたりしたく
なるんだよ。ねえ、その気持、わかるだろ」

「まあ、お口の上手なこと。そんな、うまい
こと言って、女の子を口説くんでしょう」

「なんだか、信用してないみたいだね。ま
あいさ、どっちみち、章子の美しい体は、

これから、嫌でも縛られて、カメラの前に晒
されるんだからナ。覚悟をしておけよ」

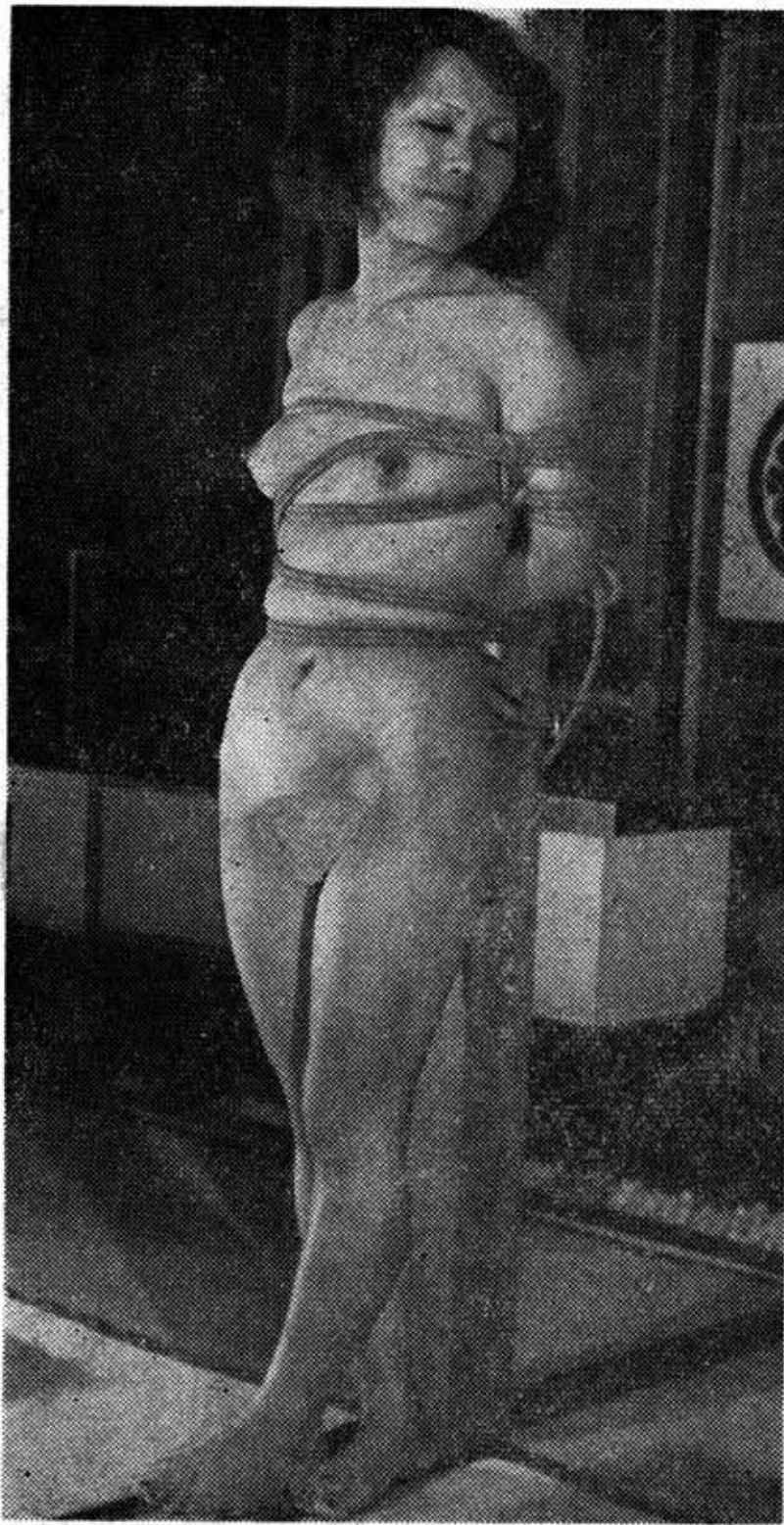
私は彼女を膝の上に載せたままで、後手首
を括った紐を解いてやる。

両手が自由になった彼女は、バスタオルを
取ろうとして手を伸ばすのを、その手をとっ
て、マダラの縄を、からませる。

「あら、解いて下さったと思ったら、すぐに

また、括りはるの？」

「そうさ、章子の彼氏の藤坂さんの依頼なん
でネ。いろんな縛り方で、今日は、写真を撮



りまくるんだ。だから、覚悟をしておけよって、さっき言っただろ？」

「そうなの。だったら、私、どんな縛り方でも辛抱するから、じゃんじゃん、責めて、写真撮って頂戴」

「よしよし、こうして両手を吊っておいて、無防備なハダカを弄んでやろうか」

「ああ、写真を撮るだけにしてよ。そんなとこ、触ったりしたら、約束違反だわ」

「それでも、こんな奇麗な体を、写真に撮るだけとは、勿体ないね。それとも、もう一度

ムチで叩こうか？」

「ムチは止めて！ 触るのだったら、仕方がないから辛抱するわ。その代り、写真を撮るのは二枚だけにして！ お願い」

「二枚だけか——。それもよからう。だが、ほら、さっき、チョキンチョキンと、やった

とこを大写しにしてもいいだろう」

「そんなのって、ないわ。全身と、上半身の

大写しの二枚だけにしておいて！」

均斉のとれたプロポーションだ。

この女体が、私の胸の中で悦虐にむせび泣

いたのかと思うと、不思議なくらいだ。

体を見ていると、二十才前後にしか見えな

いのに、SMの飼育歴数年の持主なのだ。眺めていてよし、プレイして尚よしの色で

鍛えた、いや、SMで仕込んだ女体なのだ。S人士に絶対、恥をかかさないだけのサービス精神は旺盛な持主なのだ。といって、バーとかアルサロなんかの垢に、一回だって、染まったことのない素人娘なのだ。

学校を卒業して、勤めた所と云ったら、郵便局に就職しただけという純粋さ。それが、藤坂弘氏を夢中にさせた最大の理由だろう。

素人臭さが身上の奇クにとって、こんなM女性（本人は、私はマゾではないと言っているが）は、またと得難い愛読者なのだ。

そもそも、彼女が72年9月号と12月号の読者通信に投稿したことから話が始まる。

十九才の年から二十六才に至る七年間、藤坂弘氏というS傾向の主人に、飼育調教されてきた玉木章子の魂の叫びが文章になって、読者通信に掲載されたのだった。

△奇クの読者通信に投稿してきた女性Vとしての玉木章子と、私が始めて接触したのは、第一回のSMプレイのときだった。

私は第一回目のとき、初対面の彼女に、最

初から開股責めの開けっぴろげの縛りをやったものだった。

それは、玉木章子が、飼育済みのマゾ女性だという気安さも多分にあつてのことだ。

73年2月号に、玉木章子の第一回目のカメラ・ルポ『美しい「責め」の記録』を掲載したときは割に好評だった。その反響は、八奇クサロンVや読者通信に、すぐに載った。

それに意を強くして、私は第二回目のプレイをやりたいと考えた。だが、なんといっても、彼女は藤坂弘氏という、れっきとした飼育主のある女性だ。私が勝手にルポするということとは、許されなかった。

それが、やっと望みかなって、第二回目は74年1月号のルポM女26のマゾぶり、まさに抜群Vという記録になったのである。

あのときは、私は余りにも、『浣腸』と、そして『排泄』。そしてクリップ責めという風に、羞恥責めに徹してしまった。

「玉木章子の緊縛写真が一枚でも多く欲しかった」という藤坂弘氏にとって、このときのフォトが気に入らなかったのは当然だ。

『浣腸』というSMのジャンルに、深い関心を持たない、緊縛フォト好み一遍倒の彼にしては、それは当然の結果であった。そこに私

は、一つの過誤を冒したことになる。

そして、今回が第三回目になる。

可愛い妖精——そして、野獣のような精

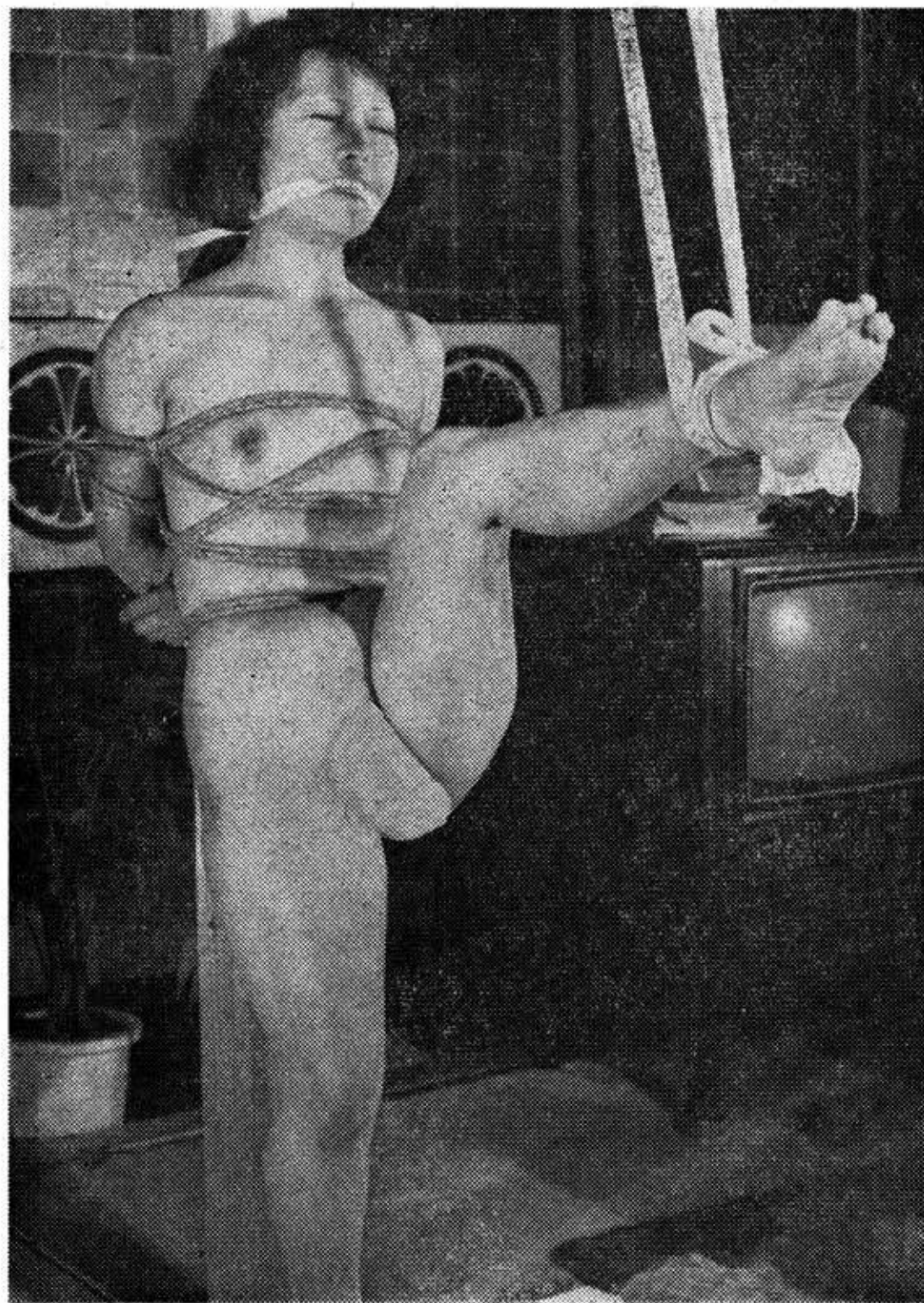
悍なM女、玉木章子——。鈴木千鶴子に似た

抜群のプロポーションを持った女だ。

その全貌を、隅から隅までカメラとペンで別扱したいという希望の反面、藤坂氏好みの

鑑賞に耐える作品も作成しなければいけないのだ。玉木章子もまた、十分に、その意図を察している筈なのだ。

そしてその一面、彼女もまた、自己のマゾの欲求をほしきままに充足させたいという願望を持っているということが、私には、よくわかっていた。



女体の慈味

私はナイロン製の縄を手にしていた。

この縄は、夜店の店頭にぶらさげてあったのを買ったものだ。

クリーム色をした縄は、ケバケバがついていて、手ざわりが如何にもゴワゴワしているのが気に入ったからだ。こんな堅い縄で真白い柔肌を、思いつきり、ぎゅっと縛り上げたら、どんなにいいだろうかと思った。

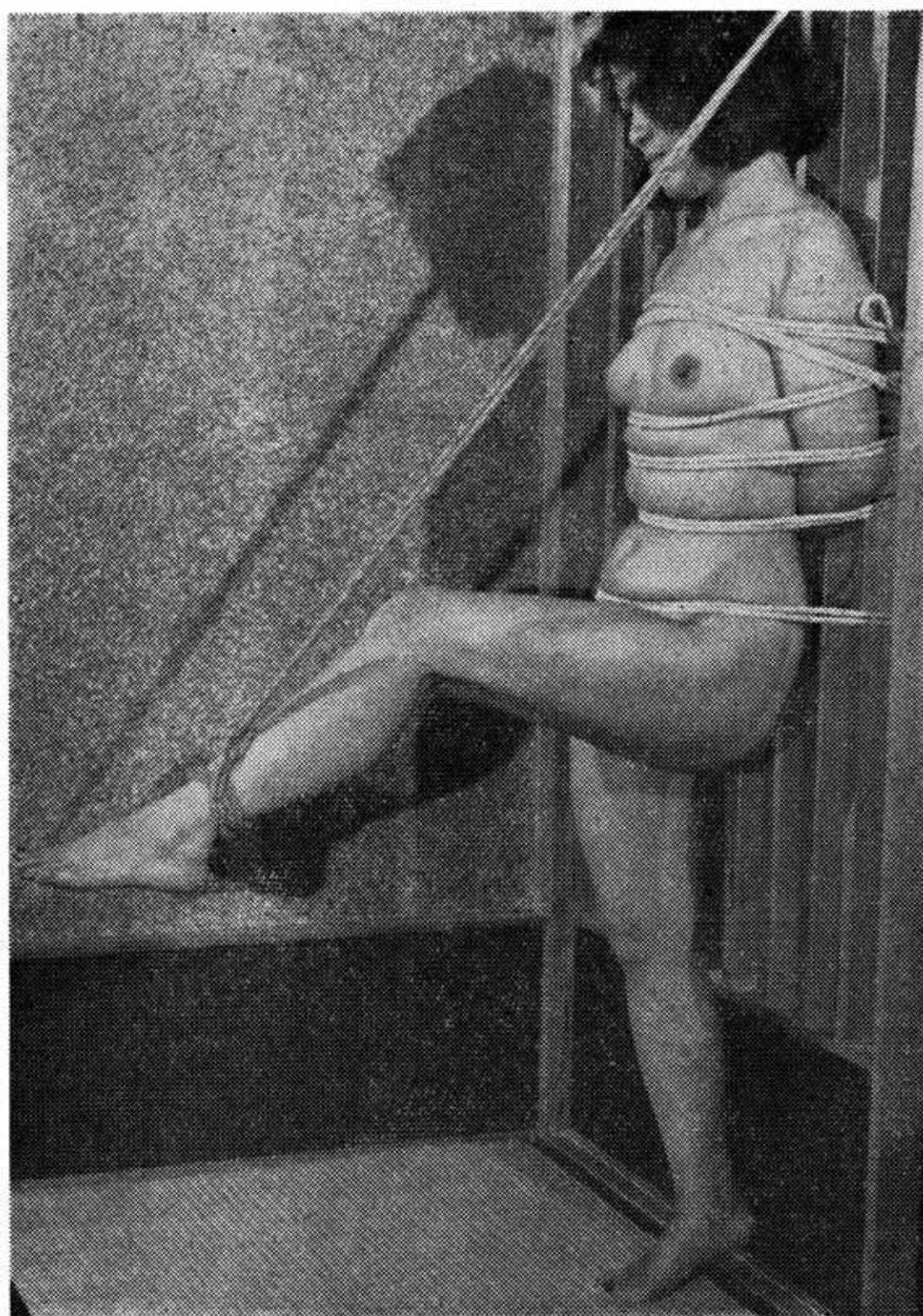
店番のおやじは、木綿や麻縄と違って、強さではナイロン製が一番だと自慢していた。特に水に濡れると更に強度が増すので、今では漁船なんかで使う縄や網も、殆どナイロンだと口釈を述べた。

「で、一体、何を括りなさるんです？」

まさか、女の子を責めるために縛るんだ、とも言えないので、人間ぐらいの大きさの荷物を括るんだと答えて買ってきたものだ。

その、こわばったようなクリーム色のトゲトゲの縄が、彼女の柔肌に、ぐいぐい喰い込んでゆく様は、むごたらしかった。

華奢な二の腕、胴などが縄を呑み込むように、くびれて喘いでいる。しごけば私の掌が



痛くなるほど硬直した縄だけに、柔肌に与える刺激も並々ならぬものがあるのだろう。

私は場所を変えて、部屋の壁一面が鏡になって、その前に縦横が十数本、立ててある所へ全裸の彼女を連れてきた。

観念した章子は従順に私の言う通りになった。足を挙げろと言えば足を素直に挙げた。

章子の裸身の、どの部分を取り上げても、凄く清潔感があった。暇にまかせて、全身の手入れを、よくしているためなのだろう。

殊に、今日は、全裸の隅から隅までを、私に見られ、写され、弄られるということを予想して、念入りに磨いてきたのだろう。

ここで私は、今日の第三回目の玉本章子と



のSMプレイを行うきっかけになった経緯について、少し述べてみたいと思う。

74年3月号の『奇クサロン』で、小池明男氏が「塚本氏は、以前、西条紀代さんを三回ルポされたのだから、玉木章子さんも、ぜひ三度ルポされて、剃毛責めにしてほしいと思う」と書いておられる。

私も、言われるまでもなく、玉木章子を、機会があれば、何度でもルポして、彼女のM度を試してみたいと考えていたのだ。

それで私は、藤坂弘氏と玉木章子のコンビで、先ずSM研究会の席上へ招待したいと考えた。会員の中には、玉木章子と逢いたいという希望の方も案外多く、ある温泉地に住ん

でいる会友なんかは、旅費、滞在費は一切、負担するから、是非、玉木章子と一緒に来てくれと言ってきたくらいだった。

藤坂氏の口から、彼女の飼育の思い出や苦労話を語って貰えたら、さぞ有意義だろうと私は一人合点していた。だが、この私のプランは彼から簡単に拒絶された。

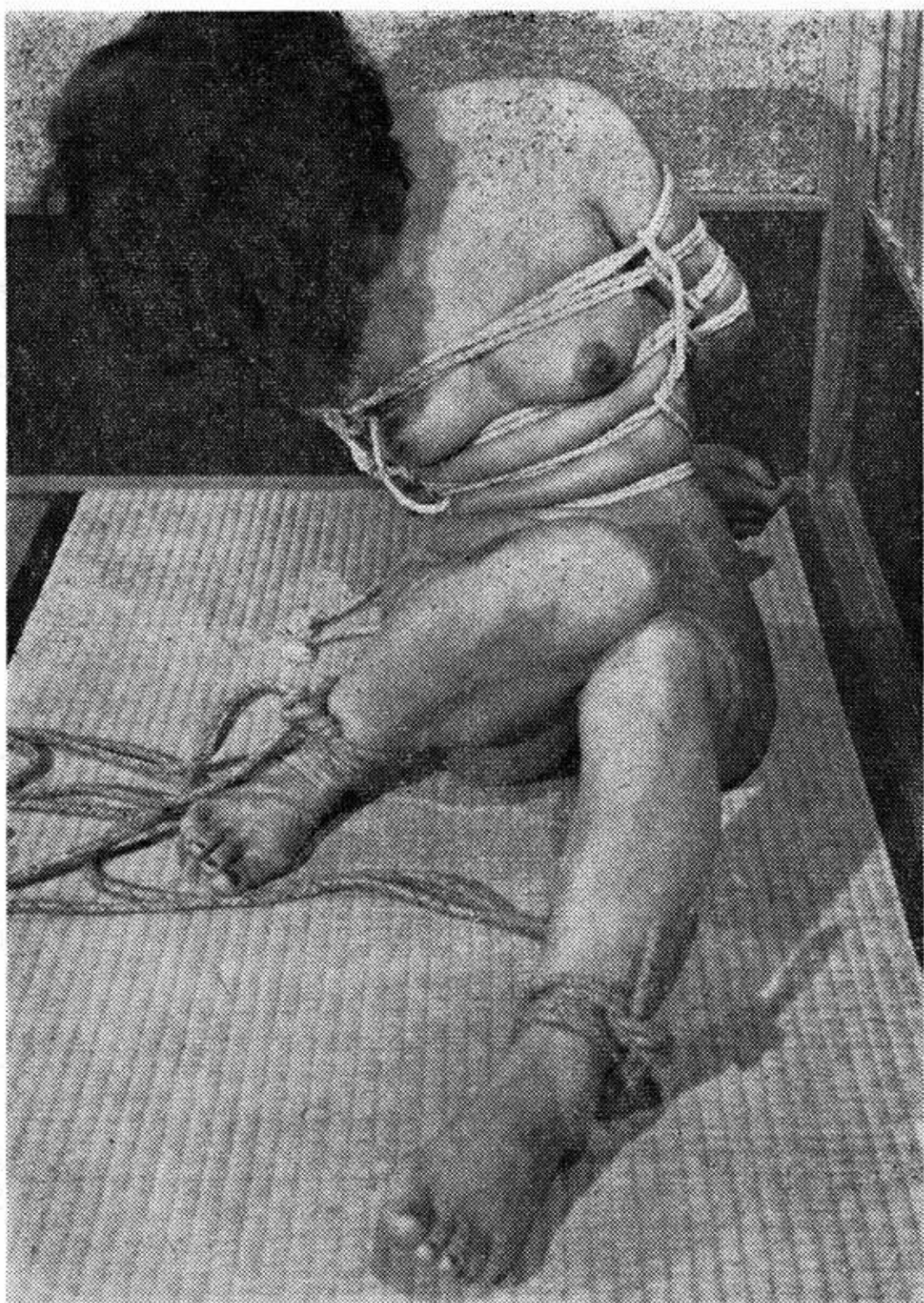
「私達二人と一緒に、そんな会合に出るなんて、そんな格好の悪いこと、出来ませんよ。その代り、章子の緊縛写真を下さるんだったら、ルポに無条件で提供しましょう」

私は重ねて、S研の会合に玉木章子だけでも顔出し出来ないものか——と、頼んでみたが、それは、次の機会にということで、彼から軽く、いなされたのだった。

そんなわけで、藤坂氏からはルポ取材の許可を得たので、私は玉木章子と、電話でプレイの場所と日時の打合わせをやった。

彼女の住むマンションは眺望絶佳の箕面市郊外の高台にある。電車、バスの便は、いささか不便だが、マイカーを持っている彼女にとって、四通八達した高速道路が網の目のように張りめぐらされているので、どこへ行くのも、凄く便利なのだ。

暇を持て余している彼女は、たった一人で



愛車を駆ってドライブの遠出をするのを楽しみの一つにしているそうだ。東では富士五湖めぐりから、箱根、熱海、それから伊豆半島一周なんか何度、行っても飽きない風光だ。

北陸では敦賀から山中、山代温泉、加賀温泉郷から能登半島あたりが行動範囲で、山陰では城崎温泉から、鳥取、島根の玉造温泉や

大山まで、車を飛ばしたとのことだ。

国道二号線を南下して北九州へ入ったり、おきまりのフェリーボートで南九州の宮崎から鹿児島まで走破したというのだから、相当なベテランだ。ボーイハントが目的なんだろうと冷やかしたら、「いつも一人よ」と言っていたが、もしも、それが本当だったとしたら、これは勿体ない限りだ。奇クの読者の方の中で我と思わん、運転に自信のある男性は同乗して長距離運転の交替をしてあげたら、どうだろうか。

車の運転だけじゃなしに、SM運転の方も彼女が理解ある女性だけに、うまく運ぶと思うが、如何なものだろうか。二年目の車検前に乗り換えるという彼女の愛車は、二〇〇〇CCの六気筒の中型車だから、十分、長距離運転に耐えられるし居住性も凄くよい車だ。

閑話休題――。

落ち合う場所は、例の国道一七一号線沿いのドライブインレストラン。駐車場も広いし噴水があって築山には、ツツジが満開だ。

約束の時間は十一時三十分。先に来た方が中へ入って待っているという取りきめだ。

棟続きが温室になっていて、熱帯植物や仙人掌、洋蘭などが、所狭しと植え込まれていて、中央が喫茶店になっている。だから、そこへ入れば、いながらにしてハワイのムードに浸れるというわけだ。時間潰しには、もってこいの場所だ。裏側はボーリング場になっているが、この方は人影もない。一時は、あれほど早朝から行列していたのに、ボウルの衰退というものは早かったナと思う。

朝は毎日、早起きをして、散歩と美容体操は欠かしたことがないという彼女は、几帳面な性格からか、今まで、いつも約束の時間より早い目に来ていた。私も途中での万が一の交通渋滞ということなどを考えて、たつぷりと時間の余裕を見込んで出てくるので、約束の時間より早く、落ち合ってしまうのが普通だった。ウィークデイの昼間だから、レジャーセンターのように、だだっ広い構内は至って、すいている。

十一時を少し過ぎた頃、私は温室棟の方から歩いてくる玉木章子に、ばったりと出会った。あたりが一瞬、明るくなったように、私には思えた。清楚な藤色の服が、可憐な彼女には、よく似合っていた。

「やあ、早かっただね」

「ええ、家でブラブラしていても仕方がないので、早い目に出てきましたの。もし、早すぎたら、コーヒーでも飲んで待っていいようかと思って……。うふふふ」

何の理由もなしに、笑い声が出てくる愉快で天真爛漫な娘だ。こうして、文章で書いてみると、いささか不自然にさえ思える彼女の笑い声も、一緒に向い合っていると、なんとはなく、こちらにも楽しくなって、笑いを返し

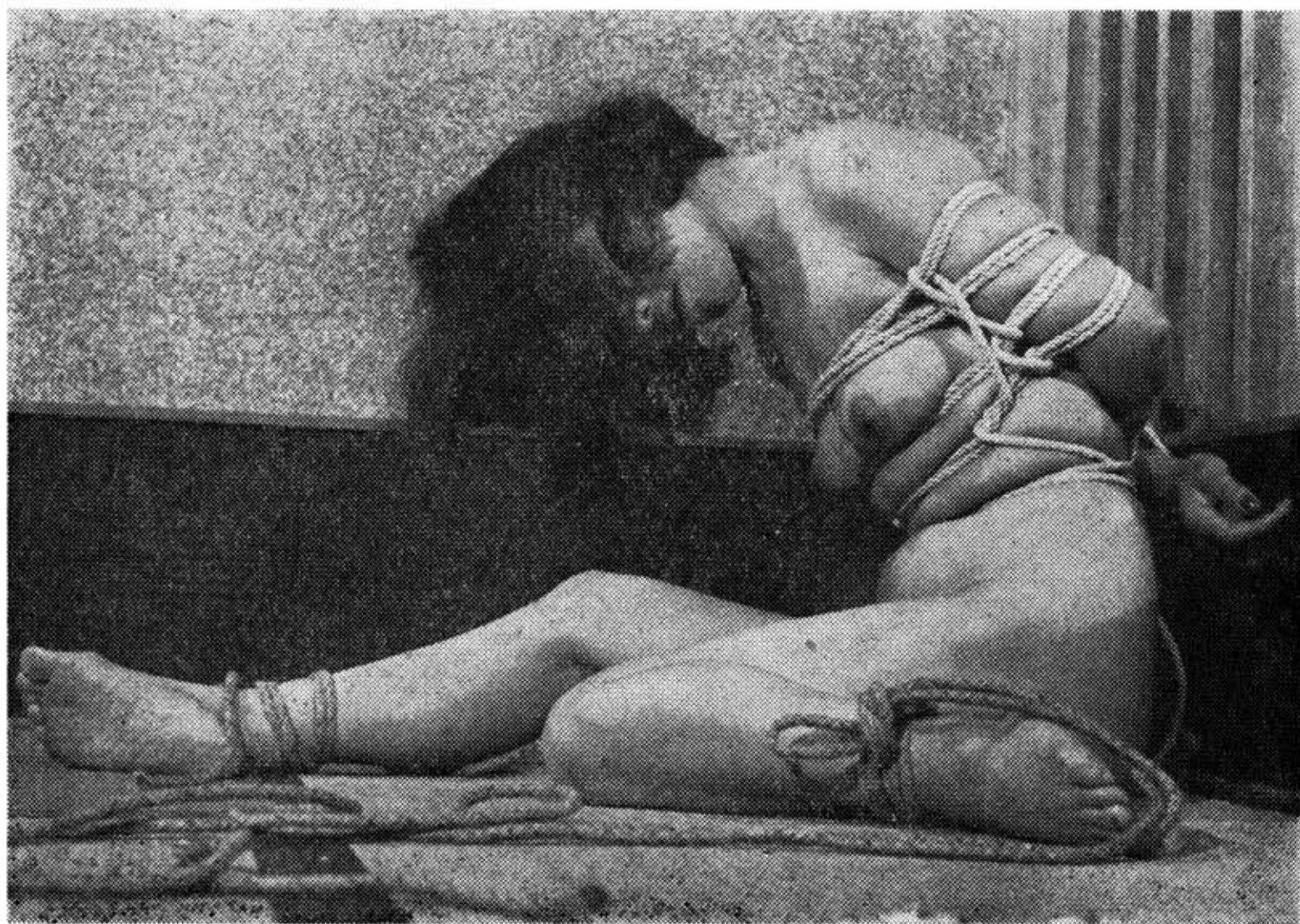
たくなってくるのだ。

「これが、この前、写した写真だ」

私は彼女のスナップフット、カラー五枚とモノクロ十枚のキャビネ判に伸ばしたのを手渡す。彼女が気に入ったというのを特に選んで引き伸ばしたやつだ。カラーのは洋服の色彩が鮮やかで、デイトライト・フラッシュを併用した逆光気味のは、肌の色がよく出ていた。

これは、先日、彼女の車に乗せて貰って比叡山から坂本へ下って、日吉大社へ参ったときに撮影したものだ。折角、デイトしながら藤坂氏に叱られるかも知れないが、緊縛フットは一枚も撮らなかった。

その代り、一枚だけ、野外の排尿シーンという



珍しい彼女の写真を撮った。

比叡山の山頂でトイレへ行きたいという彼女を押しとどめて、奥比叡ドライブウェイを通って坂本へ下り、日吉大社へ向う途中で山陰へ車を乗り入れさせたのだ。

車を乗り捨ててから松林の中の叢に辿りついて、「ここで、やってみるんだ」と、私は彼女に排尿を促した。

何をするのか、わからずに、私についてきた彼女は、初めて私の悪企みを知って、猛烈に非難しだした。そこで私は、彼女の見ている前で、先ず、自分から松の木の根っこ目がけて、放尿を試みた。

「どうだ、やってみるか。写真を一枚、パツと撮るだけだ。こんな広々としたところでやったら、そりゃ気持ちいいぞ」

「だったら、一人ですから、塚本さんは、あっちへ行っていて……」

「そりゃ駄目だ。一枚だけでいいから、写真を撮らなくちゃ、意味がないよ」

「まあ、悪趣味ね。そんな写真撮って、一体どうするのよ。この前、部屋の中で、何枚も撮ったじゃないの」

そんなことを言っていたが、結局、一枚だけなら……ということで承知したので、私は

ストロボを装着したカメラを構えた。

そのときの二人の格好は、今思い出してもまことに奇妙なものだった。

水しぶきをカメラや顔に真向から、かぶせられては、かなわないし、さりとて、真正面から狙わないと無意味だ。そこで私は、標準レンズをはずして、85ミリの長焦点レンズに交換した。

只、眺めているというのでは、こちらも間がもてないものだ。まして、彼女も、正面から目をこらされていては、出るものも出ない、というものだ。だが、それが、正面からカメラを構えているとサマになるものだ。

こうして、一枚の珍妙きわまりない写真が出来上った。ストロボをシン



クロしたお蔭で本来、暗くあるべき個所も、動感溢れる白い水流も、ばっちり写ってしまった。

☆

さて私は、今日は縄を変え、縛り方を変えて、さまざまに、玉木章子の裸身を翻弄してみたかった。それは一つには、三者関係のなかの頂点に立つ——藤坂弘氏の（女体緊縛フォト好きの）歡心を買おうという気持があった。

たのも事実である。先にも書いたように、第二回目のときは、余りにも、私は自分の興の赴くまま、△羞恥責め▽にばかり注力してしまつて、肝腎の△緊縛フォト▽の撮影の方をお留守にしていまい、彼の不興をかった。

そんなわけで、今日は、彼の好みの縄を細かく念入りに女体に掛けた縛り方で、玉木章子の被虐美を現出したいと思った。

それと、勿論のこと、三者関係の一翼でも



ある私（塚本鉄三）好みの△羞恥責め▽も、適当に併用してゆきたい。そして、中心となる「玉木章子」本人については、やはり、嘗て、73年4月号で峯村比等志氏が『玉木章子論』で、いみじくも喝破した「また、塚本氏もその方で、さぞ忙しいことだとは思うが、玉木章子に対するセックスプレイだけは、是非共、敢行してもらいたいものだと思う」の期待に応えて酬いたいものだと思った。

藤坂弘——玉木章子——塚本鉄三

この三者関係は、互いに複雑にからみ合つて、SM的な感興を益々高めてゆくのだ。

だから、今日の第三回目のSMプレイに於いては、玉木章子の「緊縛とフォト撮影」それに「羞恥責め」プラス「セックスプレイ」を、この密室に閉じ籠った数時間、交互にやり遂げてゆくのが私の役目であった。

私は胸にナイロンのロープを回して締め上げていった。ふっくらと蕾のふくらみかけたハイティーン並みの乳房だ。乳首もピンク色に色づいているが、数年間もSMプレイで仕込まれたという感じは少しも残っていない。腋の下に縄をくぐらせて、丹念に編むように縄掛けしてゆく。これは、案外に時間のかかる作業だった。二の腕と胸とを縄で締めつ

けておいて、腋の下へ、トゲトゲのついた縄を通されるということは、章子にとっても、決して感じのよいものではなかったようだ。

擦ったがり、縄が肌と肌との間をこするので痛がった。

ここで、玉本章子が一番に嫌がる個所を、二箇所、挙げておこう。それは、膝の裏側と足の指の股である。何かの拍子に、縄がその場所をこすったりしたら、極端に嫌悪した。

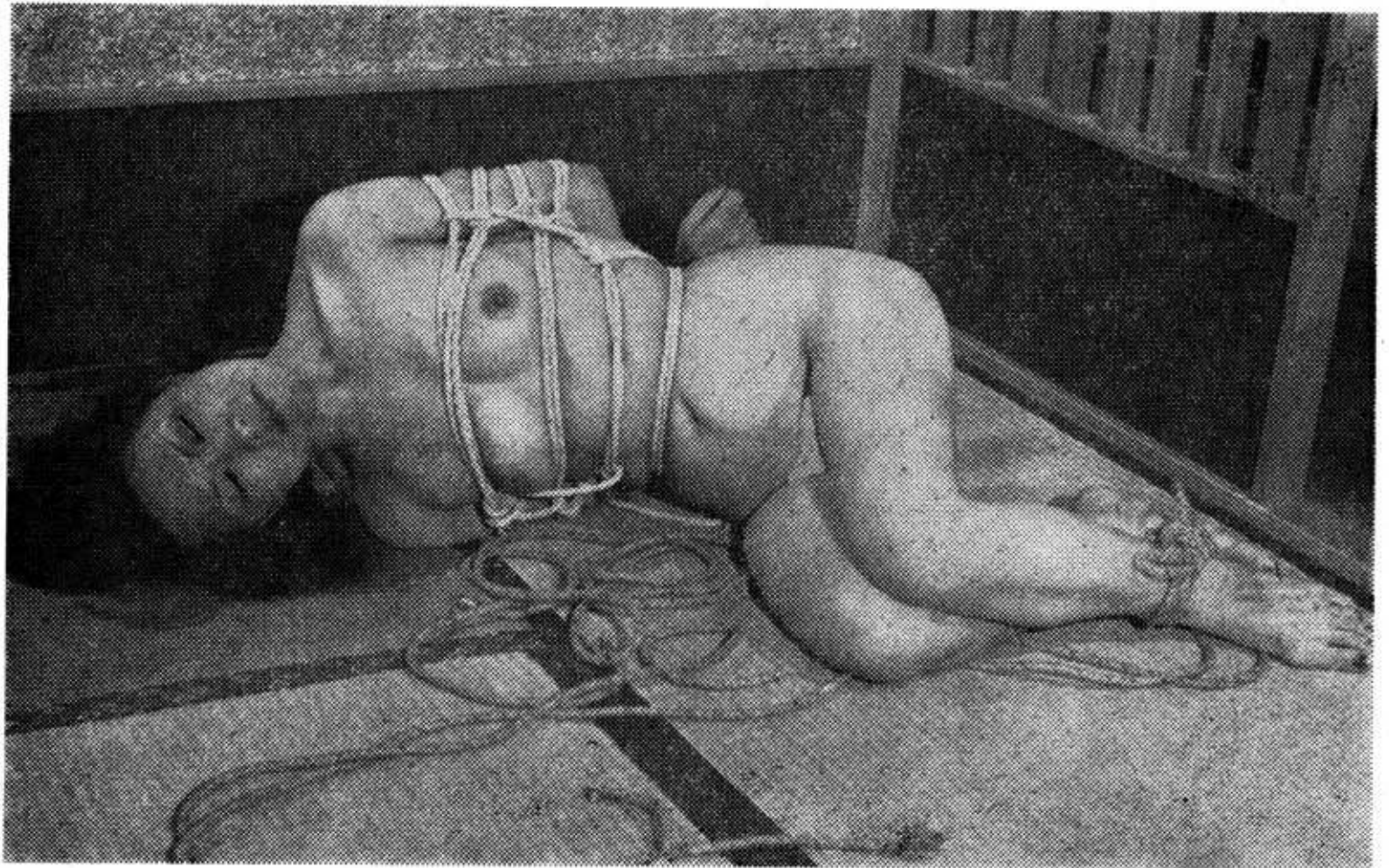
首筋や腋の下、股間縛りなんかには、なんら嫌悪を示さないのに、前記の二箇所だけは、どうしても許そうとはしなかった。

藤坂氏好みの、高手小手縛りの縄掛けが終ったところで、私は△羞恥責め▽の一種としての開股縛りをやりたかった。

私は彼女の足首に斑の縄を結んだ。

私の意図を察した彼女は、急に体を硬くさせて私の顔をチラッと上目使いに見た。

「どうだ。彼もこんな縛りをやるか？」
「いや、いや。そんなに開いたら、足が痛いわ。緩めて……」



彼女は私の問いには直接、答えず、別のことを言った。足が痛くなるほど引き上げたわけでは決してない。

「彼も、こんなにして、章子をネチネチ責めるんだろうナ」

「知らない！」

彼女は心持ち頬を染めて、うつむく。凶星なのだろう。或は、藤坂氏との濃厚なプレイを、思い出したのかも知れない。

私は、彼女の足を、ぐいぐい——と、縄を引っぱって開いてゆく。背後が棧なので、それに縄を通して引くと、面白いように脚が開いてゆくのだ。

片足を開き終ると、更に残りの足首にも縄を結んで引き上げる。両手の自由を完全に奪われているのだから、彼女が如何に必死になって膝をすぼめようとしても、それは、はかない抵抗でしかない。

彼女の意志に反して、じり、じり、じりと両方の太股が、徐々に開いてゆくのだ。

内股の白い筋肉がブルブルふるえている。

S 人士にとって、まさに、こたえられ

ない戦慄のシーンだ。

「ねえ、こんなことしなくたって、お写真、撮れるじゃないの。こんな格好、羞かしくって、イヤだわ。縄を緩めてよ」

そう言っている間も、依然として縄は引き絞られ、太股は開かされてゆくのだ。

「ああ、ああ、見ないで、見ないで……」

そう言われると私は一層、見たくなかった。

体中を、あんなによく手入れしている章子のことだ。その部分も、さぞ、奇麗にお化粧しているに違いない——と、私は思った。

なんととっても、藤坂弘氏の囲われ者だ。

いわば、この女体すべてが、彼にとっては愛寵おくあたわな貴重品なのだ。床の飾り物的存在なのだ。ペットなのだ。

私は、その思われ者の秘境を、無理矢理、暴き晒したいと思った。

こうした機会に、縄でも用いなければ、秘境探検など、出来るものではない。今や、絶好のチャンス到来というべきだ。

私は、足首を、もうこれ以上、開き切れないうまくらい開かせてから縄止めた。

観念した章子は、すべてを晒したまま、諦めたように、うなだれてしまった。

「ねえ、早く、写真だけ撮って……」



彼女は、か細く、羞かしげに呟くように言った。写真を撮ってしまったら、許されると思っているのだ。

だが、私は、簡単に写真は撮らない。

立ったまま、しげしげと見下してから、やおら、彼女の前で腹這いになった。

「ねえ、早く、写真を撮って頂戴！」

「そんなに、写真を撮って欲しいんかい？」

「だってエ、そんなに、見られているより、ましだわ。それに、お写真を撮ってしまったら、縄をほどこいて下さるんでしょ」

「さあ、それは、どうだかね。だが、そんなに写真を撮って欲しいって、頼むんだったら一、二枚は撮ってやってもいいがね」

玉木章子という女性は、不思議な女体の持主だ。多分、26才か27才になるかと思うが、全く、色素の沈着というものがないのだ。

万年処女というにふさわしいハイティーン並みの、その色艶なのだ。

第一回、第二回のプレイの際も、私は、その新鮮さに、びっくりしたものだ。が、今も、その変りないピンク色の小じんまりと整った造作に、私の目は吸いついた。

手を触れて弄びたいという強い欲求に駆られる目の前の美しい対象物である。じっと見つめていて、私は目がくらむ思いだった。

ライトを集中的に当てる。

バサリ

ゼンザブロニカのフォーカルプレンのシャッター音が、大きく響いた。

カメラを置くと、私は棧に結んだ縄を滑らせて、上へ上へと引き揚げる。

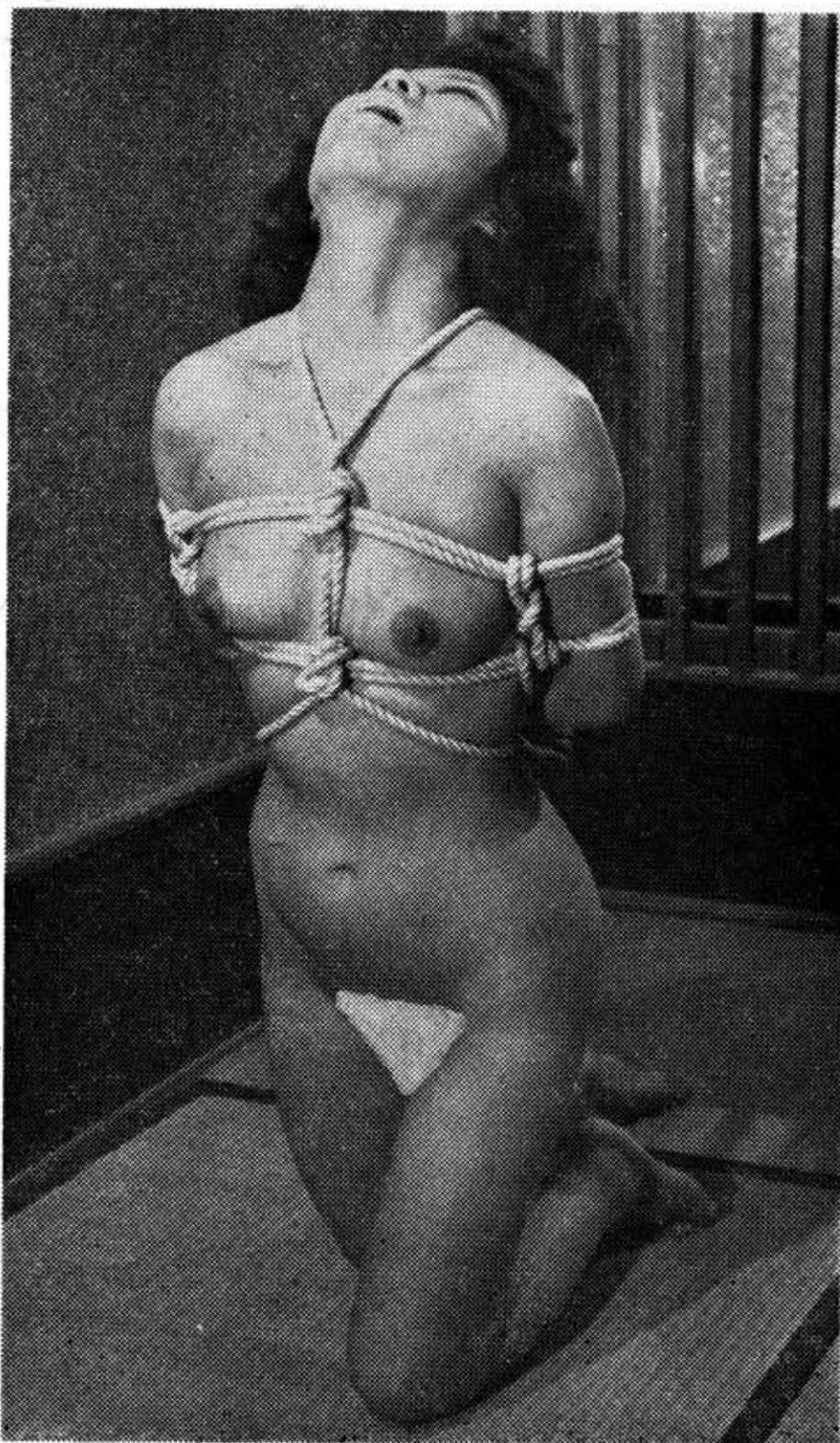
途端に、左右へ思いっきり開かせられていた章子の脚が、頭上高く舞い上った。

「ああ、イヤ、イヤッ、そんな……」

彼女の悲鳴も、ものかわ、開いたままの足が上ってしまったので、お尻が丸出した。

菊の蕾が可愛い微笑む。

私は、再び腹這いになった。



目を至近距離に近づけて、襞の一つ一つ、皺の一つ一つ、微細な起伏一つも見逃がすまいと、私は凝視しつづけるのであった。

見られている——と、いうことで章子は、たまらなくなつて、もぞもぞと、お尻をにじりながら、羞かしさに耐えていた。

もう、彼女は、写真を撮って——とは言わなかった。

私は、つと、指を伸ばした。

そこに、私は明らかな兆候を見た。

彼女の胸の裡は、どんなに燃えているだろうか。それは、よくわかった。

ああ、なんという悦虐だろうか。

眺めるだけ眺め、触るだけ触ってから、私は、やおらカメラを手にしていった。

セックスの奴隷

両足を開かせるために棧に結びつけた縄を解いても、章子は両方の足首に縄を巻きつけ



たまま、ぐったりとして、全身に緊張を緩めて、悦虐の余韻を楽しんでいる風だった。

「章子。今の責めは、どうだった？」

「いやっ、そんなこと訊かないで……」

「こんな縛られて、体の隅々まで見つめられて、写真にまで撮られて、どんな気持だ」

「そんなこと、訊かなくても、わかってるでしょ。それより、この縄、解いて下さらない

の？ 手がしびれてしまっ……」

「僕の訊くことに、真面目に返事をしたら、解いてあげる。さあ、どんな気持だった？」

「そりゃ、恥かしいわよ」

「ただ、恥かしいだけか？」

「ええ、そうよ」

「だったら、何故、あんなに……だよ」

「まあ、いやだわ。そんなことまで、おっし

やって。そりゃ、私も若い女ですもの、………
………なりますわ。ねえ、早くう、縄を解いて
下さいったら、お願いよお」

「よしよし、じゃあ、縄を解いてあげよう。

その前に、もう一つ、訊いておこう。彼に愛
されるときは、縛られたままなんだろう？」

「いやだ。真面目な顔して、そんなこと、訊
くなんて、エッチだわ。それは、御想像にま
かせます。さあ、これでいいでしょう。答え
たから、縄を解いて頂戴よ」

「そんなに慌てなくたって、いいだろう。

そうして縛られているところの章子って、と
ても美しいヨ。惚々とするな。惜しいから、
十枚ばかり、写真に撮っておこうね。藤坂さ
んも、きつと、この足首に縄を巻きつけたま
まの乱れたポーズには、気に入るよ。それは
そうと、章子は、セックスの奴隷”って言
葉、知っているかい？」

「セックスの奴隷って、一体、それ、なんの
ことなの？」

「章子はね、日蔭の女だなんて、書いていた
ことがあったね。僕は、そうじゃなくて、セ
ックスの奴隷だと思ってるんだ。本当は、縛
られること自体、余り好きじゃないと睨んで
いるんだ。章子は、自分でも、マゾじゃない



「って言ってただろう？ でも、さっきのよう
な△羞恥責め△をやったら、とても燃えるん
だな。だから、章子に一番適しているのは、
セックス責めなんだよ。僕は、そう思うね」
「わかったわ。章子は、そんな女です。です
から、この縄を解いて下さい。お願い」
「よし、解いてあげよう。この部屋を、その

ままの格好で、ぐるりと一周してから、僕の
前へ来て跪いて、『私は貴方のセックスの奴
隷ですから、どうぞ、可愛がって下さい』っ
て言うんだ。そうしたら、解いてやろう」
「ああ、こうですか？」
足首の縄をひきずりながら章子は、後手に
縛られた全裸のまま部屋を歩く。

「そんな小回りじゃなくて、大回りして、部
屋の隅々まで回ってから、こちらへ来て、跪
くんだ。よいな」

私はスツールを持ってきて、部屋の真中に
でんと据えて腰を下す。部屋の中は蒸し暑い
くらいに熱気を帯びてきている。裸になって
いてさえ、汗ばむくらいだ。

私は素裸になって首にタオルを巻いた。

腰にバスタオルをひっかけた。このバスタ
オルがないと、男は女と違って、一寸、格好
が付きにくいからだ。勿論、一旦緩急あれば
直ちに取りはずし出来るバスタオルだ。

いわば、私は裸の王様だ。

素裸で、後手高手小手に縛られて、両方の
足首に長い縄を括られてひきずっている奇妙
な姿の玉木章子が歩いているのを、私は座っ
たままで眺めていた。

やがて、私の前までくると彼女は跪いた。

「さあ、言うんだ。『私は貴方のセックスの
奴隷です。どうか、可愛がって下さい』と、
頭を下げたまま言うんだ」

「は、はい。私は、私は、貴方の、セックス
の、あああ、あの、奴隷です……」

「それから、あとは？ さあ、言わないか」
「どうか、可愛がって、下さい」

「そうか、よしよし、たっぷり可愛がってやるから、この足を舐めてごらん」

「はい、舐めますから、彼には、こんなことをしたって、言わないで……」

「舐めたいのか、舐めたくないのか、どうなんだ？ はっきりしないか」

「は、はい。舐めたいです」

「奴隷の分際^{さい}で、舐めたいとは、なんという言い草だ。舐めさせて下さいって言え」

「舐めさせて下さい」

「そら、舐めるんだ」

ルージュを濃く塗った唇が、私の足の拇指を、すっぱりと含んでしまった。ねっとりとした濡れた舌が、指の裏にまつわりつく。

私は忽ちにしてエキサイトしてしまった。

素晴らしい快感だ。

私は美しい章子の顔を眺めていた。

「これから章子は、僕



のセックスの奴隷なんだよ。いいね。わかったナ」

「はい、章子は、これから、塚本様のセックスの奴隷になります」

彼女は口にくわえていた私の指を、すっぱとはずすと、両手をついて神妙に答える。

「うん、なかなか、聞きわけのよい子だ。だ

ったら、たっぷり可愛いがってやろうナ」

私は下げていた彼女の頭の上に左足の足の裏をのせ、左足の足の裏を頬つべたへ、ぴたりとつけて、ころりと横へころがす。

「いたたた、い、痛い」

二の腕に縄が喰い込んだのだろう。自由になる脚を、ばたばたさせて章子は痛がる。

両足の足の裏を使って、私は彼女を仰向かせる。手首が下敷きになるので、彼女は、全身を弓なりに反らして尻を持ち上げる。

私は、やおら腰をスツールから上げると、バスタオルを捲くり彼女の顔を跨いで、ぴたりと、お尻を顔面に据えた。

玉木章子に対して、こんな顔面騎乗の責めをやったのは初めてだった。

☆

縄を解いてやっても

息も絶え絶えになった章子は、ぐったり伸びたままだった。

私のアヌスの周辺には、まだ、たまらない擦ったさと、痺れるような快感の余韻が、そこはかとなく漂っていた。

なんという素晴らしい優越感の満足であろうか。こんな気持ちで、久方ぶりだ。

介添えなしでは、自分では一人立ち出来なくなっている玉木章子を抱き起して、私はベッドへと運んだ。

二の腕から乳房の上下、両方の手首、それに縄の結び目の当たった背中、凄惨な縄目のアトが赤く残っている。白い皮膚に、まるで赤絵具で描いたように、ありありと窪んでいる縄のカタが痛々しい。

いとおしくて、私は彼女の裸身を抱きしめた。全く、力を失ってしまっている章子は、まるで木偶の坊のように、くたくたになって私の為すがままだ。

「章子。お前は、田舎娘で年貢のかたに、この奉行所へ奉公に来たんだ。これからは奉行である俺のなぐさみものとして、一生、仕えるんだぞ。わかったな」

「ええっ、この私が、田舎娘で、年貢のかたに？ それで、なぐさみものになるの？」

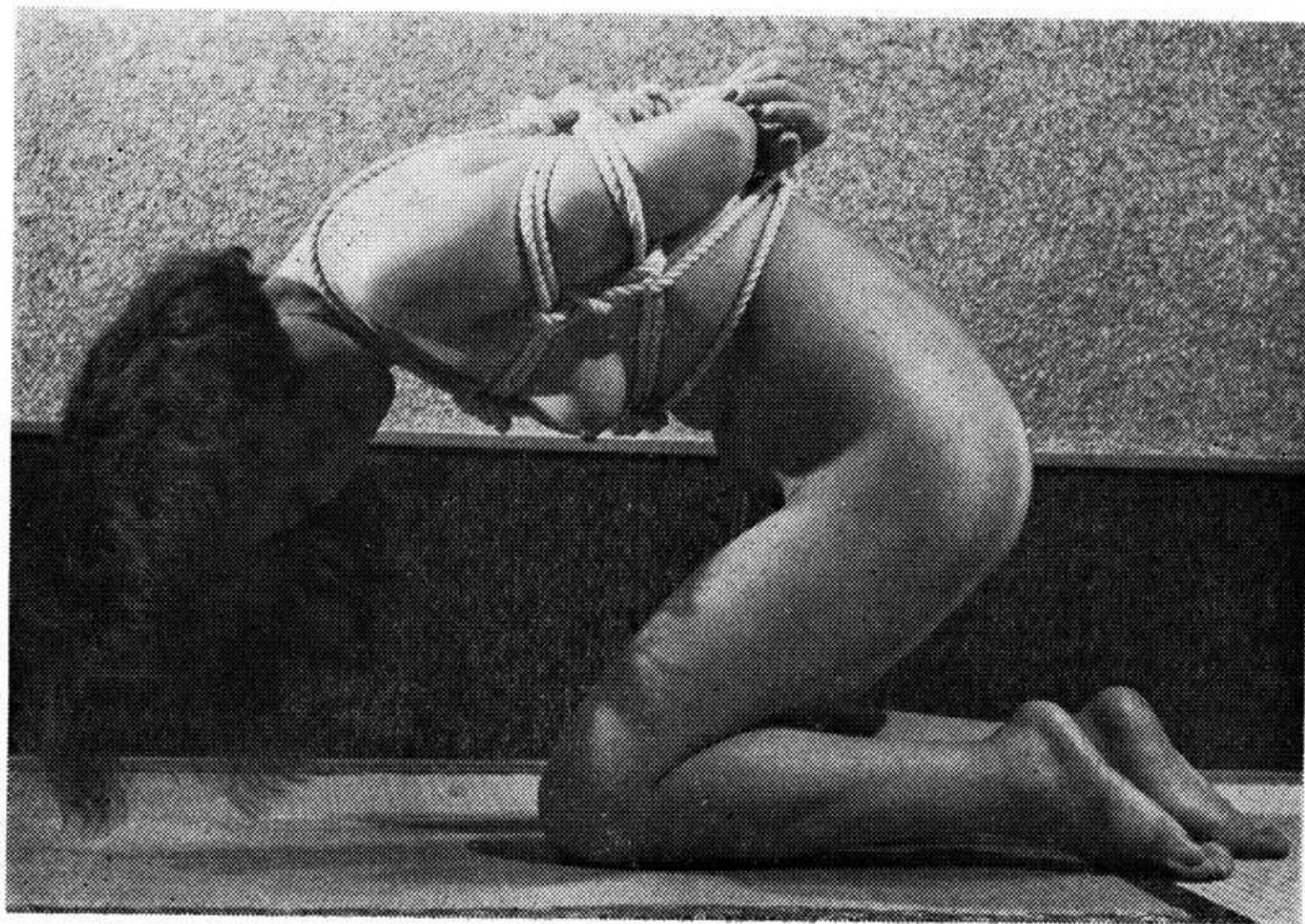
「そうだ。素直に言うことを聞けばよし、さもなくばさっきのように、高手小手に縛り上げておいてから自由にするが、どうだ？」

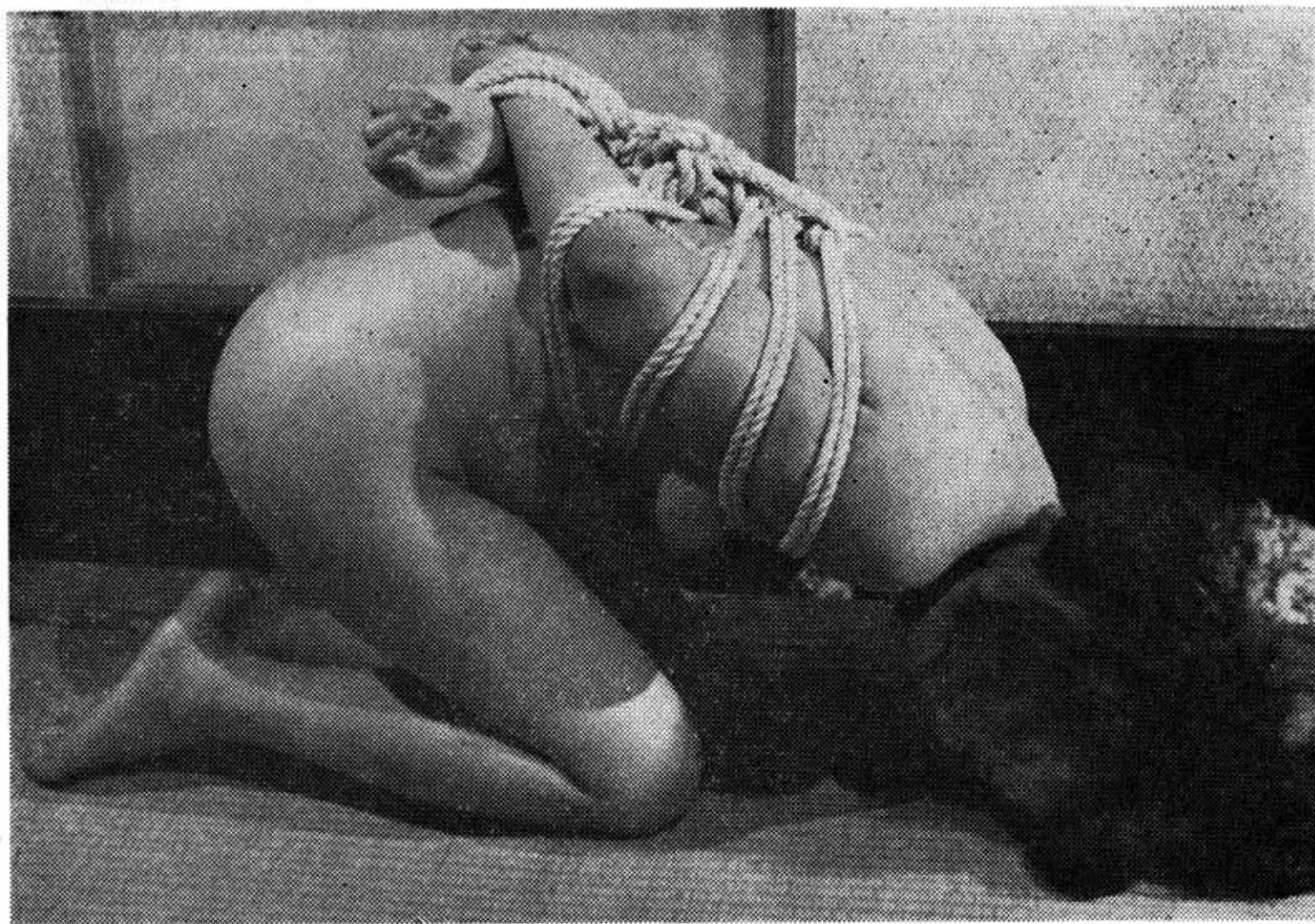
「はい、縛られるのは結構でございますが、さっきの縄は、とっても痛とうございましたので、どうか、柔らかい縄で縛って頂きたいでございます」

「やはり縛られてから、なぐさみものにされたいと申すのだな。神妙であるぞ」

「ねえ、本当は、私、縛られてから……だなんて、イヤなの。でも、どうしても縛られなくちゃいけないんです。あそこにあるあの柔らかい縄で、縛って頂戴」

「そうだな、別に逃げかくれしないんだったら、縛らなかつた方がいいんだが、やはり年貢を納められない替





りに、お前のその体で払わせるんだから、縛っておくとするか」

「あの、逃げませんから、どうか、縛るのだけは、お許しを……」

「じゃあ、縛るのは勘忍してやろう。味見をするからこっちへ来るんだ」

私は彼女を荒々しく抱きすくめる。

藤坂弘氏の目を盗んで、今までに、何回、玉木章子の味見をしたことだろう。

見たところ、二十才そこそこの体つきながら、テクニクの方は、三十女の爛熟した濃厚さを、持っていた。それに加えて、他人の持物との、たまさかの逢瀬だから、私もまた、腕をかぎりに全力投球をしたものだ。

三時間に^{なんな}垂んとする今までの「責め」によって、そ

っちの方は練れに練れていることは私の指先にも、はっきりとわかった。

玉木章子は不思議な女体の持主だった。

可憐さと華麗さとが同居していた。

見れば、初々しい色香で真綿のような柔らかさなのに、一旦、接してみれば、凄い抱擁力で私を押し包んでしまった。

一盗、二婢、三妾、四妻——の筆頭。

他人の持物を秘かに盗んで情を交わすという快味が、一段と私を駆り立てていた。

「藤坂さんとは、いつも縛られて……するんだらう？」

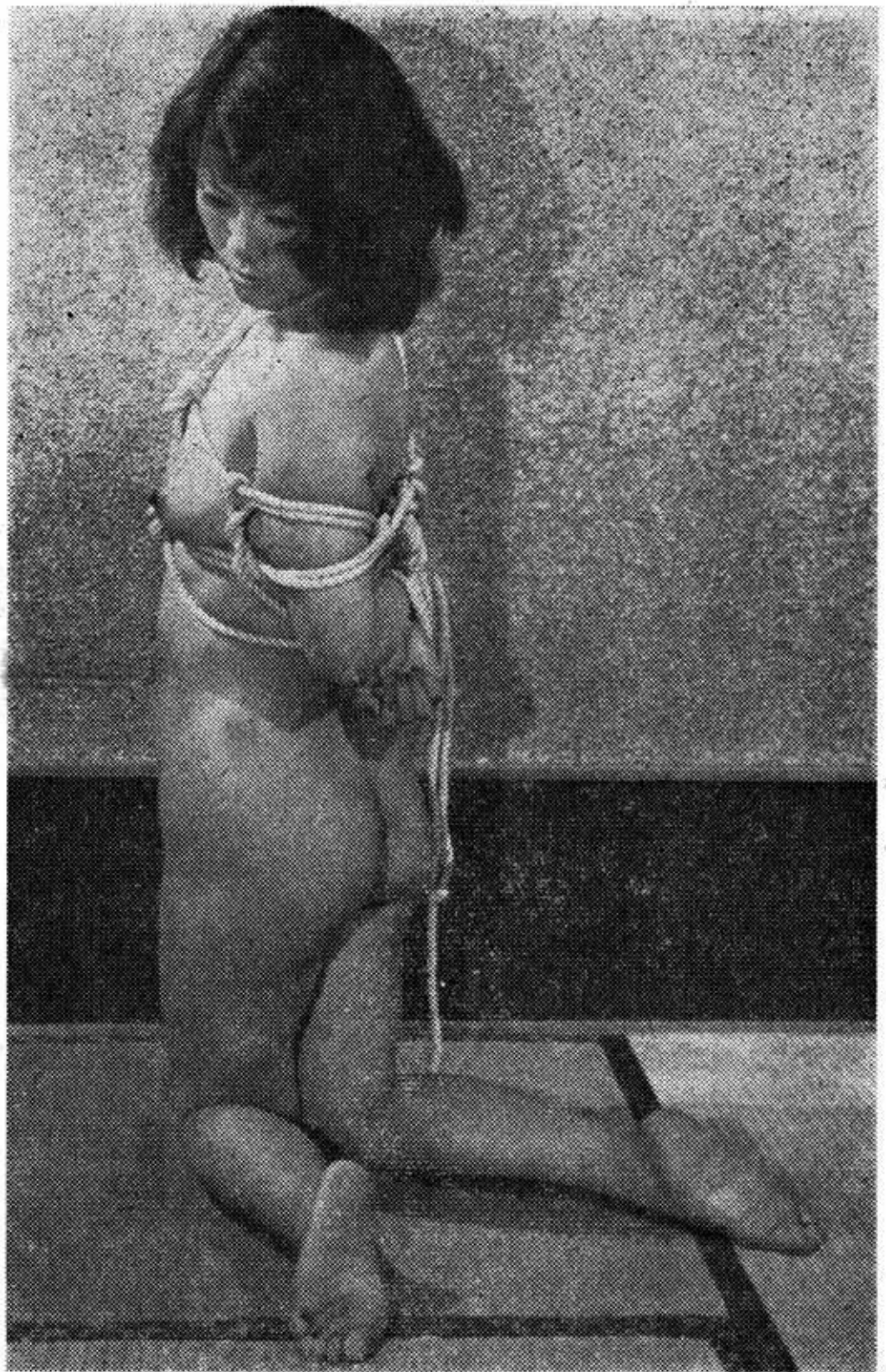
「イヤイヤ。今、そんなこと、きかないで。でも、私、縛られてない方が、こんなに、腕が回せるので、大好き！」

抱きしめれば、腕のなかで潰れてしまうのではないかと思うほどの、か細さだ。

それでいて、野性味を帯びた四肢は、強靱な鋼のように、弾力性を持っている。贅肉というものが、まるでない、しなやかな女体。曲げれば曲げるほど面白いように曲がり、伸ばせば、驚くほど、よく伸びた。

私は再び羽化登仙の夢心地を味わった。

遠くで有線放送の歌謡曲がかすかに聞えてきた。



緊縛女体めぐり

酔生夢死——というの、こういうことを

言うのであろうか。

目が覚めているのか、眠っているのか、わからない、夢見ているような夢現の境地。

考えるものとして、何一つなく、只、全身が

しびれるように、けだるかった。素裸でいるのに、寒くもなく暑くもなく、自分と外界との境界線は定かではなかった。

こんな気持ちになるのは、私一人だけであろうか。それを、私は他の経験者の人に訊きたいと思う。

そんな夢心地が過ぎて目が覚めると、寝起きのよい私は、頭が、からりと晴れていた。

五分間の転寝でも私の頭は冴えていた。いや、頭ばかりではない、全身に精気が漲っている潑刺とした感じだった。

私は、やおら、体を起した。

「さあ、次の縛りをやるぞ」

「まあ、まだ、これから縛られるの？」

彼女は薄目を開けて物うげだ。

「そりゃそうさ。今まで撮ったくらいの枚数じゃ、藤坂氏は満足しないだろう？」

「それもそうね」

私は立ったまま、寝そべっている章子のヌードに目をやった。

鼻筋が通り、美しく整った彼女の顔には、セットしたばかりというソフトな毛髪が乱れかかり、目のあたりが、かくれていた。

私に見られていると知って、開けていた薄目を閉じた。その長い睫が、今の今だけに、何故か、非常に印象的だった。

△この女も、俺は征服してしまった▽

そんな実感が、胸に湧いてきた。

細くて長い首には血管が浮き上り、首のつけ根は華奢で美しかった。

二つの乳房は、さほど大きくなく、形はくずれていなかった。ピンク色をした乳暈の真ん中に、可愛い乳頭が、これも淡いピンク

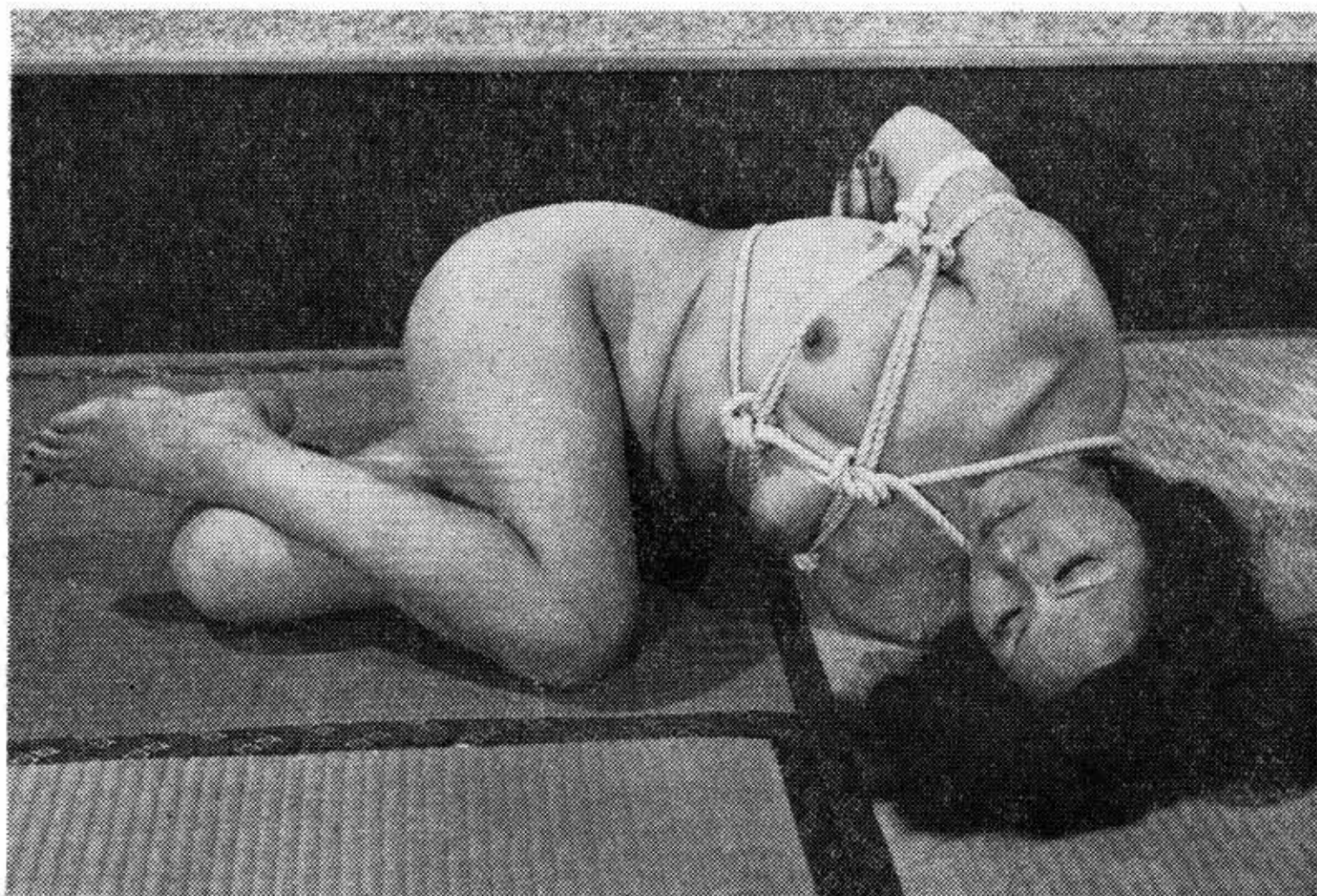
色のサクラランボのような乳首の頂で恥かしそうに微笑んでいた。これが十九の年から、七年間もSMプレイで飼育されてきた女性の乳房とは、とても信じられなかった。

少女のように可愛いらしい——そんな乳房であった。

私は、その小さなサクラランボのような乳首を指先で弄んで、しゃぶってみたいという衝動にかられた。だが、今の今、激しいプレイが終ったばかりなのだ。

章子の腹は雪のように白く、お臍のところ、きゅっと、くびれていた。如何にも、なめらかそうだった。彼女が息をする度に、その白い腹が細かく波打っている。

波打って起伏している腹は、さっきの、あの章子とのプレイを思い出して淫らにさえ見えた。淫らというのが悪ければ、エロチックと言いかえよう。彼女にしては、只、呼吸しているだけなのだろうが、細かく波打っている白い腹だけを眺めていると、私には妙にコケツトリーに見えた。



そして、雪のように白い腹の真中には、やや大き目のヨコ型の臍が、一緒になって動いていた。私は章子の、この、ぽこんと窪んだ臍窩が、大好きだった。

どちらかといえば、やや深目の彼女の臍は間のびしがちな腹面に対して、強いアクセントを与え、腹全体を、きゅっと引き締めていた。余り皮下脂肪は沈着していないのに、弾力性だけは豊富なようだった。

私は白いロープを手を、彼女を促した。

「さあ、早く起きるんだっ」

「ねえ私、お化粧、直してきたいわ。」

それに、おトイレにも行きたいし……」

「よし、それだったら、早く済ましてきなさい。戻ってきたら、すぐ縛り上げるからナ」

思えば、この密室へ入ってから、休みなしに連続でプレイを続けてきたわけだ。気心も知れているし、も早、他人同士ではないという心と心の触れ合いも生じてきている。だから、二人の気持の赴くまま、スムーズに、ここま

で進行してきてしまったのだ。

私はベッドの上に仰向けに倒れた。

奇妙なことに、今になって、再び元気が出てきた。充実したものを覚えたのだ。

思えば、不思議なことだらけだ。

大山良介氏の目の前で、文子夫人を手箒め同様に自分の物にしたときの、あの「一盗」の感興と、この玉木章子を藤坂弘氏の目のかすめて、我が物にしたときの「一盗」の刺戟とが、一体、どのように違うのだろうか。

今頃になって、私は、ふつふつと身の内から燃え上ってくる淫念に悩まされ始めた。

ああ、なんということだろうか。

私は、自分の飽くなき欲求に愧じた。

☆

渡部光雄氏から手紙が来て、妻の好美を、カメラ・ルポに提供するから——と言ってきた。好美夫人といえ、過去に二回、プレイした経験がありながら、私としては、まだ記事にしたことがなかったのだ。

光雄氏の諒解のもとに、好美夫人に挑んだ私。そのときのSM的興奮は忘れることが出来ない。是非とも、彼女とプレイして、その詳細を、この奇ク誌上に、美しい好美夫人の緊縛写真と共に、発表したいものである。

主人である光雄氏の諒解の上だから、純粋に、「一盗」とは言えないにしても、部屋に入るなり、直ちに好美夫人を、畳の上に押えつけたときは、如何にも「征服した」という「満足感」を味わったものだった。

ということになれば、関谷富佐子夫人、川路むら子夫人と、例を挙げれば、きりが無い

が、この玉木章子は、藤坂弘氏の掌中の珠であるSMを通じての「愛人」だけに、私の罪障感も一入深く、それだけに「一盗」としての刺戟も、また強かったのだ。

☆

トイレへ行って化粧を直した玉木章子は、美しく、明るい顔で部屋へ戻ってきた。





「さっきまでのことは、私は、何も知りません」といった、さばさばした何気ない顔つきだった。満足したら、女というものは、こうも変わるものなのだろうか。

私は白い手馴れたロープを手にして、彼女を迎えた。私の一瞥を受けると、彼女は着ていた浴衣をパツと脱いで全裸になった。それは飼育済の女の型に嵌まった仕草だった。

章子の全身には、次に起ることへの期待でわくわくしているように見えた。

私の胸は、ふくらんだ。

縄を持つ手に血が通ってきた。

乳房の上下から二の腕に早縄を掛けて、後手首が水平になるまで締めあげた。上膊部が腋にぴったり密着して、二の腕の肉が、むっくりと盛りあがった。

首縄から前に回った縄を横の縄に通して、二つの瘤をつくり、臍の上で左右に振り分けて背後へ回し、両脇の縄に、うしろから編むようにして締めつけた。

凄く緊縛感だ。

か細い上半身が、この白いロープで、くびれきってしまうかに見えた。

玉木章子は、全裸のまま、太腿をきっちり合わせ、うなだれて正座していた。

一分のスキもなく柔肌に喰い入った白い縄がシンメントリカルな美しさで彼女の裸身を飾っていた。それは倒錯的なSMプレイの所産というよりも、殉教的なM女の捨身の神々しいばかりの美しい芸術品だった。

私は祈るような気持でシャッターボタンを押していた。

なんという美しさであろうか。

責めれば責めるほど、益々その美しさを増す「不死身」のふてぶてしささえ窺われた。

私はシャッターを切ったあとも、しばらくぼんやりと章子の緊縛姿態に見惚れていた。

正座の整ったポーズから、臀部をにじらせて畳へぴったりと着けさせ、足を投げださせた。足首のあたりを見詰めている澄んだ瞳。

四方から縄が締めつけて、ぽっかりと膨ら

んだ可愛い乳房を羞らうように、うつ向いている彼女の姿は可憐でさえあった。縛られて、私に言われるがままになっている章子を眺めているうちに、たまらなく、いとしく思えてきた。無理難題をふっかけて、いじめてみたくなってきたのだ。

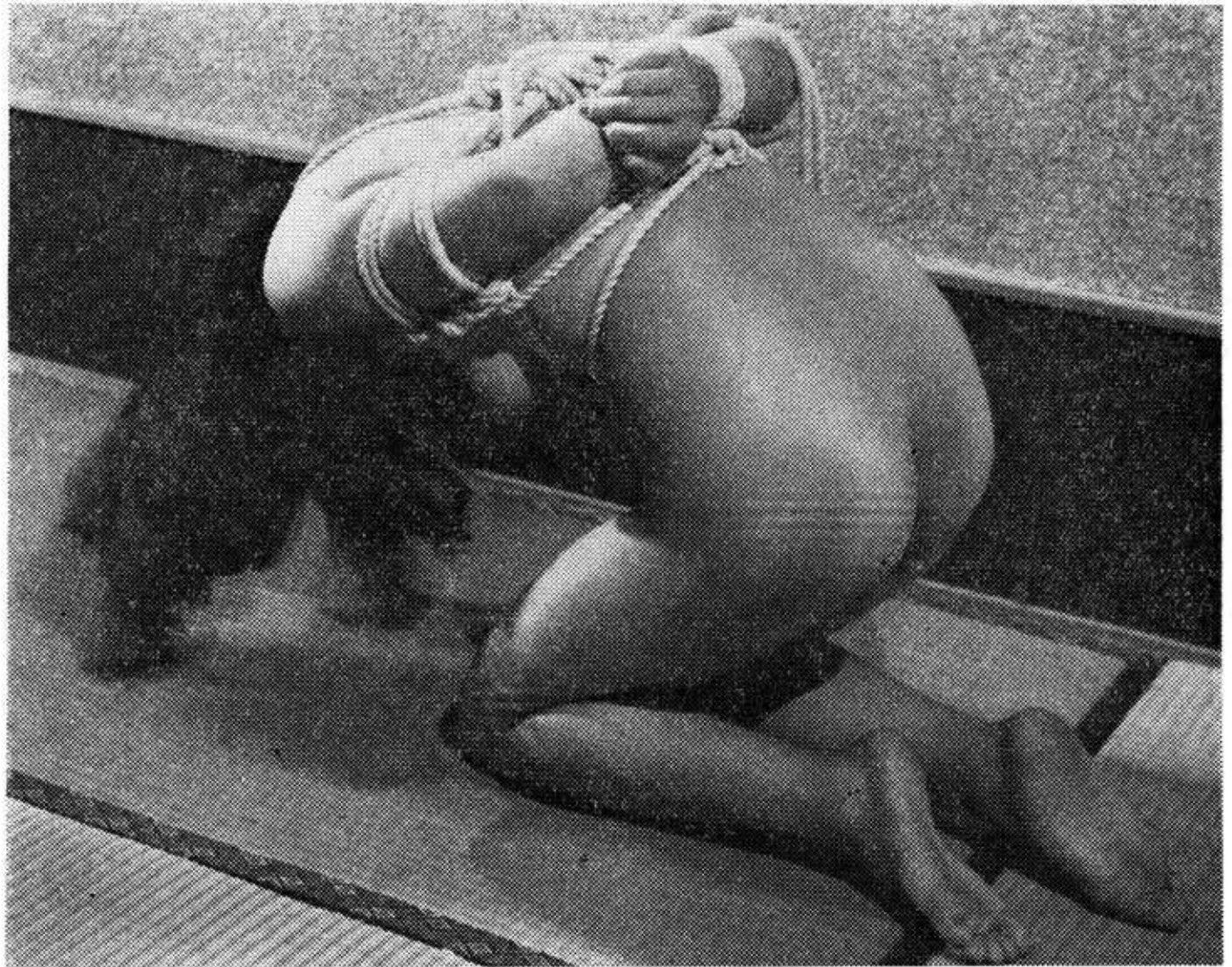
「章子、左側を見てごらん。ほら、壁一面が鏡張りになっているのだ。あれに、章子の縛られた姿を写してみたら、どうだ」

「イヤ、イヤヨ、鏡だけは許して。鏡に映った自分の、こんな格好みたら、恥かしくって、私、死んでしまいたくなるわ。お願い、そんな意地悪なこと言わないで……」

「だって、ホラ、鏡に映ってるじゃないか。見てごらんよ。さっきからずっと、素裸で縛られてたんだろ。今更、恥かしいだなんて、おかしいよ。章子らしくもない……」

「でも、でも、やっぱり、恥かしいわ」

「だったら、鏡に映ったのと、両方を画面に入れてみようか。僕の言う通りにポーズをす



るんだよ」

私は、彼女に負目を作っておいて、裸身を

こねまわすようにして、優美な緊縛肢体を弄んで、いろいろにポーズをとらす。藤坂弘氏にサービスするためのフォートを、カメラアングルを変えて幾枚も撮影した。

シミ一つない、すべすべとした玉木章子の裸身は、縄によって整然とくびれ、太腿、膝小僧、肩先、足の甲、胫などにライトが照り映えて、まるで芸術品の彫刻でも見るかのように、ギラギラと輝いている。

まさに、女盛りの女体の各部分部分が、ムンムンと色香をまきちらして、私の目の中に飛び込んでくるのであった。

「とにかく、章子の縛られた写真をふんだんに撮っておかなくてはね、折角、期待していて呉れる藤坂氏に相済まないからな。次には一度、彼と二人で章子を責めてみたいもんだな。三人プレイっていうのも面白いよ」

「いやっ、いやっ。そんなの、御免だわ。それより、前に言っただけのSM研究会とかいうのに出席したいわ。それだったら

私、相手が複数だっても構わない……」

「先日、藤坂氏に、そのことも話したんだがね、簡単にOKは呉れなかったよ。近々、S研の会合があるから、彼一人だけでも、無理に引っ張りだしたいネ」

「私からも勧めてみるわ。あの、この縄ってよく締まるのね。手がしびれてしまったわ」

私は撮るだけ撮って、縄を解く。

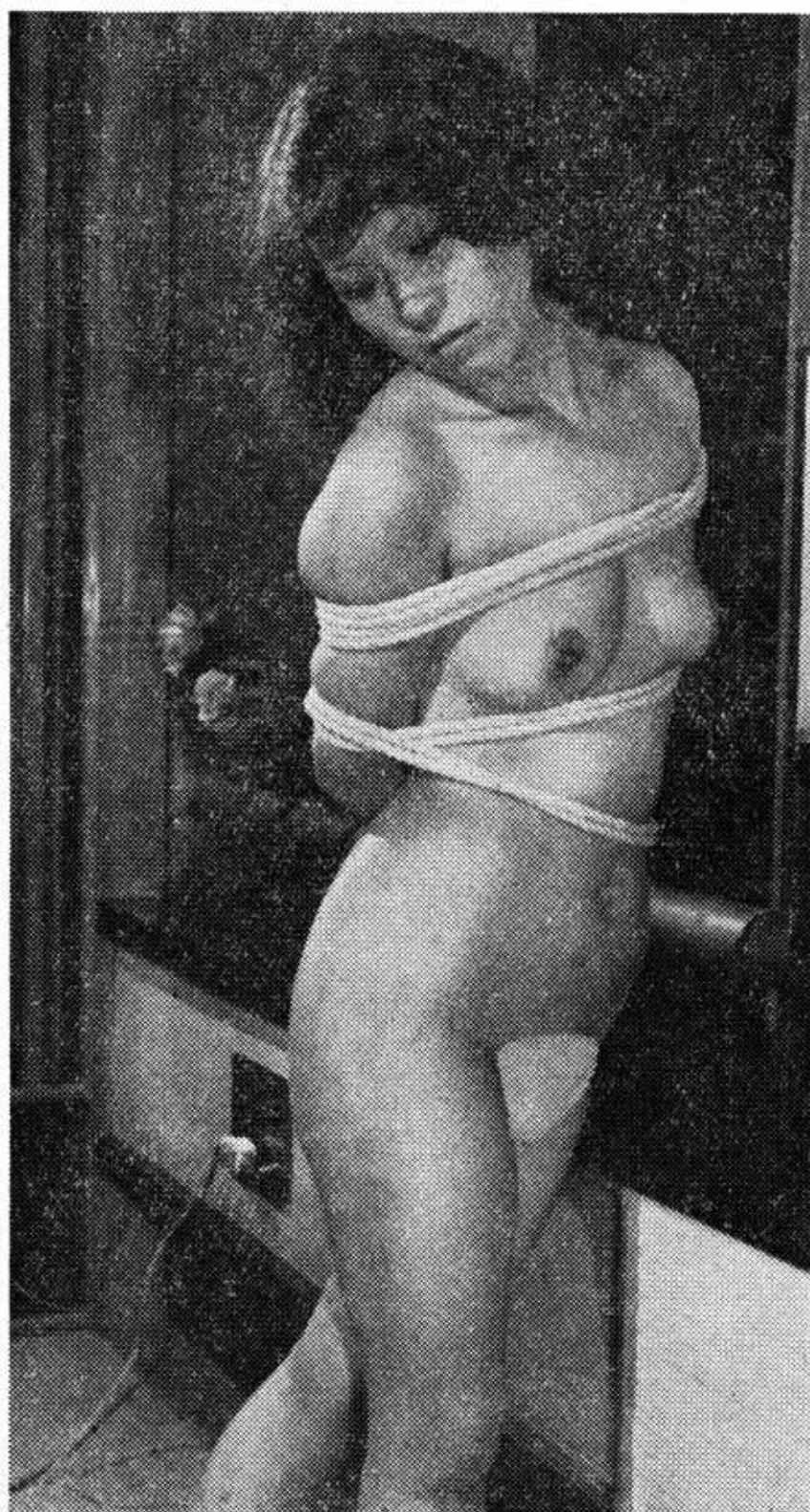
手首が一番に締まって、指がしびれるらしい。それが戻るとき、チクチク痛いと、大騒ぎなのだ。その手の指を擦ってやるふりをして、私は章子の裸身を、かき抱く。

可愛い。頬ずりしたくなるほど可愛いくて仕方がないのだ。頬っぺたばかりじゃなく肩口も、乳房も、背中も、私の唇の攻撃目標となる。擦ったくて、くくく……と、含み笑いをしながら、上半身を私の頬の上で、くねらせる。そんなときの下半身の動きも、なまめかしくて仕方がない。

掌を太腿から、臀部へと滑らせてゆく。

私は、そうしたくて仕方がないのだ。しかし、玉木章子にしたら、放っておかれるよりも、そうされたいのかも知れない。

そんなことをしているうち、彼女の手の指のしびれは、とれたらしかった。



「ねえ、まだ縛って、お写真、撮るの？」

「そりゃそうさ。今までぐらいたったら、彼は満足しないんじゃないかな」

「でも、ホラ、そのあとで、あの、プレイ、やるんでしょう？」

「うん、そうだったナ。それじゃ急がなくなっちゃ、ならないネ」

私は、今ほどいたばかりの白い縄をしごいて、早縄を掛けた。

「ほら、こっちへ来るんだ」

今まで撮っていたところとは反対側に、縛

った章子連れれてくる。

「章子、折角、縛り直したんだから、ここらで、一つ、珍芸をやってみるか？」

「ええっ、珍芸って？ それ、何？」

「さっき、チョキンチョキンとやったらう。

あそこを、どれだけ手入れているか、それを、今、ここで披露して貰おうか」

「一体、どんなことするの？」

「この台の上へ、先ず上るんだ」

「こんな幅の狭いところへ、両手を縛られたまま、とても、上れやしないわ。ころげち

「やったら、それこそ大変よ」

「だったら、僕が介添えして、上らせてやるヨ。その代り、言われた通りするんだよ。この前のとき、放尿しただろう。あれと同じ要領でやればいいのさ」

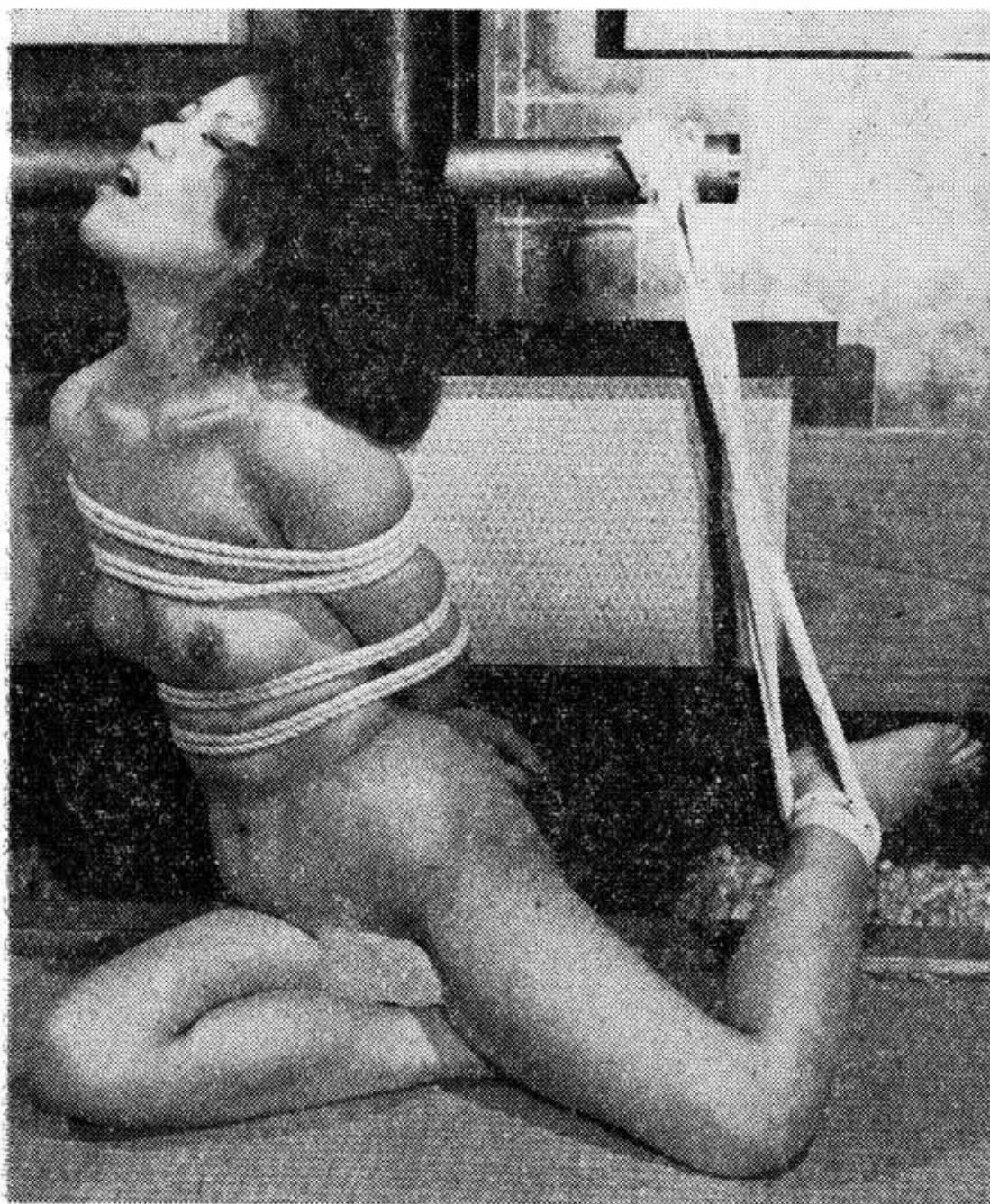
「ああ、あんなのだったらイヤ。本当に悪趣味だわ。そんなの、勘忍して……」

「そんなこと言って、本当はそうされたいんだろう。顔に書いてあるよ」

「まあ、意地悪。へんなこと言わないで。私って、そんな女に見えまして？」

私は彼女を抱えて、幅十糎ばかりの台の上に乗せる。やっと足のつかる程度だからまことに不安定である。両手が縛られていて自由がきかないのだから、もう、それだけで彼女は恐怖心にかられて、静かになった。

「そーら、そうして、両腿をそろそろ、左右に開いてゆくん」



私は正面からカメラを構える。

「いやヨ、いやヨ。写さないで……」

そんなことを口では言いながらも、彼女は徐々に両膝を大きく開いてゆくのだ。

畳の上から、一メートルばかりの高さだ。

彼女が、ころげ落ちないように見守りなが

ら、私は一眼レフを胸の高さに構えて、ファインダーを覗いた。ピントグラスに天然色の彼女の正面の画像が鮮明に映っている。

羞らいに伏眼勝ちになっている整った顔を下からあふってシャッターを切った。

悲しいまでに美しい被虐の表情だった。

「これだったら、きつと、藤坂氏も気に入ってくれるだろう」

私はカメラを置いた。

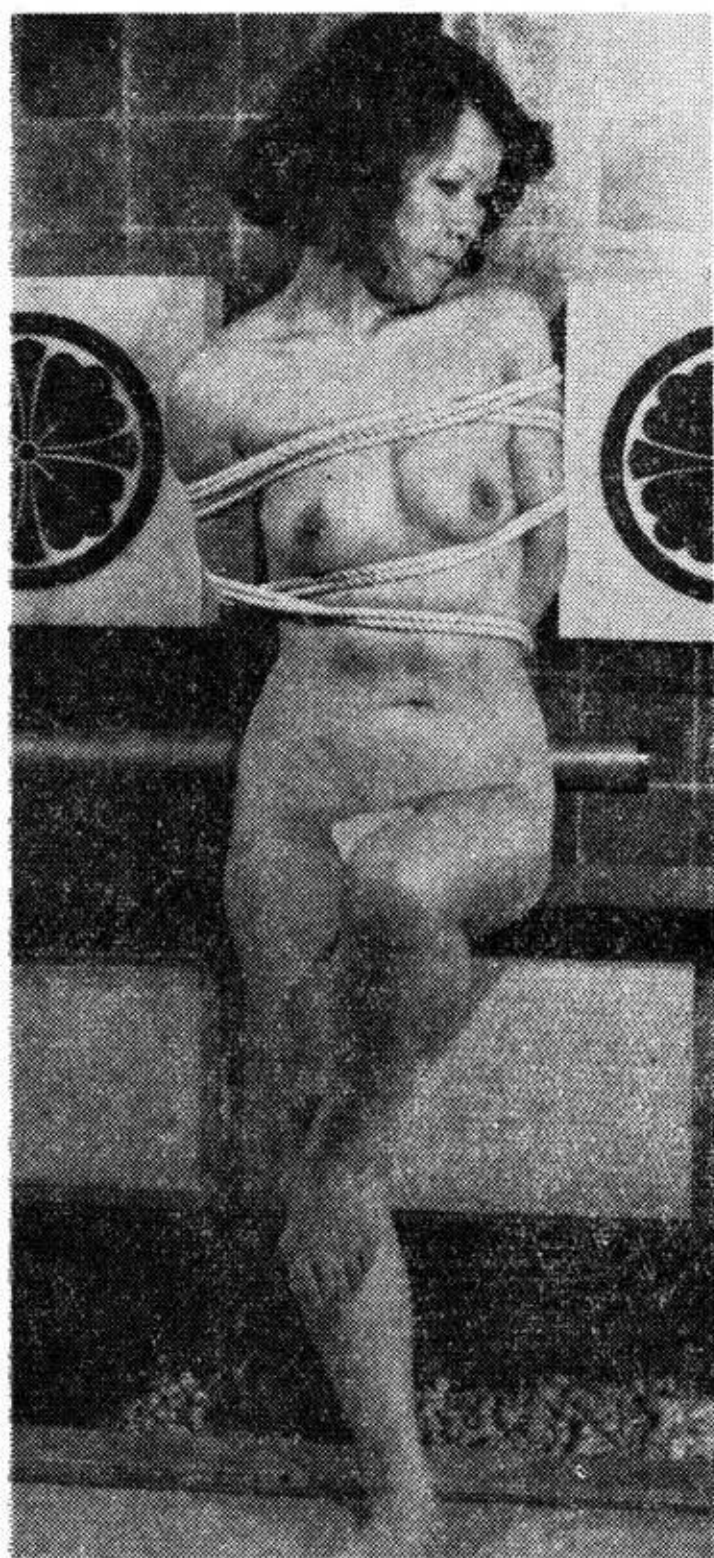
この部屋へやって来てからもう五時間は、優に経っている。疲れはなかったが、快い充足感が全身に漲っていた。

「ねえ、章子。さっきは断髪をやったから、これから「鬚剃り」をやるうかネ」

「イヤー。そんなことしたら彼に叱られるワ。なんて、弁解したらいいのよ」

「僕から電話で諒解を求めておくよ。さあ、縄を解いてあげるから、浴室へ行こう」

「あの、私、その前に、あのプレイしたいんですけど、い



「けません？」

「剃刀による剃毛プレイをやるんだよ」

「今日、お別れしたら、次は、いつ、お逢いできるか、わからないでしょ。だから、ね、この私を、もっと、いじめて頂戴」

「じゃあ、この縄を解かなくても、そのまま、いいのかい？」

「ええ、いいわ。思いつきり、いじめて頂けるんだったら、このままでも結構ですわ」

「だったら、こっちへ来るんだナ」

私は、彼女をベッドルームへ招じ入れて電灯を消した。既に窓の外は暗くて、暗黒の密室となった。私は手さぐりでベッドの上の章

子の縛られた裸身に手を伸ばしていった。

暗闇の中では、視覚は全く用をなさなかった。その代り、触覚だけが異様なまでに鋭敏になってきた。

私も裸になって布団の中へもぐり込んだ。

布団の表面がイヤに冷たく感じる。

「章子、素肌の美しさには自信があるんだろ。うね。こんなに、スベスベしているもの」

「自信なんて、とてもないけど、手入れだけは欠かさずしていますわ」

「そうだろうね。このおっぱいも、お臍も、お尻も、石鹸を塗ったようにツルツルだね」

「そんな……くすぐったいわ」

「目が見えないから、こうして、手でさぐる

だけが楽しみなんだよ。ほら、ほらね。ここが、お臍だろう？そして、ここが……」

「ああ、くすぐりたい。縛られたままで、そんなことされたら、たまらないわ。ねえ、この縄、解いて下さる？」

「そんなこと言ったって、手さぐりじゃ、どこが結び目か、わかりやしないよ」

そう言いながら、私は彼女のくびれたウエストに手を回す。途端に、彼女のしなやかな肢が、ねっとり私の体からんできた。

真暗闇の中で触覚だけが、二人の間で跳梁した。私は、たっぷり時間をかけて縄を解きその縄を足でベッドの下へ蹴落した。

縄を解くなり、彼女の腕も私の背に巻きついてきた。

☆

どのくらいの時間、二人でベッドの中にいただろうか。汗かきの私は、敷布がしっとり湿るほど、全身から汗を噴きだしていた。真暗闇の中を起きだして、部屋のスイッチを入れた。パッと明るく点灯した。

「ああ、いやよっ」

彼女は、あわてて布団をかぶる。

私は、そのままタオルを提げて浴室へ飛び

込む。熱湯のカランをひねって、冷めた湯を温めているところへ、章子が入ってくる。

そんなところは、なかなか、サービス精神の旺盛な彼女ではある。だが、どうしたことか、彼女に剃毛する絶好のチャンスなのに、そうした意欲は、少しも湧かなかった。

手元に石鹼もあるし、備付けの軽便剃刀もあるのに、手に把る気さえしないのである。

これは一体、どうしたことだろうか。

流石の私も、彼女とのSMプレイに満足しきってしまったためだろうか。

苗木陽子や松本たえとのときは、一晚中でも、その挑戦を受けとめたではないか。

それが、玉木章子とでは、どうも、調子が違うのである。

“M女は挑発する”

その挑発に誘われた私が馬鹿だったのか、それとも、彼女のスタミナが抜群だったためなのか。私は不思議に思っていた。

数時間に亘る息もつかないプレイの連続。そして、こうして肌を接しての入浴。もう他人ではないという心の交流で、別れ難い思いが私の胸に一杯になってきた。

「今度、プレイをするときは、泊りがけで、ドライブしながら、どこか温泉地へ行ってみ

ないか。章子とだったら、長距離でも、運転を交替して行けるから安心だよ」

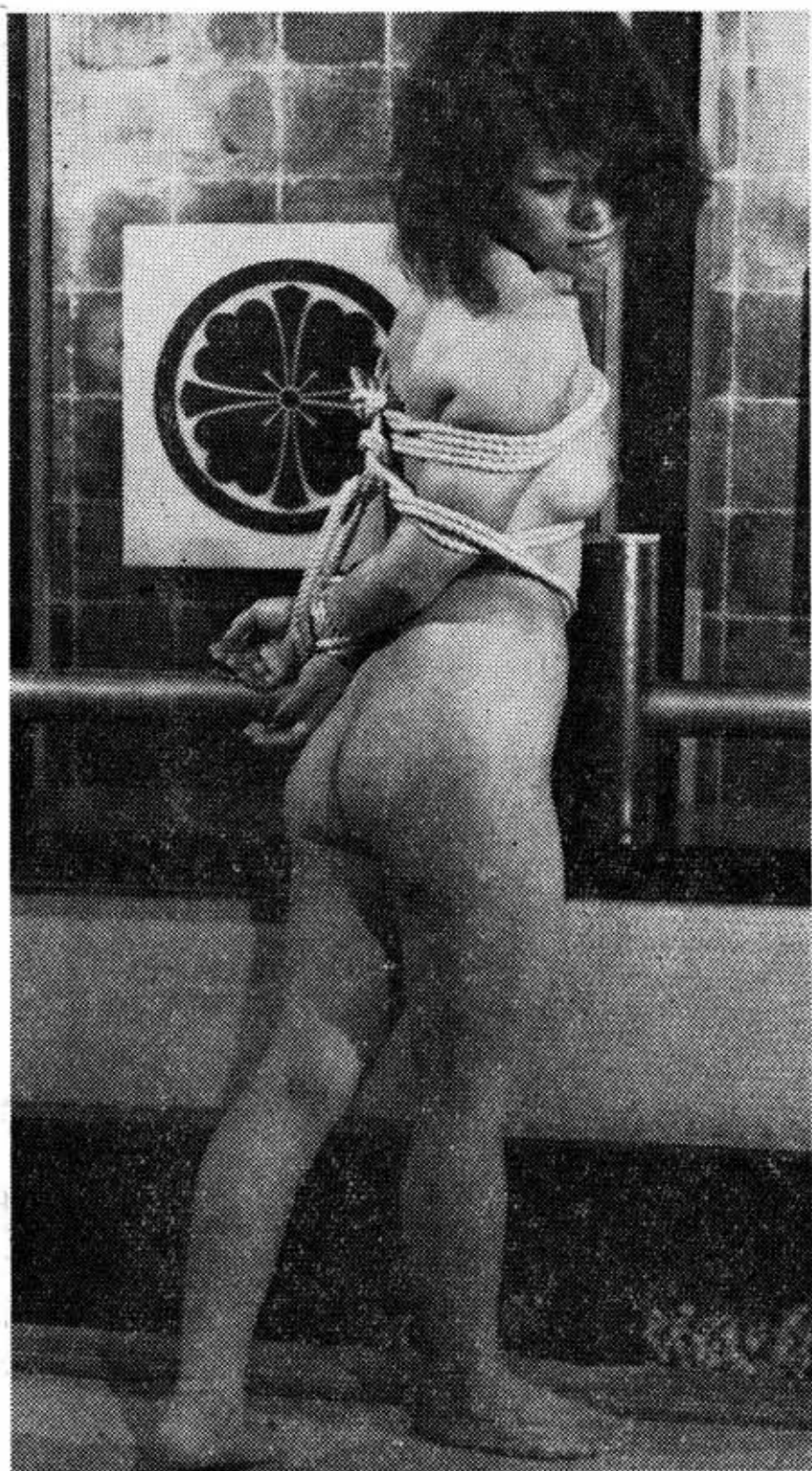
「そんな機会があったら楽しいわね。是非行ってみたいわ。私って、いつも、たった一人でドライブしてるんですもの」

「もし、藤坂氏が一緒に行ってくれるんだっ

たら、僕は藤田明子を連れて行くよ。彼女は泊りがけで行こうって、しつこく言ってきているので、四人で行って見ないか」

「それ、塚本さんから、彼に話してくれる。彼って、ちょっとや、そっとでは、出て来ないと思うのよ。人見知りするタチなのね。だ





から、よっぽど強引に勧めなくっちゃ、重い腰を上げないと思うわ。それに、塚本さんと私、こんな間になってしまったでしょう。彼はテレてるのよ。きっと」

「藤坂氏が藤田明子と二人っきりで、プレイをしたとしても、章子はなんともないかい」「ええ、そりゃ、少しは抵抗あるけど、彼は彼、私は私。彼が、それで満足するんだったら、仕方がないじゃないの」

「よし、それじゃ、きまった。僕は藤坂氏を

口説くから四人でSMプレイ旅行をやるう。そうだねえ、一泊だったら、城崎温泉なんかどうだろう。月並みな所では、白浜温泉でも山中温泉でも、場所はあとで相談してきめるとして、隣り合わせの二部屋を借りるか、或は大きい一部屋に四人入るか。ねえ、こりゃ面白くなってきたじゃないか」「そうね、私はいいけど、あとの二人は、いかしら?」

「藤田明子の方は十分、脈はあるよ。藤坂氏

と藤田明子とプレイしているところを、章子と二人で、こっちから眺めているなんて、こりゃ、ぞくぞくしてくるね。さっきのように真暗にしておいて、藤田明子のベッドへ、藤坂氏を潜り込ませるんだ。面白いぞ。でも、明子は名器の持主だから、藤坂氏は驚くよ、きっと。ウフフフ……」

「それで、私の方は、どうなるの?」

「章子か、章子は、僕が逆さ吊りにでもしてたっぷり、可愛いがってやるさ。それとも、ホラ、開股宙吊りにしておいて、うしろから……だなんて、一寸、面白いじゃないか」

「貴方って、エッチなことばかり考えて、よう飽きないのね。私は、吊られるのなんて、御免だわ。痛さに耐えるのって、そんなに自信ないのよ。だから無茶なことはいないで。どちらかといったら、羞恥責めの方が好きなのよ。それに……、彼と藤田明子さんって言ったかしら? 二人でプレイしているところを、こっそりと眺めるなんてのは、凄く興味があるわね」

「章子も、結構、エッチじゃないか。覗きって言ったら、好色哲学の最たるもんだよ。キミも、いよいよ、仙人の域に達してきたよ」「でも、藤田さんって、奇麗な方なんですよ

う？ 私、嫉けてくるわ」

「そりゃ、若い頃にはミス〇〇になったって
いう位だから、今でも余香は残ってるね。そ
れに体がいいね。殆どの男性は、その方で参
ってしまふんじゃないか。もっとも、彼女
は年を言わないし、僕も聞かなかったから、
はっきりしたことはわからないが、章子より
上なのは確かだね。その点、キミの方に断然
歩があるってわけだ」

「だったら、私って、若さだけの魅力って、
わけなの？ 失礼しちゃうわ」

「そういうわけじゃないよ。そりゃ章子はプ
レイの方も、体の方も抜群だよ。ただ、今度
逢ったとき、藤田明子と、角つき合やすのだ
けは勘忍してくれよ。うまく話がつけば、四
人混合プレイって奴もやりたいからネ」

「そんなに、塚本さんの考えている通り、う
まく運ぶかしら？ それよりも、私と二人っ
きりで旅行するっていうプランの方、考えと
いて下さいナ」

衣服を着けながら私と彼女は、そんな、と
りとめもない会話を交わし合った。

私は、玉木章子に対しては、まだまだ、い
ろんな「責め」をやりたくて心残りだった。
殊に彼女は、誰彼なしに、物怖じせず話し

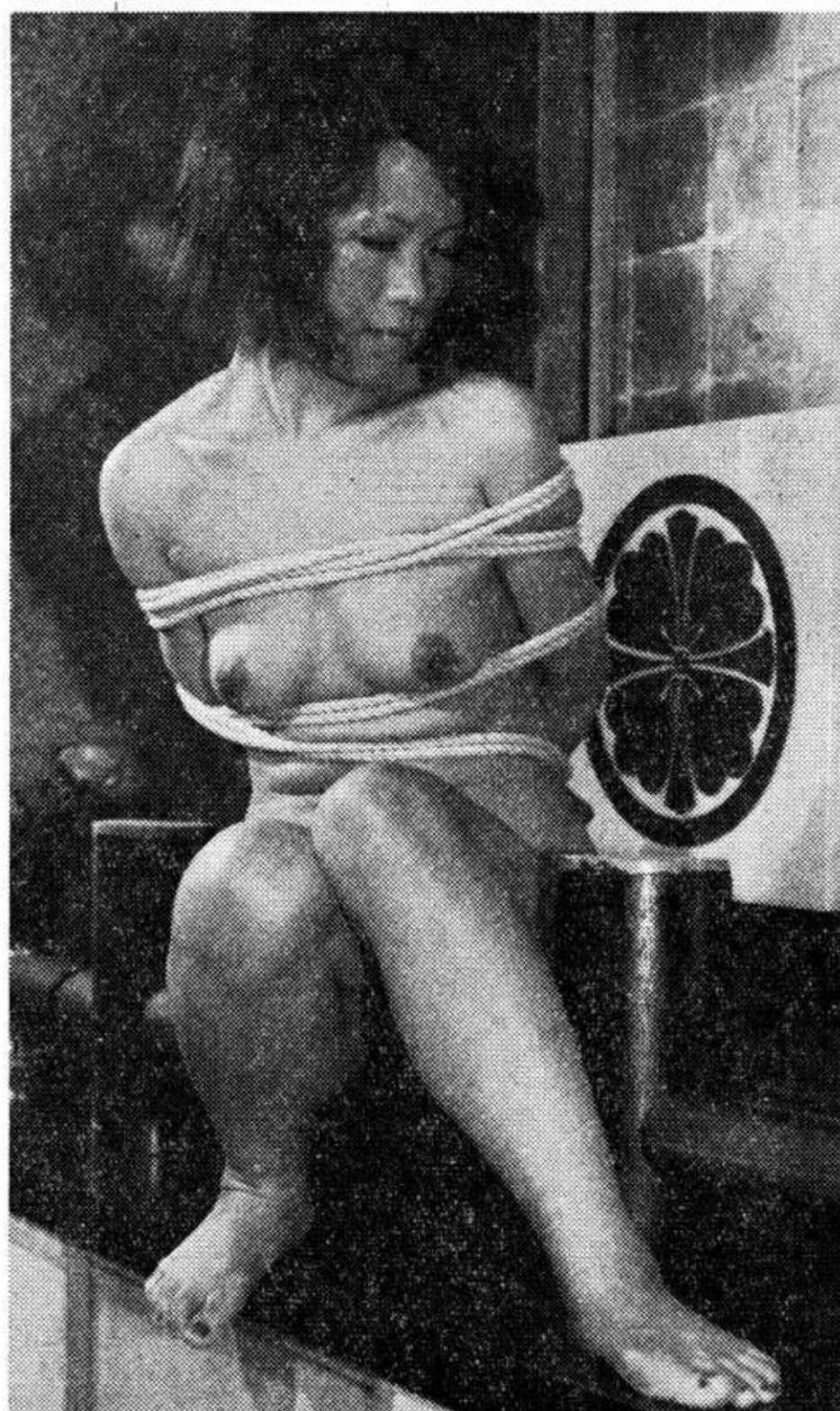


掛けるフランクな性質の持主だけに、彼女が
△S研▽の会合に顔を出して呉れる機会があ
ったら、きっと愉快なひとときを過せるので
はないかと思った。そんなチャンスがあった
ら、そのときは、とっておきの「剃毛責め」
を、みんなの前で披露してみたいも
のだ。それがまた、玉木章子の最高の願望で

もあると、私は思うのだ。

私は、なんとかして、藤坂弘氏と玉木章子
のコンビで、△S M研究会▽の席上へ顔を出
してほしいものだと思っていた。若し仮に、
それが、どうしても都合が悪いというのであ
れば、玉木章子だけでも、出席してくれない
かなあ——と、切に考えている。

玉木章子が、S研の会合に出席してくれるということになったら、それは、さぞ、楽しいことだろう。私は、その際のS研のメンバーを、誰彼と心に描いている。彼だったら、ネチネチと、時間をかけて、猫が鼠をいたぶるように彼女を責めさいなむだろうと考えたり、彼だったら、豊富なSM的話題で、彼女を煙にまいてしまうかもしれない——と、空想は、次々とひろがってゆく。



それなのに、玉木章子は、私が一度、口を滑らせて、「どこか、温泉へでも、ドライブがてら、プレイ旅行へ行かないか」と言ったのを、よく覚えていて、「ねえ、何処へつれて行ってくれるの」と、しつこくねだっている。それで、一応、一泊か二泊で、プレイ旅行を、いずれはやろうということに話はきめである。といって、日や場所をきめたというわけでもない。

藤坂弘氏の目を盗んで、二人でしめし合わせて、熱心なS研会員の住む行楽地めぐりをやるというプランは、どうだろうか。

昼は観光地を見物して回って、夜は温泉宿でSMプレイに興ずるというのは、どうだろうか。俗化した温泉地なんか、面白くないと言われる方も多い。しかし私は、ミィハー族か知らないが、俗化しきった行楽地や観光地が大好きなのだ。

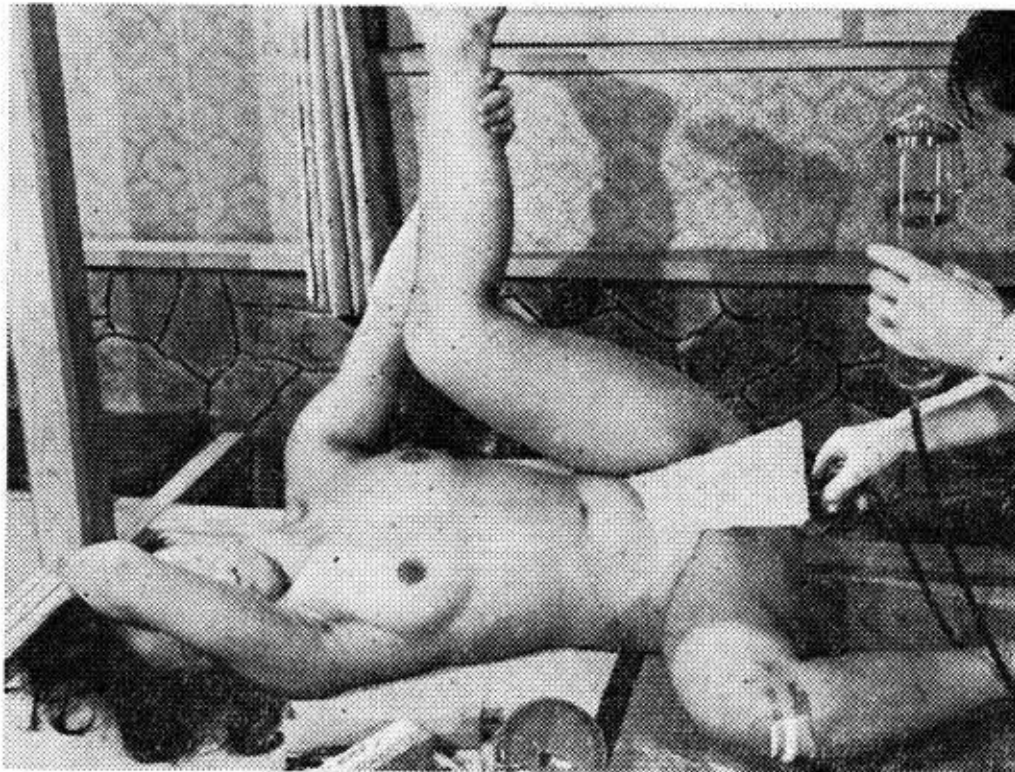
玉木章子と二人で、ポルノ映画を見たり、実演を見物に行くなんて、旅の空の心うきうきした雰囲気では、一層、興味深いのだ。ビールなら、三本や四本は飲むという彼女。プレイ旅行のホステスとしては、藤田明子と共に最も適した女性だと思う。

洋服を着終ってしまうと、彼女は、もとの明るくて快活な娘に返った。

今までの数時間が、まるで悪夢さながらに遠い国での出来事のように思えるのだ。

助手席の窓を開けた彼女は顔を覗かせてバックする車を巧みに誘導してくれた。彼女の車を置いてあるレストランの駐車場まで、私は彼女を送っていった。

陽はまだ高く、茜色の空をセブン・ツー・セブンが頭上を低空していった。(おわり)



<告白>

ある「浣腸マニア」の体験
窺視と浣腸

品川須賀男

私は浣腸マニアです。といっても、私自身が浣腸の苦しみを味わうのではなく、もっぱら妻に“してやる”ことに夢中になる浣腸マニアなのです。つまり、軽度？のS人種だと思っています。

私の浣腸願望は、ずいぶん昔から心の中でくすぶっていたようですが、実行したのは、結婚前に一度、当時のガールフレンドに浣腸しただけです。

見合結婚した現在の妻には、どうしてもチャンスが掴めずに、その願望を打ちあけかねているうちに日が経ったという状態でおりました。それが、天の助け？か結婚後二年目に、まるで私の代弁でもしてくれるような、ショッキングな情景を目撃するチャンスにぶ

つかったのです。

あの日、私達は遅い夕食をしながら、ささいなことから口ゲンカをしてしまいました。夏のことで、いく分ムシ暑さが影響していたのかも知れませんが、まだ結婚二年目の若い夫婦には、似あわない倦怠感がありました。お互いにフクレ気味の二人が、深夜放送のテレビを見ていても、面白くもなかったのですが、寝る気にもなれずに時間をもてあましているという感じで、一番、風通しのよい二階の間だから同じ部屋にいただけとでもいう形でした。

窓の手摺りにもたれて、ボンヤリと外を眺めていた私は、ふと、道をへだてた向かい側にあるアパートの一室に注意を惹かれ、無意

識の内に目を凝らしてしまいました。丁度、眼下に見降ろせる位置の、一部屋の窓が明け放され、カーテンが半開きになって、豆電球でしよう淡い灯りがついてる中に、明らかに女性の裸身が、転げ出したからです。しかも、カーテンの蔭には、もう一つの人影が認められました。私は、とっさに「夫婦の秘めごと」を直感しました。

こんな場合、わざと見ないで済ましてしまう人間がいるでしょうか？

私はずっと立って、戸棚からオペラ・グラスを取り出すと、びっくりしたような妻にかまわず、テレビを切り、電灯を消してしまいました。

オペラ・グラスを通して見る件の部屋の中の情景は、正にワクワクものでした。もちろん、妻も何やらいいながらも私に寄り添って凝視し始めました。

カーテンの蔭から現われた人は男でした。多分、全裸のその女性のご主人でしょう。やはり裸で、ここでは一寸書きにくいようなもつれ合いが行われ始めたのでした。

ところが、しばらくしますと、驚いたことに男の人が、その女性を抱き起こして坐らせると、その両手を後ろに捻じ上げて縛り始め

たのでした。黒っぽい感じの紐でした。

私は信じられない想いで惹きつけられていました。もちろん、昔から本誌を読んでいましたので、縛りプレイのことはよく知っていましたが、私自身も、ほんの時たまの夢想だけにしろ想い描いたこともある情景なのですが、それらのことは何か別の世界のことにように思っていたのです。それが、今、現実目の前で行われているのですから、膝がガクガクする思いでした。

オペラ・グラスを通して映るその女性の素肌に喰い込む紐は、相当に強く縛っていることがアリアリと分かるほどで、乳房が無残にくびれているのです。

私は、夢でも見ているような気持ちになりましたが、ふと、私にしがみつくようにして見詰めている妻に気付いて、オペラ・グラスをちよつと目に当ててやりました。妻は、それで私と同様に、その女性の縛られぶりがわかったのでしょうか。「まあッ」と小さく叫び、私の手からオペラ・グラスをひったくるように取りあげて凝視し始め、それから、私と妻との争奪戦みたいになってしまいました。

無残な後手縛りの女性を転がしておいて、男は一旦、私達の視界から消えましたが、再

び引き返してきた時には、手に大きなコップらしい物を持っていました。中には、牛乳かカルピスかと思われる白い液体が認められましたが、それを見せられた女は、急にイヤヤをするように首を振り、緊縛の体をさかんに蹴かせ始めたのでした。

その女に、男が何か囁き、次に取り出してきた物は、青みがかったガラスの浣腸器だったのです。それを、オペラ・グラスの中にハッキリと見た時の私の気持。それは、驚きとも喜びともいいきれない複雑なものでした。後になって考えてみると、狂喜してもよい筈ですのに、余りにも自分の秘めたる願望。ピツタリの情景に出喰わすと、あんなにも、胸が締めつけられるような、いたたまれないような、そのくせ期待で全身がガクガクするような、なんとも書きあらわしようのない気持ちに襲われるものだということを知らされた思いだったのです。

それから、そこに展開された情景は、正に私の心の中にくすぶり続けていた夢想そのものでした。男の持ってきたコップの中味、牛乳かカルピスかと思った白い液体は、まぎれもなく石けん溶液だったようで、それがなくなり、蹴き、悶え抜いた被縛裸女が、縄を解か

れるやいなや浴衣をはおるのももどかしげに部屋を飛び出して行くまでに、私と妻との間で奪い合うようにしてオペラ・グラスが、幾度、せわしく往来したことでしょう。

もちろん、私の受けた衝撃は強かったといえます。しかし、妻が受けたショックは、私の何倍かであったに違いありません。ムシ暑さのセイもあるにせよ、額から小鼻にかけての汗ばんだ顔が赤く上気し、小開きにした唇がヒクヒク慄えているのを、ホツとした気持ちで点けた電灯の下に見た私は、つい先刻までの気まずさなど、すっかり忘れて、このチャンスにこそ、抑えに抑えていた宿願を表面化させるべきだと決心したのでした。

「うまくやっていやがる」

これが私の偽らざる気持でした。

後手に縛られている女は、そのままの姿で男と部屋を出て行きトイレに入った様子でした。それから、私達は、たつぷりと貴重な浣腸窃視の経験をしたのでした。

男は、いやがる女の腰に手をかけて、ゆっくりとパンティを膝まで下して、一〇〇CCの浣腸器になみなみと石鹼液を吸引し、つづけて二回も、白くてふくよかな双丘を押し開いて嘴管を挿入したのです。

深夜のアパートの一室に繰りひろげられた男女の営みの前戯と申しましょうか、純粋な浣腸プレイというのでしょうか。いろんな姿勢を女にとらせながら、ガラス製の浣腸器を駆使してプレイを続けたのでした。

その中でも圧巻は、最後に緊縛のまま、両脚を上に向けて、白い挿込便器に、いやがる女を押えつけて強引に排泄させた時でした。

そのあと、二人は一緒に風呂へでも入ったらしく、私達はじっと我慢して待っていました。が、戻ってきた二人には何事も起らず、そのまま寝入ったようでした。しかし、世の中は広いようで狭いものです。近所で浣腸されている若い女がいるということは、どう考えても現実には思えませんでした。

そういえば、一度だけゴミ置場に、いちじく浣腸の空箱がまとめて捨てられていたのを見たことがあります。私も浣腸マニアの一人として、といっても妻には、きっかけがないため結婚後、一度も浣腸を実行していませんが、今夜、一緒に覗いた秘密を絶好のチャンスにして、今こそ彼女に浣腸を実行すべきだと決心しました。

「あんなの見て、どう思う？」

「とても、なんだかヘンな気持なの。女の人

が縛られているのは、雑誌なんかで見たことがあるけど、本当に見たのは今が初めて。おまけに、あんなもの、お尻にされて凄いわ。私、いちじく浣腸しか知らなかったので、驚いたわ」

私は、心の中で「しめた」と思いました。

普通の状態では、女性を決して「浣腸」という言葉を口に出しません。私にとって、数少ない経験ではありますが、過去に浣腸をした女性が一人いましたが、女性にとって、浣腸をさせるムードの時は、必ず、異常に興奮している時とか、お腹が張っているとか、気分が悪いのは、便秘のためだとかいう理由をいう筈です。

「何だか、あんなところを見たので、とてもショックで、お腹が少し変なの」

「浣腸されたいんじゃないのかい」

「ううん、そんなことないわ。でも、あなたが望むなら、されてもいいわ」

妻は羞かしさに顔を赤らめながらいいました。あとでわかったのですが、彼女は、いちじく浣腸をされるものと思っていたらしく、事実、いちじく浣腸は常時置いてあるため、まさか、私の手で本格的な浣腸器具が揃えてあったとは知らなかったのです。

やがて彼女は、白いシーツを敷いた布団の上に腰をあげてうつ伏し、枕に顔を埋めますと、私の手は容赦なくネグリジェの裾を押しあげながら、彼女の双丘を掩っているピンクのパンティに手をかけていました。

グリセリン原液を30CCも吸い込んだ浣腸器の嘴管は、ワセリンを塗ったアヌスに、ゆっくりと深く挿し込まれました。こうして、三回もグリセリン浣腸を、くり返しますと、まさか、本当に浣腸されるとは思っていませんでした。彼女が、夢中で呻き声を上げました。注入されたグリセリンは次第に効果を現わしているらしく、先程と違って双丘はトリ肌になり、いつの間にかネグリジェは脱ぎすてられていました。

その晩より三週間ほどは、三日おきにガラス製浣腸器を使用して、彼女の浣腸に対する恐怖心を起させないように気を配りながら、浣腸プレイを行いました。その後、覗いた時に見た一〇〇CCのガラス製浣腸器と同じものを使用した時の彼女の表情から判断して、いよいよ、本格的にイルリガートルを使用しても大丈夫だという気持がわいてきましたので実行に移しました。

その晩、大量の石鹼液を見つからないよう

に秘かに作り、布団の上に空のイルリガートルを準備しておきました。化粧を直した彼女は寝室に入ってきて、吊り下げられたイルリガートルを見つけ、私が今夜、何を期待しているかを感じとると、一瞬、恥らしい表情を浮かべました。

楽な姿勢をと思い、横臥させた彼女にわからないように、イルリガートルへ石鹼液をなみなみと入れ終ると、私はネグリジェを双丘がすっかり出るまで捲くり上げて、ワセリンをアヌスに、ぬり込みました。

「ゆっくり浣腸するよ」と、彼女にいい聞かせますと、素直にうなずいて、双丘を上向きに身をやじり枕に顔を埋めました。やがてワセリンで光った15号のカテーテルは徐々に30センチ以上も、アヌス内に没入したかと思うと、白い石鹼液は、次第次第に下降を始めた。おそらく、彼女はイルリガートルによる大量の石鹼液浣腸を受けるのは、生れて始めてでしょう。今更、もがいても許して貰えないものと観念したのでしょうか、大きな息づかいで、あえいでいるだけでした。

イルリガートルの白い液体が半分ほどになる頃、彼女は、「ああ、あなた、もう勘忍して頂戴。もう駄目よ、ゆるして……」と、泣

き声を出すようになりました。しかし、まだ白い石鹼液は、ゆっくりと下降をつづけています。

約九〇〇CCの石鹼液を全量注腸し終わっても、私は彼女のアヌスにカテーテル嘴管を挿入したままの悶える姿を眺めながら、徹底的に排泄を我慢させました。

始めて施したイルリガートル浣腸の効果は充分でした。その晩、私達は繰り返し、異常なほど浣腸プレイに熱中しました。つい一カ月前に窃視した、あの光景が、今更のように、ありありと思い出されました。

「また、これで浣腸してね。こんな気持ちになったのって、私、初めてですもの」

羞らいつながら、彼女はイルリガートルを指さして嬉しそうにいうのでした。この日は緊縛はしなかったのですが、この次の機会には必ず「緊縛」と「浣腸」とを併用して実行しようと思います。浣腸時の醍醐味をだんだん経験するに従って、アヌスへ嘴管を挿入する際の刺戟が、やがて快感に変わって、妻も浣腸マニアになってゆくと思います。また、縛ったまま大量浣腸した後の排泄行為を考えただけでも、今から、その光景がありありと目に浮かんで、わくわくします。

プリンセスの舌

その夜、メリー王女は見も知らなかった東洋の異人、有明によって落花のように踏みにじられ凌辱された。無理強いに「女」にされた。それも通常一対の男女が行う、いわゆる「愛の営み」とは凡そかけ離れた暴力的な手段によってである。一刻一刻に彼女にのしかかる重圧は、その力を増している。はじめ、これ程の苦痛がこの世にあらうかと思われたことが、その次にくる屈辱に比べたら、まだ

まだ生易しいものだということが痛感させられた。わずかの間だというのに、これを何回繰り返したことであろう。それでも尚、メリー王女は彼女を待ちかまえている底知れぬ地獄の奥深さを、まだやっと垣間見たにすぎないと言わなければなるまい。

王女のプライドは完膚なきまでに打ち砕かれてしまった。最初は、それも敬愛するジャネット・イングリス夫人を救うという犠牲的行為に、幽かな慰めを見出し得たのであったが、そんな考え方すら吹き飛んでしまう程、激しく責め苦は心身の双方に襲いかかったの

である。やがて、夫人を救う代りに——という交換条件そのものさえマヤカシで、彼女を責める手段の一つでしかないということが、わかってくる。

しかし、一旦、転がり出した球は停ることが出来ない。次第に加速度を増して、奈落の底へメリ込んで行くしかないのである。

潜水艦の内部にしては広く、贅をこらした有明の寝室だったが、もだえ苦しむ美女たちの熱気で、何か息ぐるしくさえ感じられる。真っ赤なウォーターマットが十五畳程の半



第七十回

分を占めている。あとの半分には同色の分厚い絨緞が敷きつめてある。

ピンとはった絹シーツの上では、さっきから飽きることもなく悦楽の営みが繰り返されていた。今日の相手は、お気に入りジャンヌだった。

下級将校のジャンヌは、こんな時でもなければ到底、有明の足下に近づくことさえ難しい立場だった。それが、作戦中だというので破格のお情けを受けることが出来る。このジャンヌを一秒でも無駄にしまいとしてジャンヌ、すなわち小林敏子は夢中だった。

そのようなカラミ合いをメリー王女は世にも惨めな気持で見守っていた。目をそらそうとすると、側で見張っている高橋侍従が容赦

前号まで秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等はその材質に応じて、五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚しい。美女狩りのG号作戦は成功裡に終了した。一路帰国する原潜ネプチューン号の中で獲物の一人、メリー王女に対する有明の慰み半分の凌辱がネチネチと続けられている。

なくスイッチを入れる。

もう一人、絨緞の上に大の字なりに磔にされた美女は、いうまでもなくイングリス夫人だった。高橋侍従がオンしたスイッチは細い電線を通して夫人の乳首を電撃する。

絹をさくような夫人の悲鳴が耳に入ると、王女の反抗心は忽ちに萎え凋んでしまうのである。口惜し涙をたたえた王女の目は、再びウォーターマット上のゲームに注がれるのであった。

有明やジャンヌは、夫人の悲鳴など、何か音楽のようにしか考えていないらしい。そう思っただけで、メリー王女は心臓が凍ってしまいそうになる。事実、彼女の肌は恐怖で粟立っていた。その肌は、今は余すところもなく外気に曝されている。

厚くふかふかした絨緞の上だとはいっても王女は床に直に正坐させられている。その上後手にくくられた縄尻を高橋侍従に押えられているのであった。王女のみじめさは、はかり知れない。自分が鞭打たれる方が余程ましだった。何か反抗したり言いつけられた通りに出来ない、その都度、苦しめられるのは隣にいるイングリス夫人だった。この間接的な拷問に、王女は神経をズタズタに切りさかれ

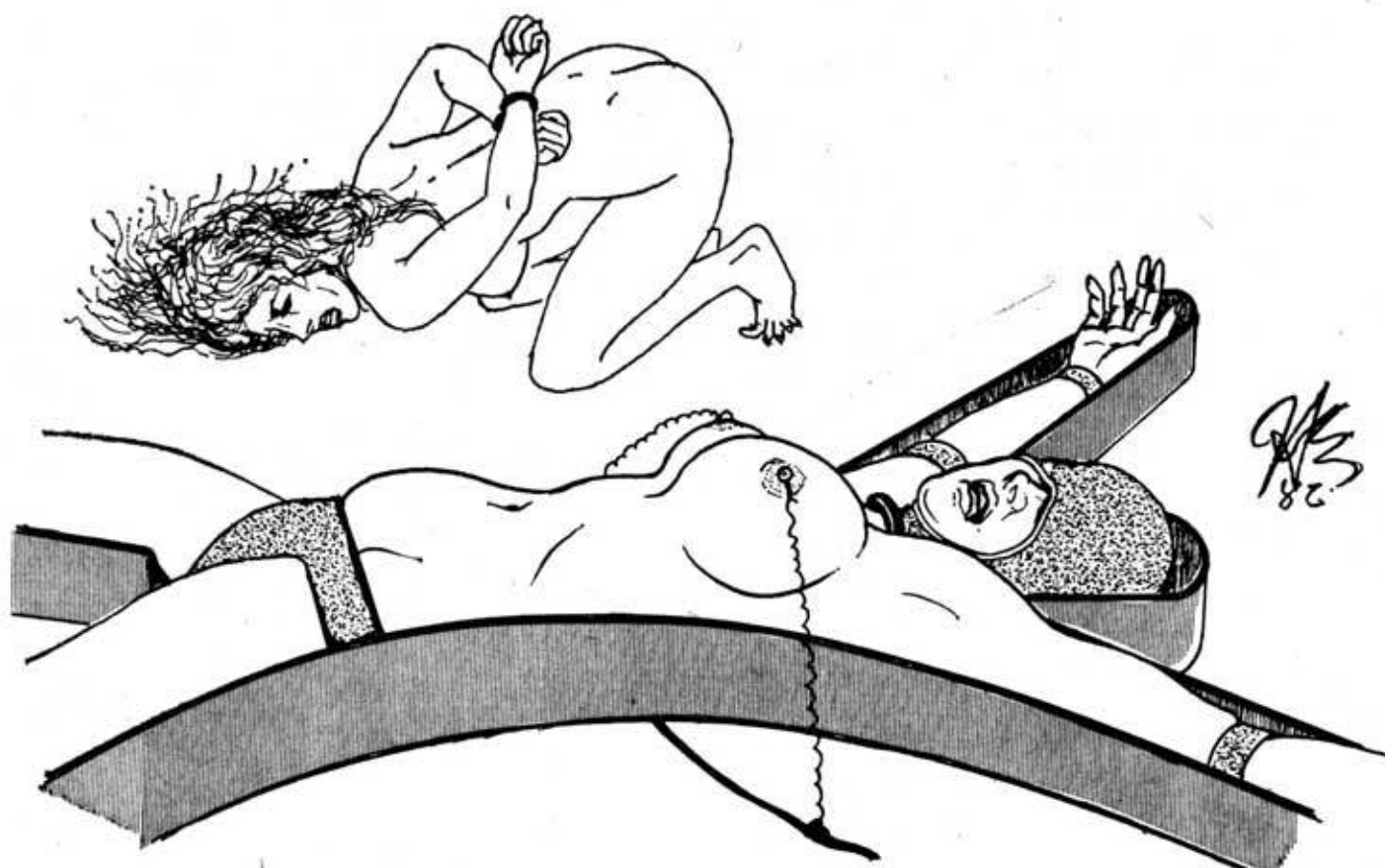
ていたのである。

そのイングリス卿夫人、ジャネットの有様は勿論、それによって王女を苦しめ屈服させる小道具として申し分のない状態だったといっている。

王女と同じ様に全裸にされた夫人は、十八才の王女のような固い初々しさこそ失ってしまっていたものの、その反面、爛熟した中年の魅力を、その豊かな曲線であらわにしていた。仰向けになっても、あの熟れきった果物を思わせる双の乳房は、つぶれそうであり、そのくせ、ムッチリと盛り上がっている。その頂点に突き出した二つの乳首は、さすがに二児の母であることを納得させるように大きく、バラ色だった。陥没した処女のそれと違って、針金を巻きつけるのは大して難しいことではなかった。だからこそ、意地悪く、幾重にもギリギリ巻きにされ、無造作にネジって締め付けてあった。それが余計、王女を怖がらせるであろうということは、いみじくも計算済みだったのである。

絨緞の上に磔されているといったのは、少しく説明が不十分であったように思う。正確にいうと、夫人は絨緞の上に置かれた

大の字型のステンレスパットに、スッポリ嵌め込まれたようにして四肢を固定されていた



のであった。責められる肉体が分泌する膏汗の量は大変なものである。その上、涙や尿、

その他、もろもろの体液が悲泣とともに噴き出してくる。それでは分厚い最上等の絨緞がたまったものではない。絨緞を汚さないようにするために開発されたのが、様々の型をしたステンレスパットだった。その用途や状態に応じて、局部用から全身用と適当に使い分けられる。そして、今、使われているのは犠牲者の全身を受けると同時にボディを磔にする役目を兼ね備えていた。

夫人は、このようなステンレスの凹みに押し込められ、首、手首、肩、足首を夫々の位置に取り付けてある枷具でロックされている。こうなっては、拘束を免れた腰のあたりを、わずかに上下させる以外の自由は全く奪われてしまったことになる。

全裸にされていると書いたのも、少しく不正確だったかも知れない。何故なら、夫人の頭部は、悪役のプロレスラーが、よくかぶるような革製のマス

クで、スッポリ被われていたからである。ただ変っているのは、このマスクには、目にあたる場所に穴が明いていないことだった。

夫人には、メリー王女が、すぐ側にいることを覚られてはならなかった。王女の声を聞かせない様、耳栓がつけられ、ワックスで封印されていたし、又、このマスク自体が目かくしの役割を果していたから、夫人はこの際メクラでツンボだったのである。

鼻と口のあたりだけは丸くくり抜いてあったから、夫人は大声で喚き、哀願することは出来た。このことは、むしろ望ましいことである。夫人が叫べば叫ぶ程、その声が王女を責める鞭となる筈であった。

顔とは対象的に、股間は全くさらけ出されている。夫人のウエスト・カーブは見事なもので、とても二人の子を産んだ体だとは思えないくらい、しまっていたのだが、そのなだらかな曲線の下端は急激に絶壁となり、その垂直部はこれは遅く、いどみかかるように開花している。よく発達したそのあたりは、生娘（きむすめ）には全く見られない。そしてそこには、黒々とした黥文字が読まれた。G—二〇一であった。

ジャンヌは、次第にその悲泣を早め、遂に一声、高く何か叫んだかと思うと、グッタリと死んだようになってしまった。

その声はイングリス夫人のそれに負けない程、大きかったが、それにしても何というコントラストであろう。片方は体内から奔騰した歓喜の絶叫であつたし、又、片方は言語を絶する責め苦に恥も外聞もなく嘆き叫ぶ痛恨の歌唱だった。

「ギャーッ」

又もイングリス夫人の乳首に電流が走ったらしい。いつの間にか、あらぬ空間をみつめていたメリー王女が、ハッとわれにかえる。

有明が起き上っている。

「スウィープ（拭け）」

ただひとこと、有明がいった。王女が、はじめて受けた直接の命令だった。

王女は狼狽した。手を縛られている。それに布切れ一つない。何をもって、どうやって拭けというのか。

「アッ！」

矢庭に王女の栗色の髪が、後で縄尻を押えていた高橋侍従によって掴まれたかと思うと無理矢理に前へ押された。

バランスも失った上体が、つんのめって前に倒れる。そこはもう有明の体の前だった。

ヌルヌルしたものが、王女の額にベツトリと、こびりついた。

「オー、ノー、ヘルプ、ミー」

哀願の声も、ピツタリと有明の体に、はさまれていては、くぐもって聞えない。宙に浮いた後手縛りの指が苦悶に躍っていた。

高橋侍従は左手で王女の首をおさえつけ右手で、その柔らかな髪を束ねて、有明の下部を、そっと拭いた。

有明は無造作に足を投げ出したまま、何もしない。

——これが拭くということなの！

歯ぎしりしながら、王女は心の中で、叫んだ。宮殿では普通、お情けを受けたものが舌と唇で綺麗にして差上げる仕来りだが、（第41回参照）未決女囚である王女に、ウツカリそんなことをさせて、噛みつかれでもしたら大変だから、髪の毛で拭くだけにとどめたのである。

メリー王女の毛髪が、あらかたの水分をとり終ったあとで、ようやく恍惚状態を脱したジャンヌが、王女をおしのけるようにして有

明の前に顔をうずめ、残り香を楽しむようにした。

ジャンヌの貪婪な臀部が、勝ち誇ったように王女の鼻先で揺れる。そして、トロトロに燃えつきた先刻の余燼を、ありありと見せていた。

不快そうに眉をひそめる王女に気付いた有明は、すぐ高橋侍従に目くばせをする。その意味がわからないようでは侍従は、つとまらない。王女の耳に唇を寄せて命令を伝える。ジャンヌのソコを……というのだ。

顔色をかえて嫌々をする王女の聴覚を、イングリス夫人の叫喚が貫く。

忽ち、ぐったりと肩を落した王女は大粒の涙をポタポタと落しながら、屈辱にわななく唇を、近づけて行くのであった。

「く、くすぐったい」

と身体を、こわばらせるジャンヌに、有明が笑いを含んだ声で言った。

「我慢するんだ。何しろザ・プリンセスの舌で綺麗にして貰うんだから」

畜性解説

メリー王女 of 精神と肉体を襲った凌辱の嵐

は休む間もなくエスカレーターしてゆく。

例によってジャンヌの肉体を肘かけ代りにした有明は、それにゆったりと、もたれかかって、とり寄せたオンザロックをチビリチビリと口に含んでいた。彼が、のんびりと退屈そうになればなる程、王女に与えられる拷問は、むしろ手酷くなった。

疲労困憊が、麻薬のように王女の自尊心を薄めてゆく。

「大丈夫でしょうか。舌でも噛まれると」
 やっと平静に戻ったジャンヌが、有明にソツと、ささやいた程、王女の悩乱は外目にもありありと見てえたのである。

「キリスト教の効用は自殺を禁じたことだ」と有明は、ひどくカケ離れたことを言いはじめた。

「ナチズムなど一、二の例外はあっても白人社会には驚く程この思想が定着している。まあ私にとっては、それがツケ目さ。大いに利用できる。これが日本の女だったら、もっと前に舌を噛み切ってしまったらだろうよ」
 グイッと酒を飲み干した。ジャンヌが、いそいでロックを作りかえる。

有明とジャンヌの、そんな言葉のやり取り

をよそに、王女は必死であった。

さっきから、忠誠修行（第35回参照）の真似事をさせられていたのである。

キリスト教でも仏教でも、いや殆どの宗教に礼拝苦行がある。

両手を高くさしあげて直立する姿勢から、そのまま跪き、上体を前傾して額を床につける。この動作を数限りなく、繰り返すのである。一回一回は単純なことで誰にでも出来るが、繰り返すとなると意味がちがってくる。やがて膝がガクガクして身体が途方もなく重たくなってくる。こうなると拷問的色彩がハッキリしてくるのだ。

これが修行ならば、自分の意思で行うのだから、まだ我慢の仕様もあるのだが、王女の場合、その一回毎に屈辱極まりない有明への隷従を表明しなければならなかった。

一インチ以上もありそうな赤い絨緞に顔を押し込んで、

「アイル、ディヴォート、マルセルフ、トウユウ、ミロード（ご主人様、私の身心を共に捧げます）」

と唱え、又、立ち上がって恥かしい裸身を余すところなく曝した姿勢では、

「サブミット、マイ、ロウエスト、フレッシ

ユ、フォアユア、インスペクション（卑しい私の肉体を、ごらんに入れます）」

と叫ばせられる。

その通りにしなければ、又もや容赦なく電流が流され、夫人の叫喚が耳を劈く。

「もうこれ以上、出来ません。どうかお許し下さい」

何百回となく繰り返した挙句、王女はもう立上ることも出来なくなった。ひれ伏したまま泣いて訴えるしかない。

「ジャネットを苦しめないで……」

「私の言う通りのことをするなら、夫人のニップルス（乳首）から針金をとってやってもいいよ」

やっと有明が話しかけた。

あきらかに罠であった。言う通りにしたって、しなくたって有明は、やりたいようにするのだ。結局は虎を狼に変えるだけのことなのだ。薬をさえ掴みたい王女の心理状態では忽ち、この餌に飛びついてしまう。

「な、なんでも致します。おっしゃって下さい」

「ウェール（よし）」

有明の目くばせで、夫人の乳首に巻きつい

ていた針金が外された。

患のついた手首を痛そうに、さすっていた王女に、訳のわからない命令が下った。

「夫人を相手にしてレスってみろ。見事、夫人を昂奮させたら、今日のところは二人とも休ませてやる」

「レスるって？」

おそろおそろ王女は聞きかえした。本当に何も知らなかったのである。

「とんだカマトト振りだな」

と嘲笑する有明。日本語だったから王女にはわからず、ただ不安そうに有明を見守っている。そこで又、英語にもどって、

「レスビアンのことさ。わからなければ実地にやらせて、見せてやろう」

と顎を、しゃくった。高橋侍従とジャンヌにカラミ合っ

て見せろというのだ。
二人共、苦笑したけれども有明の命令に抗することは出来ない。高橋淑子が男役、ジ

ャンヌが女役ときめると、思い切り大げさな身振りで抱き合うのだった。

ところが、はじめはショーとしてスタートしたのが、段々と雲行きがおかしくなってきた。そもそも、ジャンヌの体に、さっきの余燼がくすぶっていたらしい。焼けぼっくりに火がついたのである。それを感じとった高橋侍従の方も、又、そぞろに怪しい情感につつまれて行く。

「アッ、アッ」

うめきながら、ジャンヌは又も放心した。

「どうだ、わかったろう」

さすがに恥かしくなったジャンヌは、許しを願ってシャワーにかかるため、部屋を出て行ってしまったが、高橋侍従は義務として部屋を去るわけには行かなかった。その高橋侍従が、王女の細腰を突いて、イングリス夫人

の上に押し倒した。膝に力が入らない王女は、悲鳴と共に大の字に固定されたイングリス夫人に抱きついてしまったのである。

「さあ、キッスをしろ。乳房をもめ」

次から次へと高橋侍従が指図をすると、意思をなくした人形のように、王女は言うなりにイングリス夫人に、いちやつきはじめる。

「オオ、誰です。誰か——ああ、さわらないで、さわらないで——」

うわずった声で夫人が哀願



した。目かくしをされてはいても、男の手か女の手かということぐらひは、わかる。まして、柔らかな乳房と乳房が触れ合つては、同性から、いどまれているのを否定すべくもない。

これが処女だったら、このようには反応しなかつたであらう。しかし、熟れきつた中年女の肉体は、こんな極限状況の下にあつても条件反射を示しはじめるのだった。

リビドーが極限に達すると、夫人は、ぐったりと力を抜いた。そして女の性（さが）の浅ましさ、意示に逆らつて、ひとりでに反応する自らの肉体を、つくづく情けなく感じたのか、声を放つて泣くのであつた。

それを見、また耳にしたメリー王女は、たとえ強制されたことではあつても、そのように夫人を辱しめた下手人が自分であるという自責に心も動揺して、ひしとばかり、床に貼りつけられた夫人の上にすがりつき、これも惜し気もなく滂沱とした涙を夫人の素肌の上に注ぐのであつた。

分厚い黒縞子のマスクは夫人の両目を、すっかり被つてしまつていたけれども、その位置は、涙の隈でハッキリわかる程、濡らされ

ている。その上、頬ずりをする王女が又、自らの涙を、こすりつけるので、マスク全体がグッシヨリとなつた。

「誰？ どなたですか、わたくしに、こんな酷いことをなさるの？」

上に重なつていたメリー王女の白い裸身が突然、硬直したように竦んでしまった。イングリス夫人が、あえぎあえぎ、血を吐くような声で、こう言つたからである。

たちまち、王女の全身が紅葉を散らしたように紅潮しはじめる。

王女は狼狽し、驚愕していた。

信じられない倒錯であつた。もともと自責のあまり、又、同じ囚われの苦難を歎く気持ちが自然に母代りと慕つていたイングリス夫人の胸を、かき抱いたのに違ひはなかつた。

それが、いつどうして、こうなつたのか、健康な若い肉体が他の肉体に重なるとき、その他が、たとえそれが同性であつたとしても性のまだら蛇は忽ち休眠から離れ、鎌首を、もたげ出すのではないだろうか。いや、若ければこそ、稚なればこそ、未熟の性衝動は少しでも安心のできる同性に指向するのもかも知れない。

とまれ、すでに醒めはじめていたイングリス夫人に鋭くたしなめられて、はじめてわれにかへつた王女は無残に誇りを傷けられ、こともあろうに又、このような状態の下で、自分の性を曝き出さされてしまったことを悲しみ歎くばかりだった。

羞恥と悔恨に、さめざめと泣くメリー王女を有明は冷たく眺めながら、もう何杯目のファッシュングラスを、かたむけている。

エミー司令に連れられた山本百合子が入つてきた。房門（第21回参照）を平伏して入る仕来りにも、すっかり馴れて、その美しい裸身を紫房の下でスマートにくねらせるのであつた。

百合子は、湯気の立つ、とうもろこしを盛つた華麗なブルガリアンカットの硝子の鉢を持ってゐる。あらかじめ、有明が言いつけておいたものであつた。

その一本を、百合子が捧げる鉢から取りあげた有明が、無造作にカブリついた。そして百合子にともなく言ひはじめるのだった。王女に聞えよがしの英語である。

「ローレンツによれば、動物の行動の大部分は後発されたものではなくて、遺伝的固有な

ものだという。そのような行動は通常、発育の初期にはマスクされているが、何かの外因に触発されて出現する。彼は、これを、△解発▽と名づけた。狼少年の話があるだろう。

狼の中で育ったとしても人間は矢張り、人間だ。時がくれば人間らしく行動するようになる。逆に人間の中で、人間として暮らしてきても、畜生はヤッパリ畜性を解発しなければならぬ時が来る。イフ・タイム・カムズ（時がきたなら）……」

有明は、ちよつと言葉を切つてグラスを傾けながら素早くメリー王女の様子に目を走らせた。自分の言葉が王女にあたえた反響を確かめたかったからである。

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いません。致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

恐怖心が王女の耳を鋭くさせていた。彼女の運命は、有明の気まぐれに今や完全に支配されているということを、悲痛な心で受けとめざるを得ない。

「見ろ！」

有明は、再び語りはじめた。

「こいつらは、地上でこそプリンセスとか伯爵夫人とかいわれて、チャホヤされていただろうが、ここに来ては、そうは行かない。

「本性たがわず……」といったところか。もう畜性を、まる出しにしてしまっているじゃないか。よからう。その畜性に応じた、それにふさわしい地位を与えてやろう。そうした環境こそ、こいつらに自然な安住の場所なのだから……」

王女が頭をあげた。有明を睨みつける、その目は激しい憎悪に燃えたぎっていた。

「何という目つきだ。可哀そうな家畜め。そんなに傷つけて欲しいのか」

有明は器用に金串を使って二つのとうもろこしをV字型に組み合わせた。うやうやしくそれを受けとった高橋侍従が、矢庭に、その一本を身動きも出来ずにいるイングリッド夫人の体に挿入した。金切声をあげて身もたえず

る夫人の様子に、思わず顔をそむけるメリー王女。

その王女とて救われる筈もなかった。

又もや手首に巻きつく縄目。エミー司令、手練の縄さばきは王女の肉体を、まるで小包でも扱うように、くくりあげてしまった。後手縛り、足首は前にまとめて胡坐をかいたように固定し、そのあまりを首に巻いてギョツと搾る。エビ固めだが、足首を咽元に、くっつける程ではない。首と足首の間は30センチ程もあっただろうか。それでも王女は背中の痛みに悲鳴を、ほとばしらせる。

エミー司令とジャンヌが、王女の腋の下を両側から抱えあげると、くくり猿のような王女の身体は軽々と持ち上げられてしまう。そのままだイングリッド夫人の上へ。

「ギャーッ」

これが王女の声とは思えない程の絶叫だった。まさに断末魔の凄まじさだった。

グロテスクの限りをつくしているというのに、それだけは何故か嫌らしさがなくて、黄と赤とのコントラストが何となくスッキリした絵画でも見るような瑞々しさであった。

——（未完）——

☆ 私の近況報告 ☆

『奴隷妻』を夢みる私

笠井奈保子

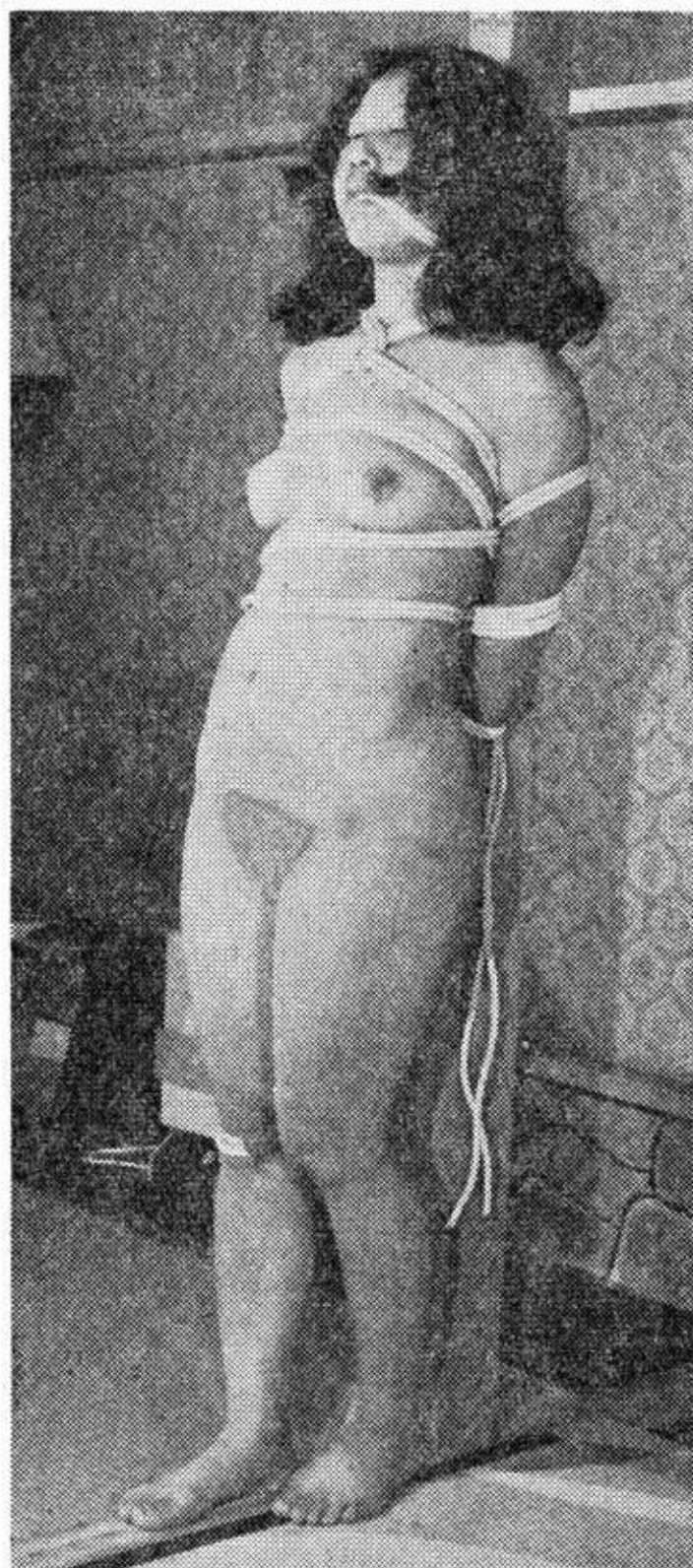
私が奇譚クラブに八長くて短い一年の思い出Vという告白をのせて頂いてから、早いもので、もう一年がたってしまいました。

あの昨年の六月号にのった告白を最後に、私が奇譚クラブから遠ざかっていましたのには一身上の理由があったからです。それは、東大阪市の義母の家からも、姉の家からも離れて、彦根の父の家へ帰っていたからです。父が病気で倒れたという知らせを受けたのは、昨年の春のことでした。彦根城の桜が満開で非常な人出なので、電車も満員だったことを覚えております。

悲しみに打ちひしがれた私にとって、そうした行楽客の浮き浮きした、ざわめきさえずとましいものに思えたくらいでした。

父の病気は脳軟化症とかいうのだそうで、素人の私には詳しいことはわかりませんが、なんでも脳溢血の軽いのだそうです。入院するほどでもないというので、自宅で療養しております。東京の姉と大阪の姉も、驚いて駆けつけましたが、家庭のことがあるので、すぐに帰って行ってしまいました。

結局、一人身の私が父の面倒を見ることになってしまいました。義母も、こっそりと、





お見舞を持って、姉たちが帰ってしまってから、父を訪ねてきました。その義母も、お店があるものですから、そう長くは、滞在することは、出来なかったのです。

やがて、だだっ広い家の中に、父と私と二人っきりになってしまいました。それから私には、父の看病と、そして、父がずっと増しつづけてきた錦鯉、緋鯉の世話も、私の仕事となっていました。

琵琶湖の水位が標準より数十センチも低下した異常渇水の夏でしたので、いくつもある水槽に、いつも新しい水を注いでおくというのは、馴れない私には、かなり重労働でした。

「その中には一足数十万円もするのが混じっているのだぞ。俺が死んだら、みんな、お前のもんになるんだ」

父は口癖のように、そんなことを私に言います。この広い敷地の屋敷と、お魚だけが、今の父にとっては唯一の財産なのでしょう。

以前、あれほど手広く、大きな商売をしていた父にとっては、その頃が懐かしくて仕方がないのでしょう。盛大にやっていた事業のことを娘の私に自慢するのです。そして、いつも、そのあとで、二人の姉には、立派な嫁入り仕度をしてやれたのに、お前には、何もしてやれないと涙ぐむのでした。

「いいのよ、お父さん。私は、こうして、少しでも、長く、お父さんと一緒に暮せるのが楽しいの。だから、いつまでも元気でいて。それに、私、今まで働いて貯金したお金があるから、二年や三年、暮しには心配しなくてもいいのよ」

そんな父を私は一生懸命なぐさめました。それ以来、私はずっと父につききりででしたので、大阪へは帰っていません。ですから、モデルとして縛られたかと思いつつも、それも出来ないでいます。ただ、私が大事にしていた玉手箱の中の奇譚クラブや写真なんかは彦根の家へ、全部、持って帰りました。

今では、それらを繰り返し読むのが毎日の

楽しみになっています。特に自分のことを書いた文章、それに写真を見ていますと、あの頃の楽しい思い出が、胸の中によみがえってきて、夢心地になってしまいます。

同性の縛られた写真が見たいたなんて、ちょっと、私、ヘンでしょう。奇譚クラブという雑誌に、私が初めて関心を持ったというのも、やはりこの「女性の縛られた写真」がきっかけになったのです。

女性が全裸で縛られている写真を見て、私はドキッとしたのです。それを裏がえせば自分も縛られてみたいという願いが、心の底にひそんでいたからなのでしょう。

誌上に私の記事や写真、それに拙い告白の文章なんか、のせていただいたおかげで、沢山の読者の方々からお便りを受け取り、文通をした方もございました。その殆どは、義母の家の住所にしたためましたので、彦根へ参りましてからは、とだえてしまいました。



そういえば、奇譚クラブの方へお便りをお送りするのも、こちらへ来てから始めてなのです。彦根って、大体が冬になると雪の多い所なんです。昨年从今年へかけては、例年になく豪雪だったのです。三月の末になっても、まだ雪が空から舞い下りてくるという、今から思えば嘘のような気候でした。

ですから、都会生活に慣れきってしまった私にとって、昨年の末から今年にかけての冬は、本当に辛い、試練でした。夏は異常渇水に悩まされたかと思えますと、冬はまた異常な豪雪に苦労させられました。

来る日も来る日も雪ばかりで、私は父が飼育している錦鯉や緋鯉を守るために、雪かきを毎日しなければなりませんでした。私は生れて初めて手と足の霜焼けと、ヒビ割れに、悩まされました。食事の仕度や父の身の回りの世話なんかは、これは当然な仕事なので、別に苦にならないのですが、除雪作業だけは、なにしろ広い飼育場全体のことですから、若い女の身にとって重労働でした。

父は、ジーンズにゴムのレインシューズをはいて、レインコートをまとうて降りそそぐ雪の中へ出て行く私を見て、「この家も土地も、みんな、お前の物になるんだから、が

んばってくれよ」と、余りなめらかでない口で言うのでした。しまいには、除けても除けても、あとからあとから積もってくる雪と戦うのが、面白くなってきました。

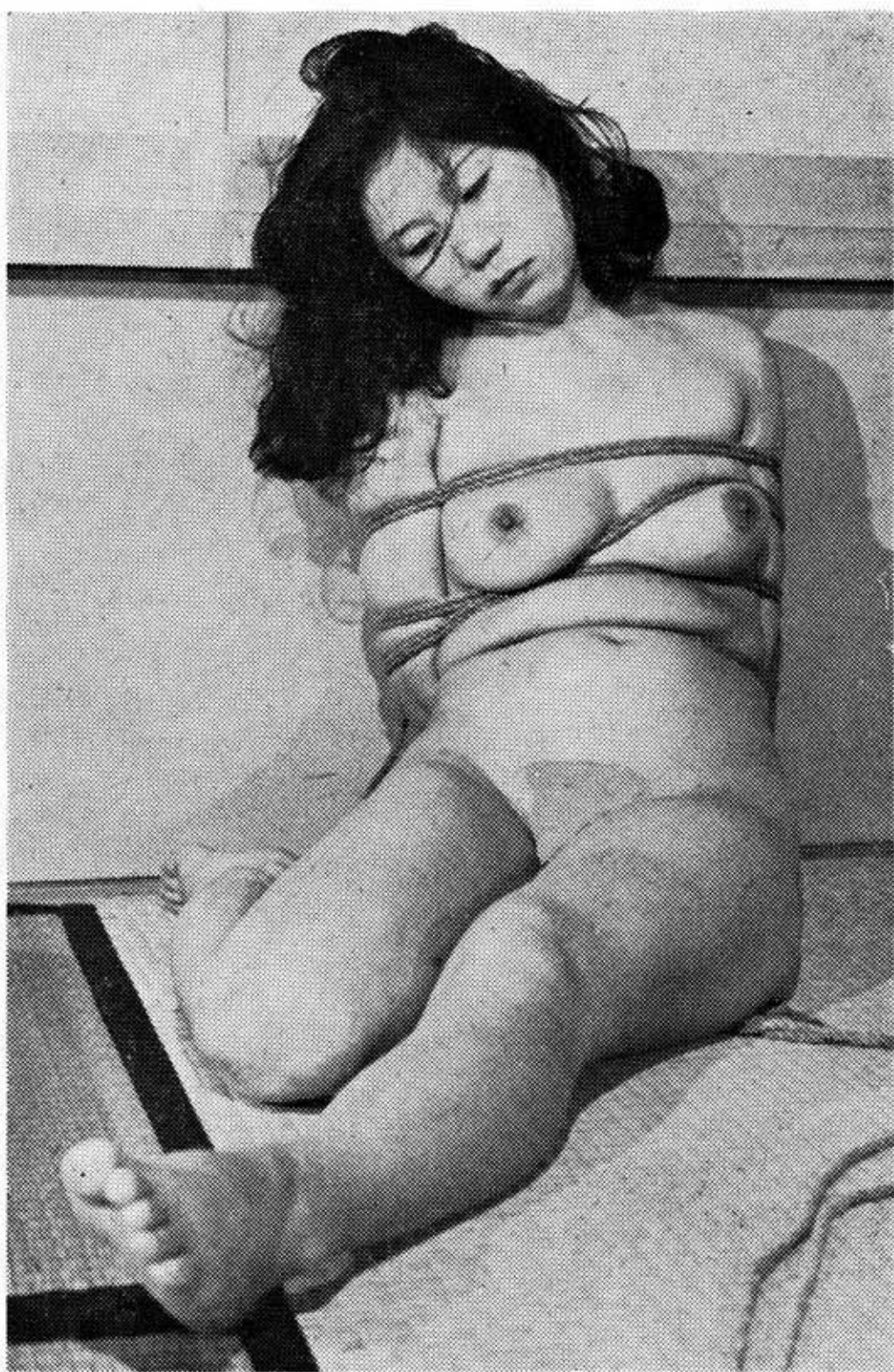
そんなわけで、奇譚クラブとも、思わず、ごぶさたしてしまいました。決して、忘れていたのではありませんが、私の日常生活の激しい変化が、お便りを書く気持ちにもさせてくれなかったのです。

それが四月の声を聞きますと、一ぺんに春が訪れてきました。長い長い冬の連続、白魔の狂うだけの冬ばかりだと思っていましたのに、やはり、例年通り桜の花も咲きました。

私が昨年、父の病気だという知らせで、この彦根へ来てから、丁度まる一年になりました。私も、とうとう二十三才の春を迎えたのです。雪かきに、はいたジーンズに、お尻が、いっぱいに張りきって、父に「大きなお尻だな」と笑われたくらい、体全体にも少し肉が付き過ぎたくらいです。

空気もきれいだし、適当に運動をするので健康によいでしょう。私の体の方は、至極元気なのです。貧乏暮しには馴れていますので、この彦根での生活も楽しいくらいです。

でも、春になって花が咲き乱れ、その花も



散ったあと、樹々の新芽がもえ出すようになってきますと、私の体の中にも、なんとなくもぞもぞとしたものが湧いてきてまして、こうして、お便りを書いてしまいました。こんなことを書いているだけでも、奇譚クラブとの心のつながりが続いているように思えて、やはり、ホッとするのでございます。

今のところ、父の病気の方は小康を保って

おりまして、用便や簡単な身の回りのことは自分で出来ますし、気分のよい折は、養殖場へ出て、錦鯉の水槽を見まわったりするくらいになりました。しかし、まだまだ、仕事をするとところまでは回復していません。

義母は、時たま、食べ物なんかを自分でこしらえて持ってきてくれますが、遠い彦根まで、夜の晩い商売なので、大変だと、私はお

断りしています。二人の姉は昨年の春以来、一度もお見舞にもきません。「お前が父のそばにいてくれるから安心だ」と言うのが、口実のようです。

私の今の気持は、やっぱり47年の12月号にのせていただいた『奴隷妻になりたい』と書いた、あの時の心境なのです。適令期の私にとって、結婚ということは一つの大きな夢です。いつも私の頭の中で考えていますことは奇譚クラブの愛読者の方の中で、こんな私のような女性でも、貰って下さるという方があれば、その方へ「奴隷妻」になりたいということでした。

あの文章を書いた頃は、日本全国、どこへでも、御主人様のおっしゃる所へ飛んで行って、「奴隷妻」として、お仕える気持でしたが、今では父の病気の看病の為に、此処を離れる事が出来なくなっていました。そのかわり、家は古いのですが、畳が五十二帖も敷いてある部屋々々。それに、板の間や土間がありますから、大変、広い家を利用してもらえると思います。

土地も湖岸に沿って数百坪はあります。父は遺言で、家も土地も全部、私に呉れると申しておりますので、此処で一緒に住んで下さ

る御主人様がありますれば「奴隷妻」の私が一生懸命に働いて、旦那様に御不自由は一切おかけしません。

「お前は、ぶくぶくと肥えてばかりいやがって、何とカンの鈍い奴だ。こんなブスは、こうしてやるっ」

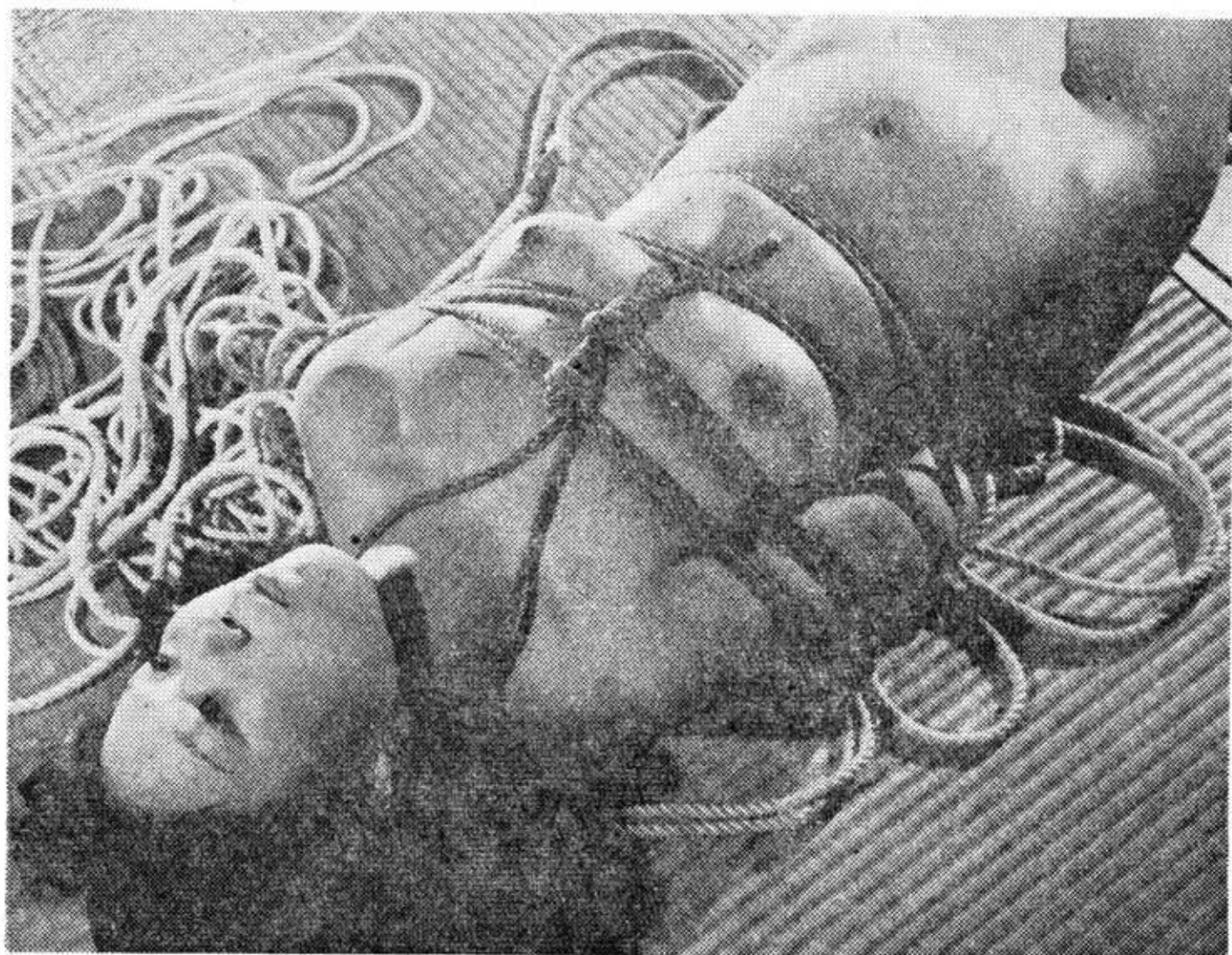
そう言われて、塚本様にお尻を蹴とばされた事がありますが、今になって、その頃が、なつかしくて仕方ありません。

この頃、夜、ひとりで寝ていて、よく夢を見ます。夢の中で、私は、いつも裸で縛られているのです。いや、縛られているばかりでなく、口ぎたなく罵られ、余りに悲しくなって目が覚めます。

それは、幾度か、塚本様に縛られてシャシンをとられた時の思い出でした。

「お前のシャシンをとっていると、疲れてか

なわない。好きなだけ食べるから、こんなに肥えてしまって、動作がぶくなるんだ」





そんな言われた時、やはり私は悲しかったのです。今でも、夢の中で、口ぎたなく言われますと、涙が出てきます。でも、それがなんとなく、懐かしく胸によみがえってきてもう一度、そんな目に合わせてほしいという

ご事情で、正式の妻にしていただけなくとも内縁の△奴隷妻▽でも、私は、奴隷妻にしていただけなのでしたら、喜んで、御主人様にこの体を捧げて悔いませぬ。もし捨てられるような事がありました事を

気持ちが悪くなるのです。いくら、そんなに思っている、もう、塚本様は、こんな私を二度と、お呼び下さらないと思います。あの時よりも、もっともっと、ひどい、いじめられ方をしたいと、今は思っています。

こんな私を、もし、△奴

隷妻▽として下さる方がございましたら、どうか、この私の身も心も、くたくたになるまで、責めて下さいませんか。独身の方で、この私を正式の妻として飼育していただければ、こんな幸せなことは、ございません。でも、もし、何らかの

考えますと、正式の△奴隷妻▽よりも、内縁の△奴隷妻▽の方が、よいかも知れません。私は、一日中、縛られ放しにされていても泣きごとは申しません。貴方様の所有するところの△奴隷妻▽なのですから、お好きなように責め、いじめ、いたぶって下さっても結構です。私の性向につきましては、私が今までに、奇譚クラブの誌上に発表していますので、それをごらん下されば、よりよく、おわりの事と存じます。

私が此処へ移ってまいります際も、自分の書いた文章がのった奇譚クラブは、全部持ってきました。72年7月号「私の玉手箱」、72年8月号「七つの土鈴と玉手箱」、72年9月号「紫陽花の咲く朝」、72年10月号「十冊の奇譚クラブの雑誌」、72年12月号「奴隷妻になりたい」、73年3月号「大きなヒップを晒して」、73年6月号「長くて短い一年の想い出」の七冊です。それに、私の事をカメラで撮った書かれた72年6月号「春宵一刻値千金」が、今、私の手元にあります。

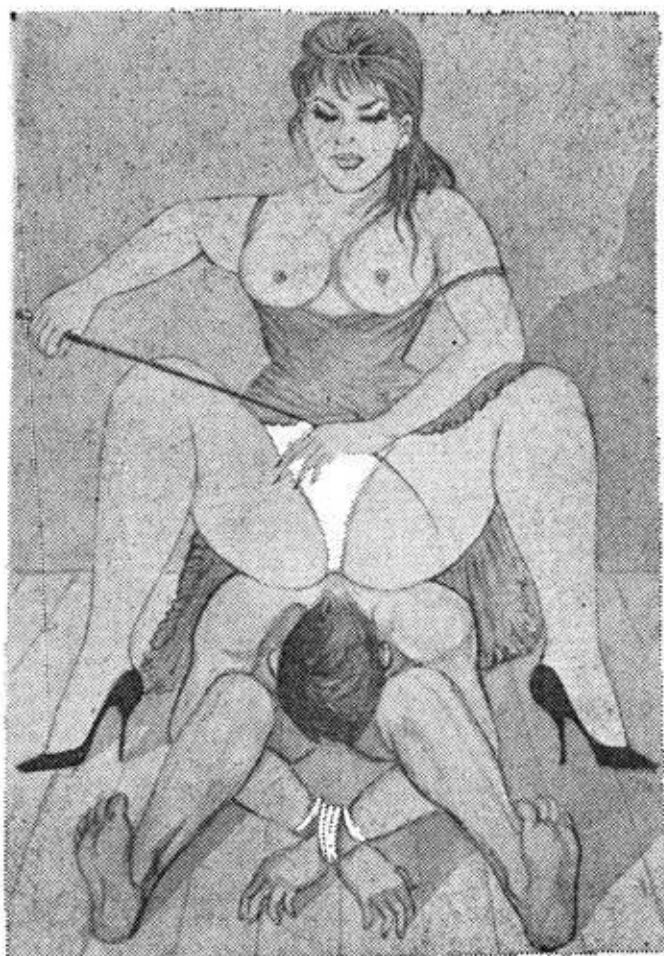
それらを読みかえしてみますと、今更のうちに、その頃の自分がなつかしくて、たまらなくなってきました。

連載・M派交友録 (五十三)

絞り取る男と女

佐戸崎昂の巻 (3)

カット・春川ナミオ



絞り取る方法

十日ほど経て、吟子のアパートにブラリと
佐戸崎が現われた。

少しやつれて疲れているようだ。

「あら、どこへ行ってたの？」

「うん、画材を求めてスケッチ旅行
だ」

たしかに、スケッチ旅行ではあつた。香港に行つて九竜や新界、レパルス湾やビクトリアピークと歩き廻つてスケッチしたのは事実だが、マカオに渡つて「大小」とブラックジャックに手を出してスッテンテンに取られて帰つて来たのだった。岩見から、まき上げた四十万を、きれいに使い果して来たのだ。

「まだ飯前だろう。飯を食いに行こう」

十一時頃で、吟子も起きたばかりのところだ

った。

近所のレストランへ行くと、佐戸崎は、し
ようが焼とシチューをとって、飯を二人前、
平げた。

よほど腹が空いていたと見えて、ガツガツ
と貪り食つた。

「どうだい、岩見とは、うまくやってるか」
あれほど嫌っていた佐戸崎だが、十万円も
らうと憎さが消えてしまうから、ふしぎだ。

憎悪が消えれば、佐戸崎は、なかなか好男
子だし、一緒にいても美男美女で、つり合い
がとれていた。

腹がくちくになると佐戸崎は元気になった。
「相変らず、お前を女王さまのように崇め奉

鬼 山 絢 策

「てるんだろ」

「フフ、まあね。フフフ」

吟子は、この間のことを想い出して含み笑いをした。

「何だよ、急に思い出し笑いなんかしやがって。ヤツと、そんなにうまく行ってるのか」

「フフ、そうじゃないのよ」

あのことを話すのは岩見に悪いとは思ったが、吟子はものごとをかくしておけない性分

佐戸崎昂

36才。画家。画才はあるが生来の怠け者。サジスチックでプレーボーイ。岩見の初恋の女を奪って捨てたこともある。吟子を五十万円で岩見に「売る」が、蔭で会って情交している。

加納吟子

28才。元アングラ劇団の女優。いまはクラブのホステス。背が高く金井克子のような日本的な美貌だが、メーキアップの具合でエキゾチックな顔にもなる。まだ芝居に出たい野心を捨てていない。岩見に対して愛情を感じていないが好意は持っている。特にサジスチックというわけではないが、芝居では思いついた演技をやったのける。

岩見崇

37才。挿絵画家。吟子を崇拜し、奴隷として献身的に奉仕している。まじめで内気のため、いつも佐戸崎にこみやられている。

なので、しゃべってしまった。

「あの日ね、何だか身体の調子がおかしいし気乗りしなかったんだけどね。岩見さんが競馬で儲かったって三万円くれたもんだから、まあお返しのもりで、つき合ってたのよ。お風呂に入りたかったのでホテルへ行ったの。やっぱりアレの前には、女は本能的にお風呂に入りたくなるものなのね」

「へエ、それで、どしたい」

佐戸崎は興味をもって目を輝かした。

「アレの前ってのは昂奮するもんなのよね。あたし夢中でやっていて、ハッと気がついたら、あの人の顔が真っ赤なのよ。びっくりしちゃった」

「アッハハハ、そいつあ傑作だ。アハハ」

佐戸崎は愉快そうに大声で笑った。

「そんな大声立てないで。人が見てるわよ」

「だって、あてがってたんだろ」

「うん、顔中ドロドロ。ウフフフ、あの人、それでもいいんだって」

「そうだよ。あいつは、そういう野郎なんだよ。お前のなら、なんでも食うぜ、あの馬鹿野郎」

「フフ、そうかしら」

「そうだと、喜んで食うよ。こんど、ため

して見なよ」

「イヤだ、そんな汚いこと」

「ハハハ。俺だって奴に……くわしてやったことがあるんだぜ」

「イヤだ。男の人のでも舐めるの」

「イヤ、そりゃ好きか嫌いかわからねえけどよ。多分、男のはイヤかもしれないね。だが俺が命令して無理に、くわしてやったんだ」

「あんまり大きな声で、しゃべらないでよ。人に聞いたら恥かしいじゃないの」

「じゃ、家へ帰ろう」

佐戸崎はサツと立つと、そのまま出て行ってしまった。あとに残った吟子が仕方なく伝票を持って支払った。

アパートに帰ると、すぐ裸になって挑んできた。

吟子は、このアパートに移ってから佐戸崎と二回、接している。今日が三回目である。

最初の時は、逃げおわせたと思ったのに突然現われ散々殴られ、拒むのを無理矢理、強姦同様に犯された。この時ぐらい、佐戸崎が悪魔のように思えたことはない。二回目の時は顔を見るなり観念したように諦めて、なすままに委せたが、十万円という金をポンと出した途端に憎悪が消えてしまい、佐戸崎の荒

々しい愛撫を快く感じるようにさえなった。そして今日も佐戸崎の挑むのを待ち受けていたように迎える吟子だった。その心の変化を、吟子自身、気づいていなかったし、矛盾しているとも思っていなかったのである。

佐戸崎のやり方は、女を何度も頂上へ登らせるが、自分は放たず、女の悶え快がるのを楽しむといった質である。彼は女を楽しませてやるのだと思っている。だから、それに見合う報酬を女から得る権利があると信じている。いわば「ひも」的な感覚の持主だった。また、自分と接した女は自分から離れられなくなる、うぬぼれた自信家でもあった。

たしかに彼が、うぬぼれるだけの實力はあったかもしれないが、絶対に女を痺れさせてしまうほどの力があつたかどうか、それは疑問である。

後に筆者が吟子に、彼のことを問い質した時「大したことないわよ、あんなの」と言っていたが、それは彼を嫌悪する感情から出た言葉で、果してどれだけの力があつたかは分らない。後になって金持の人妻と関係して金づるにしていたのを彼は自慢していたが、それだけでは、やはり實力は測れない。

ひと汗かいたあと、佐戸崎は服を着ると、

「おい、ちょっと三万ばかり貸せよ」

棚からウイスキーを出して来て、勝手に水割りを作って飲みながら言った。

「そんなに持ってないわよ」

「じゃ、いくらでもいいや」

仕方なく吟子がハンドバッグを開けると中を覗き込み、吟子が一万円、出すと、「もう一枚」と手を出し「じゃ、これでいいや」と五千円札を抜き取った。

「お前、岩見から、いくらもらってるんだ」

「べつに、お金なんか、もらってないわよ」

「だって三万ももらったと言ったじゃねえか」

「あれが、はじめてよ」

「バカだな、お前は。向うは、お前に金をくれたがってウズウズしてるんだぜ。何で奴の望みを叶えてやらねえんだ」

「だって、あたしは、淫売じゃないんだからね。そんなこと、できないわ」

「お前も人がいいな。俺が表面に出りや何とか、うまくお前に金を渡すようにしてやるんだが、俺はお前から手を引くと言ってる手前いまんところ、口を出せねえからな」

「あの人、収入が、そんなにあるの」

「あるとも。奴は小まめに働いて結構、稼いでるんだ。あんな野郎とタダでつき合うって

法はねえよ。うんと絞ってやりやいいんだ」

「イヤだ、そんなの」

「だって金は欲しいんだろ」

「あたし自分のことぐらい自分で稼ぐわよ」

「そんなこっちゃ、ノシ上がれねえぞ。じゃ俺が、いい手を教えてやろう」

絞りに取られて

「あたし歌の勉強したいの。テレビに出るようになれば、いろんな勉強しなきゃならないし、とりあえず歌の勉強しようと思うのよ」

「そりゃ、いいことですね」

「でもね、オーディション受けるまでには相当お金がかかるのよ。何だかんだって三十万ぐらい、かかるわ。だから、いま、せつせと貯金してるの」

「それは、いい心掛けですね」

岩見に金を出させるべく、佐戸崎から教わった「手」を使っているのだが、謎をかけても岩見は、まだ気がつかない。

「でも、大変だわ。毎月二万ぐらいしか貯まらないのよ。一年半ぐらい、かかっちゃう」

「あの……」

「何あに？」

ようやく謎が、とけたようだ。吟子はニコリ笑って岩見に次の言葉を言い出しやすいようにした。

「そのお金、立て替えさせて頂けませんか」

「あら、そりゃ悪いわ」

「しかし一年半も待っていたんではチャンスが逸してしまいますよ。すぐ勉強された方がいいですよ」

「いますぐ、できたら、ほんとに、いいんだけど。悪いわね」

「是非そうして下さい。明日お持ちします」

最近、株を売った金が百万ばかり、銀行に預けてある。

翌日、岩見は三十万の現金を封筒に入れて吟子に差し出した。

「これ、お返しにならなくとも結構です」

「そんなこと、できないわ。一年半たったらまとめて、お返しするわ」

「いえ、ほんとに、いいんです」

「では、お借りしますわ」

佐戸崎は「決してもらうな。借りておけ」と言った。もらえば、それだけ心の負担が生ずる。借りたのなら返せばよいのだから心の負担にならない。もちろん返す必要はないのだが、その方が相手に弱点を与えないことに

なる。佐戸崎のよく使う「手」を、そのまま吟子に言ったのである。

「よう、元気かい」

佐戸崎は相変らず前ぶれもなく突然、岩見のマンションに顔を見せた。

歓迎すべき客ではないが、岩見は愛想よく迎え入れた。

「どうだい。吟子ちゃんとは、うまくやっているかい」

「ええ、まあ……」

お互い、顔を見合わせて、探るように見合った。

二人とも相手に対して或ことを知りたいのだが、その的は全く違ったものだった。

岩見の方は、

「ひょっとして吟子と、よりをもどすのではないか?」

という不安だった。

「佐戸崎さんも、誰かいいひとが、できましたか」

と探りを入れてみた。

「それがさ、モテモテのモテで、困ってるんだ。あんまりモテるんで、身がモテねえんだよ。アッハハハ」

笑いながら部屋の中を見廻す。相変らず雑然と散らかっていて、この部屋から金の匂いはしない。

佐戸崎が知りたいのは、

「この男どのくらい金を持ってるんだらうということなのだ。」

「ところで例の残金だが、こんど大物の製作にかかろうと思うんでね。三十万ばかり都合してくれないか」

岩見との約束は、五十万払ったあと月十万の月賦ということのだが、金は早いうちにできるだけ取っておいた方がいいと思い、また岩見が経済的に、どのくらい余裕があるのか、それを知る意味もあって、吹っかけてみたのだった。いわば佐戸崎の「探り」だったのである。

「十万という約束じゃなかったですか」

「そりゃそうだが、どうせ払うもんなら早く払ってサッパリした方がいいだろう。それにいま俺は金が要る時なんだ。要る時にもらう金の方が有難味も、ぐっと増すってもんだらう」

まるで自分が払うような言い方をする。

「全く人をくった奴だ——」

と思った。昨日、吟子に三十万、渡したば

かりなのだ。四百万あった貯金も三百二十万に減ってしまっている。

佐戸崎は岩見の返事を聞いて、

「此奴は相当、持ってる!」

と踏んだ。

持ってなければ即座に「そんな金はない」と断るはずだ。渋ってるのは持ってる証拠だと断定した。金を借りつけている者特有の、鋭い判断だった。

「なあ、俺とお前とは十年來の友達だろう。

吟子をお前に譲ったのも友を失いたくないから俺が身を退いたんだぜ。君のためにだぜ。

その俺が、いま金に困ってるんだ。今度は君が男氣を出す番だぜ」

佐戸崎は、ここを先途と熱弁をふるって、しつこく喰い下がった。

岩見に見れば、たしかに、どうせ払うものなのだから、やってもいいが、あまり早く全額を渡してしまうと、また、あとで、せびられそうな気がして、なるべく長く引き延ばしておきたかったのだ。

「女って奴は金喰い虫だからね。金が要るんだよ」

絵のために使うと言っておきながら、今度は女のために使うようなことを言い出す。

佐戸崎の嘘は、すぐ底が割れてしまう。

口から出まかせを喋って何とかして金を攪もうとする佐戸崎の低劣さに、岩見は軽べつを感じ「こんな程度の低い人間と、まともに話し合う気もしない」と終いには面倒くさくなってきた。

「わかりました。用意します」

「いつ、くれる?」

「五日ばかり、待って下さい」

「もう少し早くならねえかな、おい、頼むよ」

「じゃ、あさって」

「有難てえ。じゃ、頼むよな」

要求が通ると佐戸崎はサッサと帰った。

岩見は厄介払いした気持だった。

——それにしても金使いの荒い奴だ。先月、五十万、渡したのに、もう使ってしまったのだろうか——

きつと博奕でもやって取られたんだろう。

岩見の見通しは、すべての中していた。

佐戸崎の嘘も簡単に見破ることができた。だが吟子の嘘は見破ることはできなかったのである。

翌日、銀行に行って三十万、引き出した。

ちよっとの間に百万も引き出している。

この貯金は彼が学生時代から十年以上かか

って、せっせと貯めた金だった。その四分の一がアツという間に消えた。

札を数えながら岩見は淋しい思いがした。

——どこかお前はトチ狂ってはいないかと、自問した。一千万、貯めたら家を買おう

——と目標を立てて貯金した金だった。あんな佐戸崎みたいな奴の言うなりになることはない。ともう一人の自分が責めているのだ。た。「だが、どうせ払う金だから、仕方がない」と弁解する自分でもあった。

翌日、朝早く佐戸崎は、やって来た。

さすがに岩見もムシクシヤして、札束を裸のまま叩きつけるように机の上に放り出した。佐戸崎はホイホイ喜んで拝むように札束を受けとって何度も数えた。

金を受け取ると相変らず佐戸崎は、すぐ出て行った。

——サア、仕事をしなくちゃ。減った貯金を稼いで埋め合せよう——

岩見は机に向ったが、佐戸崎に三十万払ったのが何となく惜しくてならなかった。あの喜びようは、吹っかけた要求が、そのまま通った望外の喜びといった感じだった。

——十万でも二十万でも、よかった——
いまさら、悔んでもしょうのないことだが

そんなことが頭にチラチラ来て仕事ができなかった。

岩見は筆を放り出し、出版社廻りをすることにした。

出版社の編集部の中と話をしても、なにか落ちつかなかった。

岩見は夜が来るのが待ち遠しかったのだ。

七時になると、もう待ちきれずに吟子のクラブに顔を出した。何としても吟子の顔を見たかった。

だが吟子は「お休みです」とバーテンが言い「亭主のあなたが知らないのはおかしい」というような、げんな目つきで見られた。

「イヤ、実は昨夜から家へ帰ってないもんでね。へへへ」

と、ごまかして店を出たが、不安が急に襲ってきた。すぐその足で代々木八幡の آپルトへ駆けつけて見たが、扉は鍵がおりていて開かない。

岩見は、そのあと一時間おき、二時間おきと三度、訪ねて見たが、吟子は留守で、管理人にも聞いてみたが分からなかった。

その頃、吟子は佐戸崎と一緒に三河の三谷温泉に泊まっていたのである。

見せてやろう

「ホラよ、こないだの一万五千元」

佐戸崎は吟子に借りた金をテーブルの上に放り出した。

「あら、珍しいわね。あなたが、お金を返すなんて」

吟子はチラと見ただけで化粧に余念がなかった。いつもなら、立って来て、すぐハンドバッグにしまい込むのである。それをしないのは、ふところが、あったかい証拠である。

「何だ、要らねえのか。要らなきゃ、もらっとくぜ」

「アラアラ、違うわよっ」

今度は、あわてて立ち上った。札を掴もうとする手をおさえた佐戸崎は、

「どうだ、この金で温泉でも行かねえか。お前も毎日、働いてるんだから、たまには骨休みした方が、いいだろう。もっとも二人で行くとなると、こればかりじゃ足りねえが、その分は俺が、もってやるぜ。全部、俺が持つてやるぜ」

「あらあら、どうした、お天気なの。十年に一ぺんてことね。いいわ、連れてって」

二人とも気分屋だから、話がまとまると、そのままアパートを、とび出してしまった。

三谷温泉は二人とも、はじめてだった。別に何の理由もなく、ここへ来てしまったのである。

静かな所だと思って来たところが、旅館へ泊まってみると、芸者の三味線や太鼓の音が聞えてきて、はなやかな温泉場の気分が、二人の情欲をたかめた。

「今度の旅行は……旅行だよ」

新幹線の中で大きな声で言うので吟子が佐戸崎の肩をこづいたが、佐戸崎の宣言通り旅館に着くと、すぐ風呂場で挑み、風呂から上って吟子が化粧している後から抱きついた。

女中が夕食の膳を運んできて、

「御免下さい」

と声をかけると「オーイ」と佐戸崎は吟子の上から返事した。

「アッ、ダメよっ」

吟子は慌てて佐戸崎をどかさうとしたが、抑えつけられて起き上れなかった。

和室で寝室と居間と二間に分かれていたが合いの襖が二十センチほど、開いていた。

「そこ、閉めてよ」

女中が入ってきて膳部を置いたが、思わず

視線が空き間に行くと、

「あらッ、失礼いたしましたッ」

と慌てて出て行った。

「イヤだなあ、見られちゃったじゃないの」

「フッフッフ」

佐戸崎は太々しく笑った。

「構わねえじゃねえか。どうせ温泉宿へ男と女と二人で泊まれば、やることは決まってるじゃねえか。どうってことはねえよ」

「ほんとにイヤんなっちゃう。あんたは露出症なのね」

「露出症は、お前だろう」

「あたしのは仕事でやるんだから、しょうがないじゃないの。露したくて露してるんじゃないんだから」

「ハハハ、なんでもいいや。見たい奴には、うんと拝ましてやれ」

佐戸崎は執拗に吟子を責めた。

「岩見の野郎、今頃は血眼になって、お前を探してるぜ、あの間抜け野郎」

「そんなに言っちゃ可哀想よ」

「何かと言うと、お前は岩見の肩を持つんだな。あの野郎の、どこがいいんだ。あの舌がそんなにいいのか」

「だって、あたしの大切なパトロンだもん」

「おめえ、そういう風に、あいつを考えちゃ

いけねえんだよ。あの野郎は、お前の奴隷な

んだよ。少しばかりの金をもらったからって

恩に着るたねえんだ。当り前のことなんだ

よ。それだけ、お前だって可愛がってやった

んだろう。その代償なんだよ」

「そりゃまあ、そうなんだけど……」

「礼なんか言うて却って奴は喜ばねえんだ。

奴が尽せば尽すほど、いじめてやりや、奴は

ヒイヒイ言っで喜んでるんだ。それがマゾヒ

ストの心理というもんだぜ」

「ほんとに、そうなのかしらねえ」

「そうだとも、あんな野郎にや俺達のもので

も舐めさせときゃ、いいのさ」

「フフ、あんたがサジストだから自分の欲望

を満足させるために、そんなこと言ってるん

じゃないの」

「それもあるがよ。だが、俺の言うことは本

当だぜ。十年つき合って野郎の気性は、もう

知りつくしてるんだからな。構うたあねえ

野郎を、うんと馴ってやれよ」

「そんなことできないわよ憎くもないのに」

「じゃあ、小便でも、ひっかけてやれ。奴、

涙を流して喜ぶぜ。飲ましてくれってな」

佐戸崎は自分の言葉に昂奮した。

「そう言えば——あッ」

佐戸崎は全く衰えを見せず、かき立てた欲

情を爆発させた。

「そう言えはって……何だ？」

荒い息を、はずませながら訊いた。

「あの人、この前、あたしの……ホラ話した

でしょ。あたし、びっくりして、やめようと

思ったら、あの人、このまま続けてくれ、だ

って。フッフ、驚いちゃった」

「そうだろう。奴は、お前の身体から出るも

のなら、汚いものほど、喜ぶんだ」

佐戸崎は吟子の言葉に更に昂奮の度を増し

ギューッと抱き締めた。

「アッ、アッ」

吟子は、あたりはばからぬ大声を上げて佐

戸崎に、しがみついた。

二人は全く情痴に狂った二匹の獣のように

絡み合った。

楔を打つ

「奴は余程、貯めこんでやがるんだな」

ひと息ついたところで、夕飯にした。吟子

の酌で一ぱいやりながら佐戸崎は、じっと考

えた。

「まだまだ絞れるぜ。次の手を考えなくちゃならねえな」

「あんたも相当なワルね」

「とか何とか言って、俺の言う通りやったからこそ儲ったんじゃないか。女優やタレントってものはな。男を食いものにして、のし上って行くもんだぜ。お前がテレビに出てうまくスターになったら俺がマネージャーになって、しこたま儲けさせてやるぜ」

「とか何とか言って自分も、うまい汁を吸うつもりなんですよ」

「そりや仕方がねえさ。共存共栄だよ。その代り、いまみてえなケチなアパートなんかじゃなく、豪華なマンションに住まわせてやるぜ。外車かなんか転がしてな。金持の馬鹿野郎共が鼻毛をのばしてウヨウヨ集まってくらあな。其奴等を、いいように、お前はあしらってやるんだ。そうなりや岩見なんか屁もひっかけてやらねえや。アハハハ」

絵に描いた餅を想像して得意になった佐戸崎に吟子も、いつしか引きこまれてウツトリしていた。

「いいか、その踏み台に奴になるんだ。もしもお前が気が咎めるといふんなら、お前が出世した時、金を返してやりや、いいじゃねえ

か。それでいいだろ。だから、奴を利用しなきゃならねえんだ」

人間は、誰しも心の中に夢がある。そういう物がトントンと調子よく行くものでないとは思いつつも夢を追うことは楽しいものである。

岩見のように浮世の苦勞を味わっている者にとつては、夢は描いても口には出せない。やはり現実的なことばかりが先に浮かんできてしまうのだ。しかし女にとつては佐戸崎のような夢想家は、甘美な言葉に聞えるのだ。もともと女優になぞなろうという女は夢を追って女優になったのだ。佐戸崎の言葉は阿片のように彼女に妖しい夢を描かせ、その中にさまよい込ませるのだった。

吟子の心境が、この三谷温泉の一夜を境として大きく変化した。

あの「マドンナ」で酔った佐戸崎を見た時は、女にたかり、女を食いものにする、いやな奴だと思い、一方、誠実な岩見が頼もしく見えたのだが、いまはワルでもこの男にくっついていけば、出世できそうな錯覚に陥ってしまったのだ。反対にあのようなものを舌で舐めていた岩見が阿呆に見え、頼り甲斐のない男に思えて来たのだった。

「お前は、ほんとに、いい女だ。俺がつき合った女の中じゃ一番だ。俺はお前が、好きだよ。愛してる。心の底から愛してるよ」

たしかに佐戸崎は、この頃、吟子が好きになってきた。ヤブーショーで、はじめて吟子を見た時、男の顔に跨がって、そっくり返っている女王様振りに、好奇な心を抱いて、ちよっと手を出したつもりなのが、岩見と張り合って、表面上は競った形となった、その負い目が却って吟子を欲しくなる反動となったのだ。

——フン、こんなハクイ女を滅多に手放すもんじゃねえや。十分に楔を打ち込んで俺から離れられねえようにしてやるのだ——
そういうつもりで念入りに楽しんだのだった。

岩見は吟子の顔を見ないと仕事が手につかなかった。

今夜はいるか——と思って「メルシー」に行ってみるのだが、吟子はいない。

「亭主」というたてまえ上「どこへ行った」とも聞けないし、バーテンから話しかけられるのを恐れるように水割り一杯、飲んで早々に退散するのだった。

吟子と佐戸崎は、金のあるに委せて、三河

イメージギャラリー

『朝の散歩、楽しい日課』

岡 かし



三谷温泉から館山寺、岐阜と泊り歩いてきたのだ。

吟子の顔を見たのは四日後だった。

岩見はソツとボックスの方へ呼び出して、

「どしたんですか？」

「フフ、ちょっと旅行してたの。くにの母が悪いってもんだから飛んでったんだけど、大

したことがなかったわ」

「おくには訓路でしたね」

「ええ、涼しいもんだから学校時代の友達と会ってきたのよ」

なにか吟子の言葉に嘘があるように感じたが、問い訊すすべもないし、顔を見た嬉しさで、それもすぐ消え去った。

「今晚、行っていいですか」

「いいわよ。フフ、いつもの所でね」

アパートと一緒に帰り、吟子が服を脱ぐと「吟子さん！」

たまりかねて岩見は吟子の前に座り豊かな尻を両手で抱えて、ガーターとパンティの間から出ている部分に唇をつけた。

「なによ、せっかちな。フフ、あんた飢えてんのね、あたしに。いいわよ、今夜たっぷり可愛がってあげるから。フフ」

吟子は笑いながら岩見の手を振りほどき、足を上げて肩を跨ぎ、残る足を高々とあげて頭を跨ぎ越した。

「お化粧おとす間ぐらい待ちなさいよ。ホラホラ、あたしの脱いだもの片づけて」

「ハイ、すみません」

流がしへ行って吟子は洗面器で顔を洗う。

あとかたづけした岩見はタオルを持って行って、手渡してやる。吟子は、それで顔や腕や腋の下を拭くと、

「フム、これで、あたしの足を拭いて！」

とタオルを差し出した。

岩見は感激して吟子の前にしゃがみ、靴下を脱いだ足を拭いた。

いつもより吟子が積極的であり、命令的な

のに途惑いながらも岩見は言われた通りに、パンティに両手をかけて引き下ろすと、足の先に落ちたのを吟子は、

「ヨーツと……」

足を上げて勝手から居間の方へ蹴りとばした。岩見は顔の前にムーンと迫る女体の匂いに、矢も楯もたまらなくなつて

「ああ……」

また裸の腰に抱きついた。

「まだまだ、お預けよ。あたし、おトイレに行きたいんだから」

しかし、吟子は口とは反対に、岩見の頭を片手でおさえると、片足あげて肩を跨ぎ、

「待てない？ フッフ、それまで——」

と餌を与えた。

「あんた、馬になつて女王さまをトイレまで運びなさい」

「ハ、ハイ」

板の間の勝手から入口の脇のトイレまでは数歩である。岩見は馬になった。その上にドシンと跨がった吟子は裸の尻を背中にピツタリと密着させて、

「重い？」

「いいえ、重くありません」

「じゃ、此処をひと回り、してみて」

勝手の狭い板の間を膝小僧をゴツゴツ言わせながら這いずり回った。

「アハハハ、面白いわ。ヤプーショーを思い出すわね。今度は犬にしてあげる。あんたの一番、好きなね」

吟子は跨がったまま、スーと腰を上げた。

「そこへ仰向けに寝るのよ」

吟子は今夜は最初から何かを意図しているらしく、見下す瞳が妖しくひかった。

大洪水

岩見は吟子に魔法にかけられたみたい

唯々諾々として、命ずるままに動いた。

板の間にゴロンと仰向けに寝る。

いやでも真上にそびえる女の武器が誇らし気に嘲っているのが目に入る。

吟子は、思いきり両足をひろげて悠々と、しゃがんだ。

そのままベッタリと跨がり、呼吸することだけを許していた。

いみじくも吟子に見抜かれていたように、岩見は飢えていたのだ。Mの糧を、ようやく与えられた嬉しさに、かぶりついていた。

「フッフ、ヤプーショーの再現ね。ああ、あ

たしトイレに行きたいんだけど面倒くさくなっちゃった。このまま、しちゃうかな」いつも居間でやるプレイを、勝手の板の間におびき寄せたのも、最初から吟子の企んだことだったのだ。

両股でピツタリと動かぬようにはさみ込まれている岩見には反抗する動きも、抗弁することも封ぜられていた。否も応もないのだ。

「あんた、あたしのおしっこなら飲むわね」

岩見の気持が体の中を通じて返事しているように感じた。

「ハイ、頂きます」

と舌は言っているのだ。

「いまさら初めてじゃないんだから。でも初めてかな。ヤプーショーの時はどこの馬の骨か、名前も顔も分らぬヤプーに飲ましたんだからね。いまは岩見崇という正体の分った男に飲ましてあげるんだもんね」

——あたしの味をタップリと味あわして、あたしから離れられないようにしてやる——

それは佐戸崎が吟子に対して抱いた気持と同じものであった。「楔を打つ！」ということなのだ。

佐戸崎の意図するところが、そのまま吟子にのり移ってしまったのかもしれない。

「サ、岩見さん、岩見君、岩見タカシ。お前は、あたしのオシッコを飲むのよ」

密着していた部分を少し弛め、そのままブレーキを解いた。

たちまち暖かいものが溢れて流れ出るのを知った。

「ダメじゃないのクラ。こぼさずにチャンとお上がり。タカシ！」

強烈な匂いが吟子にまで匂ってきた。

「ああ、臭い臭い。酔っぱらいのオシッコはこれだからイヤんなっちゃうんだよ」

と人ごとのように言う。

少し宛、気長に飲ましてやろうとしたが、そうは行かず、半分ほど出したところで、あとは一気呵成に放った。

「ああ、汚い汚い」

吟子は立ち上がると、

「ホラ、ボヤボヤしてないで拭くのよ。ああそれ、板の間、拭く雑巾よ。そんなもんで拭いたら汚いじゃないのバカね」

岩見は当惑気に、あたりを見回した。だが拭うものが見当らない。

「じゃ、何で……」

「決まってるじゃないの。あんたのハンカチで拭くのよ」

——ああ、そうだった——

と言うように岩見はズボンのポケットからハンカチを出した。幸い今日は一度も使わずにいて綺麗だったので安心した。

「ああ、汚い汚い。いいわ。あと、板の間は雑巾を使って拭いて頂戴。その代り、あとよく洗ってね」

立ったまま腰をかがめて拭かせると、吟子は居間へ、とんで行った。

「ああ、タカシか。佐戸崎もタカシね。でも同じタカシでも随分、違うわ。あいつのは昂で、何かプーンと、そっくり返ってるみたいなタカシだし、あんたのは崇めるっていう字なんですよ。フッフ、名は体を現わすって言うけど本当だわ。アッハハハ」

吟子はベッドにひっくり返って男のように大声で笑った。

買ったばかりの15インチの小型テレビをつけて、深夜映画をベッドで煙草をふかしながら、見ていた。

岩見の方は大変だった。

小さな雑巾ひとつしかないの、床中大洪水になった、あと始末に大わらわだった。

まず床の掃除を先に終ってから、自分のワイシャツがグショグショに濡れているのを脱

いだが、下着のシャツも汗と吟子の液体が泌みこんでビショビショだった。

「何か、ちょっと食べるもの、作ってくれない。冷蔵庫に入ってるでしょ」

見ると冷蔵庫も新品で、前のより大きなのがデンと座っていた。注意してみると、テレビだの冷蔵庫だの、このところ、だいが家の中が豪華になっていた。自分が渡した金で買ったんだなということは、すぐ分った。

ともかくパンを切って、あり合わせのものを適当に処理して盆に掛けて持って行った。

「手を、よく洗ったろうね」

「ハイ、綺麗に洗いました」

吟子はベッドに寝そべったまま、片手に煙草をすいながらムシヤムシヤ食べた。

「ずいぶん、家の中が綺麗になりましたね」

冷蔵庫も、いいが入って……」

「それが、どうしたのよッ！」

突然、吟子はベッドから、はね起きた。

「何よっ、そんな厭味ったらしいこと言っさ。勘違いしないでよ。これは皆、あたしのお金で買ったんだからね。あんたの三十万に手をつけたんじゃないからね」

激怒した吟子に岩見は慌てた。

「あ、そういう意味で申し上げたんじゃあり

ません。ただ見たままを申しましたので」

「何言ってるのさ。パトロン面^{づら}しないでよ、犬のくせに。帰ってよッ、もう用は済んだんだから」

ドシンとベッドに、ひっくり返ると、クルリと背を向けてしまった。

「すみません。お気にさわったなら、お許し下さい」

岩見は吟子の傍によって哀願した。

吟子はサッと、こっちを向いた。ガウンを着ていたが、前が上から下まで、はだけて、乳房もお腋も、その下も、丸出しになっていた。白い長い足がサッと上がると、岩見の頭へあてがって思いきり蹴とばした。

「帰れッ！ お帰り。汚い犬！」

岩見はモロに、ひっくり返った。

「どうか、お許し下さい。僕は決して、そんな意味で言ったんじゃないんです。誤解しないで下さい。あのお金は、何にお使いになつて下さっても結構なのです」

「まだ、そんなこと、言ってるの。あのお金で買ったと思ってるんだねッ」

ベッドから下りた吟子は追い討ちをかけて転がった岩見の横顔へ足を乗せてグッと踏みつけた。

「あんた、お前、あたしが、そんな貧乏な女だと思ってるのかい。フン、バカにしゃがって。こん畜生ッ」

グイッグイッと力まかせに踏みにじった。

「アッ、アッ。お許し下さい。もう言いませんから。アッ、アッ」

「こん畜生ッ、こん畜生ッ。お前なんか踏み潰してやるッ」

吟子は本気で足に力を入れて踏んだ。

「カ、勘弁して下さい」

「あたしがアルバイトしてるからって見くびるんじゃないよ。ホステスなんかと一緒に見ないでよ」

「もちろんです、吟子さん」

「いゃんなったら、すぐ辞めるんだから。あたしは女優一本に生きるのよ」

「そのお心掛けは尊いと思います」

「おせじを言うんじゃないよ。お前の失言だということが分かったかい」

「分かりました。申し訳ありません」

「悪いと思ったら、そこへ両手をつけて謝りな」

吟子は、ようやく足を、どかした。岩見は床に正座して両手をつき深々と頭を下げた。「どうも申し訳ありません。お許し下さい」

「よし、今度だけは許してやる。二度と、あたしをバカにしたら承知しないよ」

「ハイ、よく分かりました」

吟子は、言うだけ言うと言った。ベッドに入り、また背を向けて寝てしまった。

「あの……吟子さん」

とりのこされた岩見は、遠慮しながら「あの……僕を泊めて頂けますか」

「……」

こめかみから頬へかけて、痛さがよみがえって来た。吟子の足のうらの触感が想い出される。

「あの……」

「うるさいわねえ。いつまで何を、ぐずぐず言ってるんだよ」

「すみません——」

——どうしてもダメか——

悄然として岩見は帰ることにした。

だが、帰るにもシャツもワイシャツも濡れていて着られない。

——困ったな——

「宿なし犬の一匹や二匹、泊まって行ってもどうってことないよ」

岩見は狂喜した。

「ありがとうございます。泊めて頂けるんで

すか」

「裾の方から、お這入り。電気、消して」

岩見はズボンを脱ぎ、ベッドの裾から薄い羽根蒲団を捲くってモゾモゾと這い込んだ。

吟子の足が岩見の背中、肩、頭、顔と、撫で廻してきた。犬のように手足を縮めて小さくなっている岩見の存在を確かめていた。

「もっと上の方へおいで」

足で背中を逆撫でした。岩見はモゾモゾと蒲団の中をベッドの中心まで這い上がった。

吟子の長い足が岩見の首に巻きついた。

「ストップ、そこまでだよ」

吟子は手を伸ばしてスタンドの明かりを消した。あたりは真っ暗になった。

「泊めてやるかわり、朝まで舐め続けるんだよ。いいか」

太い股が、横向きに岩見の額をピッタリとはさんだ。

悲しき働き蜂

「明日の晩、映画をやりますが、見にいらっ
しゃいませんか」

鬼山の社に絵を届けに行つて、誘われた。

「私の友人が持ち寄つてやるんですが、もち

ろんMがかったものばかりです」

「ハ、ぜひ、見せて頂きたいです。あの、加納吟子さんも、お誘いしていいでしょうか」

「ああ、結構です」

翌日の五時半から鬼山の社の会議室で、はじまった。集まったのは七人だったが、岩見の知ってる顔は黒田だけだった。

はじめ、三本ばかり日本製のカラーが映写された。

「これは春木氏がお持ち下さったものです」

春木と呼ばれた頭の毛の薄い四十年輩の男は黒田とも親しいらしく時々話をしていた。

岩見と吟子は黙って見ていた。

Mものと言ったが、完全なMとは言えず、カニリングスのシーンが比較的、多いといったものばかりだった。

「さて、今度はアメリカから持って帰つて今夜が封切りです。私もまた、どんな内容か見てないので、ロスでMストーリーのものと注文して見ずてんで買ってきたんです」

映写は春木が担当した。

さすがに封切りだけあって、画面が非常に綺麗だった。

最初から長靴をはいた全裸の女が出てきて鋭いヒールなどをクロースアップして見せる

ところはM派の心理を強く、とらえている。

首輪、鞭、嵌口具と一通りの小道具も、いろいろ出てくる。途中から、もう一人、女性が出現して、二人で口ひげをはやした男を裸にして責める。

一人の女が男の顔へ逆に跨がる。もう一人の女が鞭を振るって、男の腹や胸や太腿を打つ。

鞭を振る女の表情は激しくてよいが、顔へ跨がっている女の方は、すましてるのが物足りなかった。

かわるがわる、馬にして乗り回したり、皮紐で縛って殴ったりしたあと、とげのついた鞭をとり出してくる。男が恐怖の表情で「ノー」と首を左右にふるが、女は許さない。

年かさの、三十がらみの女が、なかなかサジスチックな表情でよい。

三十女が齒を剥き出して棘鞭を一閃する。男の背中にクッキリと鞭の痕がつき、血がタラタラと数条、流れ出る。男が大口を開けて悲鳴をあげる。

さすがに、この鞭は一回きりであった。女達が寄つてたかつて長靴の足を上げて男を蹴る。男は完全にノビてしまう。

仰向けになった男の顔の上に若い方の女が

しゃがむ。男が眼をつぶって、口を開けている。三十女の笑う顔。男を三十女が靴の先で蹴とばす。目をつぶった男の苦痛に歪む顔。若い女が、すまし顔で退く。

三十女がタオルを男に投げ与える。男が顔や首、胸のあたりを拭く。

息もつかせず今度は三十女が顔へ跨がる。

凄くポリュームのある太股、尻。三十女の歓喜の表情。カメラは女の顔から、ずっと下を舐めて写し、また、舐め上げて顔へもって行く。そのくり返しである。

やがて男はグッタリとなる。

女は満足して、ゆっくり体を持ち上げる。

長々とした男の舌の大写し。途端に、「END」のタイトルが出た。

「こりゃ凄いな。これ譲ってくれませんか」

「今度また行って買ってきてあげますよ」

皆が吟子の顔を見る。反応を観察するような目つきに、吟子は反撥するようにツーンとして冷静さを装っていた。

翌日の昼、佐戸崎が吟子のアパートへやって来た。吟子は昨日の映画の話をした。

「なんだ、俺も見なかったな」

「だってマゾの映画よ。あんたは女を虐める

方がいいんでしょ」

「どっちだって好きさ。それに岩見を責める時の参考になるだろう」

「とにかく凄かったわ」

「どんな風にやったんだ」

佐戸崎は根掘り葉掘り、映画の内容を、たずねた。

「あたしも、こないだ岩見に飲ましたわよ」

「フーム、喜んで飲んだろう」

「そうでもなかったわ。顔をしかめて苦しうだったもん」

「そりゃまあ、あんまり、うまいもんじゃねえだろうからな」

「どんな味がするんだろうねえ。あんた今度あたしの、飲んでみない？」

「バカ野郎！ そんなことしたら、ぶっ殺してやる」

「だから、あんたは実^{じつ}がないっていうのよ。

よし、いつか飲ましてやるから」

「このアマッ！」

佐戸崎は吟子にとびかかって押し倒し、接吻した。そのまま二人は情痴の渦の中に巻き込まれて行った。

佐戸崎は吟子を縦横にあやつりながら、「そうか、岩見に飲ましてやったのか。そい

つあよかった」

「こないだは少し乱暴にやってやったのよ。踏んだり蹴ったりもしてやったわ」

「どうだった。奴は感激したろう」

「ごめんなさい、ごめんなさいって、謝るのよ。面白かったわ」

「もっと、こっぴどいめにあわしてやれ。グウの音も出ねえようにしてやるんだ」

佐戸崎は自分の言葉に昂奮した。

「でも、あの人のお金でテレビや冷蔵庫を買ったでしょう。それを見抜いてるのよ」

「そんなことは屁でもねえ。当り前だあな。

何も体裁ぶることはねえんだ。お金は、あたしが使ってやるから、手前は汗水たらして働けと言てやれ。お前は、あたしが使うお金のために働くんだ。と思ひこませるんだ」

「あんたも悪党ね」

「別に悪いことじゃねえ。いやがるものを無理にやるんなら悪いかもしれねえが、奴の場合、そうしてやればやる程、喜ぶんだからいっそ功德というもんだよ。そういう風に考えなきゃ、だめだよ」

佐戸崎にそう言われると、何となく吟子はその気になってくるのだった。

女責め図絵の系譜

現代やくざ気質

文と画 南彦造

私が勝之助と知り合ったのは、昭和三十年の三月の中頃だったから、数えて、ちょうど十九年前と云うことになる。その頃の私はTB（テレビ）ではないVと云う恐ろしい病魔から解放されたばかりの活気に満ちた年頃であった。想えば、やっと未来も開け、曙光を見出した記念すべき新生の春を迎えたばかりの頃でもあった。

しかし、家族や医師は「無茶をしないように……Vと釘をさすので私は連日（時間）を無駄使いVしているような焦燥を感じ始めていた頃でもあった。

そんな——或日。母の知り合いで、若い頃は『エノケン一座のプリマ』だったと、過去の思い出を、よく喋る『通称おとみさん』と云う、五十才がらみの垢抜けした、おばさんが、ちょいちょい尋ねて来ては、海外まで巡演した話題とか——昔の楽屋裏のスクandalなど面白おかしく喋っては、過去の夢を追っていた——悪く云えば芸人くずれの文化おばさんが近所に間借りして住んでいた。

彼女は、カナダのバンクーバーでの海外公演を、よく喋るので、私は「バンクーバーのおばさんVと愛称して、老後の一人住いを労わっていた。が——このおばさんは、どうした

事か、この町から4里ばかり離れた利根川沿いのS市の生家では、厄介者扱いされて、居すわれず、若い世代の跡とり夫婦とは、しつくり行かなかったのが原因で、この町へ来て一人住いをしているのであった。

私の母などは、何とかして生家の若い者にとけこむように説得するのだが、性格と云うのか、娘時代の海外旅行や、芸人特有の鼻柱の強い水に染まったせい——どうも……頑固で自己主張が強いのであった。

男関係も盛んだったらしく、いろいろな男達に囲われたようで、一番の印象は、さる神戸の財閥で、お年寄だが（80才に近い）性欲が旺盛で、当時18才だった、おばさんの魅力にとりつかれ、自分も囲われて終った——と云うのであった。おばさんは、こんな老人との暮しは自分の（夢）ではなかったが、プラグマチズムに徹していた、当時のおばさんは、金の便利さと贅沢の出来る生活に憧れてこの老人の住む六甲山の豪邸で、香わしき乙女の肉体を許していた——のであった。

この貿易を業とする大金持の老人は、おばさんの何処を好んで食指（しよくし）を動かしたのか——見当はつかないが——とにかく、連日連夜、おばさんを全裸にしてベッドに縛った上で、

白い背中に銀蛇のようにしなやかな革鞭の洗礼を浴せた——と云うのであった。

そんな時——おばさんは、悲鳴をあげ乍ら理由を問いただすのだが、訊けば訊くほど、ますます増長して、強靱な皮革の鞭が、白絹のようだった、おばさんの柔肌に、赤く滲んだ鮮血の△交錯模様△を描いて行った——の

私は話を聴いている裡に——このおばさんの肢体とか、物腰、言動のしじまに、何かしらサディスティックな男の心理を掻き乱すマゾヒスティックなムードの秘んだ、微妙な女芯の綾を潜在的に意識もし、感じとっていた。



であった。

○

私ならずとも、このおばさんと親しく交歓していると、何となく△虐めたく△なるようなサディスティックな欲望に駆られる男性は多かったのではあるまいか——と思われる節々もみられて、妙にマゾヒスティックなエロチシズムに溢れてくるのであった。

女性と云うものは、男にとって大変セクシーに感じる方がいる——自分では知らないのだが、瞠める男性の欲情を、いやが上にも掻き乱させるのだから、△襲いかかりたくなくて△終うのだ。

当の本人にとっては、甚だ迷惑なのだが、△気付かない△のは気の毒である。誰か親しい男性が△教えてやればよい△のだが、真面目な男ほど△はしたない△と思って口には出さないし、まして△教えよう△とは、しないものなのであった。やがて、その女性が△強姦△され△致死△と云った哀れな死に方をすれば、男は後悔して、△何故あの時、警戒するよう△暗示の形でもよいから教えてやらなかったのか？ と、述懐するような△犯罪悲話△は実に無限に多く語り伝えられている。

男性たるものは△勇氣△を持って、女性をリードすべきものではないか？ と思う。

私自身、電車の中などで向い側の座席に腰

を下した娘さんの△下着▽の奥が覗いて見えるのに△見えますよ！▽とは、ちょっとばかり云えなくて△当惑▽する場合にも随分、ぶち当たっている。なかなか申し難いものだ。

このバンクーバーのおばさんも、もう老女に近いのに、まだ深い△色香▽が残っていたし、芸能人であった過去の生活のせいばかりでもあるまいが、やはり、昔の染まった染料は、なかなか抜け切らぬものだ——と、しみじみ思う。

だが——しかし、△危険な色香▽だけは、注意して△脱色▽して貰いたいものだ——とは思うこと、しばしばで、時には△おばさん！——もっと地味に出来ンのかねエ！▽と云ったり△おばさんは、若い頃も、たからねエ、まだ名残りがあるよ！▽などと冗談ごかしに云えば△男の………なんかヒネリ潰してやる！▽などと、はしたない言葉を吐くような処もあり、私などのような不慮な男でも、到底、太刀打ち出来ない——過去の生活が判るような——妙に男心を惑わす、おばさんでもあった。

このおばさんは、その後——一カ月ともたない、神戸での生活に終符を打ち、また別な男性と交渉を持つに到るのだが、——娘時代

のおばさんの舞台写真などを見せられると、やはり凄く魅力的な美人で、何となく愛くるしい、瞳のつぶらな乙女であったのも分ったし——男好きのする△酷く虐めたくなるような肉体ムード▽に、溢れた乙女であったのを如実に知ることも出来た。

そうした予備知識からでもあるまいが、現在のおばさんを眺めれば、それは年齢なりに老いたけれど、やはり△虐めたくなるような風情のなくならない女▽であった。花卉のよう紅く厚ぼったい上下の唇も、いきなり吸いついて、噛み切って終いたいほどの、所謂△受けの口▽だし、なかでも一番、気になるのは下唇の先が、垂れる程に△突き出して△それ、人相易学から云って——男性にでもはやされる好色的な唇相なのだそうであった。

こう云う女性、男を虜にし、夢中にさせる△名器▽の持主だ——と、その道の易学者が激賞していた逸品で△高橋お伝▽などは、その種の典型的な唇の持主だったと伝えられて来ている。

先般、発売された△週刊サンケイ連載の「犯罪ドキュメント」△高橋お伝▽には、その△名器▽についての詳細な解剖学的データ

が、センチとかミリ単位で記されていたから資料を求める好事家にとっては、垂涎の的——私が述べるまでもなからう。

○

かくて、お伝の体質豊かな、このおとみおばさんは、続いて、また別れて、逃れるように他のスポンサーと同棲するようになったのであった。

今度の男性は、ノーマルで、こよなく、おばさんを愛したが、数年にして死去したと云うから△男喰い▽的な命運も持ち合せ、不運と云えば、全く運のない、おばさんと云えよう。

私は、このおばさんの襟足に、妙に魅かれるものを感じた。私の母は、この芸者風の背まで覗けるような△抜衣紋▽の背筋まで露呈し円い肌の見え方が気にいらぬらしく、横目で睨んでは眉根に皺をよせて居たが——それは、女だけの感情で△露出する意図や心根▽の奥が分るから——あまり見せない方がよい——と思う潔癖の具体的な現れでもあろう。だが私にとっては、若き日のおばさんの肌の香りが忍ばれるプロフィールの一ツとして、得がたい肉体のしじまを忍ばせる想いで——なるほど、こんな柔肌なら男性嗜虐者を満足さ

せた——であろうと、想像も出来、それはベ
ットリとねばりつくような緻密な肌の色艶で
あった。

その両肩は勿論、襟足の後れ毛を、アッ
に櫛上げした頭髮は、初老にしては所謂^{からす}八鳥
の濡れ羽色の^{ばいろ}Vで妙にみずみずしく、若妻の
その美事さを偲ばせていた。

そして、背筋の奥の中頃まで覗けるような
両肌の肉附きも、小娘のように円々と脂肪に
めくるめく盛り上っていて衰えをみせては居
らず、春光に、輝く柔らかな生毛のキラメキ
までが、何故か老を知らぬ、そのものに見え
た。

この年で、この艶肌なら、後手に両手を縛
り上げ——両肌の肉を締めあげ、寄せ集まっ
た襟足の脂肪を、思う存分に八叩きのめして
みたいVであろう——男の欲情も、うなずけ
るし、ピンクに色づいた桜貝のような耳朶^{みみたぼ}の
たたずまいから顔の両ビンのほつれ毛と、更
に両頬に到るまでの若さを失わぬ皮膚の白さ
は、流石八男泣かせVを自称するだけあって
私の男性をも、かきたてるに十分であった。

医学的に八女体は死ぬまでセクシーVなも
のと云われるが、女体とは反対に男の肉体と
云うものは八衰えが激しくV女体ほどの八性

の営みVには耐えられぬ——と云うから、私
の嗜虐的動揺も、やはり、このおぼさんのど
ん慾な肌が、まだ衰えをみせず、私の男芯^{おとこしん}を
刺戟せずにはおかなかったのであろう。

私は、今更ながら八女体の持つ生命力Vの
強さには圧倒せざるを得ない想いであった。

○

生家の若い跡取り息子夫婦は、年老いて、
想い出だけに生きる、このセクシーなおぼさ
んの八坐り方が悪いVとか八茶碗の持ち方が
気に入らぬVとか八水商売的な着物のつけ方
まで嫌いだVとし、何とか理屈^{いちやもん}をつけては、
おぼさんの生活を痛めつけるので、居たたま
れずに、家を出て終ったのだ——と愚痴っば
く私には語るが、若い頃に八妊娠Vして八実
子Vをつくっておきさえすればよかったのだ
——と石女^{うまつめ}を口説く、弱いおぼさんでもあつ
た。血を分けた八分身Vがない——と云った
単純な解釈だけでメドのつく問題であろうか
？ 私は何故かもっと、先天的に備った八被
虐的な体質Vの持主であったことが、致命的
な運命ではなかったらうか？——と考えるの
である。

娘の頃から八男の嗜虐の対象Vとしか認め
られなかったような、このおぼさんの特徴は

最後まで、若い孫子^{まご}の世代に到るも八虐げら
れV八残酷な対象物的女性Vとして終らねば
ならぬものなのか？ と想いをめぐらす私で
もあった。としたら、おぼさん自身には何の
罪もないのに、造型の神は不公平な創造をし
たものだ——と憎みたくなる。

○

私と母の同情が通じるのか、おぼさんは私
の家には、ちよいちよい愚痴をこぼしに現わ
れ、身の上ばなしに花を咲かせては帰って行
った。

そんなおぼさんに、もう一つの秘密があつ
た。身よりのない者同志と云うか——倅せ薄
き者同志のお互いの心のつながりが、そうさ
せるのか——おぼさんには義弟の長男で、少
年の頃——やくざの世界に身を投じ、日蔭の
生活が続ける八勝之助Vと称する若者が居て
酷くこのおぼさんを慕っていた。

おぼさんは、この勝之助に、余生を託して
安楽な後半生を願っているようであった。

私は勝之助が、数カ月ぶりにムショ八刑務
所Vを出て、おぼさんを訪ねた時——おぼさ
んから、初めて紹介されたのであった。

それまでは、何回も刑務所に入り、その方
が長かったので自暴自棄となり、荒れた生活

を続けていたが——四十才という不惑の年を迎えて、流石に心細く、おばさんを親代りに△かたぎ△の生活がしたかった——と云うのであった。

私は勝之助を一眼みた瞬間から、何故か親しみが持てた。やくざ特有のドスのきいた喋り方と、妙に肩を怒らし風を切って左右に動かす歩きっ振りだけが、気に喰わなかった。が——幼児のような△純真△さが拾物^{ひろいもの}であった。

幼稚すぎると云えば、やはり私の神経ではついて行けない知能程度の低さがあった。

けれど、それは、それなりにカバー出来ると思った。心根の優しい男なら、私はテコでも引摺って行こうと決心したのであった。

おばさんは私と勝之助が、仲良くなるのを眺め△嬉しくて仕様がな△と云った。勝之助には特技があった。散髪屋になっても出来る程の理容師的な手腕とか——コウモリ傘の修繕にかけては、これも天下一品で、商売になると思っていた。私は、おばさんに相談をしてみた。△彼の特技を生かした店を開かせよう△勝之助も喜んで△俺の方が年上で、旦那は若いけど、俺の兄貴になってくれ△とも云うようになった。

私と彼とは、兄弟のように親しくなっていた。当時、まだ肉体の痩せ細った俤の私に彼は△理髪をしてやる△と云って、秘蔵のバリカンとかカミソリなどで、商売人なみの腕前で、私の髪を整えてくれた。私の家の悪いコウモリなどは、部品を買って来て、すっかり使えるようにもしてくれた。

また、彼は170センチ以上もある長身の持主であった。胸巾も広い。おまけに軍隊時代に鍛えた柔道四段の腕前は、私の用心棒として出来すぎる程の有難さで、その上△空手△もうまい。何しろ、つい先頃まで、土地の親分の用心棒として、馴らしていたし喧嘩のうまさ——は抜群で、そのため△親分の身替りとしてムシヨに入って来たんだ△とうそぶく莫迦さ加減を除けば、気だての良い好壮年とでも、云ってよいほどの△美丈夫△でもあった。

だが——しかし、顔には深い△刃傷△があった。△喧嘩出入り△でうけた△向う傷△だから名譽の戦傷だ——と自惚^{うぬぼ}れていた。その傷の醜^{みにく}さが、返ってドスのきいた凄みに見えて——ふつうの男なら逃げる始末で、私は△勿体ないことをしたものだ△と彼に同情しもう△男前を傷つけるな△との注意を忘れた。

かった。

○
彼には、最大の△誇り△があった。彼の逞しい左腕に、何時も、鈍い光彩を放っている△恩賜の銀時計△であった。

彼は、この時計を生命の次に大切にしていた。

と云うのは、彼が栃木県の連隊に入営してから下士官△曹長△になったその春——優秀な天皇の兵隊として認められ特に△銀時計△を戴いたのだ——と云う。

現代の若者には、理解出来ぬことだが△天皇陛下から銀時計△を頂くと云うことは、最高の名譽と云うもので△恩賜の軍刀組△と共に、末代までの栄譽とされていたのである。

その名譽ある軍人だった彼の——輝かしい過去が、どうして、終戦後に於いて、こうも微塵にも踏み砕かれ△無頼の徒△の仲間入りさせねばならなくなって終った——と云うのであろうか？

彼は望まずして△悪の道に踏み迷い△彼を取巻く、すべての偽善者は、彼がよじのぼろとする、すべての△救いの手△から故意に断ち切って△地獄のドブ池△に投じて終ったのであった。

彼の心情を想えば、社会の醜悪さ、彼を取巻く人間どもの愚劣さに、怒りと失望を禁じ得ない。

○

有名な作家・芥川龍之介先生の、代表作に

蜘蛛の糸と云う儒教的な教訓めいた名品がある。地獄池に垂れた一本の蜘蛛の糸に縋りつき、極楽浄土に匍い上ろうとする悪人どもの物語で、その中で、盗賊の一人は自分だけが極楽へ逃れようと、他人を蹴落そうとしたばかりに、再び地獄池に落ちて終う——のだが、勝之助の場合もまた蜘蛛の糸である、まだ心の片隅に残った、消えない善なる灯を認めず——逆に寄ってたかって極楽浄土である——人間社会から永久に葬り去って終ったのである。生きたいと希い、地獄の池から一本の蜘蛛の糸に縋り登って来ようとした勝之助と云うやくざの生命の糸を合法的に断ち切り、再び社会へは復帰させなかった——のであった。

本人の努力も空しく、彼は、私との交情を最後に、その後1年たらずの、翌年3月——桜の陽春を待たずして、北海道は札幌刑務所で、病死して終ったのであった。

看守からの通知があったのだから死亡

したのに違いないのだが——彼が生命の次に大切にしていた恩賜の銀時計や遺品の一片も何物も、おぼさんの処には届けられずには居ないし、求めても不明の俣——現在に到っている。

おぼさんは、はるばる、札幌まで出向いて確かめたいと願ったが、それについての返信はなく、高価な交通費を支払ってまで北海道の刑務所へ、見届けに行こうとする、おぼさんの意図は、次第に消滅して行った。

すべては、生前の彼が、再起の情を綿々と綴ったが、きの稚拙な字形に込み出ているだけで真実の叫びも聴けず、また誰に聞き届けられる筈のものでもない。ただ空間にこだまするのは、彼の声なき声のみであった。

私の母が、彼の為に贈った法蓮華経のお経巻も珠数も、果して、いまは、誰の手に渡ったのか保管されているのか、目分らぬ俣なのであった。

知り得たのは、彼が、そのお経巻の目唱え、日夜懺悔し、出所後の倅を希い乍ら刑期を真面目に生きようと努力して居た——ことのみであった。は、きの便りの行間には、私の母の贈り物が無駄には終らぬ——ことだけ、書かれていたのだが——そ

んな遺品すらも、返されては来ないのであった。

私は、彼が刑期を終え社会に復帰したら、共に生きようと激励し続けて来ただけに、彼の面影は永遠に消えそうにもない。ただ薄倅であった彼の生涯を救い得なかった神々の無力を憤り、慨嘆せざるを得ないのみである。

○

彼の生涯は、云わば森の石松のようであった。彼のように純粋だがその純粋さを生かす才能も持たぬ余り自己陶醉に終り、最後には心ならずも墓穴を掘って行く人間の如何に多い社会であることか？ 自己を生かす能力に欠けた指数度は低い純粋な心の持主は、割に多いものだ。が……そんな人間たちの落ちて行く——地の涯はやくざの群れか動物的な暴力の集団でしかないとは——何と悲しい娑婆の仕組であることよ！

そして、その者たちを一般の人々は、無頼の徒として蔑み。対等に扱おうとしないのであった。

あれから——数えて何回、桜花の季節を迎え、多くの人々が、爛漫たる花季の宴を繰り

展げて来たことであろう？

だが、私にとり勝之助と桜樹の下での再会
は、永遠に△空手形△となって終ったのだ。

彼が、死んで此の世に無いいま——彼の所

謂△罪状△と云うか——刑事責任に問われた

過去の前科なるものに就いては語りようもな
く、果して、彼が、本当に△救い得ない悪人

であったのか？△他山の石として、述べたて
るべき△真相△も掴めぬ筈なのであった。だ

が——私は、彼のためにも△掴み得た真実△
について語ろうと思う。それが、彼に対する

△はなむけ△かも知れない、と思いたった。

○

△あさま山荘△の事件で、有名になった上越
の山々から端を発する利根川が、南へ下り、
千葉県と茨城県境を流れる頃は、水流も穏か
となり△坂東太郎△の名称にふさわしい大河
と化している。

水量も豊かで、肥沃な土地も多く——その
豊富な資源の故に人々が集まり、金が動いた

——だから、自然に、その△金△や△人△を
目当ての△やくざ者△も集まり、遊侠の群れ

が横行するようになった——と土地の者は云
う。それが△銚子△に近い辺りだ。

また——上州△群馬県△は機業地で、織物

が盛んだから、やはり△金を持った人間△が
集まったので、自然に、そんな△しろうと△
相手の△賭場△が開かれ、遊侠の群れが、よ
い△餌食△にしていたのである——と土地の
古老は語る——のだが？

物の豊かさばかりでもあるまい。長野から
新潟にかけては甲州△山梨県△も同様だが、
山林が多く、物資の生産が少ないので△貧乏
にい、やけのさした若者たち△が自棄で△や

くざ△になり、遊び暮したのであった。

働き甲斐のない風土に育った人間どもが、

肥沃な土地なるが故に金を持ち集まって来る
人間を相手に、生計をたてようとする——関

東に於ける△やくざの分布図△は、こうして
地域別に彩られてはいるけれど——私が、い

ま語ろうとする勝之助は三波春夫の唄△大利
根月夜△で有名な、利根川沿岸——茨城県の

S町で生れた。子供の頃に両親と死別した彼
は養父母の間を転々とした△流転△の生活の

末——軍隊生活に入ったのだ。昔から△食う
に職なく、住むに家なく、大志を抱いて軍隊

に入る……云々△と語られるほど、軍隊での
△再役希望者△には貧乏人が多く生家に金は

あっても次男坊とか3男坊に生れついた者が
多かったのは、軍隊に居れば三食つきで△食

いはぐれ△がなかったからなのだ——その上
古兵になれば、自然に階級も上だから新兵を
頭の先で使えるようになった——こうした下
士官の集まりが、日本の軍隊を△檻獄部屋△
化して終った要因でもあるのだが——勝之助
もまた△満期除隊△せず、再び志願して下士
官となった。

しかし彼の場合には、前述した通りの△銀
時計△組だったから、名実共に上下の将兵か
ら認められる優等生であったわけだ。

表影を受けた者——必ずしも善良とは限ら
ぬのが人間社会の常だが——とにかく彼は、
軍曹の上の曹長にまで昇進したのであった。

その上の特務曹長△准尉△で、その上が将
校となり少尉と云うのだから、下士官として
は最高位に等しく、彼のように△虐げられた
少年時代△を暮した者にとっては、まさに
△王者の生活△だったに、違いないのであっ
た。妻帯も出来た。

ところが△終戦△であった。食うに職なく
住むに家なく——軍隊を志した彼の進むべき
道は、見失われた。

戦後の実話や小説のネタになった多くが、
この△兵隊くずれ△の△やくざ△だったのを
思えば、そんな男達の乱れた生活模様——そ

の俣が△敗戦国の真姿▽でもあった——と云えよう。

彼は、私の住む町の駅前通りで△パチンコ店▽の△用心棒▽に雇われた。

その以前の彼の職場については、省略しよう——初めのうちは、真面目だった彼も△家庭私情▽その他の因果関係で、次第に△正常な職場▽を追われる身となり、すねた心も手伝って、土地の△やくざの親分▽の身内になった——のであった。

こうした組織のあり方は△旧軍隊▽と変わりなく、彼の性^{しょう}に合^あって居たのかも知れない。彼は何時の間にか△子分▽にも愛される△兄貴分▽となっていた。

パチンコ店での職務は△手を焼く酔っぱらい▽の締め出し△性の悪い客▽への示威運動とか、とにかく警察の手を労せずとも解決出来得る範囲の△防犯行為▽の遂行であった。

ところが、彼は内部の従業員が秘かに演じた犯行の現場を期せずして瞥^{べつ}見して終ったのであった。

△玉売りの若い女性▽の、売り上げ金のピンハネを目撃したのだ。彼は、直ぐさま店主に報告すればよかったのだが、女性の身を考え疵^{きず}つけないかと思ひやりから、秘かに彼

女を、店外に呼び出し△難詰▽したのであった。

女は自分の非を悟り、同時に、勝之助に傾く心を押さえ切れぬようになって行った。

次第に親密度を増した二人は、市内のK旅館で睦み合うようになった。

そんな、或日の午後。勝之助は警官の来訪を受け、その俣、署内の房に留置された。

理由は△婦女暴行ならびに致傷▽だと云った。即ち、彼は△従業員女性の犯行を知り、脅して、旅館に連れ込み、強引に女体を姦した▽と云うのであった。

被害者の訴えにより、内偵していたが、事実も分り△強姦致傷▽の現場も△盗聴▽している者あり△間違いない▽と証拠がためも十分であった。

彼は、勿論△否定▽したが、婦人科医の検診の結果△処女膜の破壊▽も認められたし、従業員の弱みにつけ込んだ△悪質な脅しだ▽として、犯罪の成立を余儀なくされた——それは関係当局の△弁明▽であった。

彼が、唯一の頼りにしていたバンクーバーのおばさんから、その逮捕された理由を聞いたのは、彼が△地検▽送りになってからの数日後であった。

私の母は△警察署▽に出掛け、担当官から事情を聞いたが、担当官は△被害者の訴えで強姦▽の事実があったし△脅して旅館へ連れ込んだ▽のも、加害者が認めた——と云うのであった。

しかし、私どもの調べでは△被害者の女性には男性関係も多かったし、処女膜云々は、大変におかしい▽また△旅館の個室へ異性と共に行く▽と云った態度には△処女性性は認められない▽し△強姦された▽とは、ますます変であった。

そこで、おばさんにも協力して、再三にわたり、事件の再調査を求めたが、いっこうに犯罪の核心に触れようとする当局の良心はなく、そうこうしているうちに△裁判▽にかけられることになって終った。

流石に△裁判所▽では△犯罪の事実▽を認めず△無罪釈放▽されたが△刑務所▽の門を出た途端に△再逮捕▽されたのであった。

当局の弁明では△強姦致傷の件に関しては裁判の結果通りだが、兇器、不法所持の罪が残っていた▽と云うのであった。

私どもの調べでは△確かに旅館に女性を連れ込んだ当日には、竹製の短刀^{トス}を懐^{ふところ}にしていた。だが法律で定められた△短刀▽とは全く

違うのであった。

ところがである。警察当局には△連名の嘆願書▽が提出されて居り△かかる危険人物を社会に解放す▽ことは、治安維持上△不本意▽である——との内容であった。

嘆願書によれば、勝之助の義父が音頭をとり△町内会の有志▽とか△関係ある知合い▽が△署名簿▽をつくり△是非とも刑務所へ送って貰いたい▽との願いであった。

かかる△野良犬▽のような男を善良な市民の住む町に放せば、町内会は勿論のこと、市民たりとも安心して生活も出来まいから、どうしても刑務所送りにしてくれ——との強い内容の文書も加えられていたのだ。

当の勝之助に云わせれば、次のようなものなのだが、真実はどうなのか？ 彼の告白を纏めてみよう。

○

彼には、妻と最愛の子供が二人もあった。

1 姫2 太郎の典型的な家族構成だった。戦中の頃は倅せで平和な庶民生活であったが、敗戦後の激変で思想も変り、生活の様式も自由化された。義父の妻△つまり勝之助の実母▽が間もなく死亡すると、義父は、若くてグラマーな勝之助の妻に想いを寄せるようになって

た。義父と勝之助との対立は激しくなった。

巧利にたけた義父は、しきりと、勝之助の妻や子供の懐柔につとめ、家族の離反策に終始した。もし、勝之助が冷静な神経の持主だったら、さしてむずかしい△家庭操縦法▽でもないのだが、生れつき粗暴で、人間的な愛情に飢え育った勝之助には△暴力▽に頼る以外に方法がとれなかったのであった。

△暴▽に対し△柔▽を持って△対応▽する愠々無礼な義父は次第に勝之助から妻子を離反させるのに成功して行った。

一度、結婚した女と云うものは、最初の裡は、世間態とか古い貞操観念に捉われ、夫以外の男の誘惑から逃れようと、情慾に燃える男の要求を酷く突き離すものだが——当の夫が、獣慾的であり、精神的な愛情のかけらも示さぬようになれば、肉体だけを求める男との交渉は次第に避けるようになるものなのであった。

しかも妻の微妙な女性心理など考慮に入れた知能指数など持ち合せぬ勝之助は、妻が交渉を嫌えば、嫌うほど暴力で性交を強要し、逃げる妻を縛ってまで目的を果さねば男の意地がたためと思ひ込むようになった。夫婦は△強姦同様▽な同衾を重ねるようになった。

そうなれば△しめた！▽もので、義父は勝之助の妻子の味方となり、夫の非常識を叱りどばし、しばしば、夫婦の接合を妨害した。あまつさえ、妻子には、勝之助に代ってこづかい銭などを与え、生活の面倒まで見るようになった。

こうして、義父の作戦は図に当り、妻は勿論——二人の子供までが、義父になつき、実の父親である勝之助など問題にせぬようになって行ったのであった。義父は、勝之助の所業を憎み、実父としての△資格なし▽と、妻子の面前で罵り、彼の△劣等感▽を助長したのであった。

纏て、彼が自暴自棄になり、土地の親分の身内になると、義父の作戦は、ますます実効を奏するわけで——以後は順調に、妻子を自由に動かす事に成功したのであった。

勝之助がパチンコ店の女子従業員をホテルに連れ込んだ事件を知った義父は、すぐさまかねて知り合いの警察官に嘆願したのだ。

少年の頃——この義父に厄介になった弱味のある、この警官は、義父の依頼を受け入れ法律的な犯罪の成立に勤めたのだ。

○

万策つきた勝之助は、土地の親分に救助を

求めた。ところがであった。彼と△盃△を交した筈の親分は、意外と血も涙もなく、彼との親子関係を断絶して終ったのであった。

勝之助は口惜しかった。△親分だけは……と信じ切った者に裏切られた△残念と悔悟の涙は汲めども溢れ——止めどもなかった——と云う。

彼は、生れて初めて、己れの錯誤に気付くのであった。やくざの世界に身を投じた、幼稚なレジスタンスの、ひとりよがりの、恐ろ

しさを知った時には、既に、第三者の力では救出する技も、残されてはいなかったのである。彼と彼を取り巻く娯婆は無関心にも、彼を葬り去ろうと企んでいたものであった。

私は、彼が口癖のように、得々と喋りまくっていた言葉を想い出した。

△親分の身代りでは、何度でも刑務所行をした、この俺だ！ いざと云う時には親分が必ず、俺の味方になってくれるさ！ それが、やくざの義理人情と云うもんだぜ！ 素人の

新発足 懸賞△告白、手記、体験△原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文趣味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

あんたには判るまいが……ねエ！△

そして私は、その言葉のたびに△否定△し続けて来たが、その意味が現実となって、重たく彼の身に押し被さって来よう……とは？

彼は、親分子分の△盃の繋り△を△金鉄の如し△と讃えて来たが、彼が逮捕されるや、自分の身の危険を恐れて△差入れ△どころか△叩けば出る埃△を案じて、知らぬ顔の石仏と化して終ったのである。

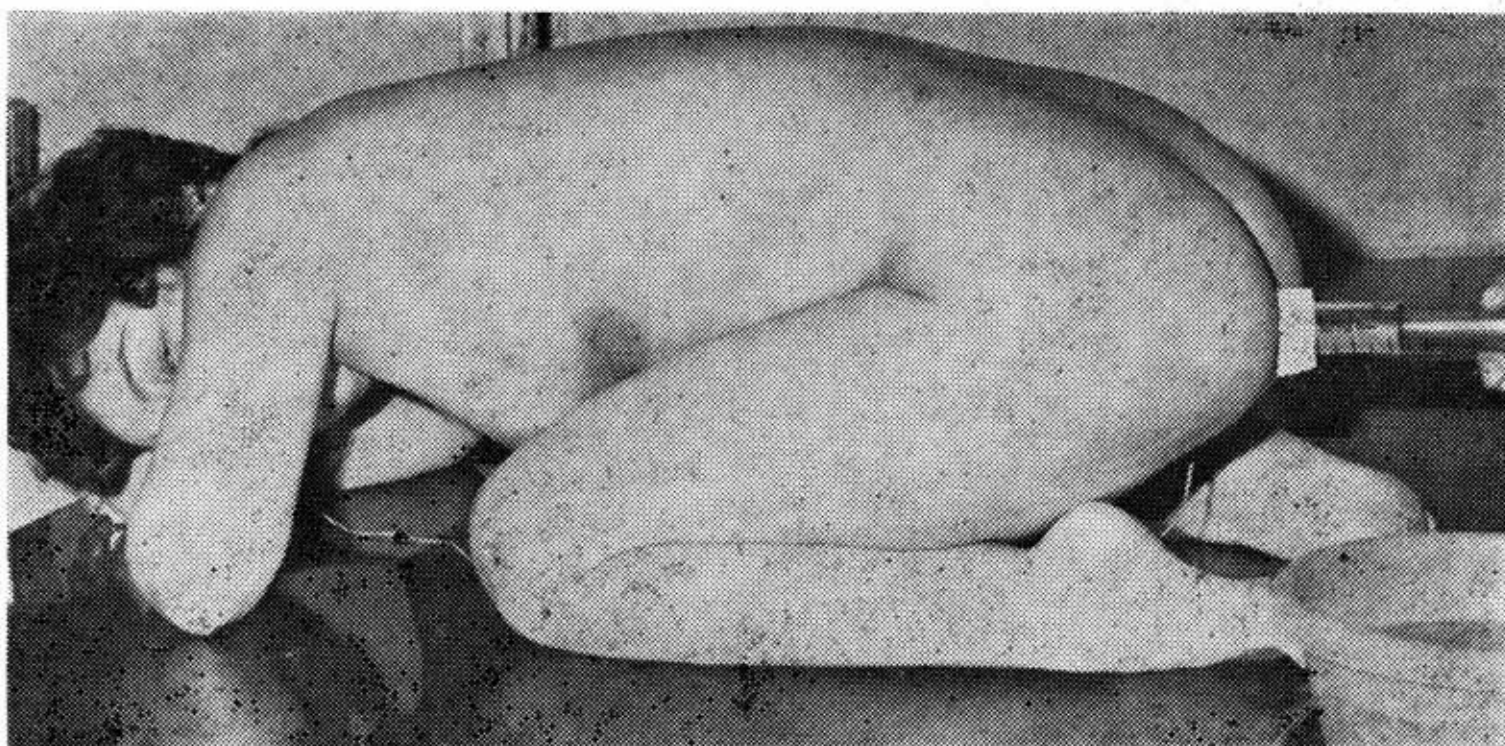
そんな塩梅とは露知らぬ、信じ切っている勝之助の心情が哀れで、私は△その始末△に就いては、いっさい△面会日△には、口に出さなかったが——覚悟し切って、己の非を知り始めていた、彼は冷静そのものであった。

殺伐だった彼の顔相には、会うたびに仏のような△慈相△が現われ始め、今度△出所△したら、一切の前科を忘れ——まともに生きたいと思う希求の善意が滲み出ていた。

その彼も、刑期半ばで、北国の凍つくような酷寒の札幌刑務所で、迎春花も、万葉桜花も見ずして△死んだ△と云う。

どうしても、彼を刑務所へ送り込もうとする人々と、法律の番人どもの謀略は、見事に一つのやくざの良心の蕾を、無惨にも、もぎ奪って終ったのである。

(終)



〔告白〕

「浣腸責め」 の味を知った私

早坂郁子

四月の末から五月にかけての、あわただしいゴールデンウィークが終って、青葉若葉の陽に映える新緑の今日この頃、編集部の方々はじめ、SM同好家の皆さまには、お元気にて、お過しのことと存じ上げます。

光陰矢の如し——と申しますが、本当に月日のたつのは早いものです。主人が始めて、△奇クサロンVに、あの恥かしい告白と、私のあられもない写真を発表いたしましたから早や、二度目の春が過ぎようといたしております。その間、幾度となく編集部に加筆訂正

を、お願い申し上げ、掲載して頂きました私の共の告白に、多くのSM同好家の皆さまから頂いた御親切なお言葉には、心から厚く御礼申し上げます。

結婚以来、主人の思い通りに飼育され、その激しい責めが苦しい程、よりマゾの欲びを強く味わい、悦虐のルツボの中で燃え上るようになった私を、しきりに他の男の方を混じえ、セックスにまでつながるプレイを主人から要求されるようになりました。そんな主人の言葉を度重ねて聞いておりま

すと、ふと、「主人以外の男の方から、こんなに責められ、主人の見ている前で羞かしめられたら、どんなだろうか」などと、とんでもない事を思い浮かべるのです。

そうしますと、身も心も、マゾ願望の女として育てられた私の身体の奥底から、えもいえぬ陶酔感が湧き出るように私を包み、その脳裡に描かれる未知の世界を想像しつつ、しびれるような悦楽の淵に沈んでゆく自分を知るようになったのでございます。

去年の十一月号に、『プレイ旅行の記録』と題して投稿させて頂きました、つたない私の告白にもございましたように、旅行中、何度何度も、私を責めながら、他の男の方とプレイをするようにと主人は促すのでした。「あなた以外の男の方に責めて頂きます。私は外の方に苛めて欲しいんです」

気の遠くなるような悦虚に陶酔しきった、うつろな頭の中から答えた言葉が、こうまで早く、現実のものになろうなどは、思いもよりませんでした。

あの体験は、私共夫婦にとりまして、これまでにない刺激的であったことは申すまでもありません。また、マゾ女として育てられた私にとりまして、かぎりない幸福を感じさ

せて頂きました。と同時に、私の新しい刺激に対する欲望は、これまでも増して、熱く燃えひろがり、よりM的女性に成長したく思っております。

主人に、一層の飼育をお願い申し上げ、きびしい調教を受けております。

主人から飼育を受け始めた頃は、気も動転するほどの羞恥責めのプレイの連続で、主人も私も大いに興奮したものです。

それが、それ以降の永い結婚生活を通して次第にエスカレートするSMプレイに、ローソク、クリップ、投げ針、流腸という風に、色々な道具を使うようになってからは、さしもの羞恥責めも、私達の間では完全にマンネリ化してしまいました。

初め、あれほど燃えに燃えた羞恥責めが、不思議なくらい興奮度も薄らいでまいりました。このことは、主人にとりましても、同様だったろうと思われます。

しかし、今回始めて、主人以外の男性の方の手によって全裸にされ、きびしく縛られま



した。そして、身体の奥深くまで、むき出しにされた、あのたまらない恥かしさにも拘らず、かなしいマゾの性^{さが}とでも申しましょうかこのあからさまな姿を、もっと見られたい、そして思いきり、なぶられたいという欲望が

脳裡に渦巻いてきました。

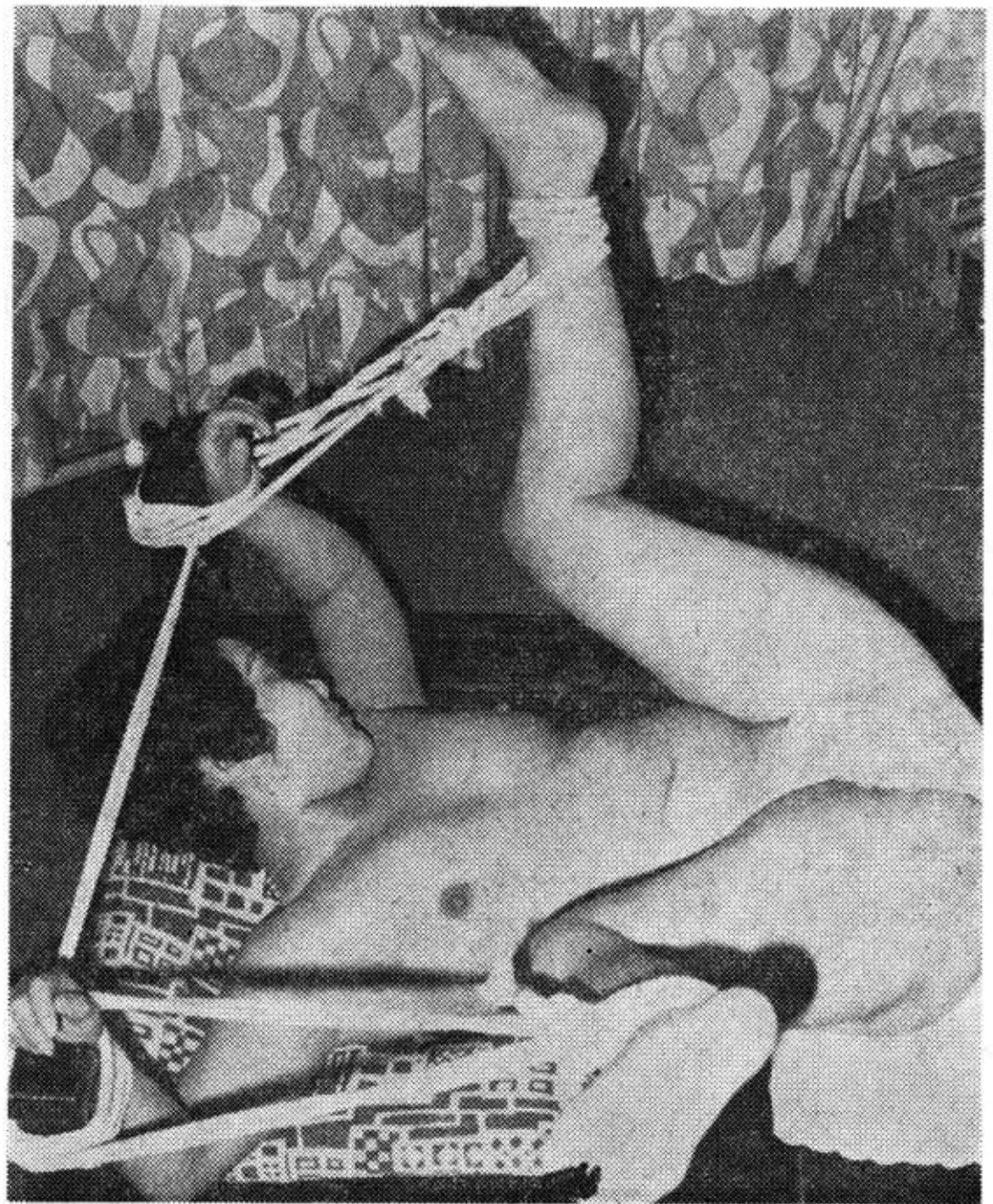
さして、苦しくもない責めなのに、それが快い疼きに変り、永らく忘れていた羞恥責め快感を催し、あの痒いような欲びを味わせて頂くことができました。

また、浣腸プレイも、特に私の好きなプレイの、一つです。

あの、お腹の中を、えぐり取るような便意に苦しみ悶えるときは、パイプや指の弄戯によって、やさしくいたわるように、愛撫責めにされます。また、あるときは、お尻に投げ針を打ち込まれ、急速に悦虐の欲びへと追い上げられる苦しみは、まさに、マゾ女の性のぎりぎりの限界としか、言い現わしうがありません。

主人から浣腸プレイの飼育を受け始めた頃の私は、とても我慢ができず、興奮よりも、むしろ苦痛を感じておりました。

それよりも蠟涙を垂らされたり、投げ針で



軽くつつかれる方が、ずっと刺戟がありましたし、また、それにパイプでも加えて頂ければ、尚さら、激しい興奮を覚えることができました。

でも、主人としては、やはり私を自分の好み通りのマゾ女に仕立てたかったのでございましょう。蠟涙責めや、投げ針責めと、あら

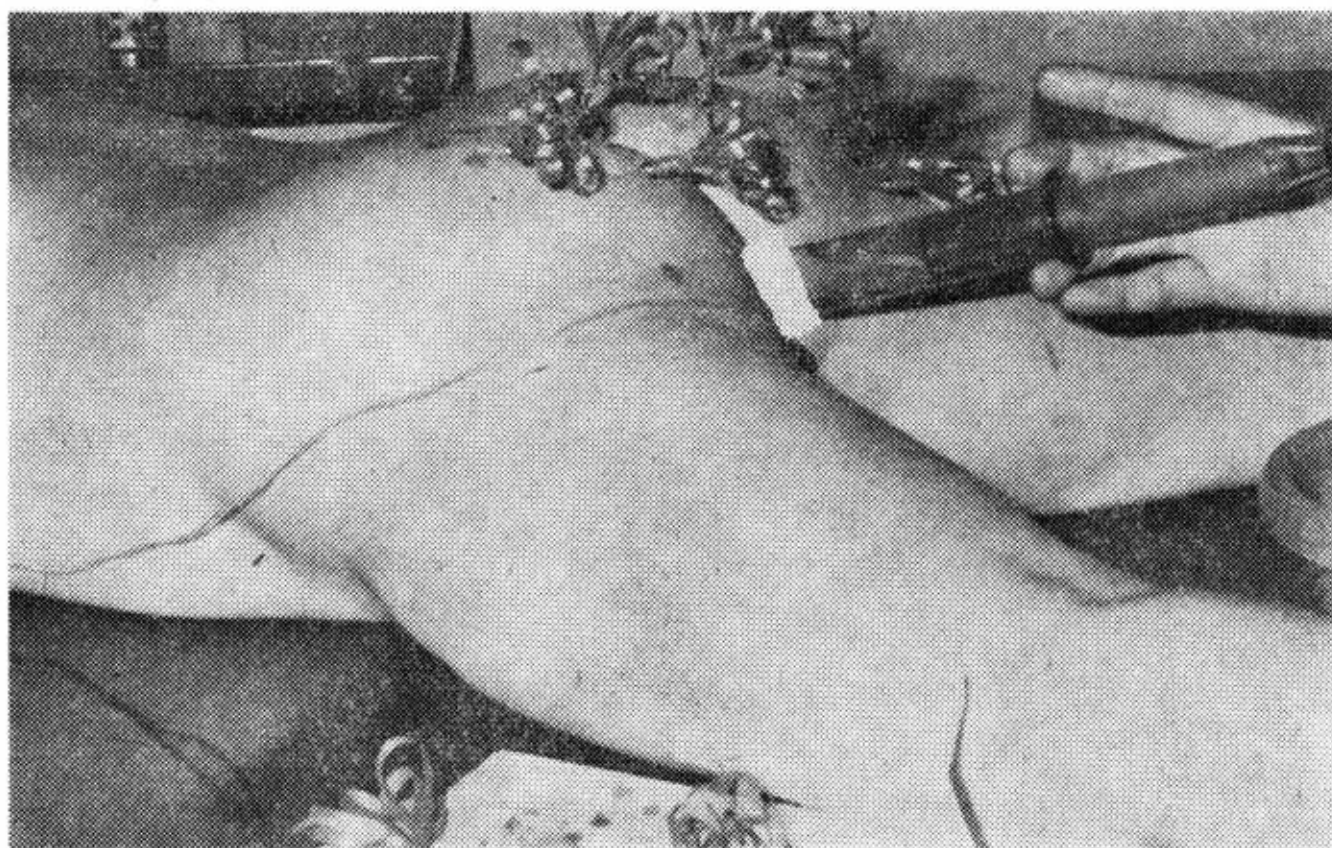
ゆる責めに併用して、徐々に浣腸に慣らされていった私はいつしか浣腸プレイが、私のマゾ性を満足させてくれるにふさわしいプレイであることを知りました。

今度の体験でも、とりわけ浣腸プレイは、このマゾ女の欲深い願望を満足させるに充分でございました。

ただ、浣腸を受けるには、やはり自然で、一番受けよい型かも知れませんが、顔と両膝で身体を支えて、両足を大きくひらいて、お尻を高く持ち上げる姿勢は、あまりいい格好とは申せません。

それが、まして、他人様の前で、このポーズを作る恥かしさは、格別のものがございます。しかし、マゾ願望の私にとりましては、それなりに、羞恥責めにも似た欲びが求められるのでございます。

浣腸液の注入が始めますと、ひととき激しい陶酔感が私を襲います。一回、二回と注入の回数を数えているうちは、まだいいの



ですが、千CC近くも注入されますと、グルグルという腹の中の音と共に、注入液が腸壁にしみわたり、その苦しみに、お尻を左右上

下に、つい動かしてしまいます。

「バイブを使って、お願い」

「針を打って頂戴」

つきあげてくる便意を、こらえながら、バイブや投げ針をせがみ、その快感に我を忘れて全身、泡立つような悦虐の中で、浣腸責めのとても苦しい、そして、バイブの楽しい一刻を求め続けるのでございました。

やっとのことで許されて、急いでトイレへ駆け込み、排便するときのその心地よさは、あの悦虐に悶えた浣腸プレイとは、また違った、すがすがしい快感を覚えるのでした。

しかし、ときには、意地悪い主人の命令で風呂場のタイルの上や、おマルの中で、恥かしい用を、たさねばならないときもありますが、マゾ女の私には、その意地の悪い主人の命令にも、△愛されているんだ△という自覚に、妻としての幸福感に、身体中で浸るのございました。

これまでに奇ク誌上に登場されました浣腸マニアの方達のように、そう多くの経験は、まだ持ち合わせていませんが、これから、大

いに浣腸プレイを楽しんで、その良さを味わいたいと思っております。

なんと申しましてマゾ女の私としましては、浣腸されるとき、あの身の置きどころのないような恥かしいポーズ、それに自分の体内に冷たい浣腸液が注入されるということに、耐えがたい愉悦を覚えます。その上、大好きなのは、ローソク責め、バイブ、投げ針などの責めです。

若し、浣腸マニアの方達の中で、郁子に、こんなプレイをさせてみたいと、お願いの方がいらっしゃいましたら、どうぞ、この郁子に責めのアイデアをお与え下さいませ。そして、一日も早く、ベテランの方達のお仲間に加えて頂きたいと思っております。

責めのアイデアを与えて下さいました方々に、郁子のこの全裸の女体を捧げて、思いのままに責めて頂きたいと考えます。どうぞ、よろしく、お願い申し上げます。

郁子は今、冷たい浣腸液が体内に勢いよく注入される時の快感と、あの耐えがたい便意をこらえる苦痛と、排便する時の心地よさを知ってしまいました。「浣腸」こそは、今までの郁子のマゾを根底から変えてしまうのではないかと考えております。

(終)

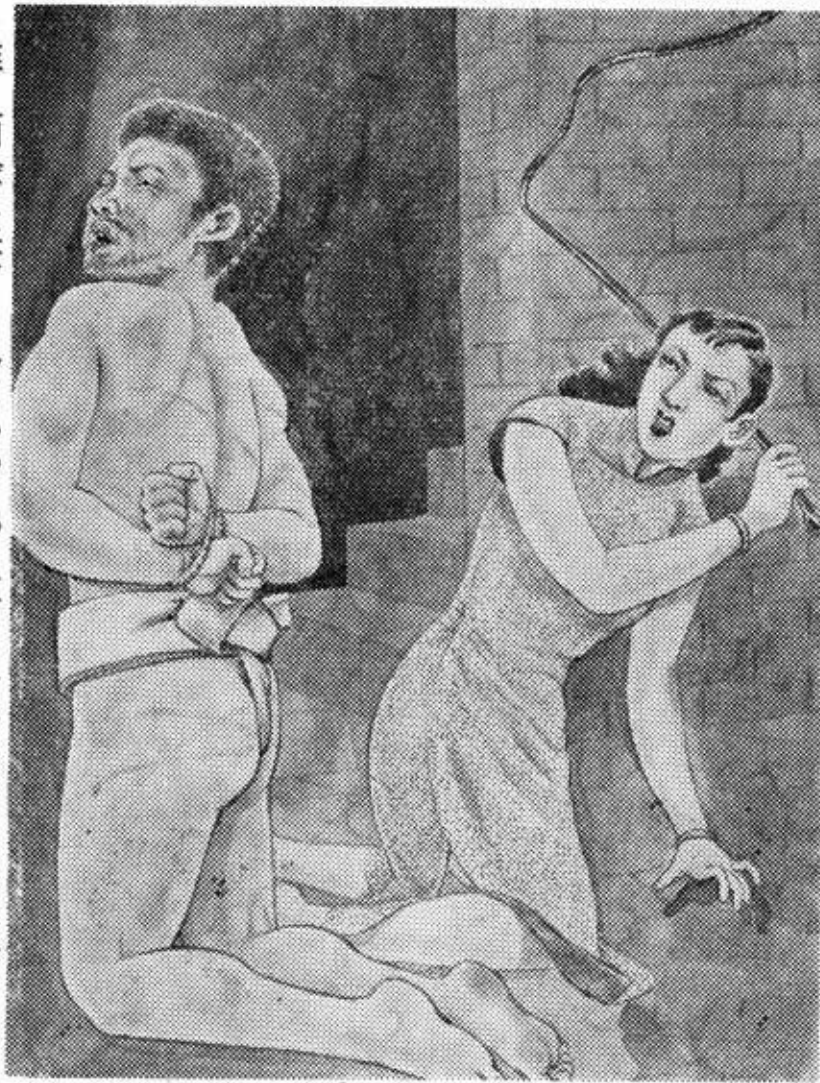
連載 M グループ [空想創作集団] 作品

女の虜囚

(6)

△ある湯治客の話より▽

佐 治 麻 造



誰も面会に来てくれなかった。早苗の力では面会はおろか、文通の許可をとる事も出来ないのだろうし、許可を取ろうとすれば取れ

なくて喚くと、嵌口具を嵌められた。壁を叩いて叫ぶと、容赦なく囚衣を剥がれて鞭の雨を受けた。狭い房内を転げ回って呻き悶えた

る嫂からも、何の音沙汰もない。囚われの身の謙二には知る由もなかったが、嫂は既に良人の許へと海外に旅立っていたのだ。もう打ち合わせる事もないという訳なのか、法理士からも何の連絡すらなく、謙二は心細さに胸を痛めながら、未決囚の日夜を過さねばならないのだった。堪まらなく

時、ぎしぎしと締め上げられた革の窄衣の苦しきは、骨身にこたえた。如何に泣こうが哀訴しようが、看守達は冷酷そのものだった。

或夜、深々と更ける監房の中で、彼は早苗の面影を臉に浮べながら独り自ら慰んだ。許可がなく、そんなことをするのは重大な反則であるのは知っていたが、堪え切れなかったのだった。恥かしさを忍んで哀願しても精々十日に一度しか許されないし、それも監視を受けながらの、みじめさなのだ。

彼は意地悪い婦人看守に忽ち発見された。

「お舐め！」

婦人看守は、おののく彼を汚らわしそげに見下ろして命じた。囚衣を除った彼は、両手

で両膝を抱えさせられ、膝のうしろで手錠を掛けられた。

「おいで！」

尻を蹴り飛ばされた彼は、他愛なく倒れて痛さに呻く。

「さっさと立つんだよ。ほんとに汚らしいったら！ 未決囚にも錠を嵌めとかなきゃ駄目ね」

無慈悲な足蹴を受けながら彼は、ぶざまな恰好で追い立てられた。両腕は前にも後へも抜く事が出来ないで、膝を曲げ深々と前に折って、両腕に抱かれた膝をヨチヨチと動かして歩くのだ。手錠の鎖が、もう僅か長ければ、後ろへ抜けるのだが、どんなにもがいても尻が、つかえる。懲罰の恐ろしさにおののく彼は、途切れ途切れに無駄とは知りつつも赦しを哀願した。

婦人看守のスカートが揺れて足が挙がって何度となく蹴り飛ばされ、そのたびに倒れて呻く彼は、懸命に身をもがいて、やっとの思いで立ち上がる。途端に又も蹴り倒される口惜しさに、彼は喘いだ。同僚が持って来た鞭を受け取った婦人看守は、ヒュウと空に鳴らして、バシッと床を叩き、哀れな囚人は無抵抗の全身の素肌を曝す恐怖に息を詰めて、わ

なないた。

シャワー室の更に奥に追い込まれた彼は、しばらく待たされた。上体を深く倒し膝を曲げ、おののく目で床を見詰める彼に、スイッチやバルブを操作して行き来する婦人看守のスカートの端や靴が見えた。もがきにもがいた両手首は、手錠に痛められて、ずきずき疼く。

「もういいようね。この中に入るんだよ。少しばかり冷やしてやるわ」

目を挙げて前方を見ると、床に掘られた一米四方の穴に水が湛えられていた。

「入れといたら入るんだよ」

殆ど水平になっている背に、鞭が長々と炸烈した。

「ヒーッ」

穴の縁によるめき寄って立ちすくむ彼の尻を非情な靴が蹴り、彼は喚き声と共に水中に落ちた。

「ヒー！」

もがいてようやく顔を水面に出した彼は、笛のような悲鳴を洩らして唇をふるわせた。

辛うじて鼻が出る位に湛えられた水は、凍結寸前まで冷却された冷水なのだった。

「どう？ 気分は。未だ少ないわね。もう少し

入れようか」

氷のような冷水が流れ入って、彼は穴の底に尻をつけた姿勢を必死にもがく、まりのようにされた体の不自由さを呪いながら、ようやく膝立ちになって頭をうしろへ、のけぞらせた。そうしないと鼻に冷水が入るのだ。水かさは無情に、なおも増して、彼は膝を浮かせて爪先立ち、両膝を強く揃えて少しでも上体を伸ばそうとした。首も必死の努力で伸ばせるだけ伸ばし、懸命に顎を突き出す。

「こんなものね。お上のお慈悲よ。少し情熱をおさましょ。ホホホ」

冷水を止めた婦人看守はハンカチで手を拭きながら笑った。漬けられてから二、三分しか経っていないが、既に冷たさは全身の骨の髄に沁み通った。歯が自然にガチガチ鳴り出し、指先から感覚が失われて行く。

「お、おゆるし下さいまし。い、いつまで漬けられて……」

哀願の言葉も声にならない位だった。婦人看守は嘲笑を残して立ち去り、電灯が消された。漆黒の闇の中で氷水に漬けられた彼は、恐怖に胸を締めつけられた。穴のふちは眼前にあるのだが、如何にしても這い上る事は出来ない。凍った足は、もがくたびに無感覚に

滑って、彼は何度も冷水を呑んでむせた。久し振りの真水を、自由に飲めるのではあったが、今の彼には、そんなことよりも寒冷地獄の辛さが身を切るようだった。水が少しでも温まると冷却器が動いて、水温を容赦なく引き下げる。肌に突き刺す冷たさも次第に感じなくなつて、彼は暗闇の中で半ば失神しかけた。不意に電灯の光が臉に感じられ、現われた二人の婦人看守が、肩や腕を掴んで乱暴に水槽から引っ張り上げた。穴の縁に当たつてされる痛さも殆ど感じられない。床に丸くなつて倒れた彼の頭を婦人看守の靴が蹴った。微温湯のシャワーが体に注がれ初め、やがて感覚を取り戻した彼は床の中を、もがいた。革の首環が水を吸って苦しい。

「どうやら生き返つたようね。少しは鎮まつたの？ 何なら何度でも、ほうり込んでやるわよ。どう？」

彼は震え上つて、赦しを乞うてもがいた。

「ちゃんとした恰好で、お言い」

死物狂いでもがいた彼は、背骨が折れる程の思いをして、ようやく両腕の間から片足を抜くことが出来た。もう一方の足も抜いた彼は、喘ぎながら正座した。

「やっと分つたようね。フッフ」

婦人看守の靴底が彼の頭を踏みつけ、額を床に押しつけた。

「規則に反して不潔なことを致しました。申し訳ございません。お、お赦し下さいまし」

「今度やると承知しないよ。錠を掛けてしまふからね」

「ハ、ハイ。もう決して……」

「そう。じゃ少しばかり鞭をやつて、赦して上げるわ」

思わず恐怖のまなざしで見上げたが、無駄だった。背と尻と腿に革鞭の雨が加えられ、濡れた素肌を鞭打たれる痛さに彼は全身をよじり、もだえて喚いた。

「さあ、房に帰るんだよ」

蹴り飛ばされた彼は、這うようにしてヒール悲鳴を洩らしつつ、独房へ辿り着いて蹴り込まれた。鉄格子が閉まる。

「手錠、外して要らないのかい？」

あわてた彼は、膝でいざって鉄格子の間から両手を差し出した。

「あ、あの首環が、とても苦しくて……」

「フン、その中に乾いたら元通りになるわ。」

さ、磨いておおき」

外された手錠が滴を垂らして、彼の膝の上にカチャンと音を立てて投げ込まれ、厚い鉄

扉が閉じられてしまった。濡れた体を、まるめた囚衣で拭いた彼は、未だ齒をガチガチいわせながら丹念に手錠を拭い磨きつつ、声を忍んで泣いた。

冷え切った体は、囚衣をまともにも中々温まらない。じわじわ締まる首環の苦しさに、彼は思わず指をそれに掛けて喘いだ。首のうしろ側の尾錠部分を包んで掩う金具と、その鍵穴が指先に冷たく触れた。更に強く締まつて来たらと考えると、もうこれ以上は緊まらないだろうとは思ひながらも、恐怖に身があのいた。つけ放しの電灯の淡い光に照されて手足を締め体をまるくして片隅の床に伏して呻く彼は、コンクリートの硬さ冷たさを、そんなにも骨身にこたえて感じたのは初めてだった。

いつしか眠つた彼は、鳴り渡る起床のベルを鉄扉越しに聞いた。体が熱つぽく節々が激しく疼き、鞭痕が堪まらなく痛い。もう少し横になつていたかったが、許される事ではなかった。

鉄扉が次々と開かれ朝の点検が始まった。鉄格子の内側に膝をくっつけて正座した彼は上体をふらつかせて囚人番号を叫んだ。

「手錠、磨いといいたかい？」

彼を昨夜半、氷水漬けにした婦人看守が、きびしい視線を注いで言った。

「ハイ、磨かせて戴きました」

差し出した手錠を受け取った彼女は、環をギリギリ鳴らして二、三度、回転させて調べカチャンと合わせて腰の革サックに納め、スカートを蹴し、靴を響かせて次の監房へ移った。房内の掃除は、ともえなかったが、勿論、休む訳には行かない。喘ぎ喘ぎ這いずり回った彼は、意地悪く検査する婦人看守に叱りつけられた。畳んで床においた私服類の整頓が少し乱れていたのだ。

「鉄棒の磨き方も足りないよ。便器の縁も濡れてるじゃないか」

痛めつけられた体に鞭打って再び床を這い回わり、そして、しがみつこうようにして鉄格子を磨き直す彼は、しみじみと囚われの身の悲哀を味わうのだった。いつもは待ち兼ねる囚人食も、その日は半分以上、残してしまった。正座しているのも苦しくて堪まらなくなつて口を開けて喘いでいると突然、鉄扉が開いた。

「四十五号。出なさい」

手錠を持って立っているのは、小柄な慈悲深い婦人看守だった。どこへ連れて行かれる

のか知らないが、腰縄を打たれながら彼は地獄で仏に会ったような心地がした。よろめいては時々膝をつく彼の腕を掴んで、彼女は憫れみを示して扶け起してくる。連れて行かれたのは医務室だった。勿論、職員用の表口からではなく、囚人用の裏口からである。殺風景な室の中には、方々破れたマットだけが載せてある、壊れかかった鉄の寝台が二つばかり、隅の方には空の薬品箱や何かが雑然と積み上げてあった。仕切りの壁のガラス窓越しに、薬品棚や医療器械の整然とした治療室が見え、若い婦人職員が白い腕をまくって青年医師の注射を受けながら、如何にも面白そうに笑い合っている。もう一人の医師か薬剤師かが新聞をひろげているデスクの上の茶碗のコーヒーから、立ち昇る湯気を窓越しに見て、彼は思わず咽喉を鳴らした。婦人看守が縄尻を握ったまま仕切り扉を開き、少し体を治療室の中に入れて、

「先刻、お電話したのを連れて来ましたわ。お願いします」

開いた扉から華やかに談笑する男女の声やコーヒーを吸る音等が流れて来て彼は堪まらなくみじめな思いに駆られて、うなだれて涙ぐんだ。

「えらかったら、坐ってもいいのよ」

婦人看守は腰縄を曳いて彼を扉から少し遠ざけながら言った。かなり待たされてから若い看護婦がスリッパを、ばたばた言わせて出て来た。

「これね？」

と顎を、しゃくって顔をしかめる。

「ええ、これ、部長さんの受療許可書よ」

看護婦は許可書を見ようとししないで右手の注射器を少し挙げて液体をシュッと押し出して、

「お尻に射つよ」

婦人看守が手早く腰縄を解き手錠を片方だけ外してくれる。囚衣の股引きを押し下げた彼は床に四つ這い、看護婦は面倒臭そうに針を突き刺した。

「あの、ついでに鞭痕にも薬、塗ってやって下さらないかしら？」

「面倒くさいわねえ。アイロン掛け、溜っているのよ。明日、持ってくるから、器用な女囚を役に出してくれる？」

「ええ、いいわ」

鞭痕に塗られた薬液は、灼けるように沁みて痛かった。

「さ、終りよ」

看護婦のスリッパに腰を蹴られ、彼はもぞもぞと囚衣を繕^{つくろ}った。

「S座のロードショー見た？」

煙草に火をつけながら看護婦が言った。

「ウ、ウン、未だよ。評判いいわね」

外してぶら下ったままの手錠の片方を引き寄せて彼の手首に再び嵌めながら、婦人看守が答える。

「あら、気がつかなかったわ。手首が、ひどく痛んでるじゃないの。薬つけてやってよ」
「どうせ同じ事よ。早いこと、枷^{かぎ}だこが出来た方が本人のためだわ」

紫煙を囚人の顔に吹きつけながら看護婦が言い捨てた。

「けど、どうして氷水に漬けられたの？」

「あの、不潔なことをしたのよ。無理ないと思うけど、嫌ねえ」

婦人看守は手際よく腰縄を打ち、彼は恥かしさに顔を赤らめた。

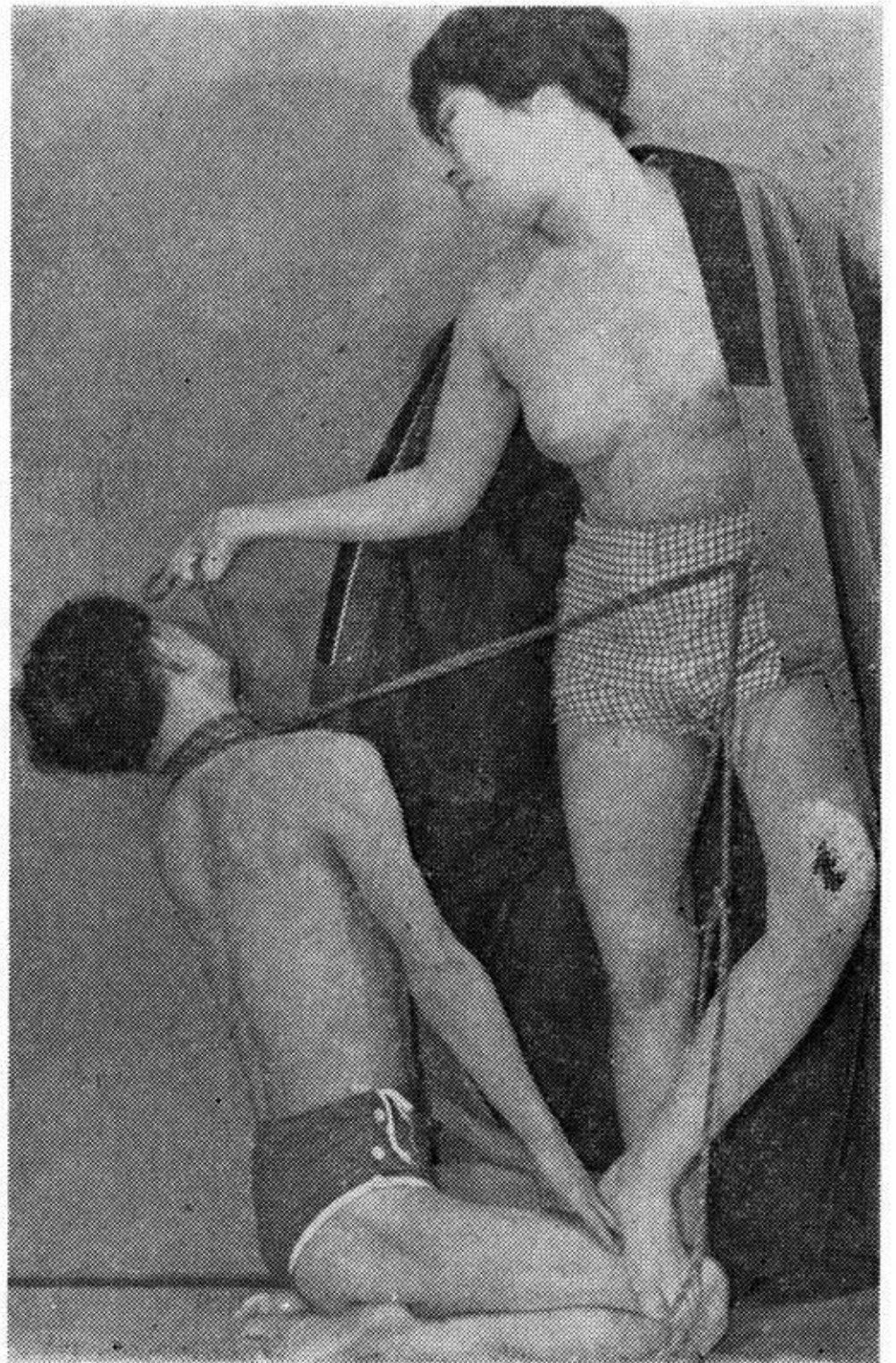
「さ、お礼を言わなきゃ駄目じゃないの」

「手を合わせて言うのよ」

看護婦は腕組みして傲然と言った。

「あ、ありがとうございます」

腰縄で抑えられた手錠の両手を腹の所で合掌して深々と頭を垂れた彼は、胸が熱くなる



思いで途切れ途切れに咬いて歯ぎしりした。

「おいで」

腰縄がグイと曳かれた。

「男は未決囚でも錠を掛けときゃいいのに」と看護婦が背後から言う。

「可哀想なこと言うのねえ。とても辛いものらしいわよ」

「近頃のきつい奥さん方は、旦那様に使ってやるって話よ」

「あら、それは戒具類不正使用よ。禁じられてるわ」

治療室への扉に手を掛けた看護婦と、縄尻を握って裏出口に立ち止った婦人看守とは、互いに振り向いて話し合った。

毎日のシャワーは、男囚と女囚とは区分されて数名宛、曳き出されて浴びるのだった。シャワー室に曳き出される時には手錠を嵌

められないのが嬉しかった。囚衣を全部、房内に脱いだ謙二は、同じような男囚達五名と一緒に一列に並び、両手を後ろに組んで、鞭を持つ二人の婦人看守に監視されて今日も、ぞろぞろとシャワー室へ入った。首環が外される。シャワーといっても唯、穴のあいた鉄パイプが一本、頭上に走っているだけの話である。パイプの真下に並んだ、いずれも屈強な体つきの六名の男囚達の頭上から、やがて冷水が注がれ、男囚達は素手で体中を撫でこする。

正面から婦人看守達に鋭く監視され、男囚達は少し開いて立った足の位置を動かす事は許されないのだ。

「畜生！ 人間扱いじゃがらねえのか」

謙二の隣の男が首の周りを激しくこすりながら忌々しげに呟き、顔を撫でるふりをしてゴクリと水を飲み込んだ。二、三日、収監された若い男だ。

「五十八号！ 前に出て」

婦人看守の声が鋭く飛び、鞭が床に激しく鳴った。男囚達は一様にビクリとして体を硬張らせる。

「自分の番号を忘れたの？ お前だよ」
五十八号は、ふてくされたような態度で、

二、三步、前に出た。水が止められ、他の男囚達は両手を後ろに組んで、濡れたまま立ちすくむ。

「五十八号。お前、今反則しただろ？ 言っでごらん」

近寄った婦人看守が睨みつけ、きびしく言った。五十八号は黙って口を、とがらせる。「その態度は一体、何なの？ 手を後ろに組み！」

五十八号の両手が口惜しそうに後ろへ回った。指先から滴が垂れ、刈られていない髪はべったりと濡れて、額やこめかみに、まつわっている。

「口を利いた上に水を呑んだね。誤魔化そうたって駄目よ。尻を挙げて四つ這いな」

五十八号はビクリと震えて、

「む、鞭を……」

「そうよ。当り前じゃないの。早くおし」

婦人看守を睨むようにした五十八号は、きびしい視線に射すくめられて目を伏せ、唇を歪めながら、さも口惜しげに膝を床に落し、両手を床について四つ這った。尻や腿の鞭痕が未だ新しい。斜め後ろに立った婦人看守の鞭が床を激しく叩き、五十八号は四つ這いの体を、わななかせた。

「ちきしょう！」

頭を振って五十八号が低く呟いた。

「何だって！」

濡れたままの五十八号の背に、鞭がしなつて飛んだ。囚人は、歯を喰い縛って苦痛をこらえる。背にもう一撃、そして今度は尻から腿にかけて、赤いみみず脹れが、見る見る走る。意地悪い婦人看守は鞭と鞭の間に、かなりの合間をおき、又、更に時々床を叩く。鞭の痛さもさることながら、それを待つ恐怖に囚人は全身を波打たせ、耐え切れなくなってしまう。床を微かに、にじり這って喘いだ。必死の思いで悲鳴をこらえていた五十八号も、脇腹に鞭を喰って、遂に悲痛な喚き声を挙げた。

濡れた全身に更に脂汗が浮んで光った。

「フフフ。とうとうネを挙げたわね。しぶとい奴」

婦人看守達が顔を見合せて嘲り笑った。

「ほんのちょっと、口を利いただけじゃないか。それを、こんなひどいことするなんて。ムッ、ヒー！ 俺は悪いことなんかしてないんだ。あんまりじゃないか。も少し、人間らしく扱ってくれたって……」

夢中になって喚いた五十八号は、床にしが

みついてオイオイと泣き出した。

「未だ、あんなこと言ってるわ」

「お前の方に、身に覚えがあるうがなからうが、そんなことは知っちゃいないことよ。それは裁判所が決めることだわ。反則した囚人を懲戒するのは私達の職務なんだからね、悪く思わないでよ。フフフ」

「泣いてばかりいたって、仕様ないじゃないの。未だ鞭が欲しいのかい？」

矢庭にふくらぎからひかがみのあたりに鞭が鳴り、一きわ高い悲鳴と共に五十八号は床を転げ回わり、手足を縮めて絶え絶えに呻いた。二、三步、そのあとを追った婦人看守が床の五十八号囚を見下ろして冷やかに鞭を更に振り上げる。恐怖のまなこで仰いだ五十八号は、訳の分らぬ喚き声を洩らしながら跳ね起きて、婦人看守の足許に、ひれ伏した。

「お、お赦し下さいまし悪うございました。」

もう決して、あんなことは……」

「フン、口先だけじゃ駄目よ」

「ハ、ハイ。よく、よく分りました。ハイ」

「顔を挙げてごらんよ。フン、まだ口惜しそうな顔付きしてるわね。いいかい、お前がいくら喚いたって、ここに居る以上は囚人なんだからね。私達に逆らったら、痛い目に遭う

だけよ」

「ハ、ハイ」

「今はこれで赦したげるけど、今度は、こんなことじゃ済まないことよ」

「ハイ」

「列に、お戻り」

五十八号囚は、よろよろと立ち上り、ハッと氣付いて両手を後ろに組んで、鞭痕に残る痛みにヒューヒューいいながら、シャワーの下で男囚達の列に戻り、そして一声、大きく吸り上げた。

「お前達みんな、今日は体を拭かせないよ。もっとも、もう乾いたろうけどね」

古い囚衣を切って作られた雑巾のようなもので、いつもは体を拭かせて貰えるのだが、五十八号の反則のため、今日は許して貰えないのだ。婦人看守の手が鳴り、六名の男囚達はシャワーの下から、ぞろぞろと離れ、先刻外された、それぞれの首環の前に列を作って正座した。

二人の婦人看守が片端から首環を嵌めて行く。革の輪が切なく首の周りにあてがわれ、尾錠が締められ、その尾錠部分を包むステンレスの掩蓋がカチリと鳴って閉じられた。婦人看守の手が又鳴って、立ち上った男囚達は

列を作り、うなだれて独房へ帰って行く。鉄格子が閉まり鉄扉が非情な音を立て、四十五号囚の謙二は後ろ手に組んだ両手を、ようやく解いて、生乾きの体に先ず囚衣の褌を締めながら、溜息を洩らすのだった。

数日後の朝、彼は出廷を言い渡された。

「着たければ私服を着ていい。三十分後に曳き出すからな。掃除はしなくていいぜ」

久し振りに着替えた私服の下着は、陽に当たらないので、じめじめと氣持悪かったが、ズボンをはき上衣を着ると嬉しかった。しかし裁きの庭を思うと心が重い。鍵の音がして鉄扉がギーと開き、小柄な婦人看守が鉄格子の外に立った。制服制帽を一きわキツチリとつけて、踵の低い黒靴が磨き立てられて光っていた。鉄棒の間から差し出す彼の両手のワイシャツの袖口を押し上げるようにして、彼女は手錠を念入りに嵌めた。

「拘置所の外で反則したら、懲罰は特別に、きついよ。分った？ 草履をお穿き」

「ハイ」

監視台の下の広い中央通路に集められた囚人達は男女合わせて十二、三名だった。検事の調べを受けに行く者と、出廷する者とは分けられ、出廷する連中は首環が外された。通

路の床に一米程おきに錠金具をつけた三米余りの太い鎖が長々とおいてある。検事局へ行く連中はロープを手錠に通されて芋繋ぎにされて曳かれて行った。

出廷するのは謙二を入れて男女各二名で、床の鎖の横に一行に立たされる。命じられるままに身を屈め、手錠を鎖の錠金具に近付けて待っていると、担当看守が順々に手錠の鎖と錠金具を連結して行った。女囚達が前で謙二は三番目だ。身を起すと鎖が重々しく音を立て手錠が手首に喰い込む。謙二の前の和服の女囚が顔を両手の方へ持って行って嗚咽した。

地下を通過して裁判所へ抜ける、薄暗い通路は階段の手前の鉄格子の所で第二種未決監の区画からの通路が口を開いている。二人の婦人看守に前後を護られて四名の囚人が鉄格子の手前三十米程の所に来た時、第二種未決監区画の通路から、一名の囚人が足をもつらせながら、よちよち歩いて現われた。頭は丸坊主にされているが、胸のふくらみで女囚と分かる。黒革の腰枷兼用の褌だけを、きつく締め込まれた、その女囚は、見るからに重そうな鉄枷を両足首にガッキと嵌められ、船の錨に使えるような鎖の環、三つばかりで繋ぎ合わ

されていた。胸から背にかけて黒い革バンドが纏掛けに、きつく掛けられ、後手錠の両腕を背中バンドの交点の金具に高々と吊られている。極めて狭い歩幅で喘ぎ喘ぎ歩いた。

に、腰枷の前部から足鎖を吊った太い鎖が、足の内側を揺れて叩いて鳴り、首環の前後の囚人番号札の鉄板が胸と背に当り、そして纏バンドを締められた乳房が、ブルブルと震えた。謙二の前の女囚達は、その姿を眺めて悲鳴を洩らして息を呑んだ。鉄格子を潜った革褌の女囚が、足錠を床に響かせて膝について肩を波打たせた。腰枷の後ろにつけた革ロープを握る小柄な婦人看守が荒々しく引き起して右手の鞭を尻に当てる。悲鳴が低い天井の通路にこだました。追いついた謙二達は鉄格子を潜ると、かたわらのデスクに坐っていた男の看守が囚人達を一人々々きびしく見て何か記入し、そして大きな鍵を手にしち上って鉄格子扉をガチャンと閉めた。足枷の女囚は前後を婦人看守に挟まれて階段を昇ろうと、もがいていた。足枷を繋ぐ鎖が階段の一段の高さより短いので、女囚は膝で這い昇るしかない。後手錠の体は、ともすればバランスを失って前後に、のめる。後ろへ倒れかかれば革ロープを持つ婦人看守が足で支えてやるの

だが、前にのめる時には誰も支えてやらないのだ。這い昇ろうとする、もがきを少しでもゆるめると、女囚の肌に、容赦なく鞭が降った。

「あら、お通りなさいよ。通れるわ」

鞭の手を休めた婦人看守が、階段の途中で振り返り、スカートの上から足を掻きながら言った。

「ええ、でもいいわ。待ってるから」

謙二達の先頭を行く小柄な婦人看守が、眉をひそめて言った。

「その女囚、一体どうしたの？」

「これ？ 公判の時、暴れて社会の人に迷惑掛けたの。今日は判決よ」

大柄な婦人看守は、がっしりした両足で階段を踏んで這い昇る女囚について二、三段、昇りながら答えた。

「保険を掛けては男を殺してたのよ。はっきりしてるのは三人だけど、もっと殺してるらしいわ。死刑は確実ね」

無数の鞭痕が残る薄汚れた、その女囚の体は、やつれを見せてはいるものの、女らしい線を描いていて、謙二には、とてもそのような恐ろしい女性とは見えなかった。重い鉄枷に痛められた両足首の枷だ、この皮膚が新たに

破れたらしく、血が薄く滲み、未だふくよかさが残る両手首には、高く背に吊り上げられた後手錠が、めり込むように少し斜めになつて喰い込んで、両手の指先は空しいもがきを示してビクビク動いていた。ようやく這い昇り切った女囚は、鎖をガチャつかせてペタリと坐り込んで呻き喘いだ。勿論、鞭が鳴ったが、女囚は少し尻を浮かせかけただけで身をよじり、もだえるのみだった。

「す、すこし、休ませて、下さいまし……」

哀願の聲が切れ切れに微かに洩れる。

女囚の前を行く婦人看守が舌打ちしてポケットから何か取り出し、女囚の鼻を手荒に摘んだ。革紐のついた、鼻締め金具だ。女囚は弱々しく顔を振って避けようとしたが、忽ち鼻の障子は、金具のネジに締めつけられてしまった。

「ヒーッ！」

鼻を曳かれた女囚は、悲鳴を挙げて何度もよろめいた末、ようやく立ち上った。自業自得とはいふものの、むごい扱いを受けた女囚がヒーヒー泣きながら一階の法廷の仮監房へ曳かれて行くのを見送って謙二達四名の囚人は三階へ昇り、薄暗い片隅の仮監房に入られた。鉄格子で廊下と仕切られた一隅の奥の

壁際に、一米四方にも足りない仮監房が十個程、ずらりと並んでいる。前には鉄格子扉がついていて、奥はコンクリートの壁、隣の房とは鉄棒と金網とで仕切られていた。手錠を繋ぎ合わせた重い鎖が除かれると、腰と肩が軽くなった思いだった。囚人達は一名宛、仮監房に入れられて正座を命じられ、二人の婦人看守は廊下に面した鉄格子のすぐ内側の椅子に腰掛けて監視を始めた。

裁判所の仕事が始まるまでには、未だ時間がある。廊下を這いずって磨き立てる既決囚達のおぞましい姿が二重の鉄格子越しに眺められ、あちこちで鞭音と押しつぶしたような悲鳴とが絶えず聞えた。謙二の隣の房の床にうなだれて正坐している和服の女性が、婦人看守の方を、おずおずと上眼使いに見ながらそっと手錠の位置をずらせてホッと溜息を洩らした。喰い込んで痛かったのだ。

やがて、あたりが人々の気配で少し騒々しくなり、男と女が一名宛、腰縄を打たれて曳き出されて行き、仮監房には謙二と和服の女囚とが残された。独り椅子に掛けた小柄な婦人看守が所在なさそうに雑誌を読んでいる。

「あなたは何をしたんです？」

小声で謙二は隣の女囚に話し掛けた。金網

越しに見る横顔が、早苗そっくりに仄白いで、堪まらなくなったのだ。

「駄目よ。口利いては」

彼女は素早く婦人看守を見やってビクリとして呟いた。婦人看守は、こちらに背を向けスカートの足をスマートに組んで雑誌に見入っている。

「私ね、主人の事業のためを思って、お役人に贈物したの。私の独断でした事なんだけど主人も疑われて……主人は結局、釈放されたけど迷惑かけて申し訳なくて……子供達は今頃どうしてるかしら？」

彼女は指先で眼頭を押えて啜り上げた。手錠がカチャリと音を立てる。

「けど、受け取った方のお役人の御夫婦も、この拘置所にいらっしゃるのよ。受け取った方は泥棒並みの扱いを受けなくちゃならないのですってねえ。ほんとにお気の毒で、考えると、もういても立ってもいられないわ」雑誌を椅子に投げ出した婦人看守が立って近付いて来た。

「話をしちゃ駄目じゃないの」

「ハ、ハイ。申し訳ございません。お赦し下さいまし」

和服の女囚は声をわななかせて赦しを乞う

て手を合わせ頭を深々と垂れて鼻を吸った。
「ちょっと、きついようね。ゆるめて上げるから手を出してごらん」

往復ビンタ位は覚悟していた女囚は、夢かと喜び、いそいそと両手を差し出して手錠をゆるめて貰った。謙二も少しゆるめて欲しかったが、

「四十五号。お前は駄目よ」

手錠の鍵を胸ポケットに納いながら婦人看守は謙二にピシリと言った。

「最初に話掛けたのは、お前なんだからね」

女囚の膝の上の、ゆるめられた手錠を羨ましそうに横目で見ていた彼は、やさしい婦人看守に、きびしく言われてシュンとして、うなだれた。意地悪い婦人看守のビンタや鞭よりも、この小柄な婦人看守の叱責の方が胸にこたえた。しばらくして、もう一人の婦人看守が捕縄を束にして振り回しながら現われ謙二と和服の女囚は曳き出された。廊下と仕切った鉄格子の内側で囚人達は、それぞれ腰縄を打たれた。彼を連れて行くのは小柄な婦人看守の方だった。廊下を行き来し、あちこちにたむろする社会の人々の間を曳かれて歩くのは、久し振りに味わう恥かしさだった。許された用便を手錠腰縄のままで済ませて曳

かれた三十七号法廷の前には、懐かしくいとしい早苗が、おろおろして立っていて、彼の姿を見ると黒い目に見る見る涙を湛えて顔を掩った。法廷には法理士の顔も見えた。傍聴席の横を通ると、被害者の家族達が低い罵り声を浴びせた。腰縄だけを解かれて婦人看守と並んで被告人席に坐った彼は、堪まらなくなつて振り返り、早苗の姿を求めた。彼女は一番、隅の方に独り離れてハンカチ片手に悄然と坐っていた。兄や嫂の姿はなかった。

「前を向いてなきや駄目よ」

解いた捕縄を整理しながら婦人看守が叱りつけた。検事や書記達が席につき、やがて裁判官達が段上に現われ手錠が外された。

検察側の証人である目撃者の娘さん二人が別室から入廷して、謙二の車が非常な高速で走っていたこと、轢いたあと、速力をゆるめもせずに走り去ったこと等を証言した。被告人側の証人として、同乗していた三人の令嬢達が喚ばれた。横断歩道でない所を横切ろうとした被害者の不注意を強調して法理士の質問が済むと、検事の反対質問が始まった。一人宛、代る代る証人席に着く令嬢達は、鋭い訊問に会って、しどろもどろになり、泣き出さんばかりだった。轢いた直後、車を停める

ように被告人に言ったかどうかという点を突かれて、彼女達は真蒼になつて震え上った。逃げるのを、そのかしたのは、彼女達なのだ。令嬢達を証人に呼んだのは失敗だった。元来、このような事件には乗気のなかった法理士も、流石に狼狽した様子だった。被告人側が喚ばなかったら、検事側でその点を突くべく令嬢達を喚んだかも知れない。警察での取調べの際には、辛うじて不問に付された事なのだった。

しかし、あの時には彼にも停車する意志は毛頭浮ばなかった事なのだ。検事に喚ばれて証人席に立った彼は、令嬢達は何も言わなかったと言いつつ切つてやった。令嬢達の母親達が傍聴席で手を合わせて感謝するのを見て、彼は少しいい気持だった。早苗の存在を意識して、いい所を見せようという気持もあったからだったが、そんな反省をするよりも、胸のつかえが少しは晴れた思いだった。

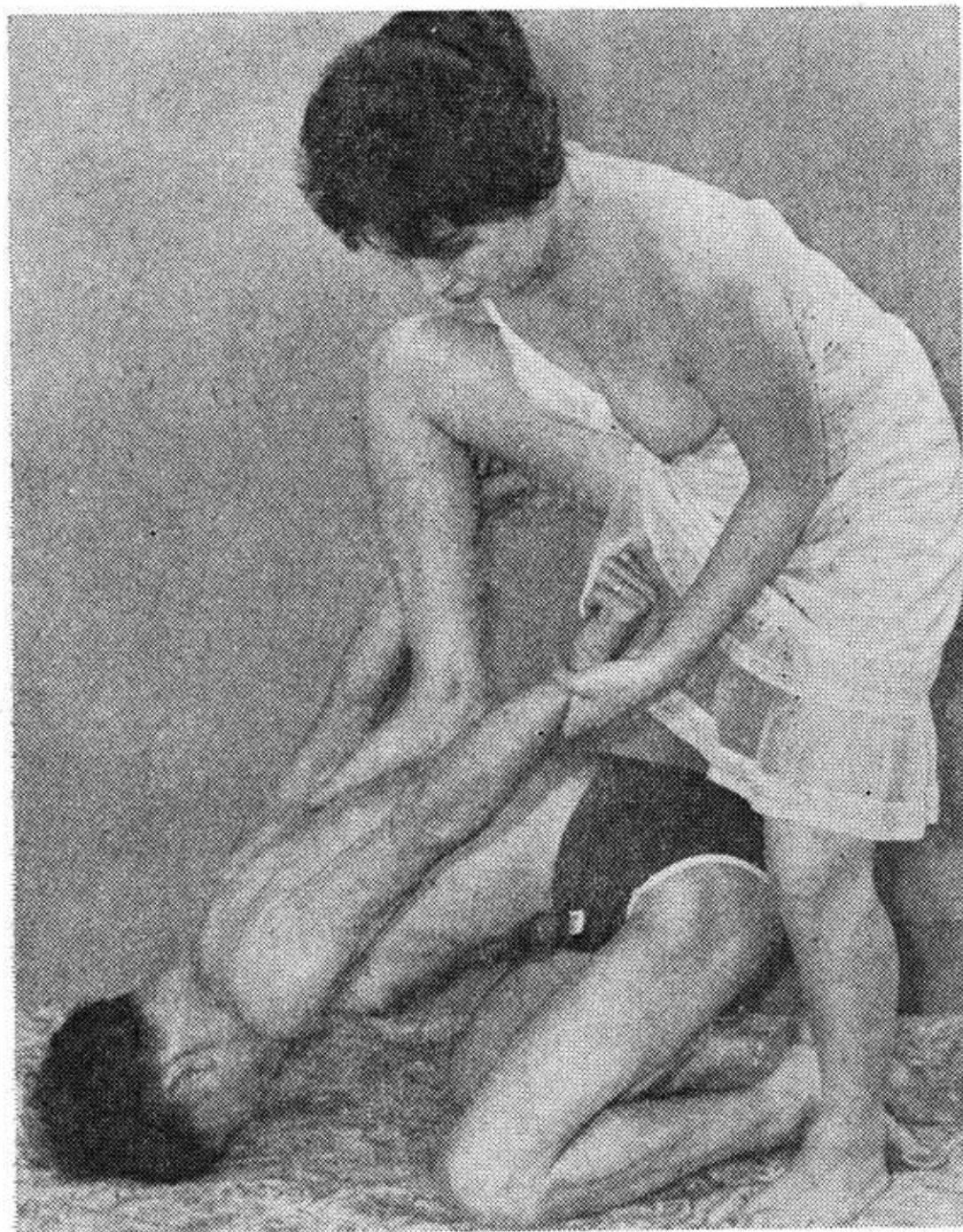
検事は七年の懲役を求刑し、裁判官は次回に判決を言い渡す旨を宣して、その日の公判を終えた。

人々は、それぞれ帰って行くのだが、拘置中の彼には、それは許されない。スカートの膝に載せていた手錠をカチャンと取り上げ、

彼の腕を掴んで立ち上がる婦人看守に促されて、彼は一旦おろした腰を再び上げて、婦人看守と向き合って立った。手錠を嵌め易いように両手を差し出さねばならないのだ。振り返っては、こちらを眺めながら法廷を出て行く人々が切ない程に羨ましく、ねたましかった。

婦人看守の命じるままに体を回わして上衣の上から腰縄を打たれる。早苗は未だ傍聴席に坐っていた。そのまなざしを感じると、身もたえする程の悲しさに胸が疼く。しかし、職務を行う婦人看守は無表情に腰縄を曳いて彼を引き立てるのだった。早苗のそばを通る時、彼女は何か呟いたようだったが、彼は遂に一言も言わなかった。口を利くと泣き出してしまいそうだった。

「一番おそくまで坐ってた女の人、あれは、お前のおかみさんなの？」



仮監房の仕切りの内側で腰縄を解いてやりながら婦人看守が訊ねた。早苗を、おかみさんと呼ばれて口惜しい。

「いいえ、ハ、ハイ、そうです」

「そう、綺麗な人ね。可愛くておとなしそうで。ゆっくり会いたいだろうけど仕方ないわね。さ、お入り」

狭い房の床に正坐した彼は、婦人看守が閉じる鉄格子扉の錠の音を歯ざしりする思いで聞いた。仮監房には和服の女囚だけが未だ帰っていなかった。

数日後の午後、彼は曳き出された。

「どこへ連れて行かれるんでしょうか？」

黒革の褌バンドを囚衣の上から腹にあてがわれ、腰をぐるりと回って後ろで締められながら彼は、おろおろして訊ねた。

「家庭裁判所へ行くのよ。決定の言い渡しを、受けにね。さ、足を、もう少し開いて……」

左右に滑るように腰バンドの前部に取り付けてある縦のバンドを少し動かして中心に持って行った婦人看守は、そう言いながら縦バンドを、両足の間に潜らせた。腰バンドの後ろには左右と上下の両方向に利く尾錠金具がある。縦バンドが

思い切り締め上げられ、彼は腰をもだえた。

「き、きつい。そんなに締めないで。ウッ」

「ホホホ。少し歩くと、丁度いい加減になるものよ」

尾錠部分を掩うステンレス製の箱様の金具の蓋が、カチリという錠の音と共に閉められた。縦のバンドの前の部分の真下ではないがかなり下の方に小さな、しかし頑丈な錠金具が取り付けられている。腰骨や股に喰い込むバンドの厚い革のふちを、彼は手錠の両手の指先で、いじった。

「何してるの？ 手をもっと下げるのよ」

ピンタを喰った彼は腰バンドから指先を離して、嵌められている手錠を縦バンドの前の錠金具に近寄せなければならぬ。白い手袋をつけた婦人看守の指が、手錠の鎖の中央の環に錠金具をカチッと嵌め込んだ。直立すると両腕は下に伸ばし切ったままの状態で殆ど動かせない。

家庭裁判所へ出頭させる旨を事務室で言い渡された。

「こんな恰好で連れて行かれるんですか？」

と彼は泣き声で訊ねた。

「そうよ。不服なの？」

襟元を大きくひろげたドレスを着た婦人職

員は、脂の乗った首に掛けた細い銀の飾り鎖をキラリとさせて、デスク越しに彼に言う。

「着替えさせて貰えないんでしょうか」

腰、股の緊縛に顔をしかめながら、彼は恐る恐る哀願した。せめて首環と囚人番号札とを除いて欲しかった。

「駄目々々。手数を掛ける癖に何を言ってるの？」

婦人職員はそう言ってチョコレートを口に放り込み、面倒臭そうに顎を、しゃくった。

「来るんだよ。さ」

金具がガチッと鳴り、腰を曳かれて彼は、よろめいた。こんな姿で、あの令子に会わねばならないのだと思うと堪まらなかったが、所詮どうにもならないのだ。ひそかに期待していた護送車にも乗せては貰えず、婦人看守に腰バンドの革ロープを握られて彼は、拘置所の外へ連れ出された。

家裁は、この裁判所の隣にもあるのだが、彼が出頭しなければならぬ家裁は、ずっと山手の方にあるのだ。

秋の陽に照らされた舗道を素足に穿いた、すり切れの藁草履で踏みしめて曳かれて行く、うなだれた彼の目には道行く男女の足だけが見えた。腰バンドの更に下方でしっかり

と抑えて留められた手錠が時々きらめいて、屈辱の思いに、ともすれば霞む彼の目を鋭く射る。堪まらなくなつて立ち止った彼が、体を深く深く折り曲げて指先で目を拭おうとすると、背後の婦人看守の手の革ロープが腿に激しく鳴った。

「さっさと、お歩き！ 時間がないのよ。二時までに行かなきゃいけないんだから」

人々の嘲笑いと、さげすみの気配が感じられる。彼は道行く人々に掴み掛かりたい思いだった。このような、きびしい縛しめを施して街の中を追い立てる背後の婦人看守の高慢な顔を撲りつけてやりたい衝動を感じた。しかし、そのような事が出来ないようにと施されている戒具なのだ。

背後を歩くこの女性に先刻、嵌められた手錠は、両手首の骨に喰い込んで呻く程の痛さだし、先刻、締め上げられた褌バンドは、囚衣の上から切ない程に腰部を締めつけて喘ぐ程だった。

肩を震わせて、もだえる彼のむき出しのふくらはぎに更にピシリと革ロープが鳴る。敵わぬまでも婦人看守に体当たりしようと思ふ無念さを、ようやく、こらえ諦めた彼は、再び、とぼとぼと歩き出すのだった。

電車の中では席があるのに座らせてくれなかった。

「お前なんか腰掛けると汚れるからね。知らずに、あとで坐る方に申し訳ないわ」

婦人看守は、そう言つて自分は扉のきわの席に腰を掛け、シートの端の手摺板に囚人の腰のうしろを当てさせて立たせて革ロープを短く握つた。心得てはいるものの動揺する度に思わず腕を動かそうとする彼は、手錠の硬さを思い知らされた。腰バンドと革ロープを連結した金具が腰のうしろでガチャッと鳴つて、革ロープが邪慳に曳かれた。

「降りるのよ」

降りた駅の三つ四つ向うの駅の近くには早苗が住んでいるのだ。彼は頭を振つて悲しく諦めて駅を出た。家庭裁判所の玄関前の広々とした石段を昇りかけた時、玄関の大きな硝子扉が開いて数人の男女が出て来た。Gパンに赤シャツと黄シャツの二人の少年、その前にスラックス姿の少女が一人、未だあどけなさが残っている彼等は打ちしおれながらも精一杯のふてぶてしさを示して、二人の婦人警官に叱りつけられながら素直に歩こうとしない。薄汚れた服装の少年少女三名の両手には手錠が光り、捕縄で珠数繋ぎにされていた。

先頭の少女は街路を見下ろして流石に両手で顔を掩うた。捕縄をぶら下げた手錠が両手首を僅かに、ずり落ちる。すれ違いに階段を昇る謙二の姿を横目で眺めて少年達の顔に恐怖の色が浮んだ。

室の前の静かな廊下で彼は立たされたまま待たされた。革ロープを手に巻きつけて長椅子に腰掛けた婦人看守は煙草に火をつけ、囚人を自分の方に向かせ、紫煙に目を細めながら戒具を点検した。

「お前も哀れな男ねえ、方々で裁判に掛けられてさ。さ、少し離れて、こっち向いて立っているのよ。何？ 手が痛いって？ 辛抱するんだね」

廊下を行き来する人々は、ここでは余り見掛けられない姿の彼を見て不審そうだった。

やがて廊下に現われた女性を、床に落した目の隅で認めた彼は、全身が熱くなる思いだった。思わず知らず呻き声が咽喉を洩れ、体がうしろを向く。秋にふさわしい柄の和服姿で裾捌きも鮮やかに近付いて来るのは令子だった。

「動いていいと誰に許して貰ったの？」

婦人看守が組んだ足を解き、革ロープをグイと引っ張って叱った。従わねばビンタが飛

び、革ロープが鳴るのだ。彼は深々とうなだれたまま再び婦人看守の方、即ち令子の方に向かねばならなかった。令子の視線が真正面から針のように感じられる。

「グッ：ウウッ：」

彼は全身を震わせて悲痛な喚き声を洩らした。死んでしまいたい程の情けない思いだった。膝がガクガクして今にも折れそうだった。

「お久し振り。お元気？ ホホホ。よく似合うわよ、四十五号囚さん」

キツチリ穿いた白足袋が彼の目にボンヤリと見え、すぐ真前から令子の声が聞えた。廊下には他にも長椅子があるのに、彼女は婦人看守に並んで腰掛けた。様子を察した婦人看守が

「あなたが、その、奥さんですのね」

「そうです。わざわざ連れて来て頂いて御苦勞様ですわねえ」

「いいえ、職務ですわ。とはいふものの、余分な仕事なんですよ。出頭させなくても書類だけ回せばいいんですのにねえ」

「ほんとにそうですわね。ちょっと謙二さん黙って唸つてばかりいないで何か言ったらどう？ これで、お別れなのよ。囚人生活は辛い？」

婦人看守が手を挙げて制して、

「囚人は社会の方と話しするのを禁じられてるんですの」

「あら、そうですの。フフフ。けど、あなた方のお仕事も大変ねえ」

婦人看守と雑談を交わす令子の横顔を、彼は盗み見した。アップ気味に結い上げた首筋は煙るような曲線を見せ、朧けた顔立ちは長いまつげに翳って相変らず冷たく美しい。妻としては、愛想をつかした女性ではあったが、今の囚われの境涯から救い出してくれるなら、この女とより、を戻してもいいと、彼は一瞬、そう考えさえした。

「喘いでるじゃありません？ 床にでも坐らせてやったら？」

と令子が言った。彼の胸を突然、憤怒の思いが湧き上る。この手錠が、せめて禰バンドに抑えられてさえいなければと、彼は両腕を僅かに動かして身を悶えた。囚人の心の動きを読むのに熟練している婦人看守は、素早く手錠を腰の革サックから取り出した。身を屈めた婦人看守の手が動いたと思うと二度、金属音が響いて、彼の両足首には手錠が嵌まっていた。鎖のついた部分が両足首の前側にあるので、それだけでなく短い鎖に足は、もう

ビクとも動かせない。無理に動かそうとすると、足首の骨が砕けるばかりに痛んだ。令子が横目で眺めて肩をすくめ、フフンと鼻で笑った。

「お待たせしました。始めます」

事務服の娘さんが現われて、そう告げ、彼を見て眉をひそめた。令子は、さっさと室内に入り、彼は片足だけ外された手錠をカチャカチャと曳きずりながら、そのあとについて連れ入れられた。

立会判事の婦人は、眉一つ動かさなかったが、調停委員の男女は彼の姿を見て眉根を寄せる。椅子に坐って襟元等をつくろう令子の横に彼は立たされた。彼が坐るべき椅子には婦人看守が革ロープを握って腰掛けた。外された片足の手錠が再び足首を噛んだ。

「では森令子及び森謙二の両名に係る調停裁判の決定を言い渡します」

立会判事の婦人が静かに宣した。

「その前に看守さん、被告の戒具を除けておやりなさい。首環は、いいわ」

婦人判事の指示に婦人看守は口をとがらせ「そんな事おっしゃっても無理ですわ。ここには私、独りなんですもの。責任がもてませんわ」

「私が責任を持ちます」

「だって……鍵を持ってませんわ」

「嘘を言いなさい。第一、鍵を持ってないとすると服務規程違反ですよ」

婦人看守は、しぶしぶ鍵を取り出した。

「そんなに心配なら、足だけは拘束しておきなさいな」

腰バンドのうしろでカチャカチャと掩蓋の錠が外され、縦バンドがゆるめられて両足の間に垂れた。腰バンドも解かれ、禰バンド全体の重さが手錠にかかる。

「こっちを、お向き」

締め上げられていた股と腰の緊縛を解かれた彼は、ホッとした心地で足錠に気を付けながら、うしろを向いた。ふくれ面した婦人看守は腰掛けたまま手錠を外し、更に手錠を禰バンドの金具から外して、スカートの上に置いた。禰バンドは椅子の横の床の上に投げられた。

「判事さんの方に、お向き。両手は後ろで組んでるんだよ」

動かした足首に喰い入る手錠の痛さに顔をしかめながら彼は、再び婦人判事の方に向いて、うなだれて両手を後ろへ回した。言い渡された決定を聞いて、彼は唇を噛んだ。令子

の要求額を僅かに下回る額の慰藉料を支払え、というのだ。離婚成立は覚悟の上だったが、その額は彼の全財産の半ばに近かった。

「この決定に不服なら七日以内に裁判所に再訴していいのよ」

婦人判事は机上の花瓶の草花越しに彼と令子を交互に見やって言う。

「けど被告の方は、もし刑が確定すれば再訴は無効になるからね。支払わなければ強制執行の上、奴隷にならなければなくなるわよ。懲役を済ましたら直ぐに今度は債務奴隷になるのは嫌でしょ？ 支払命令書が届いたら期限内に払った方がいいと思うわ」

謙二の胸は、やる方ない悲哀に疼いた。

「そうそう拘留中なのね。代理人は誰？」

彼は、ためらう事なく岩下早苗の名を書き署名して拇印を捺した。

「再訴期限内には申し出れば一度だけ面会したい人に会えるからね。拘留所へ連絡しといたげるわ。では、これで……」

立ち上る判事達に令子は、にこやかに礼を言った。判事達が去って室内には事務員の娘さんと令子だけが残し、婦人看守は囚人を小突き回して当り散らした。

「こっち向くんだよ」

硬い金属で後頭部を、したたかに小突き上げられ、腕を掴んで引き回された彼は、足錠をもつらせて膝をつく。腰掛けたまの婦人看守の右手に握られた手錠を、見上げた彼は、眼前のスカートを睨みながら歯ぎしりする思いで、ようやく立ち上がった。両足首が千切れるようだ。ろ、う、け、つ、染めの細身のハンドバッグを開いて唇を直している令子が、面白そうに眺める。目が昏む程のみじめさ無念さをこらえ、揃えて差し出す彼の両手が、ぶるぶると震えた。囚われの身には当然の事とはいえ、勝ち誇った笑みを浮べる令子の眼前で、浅間しい戒具を施されるみじめさは骨の髄に込み通り、肺腑を貫いた。面倒を掛けられ面子を損った怒りをこめて右手首に思い切り叩き込まれた手錠の環が、クルリときらめき、バシッと鳴って固く喰い込む。左手首には思い切って打ち込めないで、嵌めた環を更に押えつけて締められた。

「それを拾うんだよ」

床の禪バンドを手錠の両手で拾い上げさせられた彼は、微かに無念の声を洩らした。

ようやく立ち上った婦人看守は、引ったくった禪バンドを彼の腰に締め上げて行った。膝を曲げて精一杯にひろげた両足の間を、自

分でバンドを後方へ潜らせた彼は、容赦なく緊め上げられて苦痛の呻きを挙げた。婦人看守の手の力でも、とことんまで締め得るような尾錠の構造なのだ。カチリと鳴って閉まる錠の音を腰バンドの後ろで聞いて、彼は両手で顔を掩って嗚咽した。緊縛の苦痛そのものは耐え難い程ではなかったが、令子の眼前に晒すこのみじめな姿を思うと、堪えられない心地だった。両手を挙げて両手首の手錠は全然ずり落ちない程に固く嵌められていた。事務員の娘さんもペンを休めて眺めている。

「手をお下げ！ 分ってるだろ馬鹿な奴ね」

顔から離して前に垂れ下げた両手の手錠が縦バンドの下の方の金具に結合された。

「何を泣いてるのさ。お前は囚人だよ、当り前のことじゃないの」

既に、すべての自由を奪われてしまった彼の頬にピシピシと往復ビンタが鳴って、彼は身をよじった。胸ポケットから取り出した鍵で両足首を責め苛んでいた手錠が外され、婦人看守の腰の革サックにカチャリと重ねて納められた。再び胸ポケットに納め込まれる鍵を囚人は怨めしうに見た。あの小さな鍵がなければ、この手錠も禪バンドも外しはおろか、ゆるめることさえ絶対に出来はしないの

だ。伏目になると、この婦人看守のきつい顔も、豊かな臉と意外に長いまつげを見せて、かなり美しい。

「お、お願いです。少し、ほんの少し、手錠をゆるめて下さいまし。お慈悲を……」

「駄目よ。今度、口を利いたら承知しないから」

彼女は、そう言って腰バンドの後ろに、革ロープをカチツとつけた。

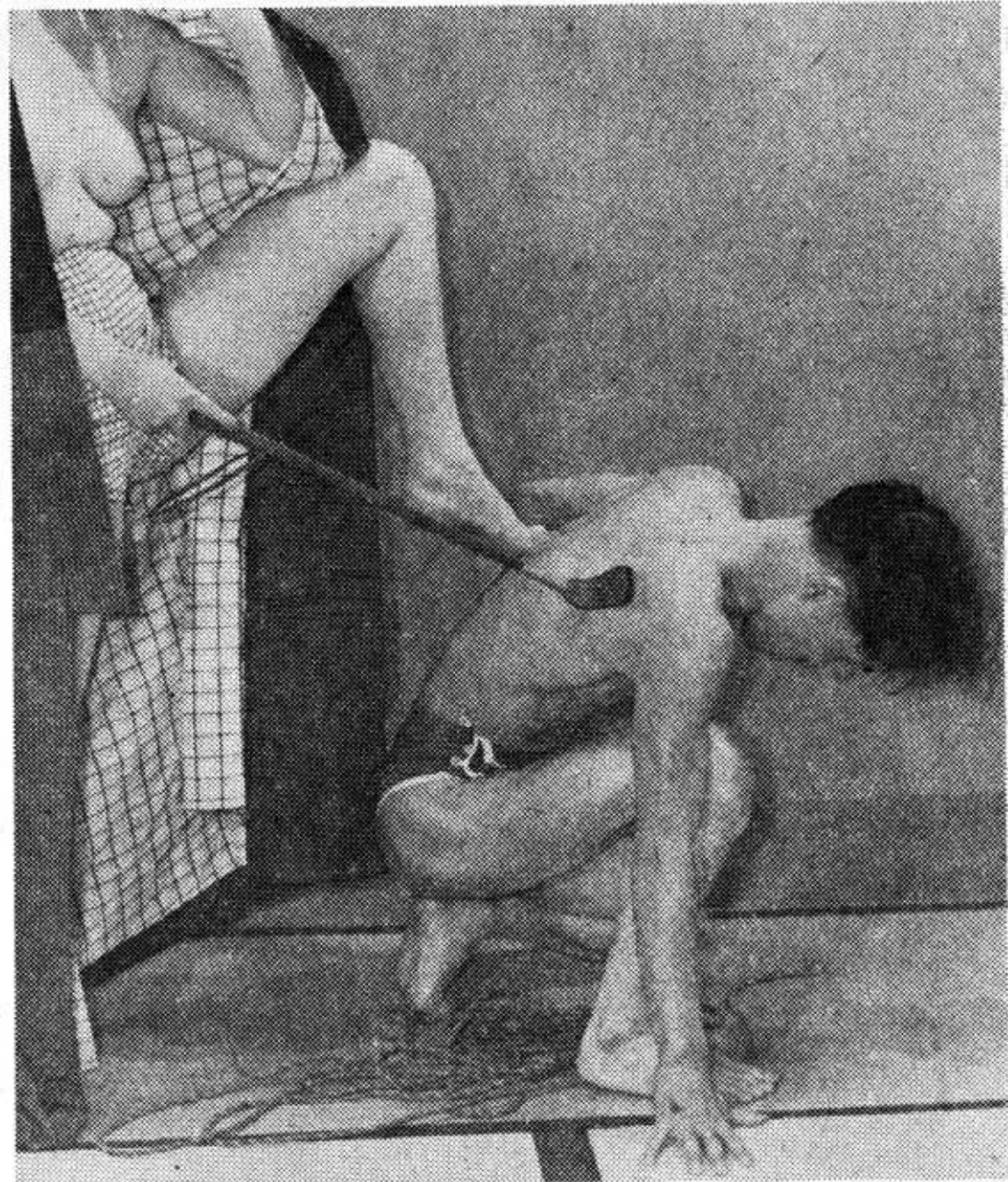
「ホホホ、又、縛られてしまったのね。そうして又、牢へ帰る訳ね。可哀想みたい」

令子がハンドバッグを閉じてスラリと立ちながら嘲った。和服の色彩が華やかに、ゆらめいた。

「ウッ、ち、ちくしょう！」

又しても噴き上る怒りに彼は夢中で二、三歩、彼女の方へ迫った。腰の革ロープがピンと張る。

「こ、こんなに、されて見る、こんなに……どんなに情けないか。笑って見物していい



で、さっさと行ってくれたら、いいじゃないか」

彼の喚きの最後の方は身もだえと泣き声になった。

「何ということをするの！ お前は」

革ロープが猛烈に尻や腿や、ふくらはぎに鳴り、意地にも洩らすまいと耐える悲鳴が

彼の咽喉を、遂に糸を引いて出た。

「ホホホ。馬鹿ねえほんとに。囚人の癖に看守さんに逆らえる筈がないじゃないの。七年の懲役を、求刑されてるんだったわね。お気の毒ねえ、フフフ。早苗さんにも会えないで。じゃ、おとなしく監獄へ行ってきたらいいわ」

残り香を後に立ち去る令子の後ろ姿を睨みつけた彼は、床に顔と肩と膝をついて身を揉みに揉み、転げ回らんばかりに嗚咽するのだった。

「さ、もういいだろ。帰ったら懲罰だよ。お立ち」

婦人看守の靴先が彼の腰骨を

蹴り上げた。

玄関を出ると、陽に照らされた石段が広々と眩しかった。降り切った所で婦人看守は立ち止まり、石段に片足をかけて革ロープを握ったままスカートの裾を少し持ち上げ、靴下の縫い目を直した。うなだれて立って待つ彼の頭上で大きな街路樹の葉が、さわさわと鳴

る。少し離れた路傍に駐車している純白のスポーツカーのそばには令子が立って、白い指先で扉を焦立たしように軽く叩きながら、彼の方を、ちらと見た。令子の指には彼が見た事のない大きなダイヤの指環が、きらきら光っていた。向う側の小さな喫茶店から長身の青年が出て来て街路を横切って小走りにやって来た。

「ごめん、ごめん」

と扉を開いてやりながら、

「あれかい？」

と謙二の方に顎を、しゃくる。

「そうよ。もう関係ないわ」

運転席の横に乗り込む令子の裾が乱れて白い足が、ちらりと見え、横顔が嫣然と笑みこぼれた。

「フン」

さげすみの色を浮べて、謙二の頭の先から足先までを、じろりと一べつした青年は、運転席に滑り込んでボタンと扉を閉めた。軽やかな爆音を残してスポーツカーは走り去る。瀟洒な背広姿の青年に寄り添った令子のうなじの乳色の白さが謙二の目に灼きつくようだった。

「お茶の一杯も出さないんだものね、咽喉が

乾いたわ」

婦人看守は、そう言って囚人を小突きながら街路を横切り、喫茶店に入った。ウェイトレスの小娘が、

「奴隷は外において下さいませんか？」

「奴隷じゃなく、囚人よ。いいでしょ？」

ウェイトレスは婦人看守の襟のバッジを見ながら眉をひそめて、うなずいた。二、三組のアベックの客も顔をしかめたが、婦人看守は平然と店内を通過して片隅のテーブルに腰を下ろした。

「壁を向いて立っといで」

革ロープを短く握ったまま、婦人看守は美味そうに咽喉を潤おす。拘置所を連れ出されてから、ずっと立ったままの謙二は疲れていた。前屈みの姿勢を強制され続けた背や腰がだるくて痛い。一滴の水すら与えられはしない事は諦めているものの、コップの音や、あたりの匂いが切なかった。令子の事を想うとやる方ない怒りと悲しさが胸の奥から、こみ上げる。思わず喘いで身もだえすると、低く抑えて留められている手錠がガチャガチャと音を立てた。

「じっと出来ないの？」

婦人看守は、なかなか立ち上る様子もなく

煙草をくわえて囚人を叱りつけた。

「ハ、ハイ。すみません」

近くの席の若い娘がストローを吸りながら謙二を、じろじろと見て、

「おとなしく、言われた通りにしてるわ」

「当たり前さ。反抗出来ないじゃないか」

娘の前に坐った青年が振り向きもしないで言った。

「お願いですから少し坐らせてやって下さいまし」

謙二は小声で哀願した。

「そうね、いいわ。こっち向いて、お座り」

許しを得た囚人は婦人看守の方に向き直り革ロープをまたいで床に足を折って正坐し、ホッと吐息を洩らした。禪バンドの縦バンドの下の方で手錠を留められているので、両掌を夾んだ膝が、かなり開き、うしろから回った革ロープが、その間から伸びて、眼前に腰掛けた婦人看守の右手に握られて少し垂れ下っている。坐りこむと、締め上げられている禪バンドも少しは楽になったようだった。

「ちょっと可哀想みたいだったわね。口惜しい思いをしたことだろうねえ」

制帽を脱いで髪に櫛を当てながら、婦人看守は囚人のみじめな胸の想いを更に掻き立て

た。手を放した革ロープは、盛り上ったスカートの上に置かれたままだ。乾いた涙の痒さに囚人は思い切り上体を伏せ、不自由な手で辛うじて顔に指先を当てる。手を動かすと手

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十三日確実発売!

一月分	1冊	六〇〇円 (送共)
三月分	3冊	一八〇〇円 (送共)
半年分	6冊	三六〇〇円 (送共)
一年分	12冊	七二〇〇円 (送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替(大阪四二七八三番)』のいずれかをご利用

首が千切れるように痛み、指先は何だか痺れたようだった。

「あの時のお前の気持は、察してはやるけどね。社会の人に悪態を吐いた事は赦しては

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代六〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に△本号にて前金切の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎年二十三日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

れないわね。しかし可哀想だから軽い懲罰で済まして上げるわ。さ、出るのよ、おいで」

制帽を何度も、かぶり直して髪にピンで留めた婦人看守は、ネクタイの結び目に手をやりながら、片手で革ロープを握って立ち上った。コップに飲み残された冷水を横目で切なく眺めて、よろよろと立ち上った囚人は、喰い込む禪バンドに呻きながら、両足の間の革ロープをまたいで再び少しよろめいて、婦人看守の先に立って、藁草履を引きずるのだった。

拘置所へ戻った彼は首枷を嵌められて房へ入れられた。社会人である令子に許しなく囚人が口を利いた懲罰なのだ。厚さ五センチ程で約一米角の檜の板で作られたその首枷は、食事の時以外は昼も夜も外される事なく囚人を苦しめた。運動もシャワーも禁じられて、終日、房内に正座していると、首の骨が折れ肩の骨が砕けるようだった。両手で枷を支えて揺すぶりながら彼は呻いた。夜、横になれないのも辛かった。あの令子に、ほんの少しばかり口を利いたために、こんな苦しみを受けるべからぬのかと思うと断腸の思いだった。きっちり七十二時間の後、彼は首枷の呻吟から、ようやく解放された。



人間は、ある目的のための手段を、他の目的のための手段、もしくは目的そのものに転位させる特技をもっている。マッチ軸を点火器という本来の役目から解放して耳搔きに転用することは、よくやることである。点火器を衛生器具に転化させるのは創造力が働いたからである。創造力は理性によって、もたらされる。

尻打ちや緊縛プレイにも同じことが言われる。尻打ちや緊縛は、もともと懲罰を目的とするか、そのための手段であった。自分の犯した罪、過失を贖うため、こらしめのため、尻打ちは主として修業中の人達に行われた。肉体的苦痛を伴うが故に、懲罰としては最も

原始的な、感覚に訴える行為である。緊縛は人間の自由な行動、自由な意志を肉体の拘束を通して、肉体的にも精神的にも、いたぶる責めとして用いられ、同時に懲罰者の懲罰を容易に行えるための手段に使われてきた。

この本来的な用法を快楽の手段にし、更には目的自身に転位させ、一般に開示したのがサドであり、マゾッホである。サドは人間社会のエゴとエゴとの闘争の中で、一方のエゴが他方のエゴを一方的に圧倒することによって征服者の被征服者に対する快楽を引き出した。マゾッホはエゴの闘争において、自己のエゴを放棄することによって容易に相手のエゴを受け入れ、かえって相手のエゴを自己の

ミズサワ・アンダー グラウンド

☆尻打ちと緊縛プレイ考☆

水 沢 登

奉仕者に転化させることのなかから快楽を導き出したのである。サジズム、マゾヒズムは人間以外の動物の本能では開発することのできない、人間の理性による、新しく創造されたイズムの世界である。

サド、マゾッホの創造した世界は長い間、我々の社会理念、道徳からは受け入れるには非常に抵抗のあるものであった。何故なら、この世界を受け入れるには人間理性の飛躍的な認識と自由が与えられる必要があったからである。しかし一度、創り上げられた世界像は偉大なだけに消滅することはなかった。社会理念と道徳の変遷につれて、徐々に人間の社会生活に溶けこみ始めたのである。勿論、

そこには妥協という変形はあるにしろ、今日性革命といわれる性の自由化が、その一つの傾向を示している。

これから、性愛生活における一つの変形としてのプレイという社会道德との妥協的産物を主題として、我々がSMの世界をどのように導入しているかを考えていきたいと思う。

1、尻 打 ち

尻打ちに懲罰なのか、快楽なのか？ という疑問に対する答は現在のアメリカでは純粹に「懲罰」と言い切れるものよりも「快楽」もしくは「どちらでもある」との答をするものの数の方が年々増加しているという。

尻打ちの様相は色々あって、夫婦相互間、婚約者同士、両親によるティーン・エージアへの家庭訓育、教師による懲罰、学生の秘密結社の入会儀式、典獄の囚人懲罰、職場におけるボスの仕置、レスビアンの尻打ち、娼婦の顧客鞭撻、娘の母親尻打ち、秘密クラブでの快楽追求のための尻打ち等……がある。

(後出参考図書参照) なかでも、夫婦間の特に寝室での尻打ち、または、その変形行為が益々一般化しつつある。このことはパルプ・マガジンから有名文学作品まで夫婦間の尻打ちに関する記事のスペースが年々増加の一途を辿っている事実からも、裏書きできるといえる。夫婦間の場合、尻打ちは無効快楽を目的とし、懲罰を目的とするものは少ない。寝室

で尻打ちを受ける、ある主婦の告白によると「五十回もパドル(木のヘラ、ピンポンのバツチのようなもの)で強く打たれると、スリルをおぼえてカッカと燃え、後に続くコイタスへの期待にふるえる」という。

尻打ちを懲罰から快楽へと移行する素地は彼女らの青春期における経験を越えたスリルによって培われるに違いない。父親の尻打ちと医者が尻にペニリン注射をするのとは確かに異なった感覚を得るであろう。一方スパンカー(尻打ち者)は犠牲者の苦痛に歪む顔、涙。赤く染まった尻を見ることによる視覚的刺激。呻き、叫びを聞くことによる聴覚的刺激。躍動し、ふるえる尻を抑えつける触覚的刺激によって、性の活動を活発化することになる。

思春期における家庭訓育で尻打ちに懲罰とは異なった意味を感じとってゆく事例を一つだけ取り上げてみよう。この父親はサジステイックな性向があり、娘はマゾヒスティックな性向が、ほのかに垣間見られる。

ジェニファー・B 私は十六才です。私は平手の尻打ちをされた事はありません。——いいえ、私はパドルで打たれたり、鞭打ちをされたりするという事です——ほとんどの場合パドルです。前夜に父から尻打ちを受けてヒリヒリするお尻で机に向ったことは度々でした。あの時は父は確かに惨忍になるのだ

と思います。尻を打つだけなら、そんなにわるいとは思いませんが、父は私を羞かしめようともし、しているのです。羞かしめようとしているのは裸のお尻なのです。はつきり申しますと、私は恥かしいので、父に余り見られないように、お尻をくっつけて下げるようにしているのです。しかし三回も打たれると、打たれた箇所が激しく上下に、はねるので、嫌なのです。私の顔がお尻と同じように真っ赤になってゆくのが、わかります。父は尻打ちした後、その部分を、つねっては喜ぶのです。こんなことは、全く不必要なことなのです。私はパドルを買いにやらせられたことを忘れたのです。父の命令だったのです。一つ買って家に持って帰るように言いつけられました。私はボーイ・フレンドに買いに行ってもらいました。それまで父は剃刀のトギ皮を使っていたのです。ジェリーが買ってきてくれたパドルを使うようになってからも、剃刀のトギ皮がつくった恐ろしい跡を取り除くことはできなかったのです。家を離れられる時がきたら、どんなに嬉しいでしょう。よその少女達も尻打ちをされているのを知っています。しかし、私ほど嫌な目にあっている人はいないようにみえます。他の人達と比較して私ほど、ひどく尻打ちされたものはないでしょう。

-----イメージギャラリー『雪責め』須坂 旭-----



アメリカにおいては、定期的に尻打ちを経験している少女は五五%にのぼり、そのうち両親によって打たれたものもあるが、父親のみ打たれたものは七五%に達するという。このような経験をもつ若者が成人し、懲罰から解放された時、深層心理に残るものは、あの苦痛を伴う甘美な快楽なのではなかろうか。それが、現代における伝統的性行為の陳

腐さ、性関係における女性の役割についての妻の理解意識の増大、女性の地位向上に伴う女性の享楽追及の自由性の拡大、性行為につながる尻打ちに関する社会的、宗教的羞恥からの解放、生活力の増進と、それに伴う人間の若々しさの延長、等の条件の下で復活、再生するのであろう。

「尻打ち入門」のようなガイド・ブックがあ

らわれてくるのは、尻打ちがポピュラーになってきている事実を示すもので、次にその一部を紹介するのであるが、そこには罪悪感の跡片もなく消え、感覚的な快楽を追う陽気なプレイしか見られない。

—— 一番よい方法は、ものの上に、俯伏せに横たえることである。用意ができれば、長椅子に腰掛け、少女をももに横たえる。彼女の体の上部と下部は長椅子にのっているようにする。少女のものはスパンカー（尻打ちする者）のものにのるようにする。それからスパンキー（尻打たれる者）の衣類をぬがさなくてはならない。フレアー・スカートが一番好ましい。犠牲者の足にまつわるものを引き上げ、ヒップの上まで、まくり上げるのに、ぞうさないし、彼女自身、手伝うこともない。ペチコートを一、二枚つけていけば、同じように、まくり上げる。このしぐさでエキサイトしてくるのである。スカートを腰の上までまくり上げることは非常にセクジュアルなものだが、このことは犠牲者が、その後にく厳しい調教を何でも受け入れ、従うことを意味する。と同時に彼女に手伝ってもらわなくても、パンティを膝下まで、めくり下すのに支障がなくなったことにもなる。パンティがゆるくて、すぐ、ずり落ちるようなら、彼女は、どうもセクシーではないようだ。大部分の少女はピッチリしたパンティをはいている

から、見た目に刺激がある。そんなパンティをつけている時は軽くヒップを持ち上げてもらうと具合がよい。従順な態度に加えて、お尻をつき出すようにして尻打ちに協力してもらえば、感覚的に非常に都合がよい。ジーパン・パンツ等を着けている場合には手伝ってもらわなければならない。着衣を引き下すのは、ももの上に横たわってもらうまで待たなければならない。そうすれば彼女は、そんなに恥かしがらずにすむからである。尻打ちのよろこびは、あなた自身が障害物となっている着衣をぬがすことにもあるのだから。急いではいけない。ジッパーやファスナーを、ぎこちなく、つかんではいけない。彼女が、こわがるから。

逆説に聞えるかも知れないが、はじめての尻打ちにはパドルを用いてやるべきである。パドルなら懲罰の要素が含まれているので、何かしらセックスを感じさせなくてすむ。裸の肌を素手で打つのは彼女の穏やかな感覚を、いらだたせる。パドルなら事務的に感じさせるからである。尻打ちの箇所を初心者には、どうも誤りがちである。尻の上部では背骨を痛める危険性がある。尻以外のところを打ってはならない。足の上部や股を打つというのにはフィクションが多い。体一面を、やたらに打って真っ赤にするよりは、尻打った箇所のみを赤く輝かせるようにし、他の体の部分は

真っ白のまま残しておく方が、コントラストが、はっきりして視覚的には上手な尻打ちだといわれる。

尻打ちには特に最初は、やりすぎてはいけない。時間も犠牲者に合わせるものであって、スパンカーの欲望の度に合わせてはならない。尻打ちを受ける殆どすべての人達が、初めての場合、多少は悲鳴をあげる。突然、感覚が乱され、羞かしさをおぼえるからである。スパンカーは感情的な悲鳴と、打ち傷の痛さからくる悲鳴とを混同してはならない。尻打ちが終わった後の処理が、最も重要である。

犠牲者がスパンカーのももから立ち上る前にパンティや、その他の衣類を直すのを手伝ってやらなければならない。立ち上ってから衣服を整えるのは彼女の責任である。整え終わったら、抱きしめて、しばらくの間キスしてやらなければならない。こうしてやると、犠牲者のふるえている尻をコイタスへの感覚に微妙につながせることになる。あなたが好きなんだということを知らせて、安心させるのである。尻打ちの最中にオーガスムに達し、性的欲望が衰えてしまった場合で、こんなことをするのが困難だとしても、今後彼女を尻打ち続けたいと願うなら、やはり欠かしてはならない。

この初心者へのガイドの端々から感ぜられ

ることは十代に経験した懲罰としての尻打ちから逃れることを最初から意識しているということである。快楽としての尻打ち本来の姿である、素手で素肌を叩くことを導入の段階で敬遠し、パドルを用いた懲罰の尻打ちの形態をとることは、やはり快楽のための尻打ちに抵抗を感じる意識が払拭しきれず、やむを得ず社会慣習と妥協せざるを得ないのだと解釈される。そのせいか、スパンカーは尻打ちによる快楽を、犠牲者の苦痛からのみ引き出すのではなく、尻打ちの雰囲気や情緒から引き出そうとする傾向が、強いように見受けられる。

尻打ちでの最大の快楽を引き出すはずの女体での最もセンシブルな箇所の打撃行為は、実際には余り行われておらず、そのような事実があると記事はフィクションであるときめつけ排斥しているのは尻打ちがサジスチックな行為ではなくプレイであることを裏書きしている。即ち、サジズム本来のエゴとエゴとの闘争、一方のエゴが他方のエゴを圧倒しつつすトゲトゲしさはなく、スパンカーもスパンキーも共に相手のエゴを認めた合意の上の愛戯の形態をもっているのである。

更に重要なことはプレイとしての尻打ちがコイタスを前提したものであるということである。このことは「事後の愛撫で、ふるえる尻をコイタスへの感覚に微妙につなげること

にある」という一文で象徴される。尻打ちが窮極的にコイタスにつながることを他の事例から確認しておきたい。次の英詞は現代における尻打ちのプロト・タイプ（原型）といってもよいだろう。ただし、拙い筆者の訳で原詩の情緒が少なからず損われることを悲しむものである。

尻打ち (Fairfield Fletcher)

ほんとにうれしい
こんな幸せ知ってるなんて、
あの恋人にキスをしたあとで
後を向いてといいつけます。
膝下すっかりつかむんだ。
腰をたわめてそうすれば
お尻がポッカリあらわれる。
お尻をつつんだパンティは
ビクリするよなピンク色。
それをずり下げチラリと見ると
完全無欠の美しさ
信じられない美しさ。
仕置きにふるえるくぼんだ丘は
すっかりむかれて赤裸
触れたお尻は象牙の白さ
見た眼はまったく冷たそう。
だけどもため息もらします
快楽は二人の宝だと
承知しているその故に。
いとしい人のよろこびは

責めてやらねば生れない。
パドル振り上げかわいい尻を
ピシヤリと叩けば愛情が
拡がってゆくのを知ってます。
どんなに責めがつらくても
かわいいあの娘はうれしいと
きつと私に言うでしょう。
.....

パドルで打てばその音も高く
その勢でちよつとの間
お尻はキュッとしまります。
お尻がピクンとはねかえりや
天にも昇ったよろこびが
も一度叩けと命じます。
痛みはすでにいや増して
頬は真赤に燃えています。
血という血が大急ぎ
みんなやってきたのです。
早打ちすると色あいは
輝くようになってきて
高められたよろこびは
滝となって流れいる。
尻打ちすると愛の神々に
私はお礼を申します
こんなすてきなやりかたで
裸のお尻をピシヤリと打てば
二人は共に恍惚境を
さまよえる日々を送れることを。

尻打ちが最高頂に登りつめ

あの恋人が静かにすすり泣き
甘い悲鳴もらすよに

なったら勤めはおわりです。

輝き燃えるこの娘の尻に

ピッチリパンティはかせます。

彼女は振り向き言うことは

さあ来て抱いて私のお尻。

お尻はもう冷たくありません。

.....

二人はベッドで結ばれる。

セクジュアルな火が消えぬ間に。

ベッドの横の板床は

あの恋人の尻を打った処。

二人の快楽はみたされた

溢れるほどいっぱい。

「うれしい君を尻打って

私の恋人いとしい人よ」

(The Joys of the whip and the Rod

1872年より)

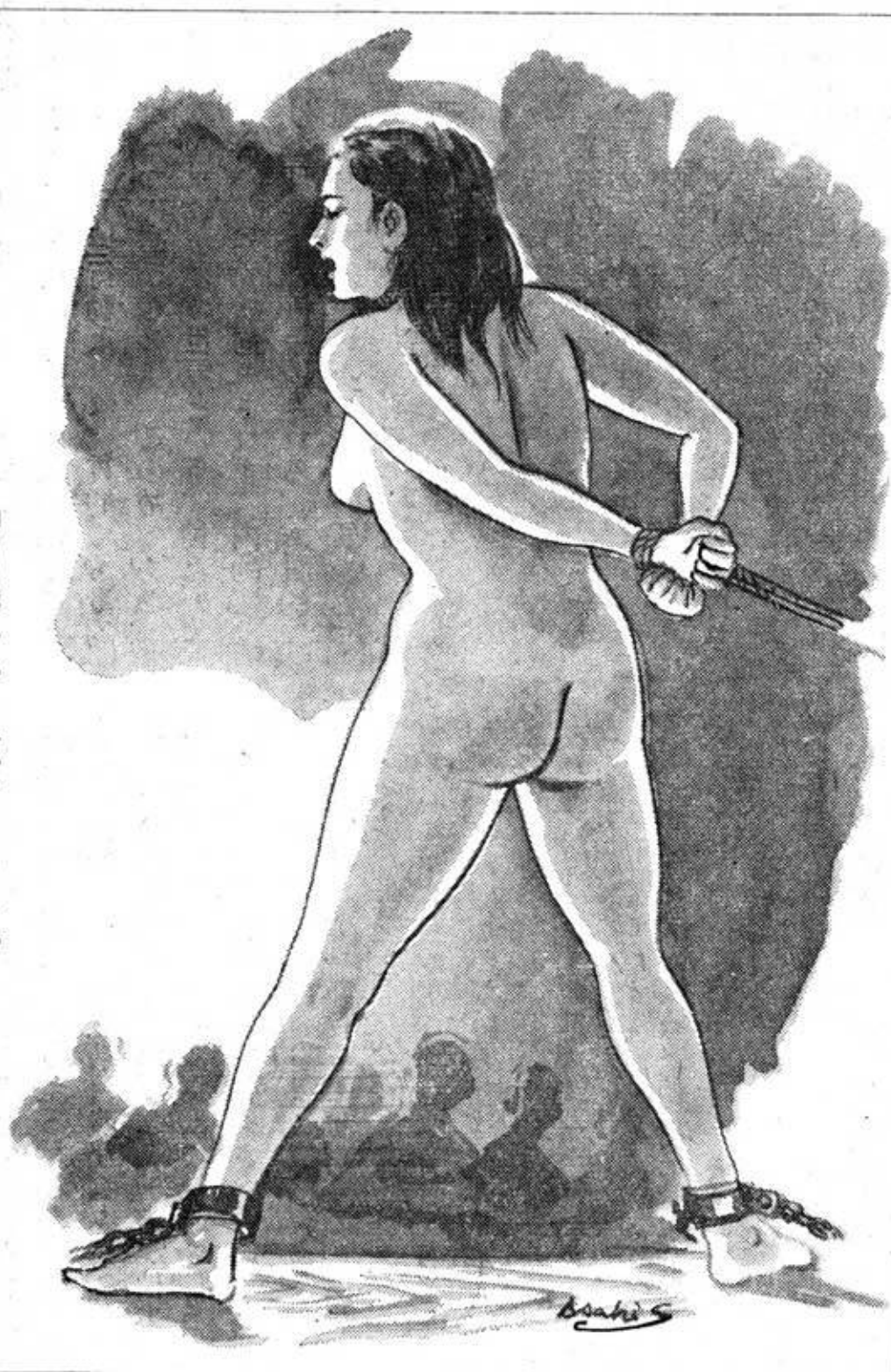
2、性的異常とは

この詩を読んで貴方は、恋人二人のやさしい愛の交歓を感じますか。それとも、みだらな異常な本能的行為とみなしますか。おそらく一切の外的拘束から自由な二人だけの愛の世界をのぞいたと思っっているのではないでしょう。我々には一見してアブノーマルな愛の仕草も、愛し合う二人のひたむきな愛情に

よって昇華され、ノーマルな行為として許容しようとする心の動きがあるのではなからうか。ここで、性的ノーマルとは何か、アブノーマルとは何か。どのような差異が、あるのか。それらを考察してゆくことにしよう。

性欲を、獣欲と一口に呼ぶならわしがあるが、この表現は正しいものであろうか。性欲

イコール獣欲と考えるのは、人間の性欲を獣のそれと同列に置くことである。いいかえれば、性欲は、本能のみに根ざすものと解釈されそこには旧道徳、宗教的抑圧による性欲の忌避、性欲の否定、軽視の傾向が、うかがえる。理性的動物としての人間は、性欲の面に關しては否定されているのである。果してそ



イメージギャラリー

『初舞台、裸女さらし』

須坂 旭

の通りだろうか。

性的に無知な若い男女二人が接した時、二人には当然ある性的衝動が起るであろう。しかし、体の奥底から湧き上ってきたこの衝動を、どう処理してよいか判らないだろう。これを性的行為に移行させるためには、その方法を人間は見、聞き、読み、導かれねば円満な行為は営めないであろう。思春期の性の悩み、知識欲が、いかに大きく、深いものか自分自身の体験から考えてみれば理解できることである。筆者自身、中学三年の秋、アンリ・バルビュスの「地獄」を本屋で立読みし、突然、強烈な衝撃に襲われ、本持つ手がブルブル震えたことを忘れ去ることができない。性の深遠さに驚嘆すると共に、人間の性行動が恐ろしかったのであろう。枕草紙が性教育の幼なかつた時代の、唯一の無垢な青年男女の教科書であつた事実からも、結婚前夜の驚きと羞恥に包まれて、初めて知らされる性行為の実態からしても、人間の性欲は本能のみでその目的を達成し得ないことが示されるのである。

人間以外の動物では、雄が雌に接した時、本能のままにオーガンの結合、エジャキュレーションにスムーズに進み、種族保存の目的を達する。人間は他の動物に比して、五感と同じく性本能も衰退している。これを補うため理性の活動としての学習が必要になってく

る。即ち人間が種族保存の目的を達するには理性なしでは達成できない。理性が関与する以上、そこには創造がある。人間の性生活が本能だけの獣の性行動よりは、質的にも量的にも、はるかに豊かなのは、この故である。

男女二人だけが愛の世界という、相互のエゴを認め合い、外的に拘束されず、内的には二人だけの理性にのみ束縛される、本質的に自由な場においては、色々な形態と質をもつ性愛の可能性を追求できる必然性をもつ。しかし、理性は無限に自由な訳ではない。種族保存という究極の目的達成のために、人間の衰退した本能を補足するという前提条件がある以上、最終的にオーガンの結合、エジャキユレーションを伴わない性愛の形態はノーマルの範囲を脱することになる。例えば、二人の男女間でフォア・プレイとして、尻を打ち緊縛、拷問という形がとられたとしても、互いのエゴとエゴとが認め合われ、やがてコイタスに向うものであればノーマルであるが、一方のエゴが他方のエゴを一方的に否定して最終目的が尻打ちであり、緊縛であり、拷問であって、男女の結合なくして終るのは、アブノーマルなのである。我々が犯し易い誤ちは、男女間の行為に単に現象面だけを捕えて尻打ち、緊縛、拷問をするからアブノーマルだということである。我々は人間の行為を本質的に捕える努力を忘れてはならない。

3、緊縛プレイについて

人間は本能の衰退故に理性の自由な創造による、一見、異常とも見える行為を持ちこむことによって、性生活は豊かなものになることを確認してきた。ただし、一方が他方のエゴを尊重せず、終局に男女の結合を伴うこともなく、手段が目的に転換される時においてはアブノーマルと言わねばならない。

理性は想像力を駆使し、創造するが故に、多種多様な性愛生活が存在し得るであろう。ハブエロック・エリスは「性のあり方には、ただ一つの型しかないのではなく、人の数ほど多くの型がある、といったほうが真実に近い」といい、ヤスパースは「正常であるということは、同時に精神の貧困を示すことである」と言う。尻打ちや緊縛が性愛生活の中に滲透してきているのは超自我が、これらの行為をノーマルなものとして受けとめるようになってきているのかも知れない。

奇クは戦後の出版界に特異な存在として、一方では継子扱いにされて、ながらえてきているように見える。筆者は奇クに所載されているプレイアーのプレイ観を抽出することにした。ノン・フィクションであっても作者のイメージを通して語られる以上、フィクションに介在する作者の思想はプレイの経過の説明よりは真実に近いと思われる。内容はS

的、M的なものが主題になっているけれど、結論としては、逆説的に聞えるかも知れないが、そこには非常にノーマルな人間像を見出したのである。

例一、安井喜久子「私達夫婦の甘い秘密」(四三年三月号)より。

「苦痛の中から——満足し切った夫の姿を見た時、私は幸福感で、いっぱいになってしまします。これはどこまでに夫はこの私を愛してしてくれる、と肌に痛く感ずる」「夫の喜ぶ姿を眺めて辛抱しているうち、いつしか、私もムチ打たれることを喜ぶ女になってしまったのです。ですから最初、私が夫以外の男性からムチ打たれたとしたら、結果は大分、違っていたかもしれません」「ピシッと肌に弾む鞭。そのときの肉体的な苦痛もさることながら、あの〇・五秒の空白を待つ精神的な苦痛。それは次に襲ってくる鞭打の肉体的苦痛以上に私の気持を圧迫します。私は、まだMではないのでしょうか？ 只、愛する夫に迎合するために、夫の趣味に合わせてMを仮装しているだけなのでしょうか。私は時間と努力で夫の期待する妻になりたいと考えているのですが……」

例二、「妻よ薔薇に似て」 辻村 隆
(四二年一二月号)

強烈な緊縛プレイの後の田宮寿子さんと筆者との対話

「所詮、女は受身なんです。変形的な愛情だけれど、ご主人は必死で今、奥さんを愛しているらしい。それはプレイをしない時の旦那さんの在り方で、奥さん自身、一番よくご存知でしょう」「それはもう、よく……」

「でしよう。理解のない他人が、もし知ったら、たまげるかも知れないけれど、お二人のご家庭をお二人で創られた。そのお二人の日常が、ピッタリと息の合った過し方ができる——変型であろうがなからうが、お宅の内だけのことなら、それが即ち幸福というものじゃないですかね——」

例三、「縄は知っている」 辻村 隆

(四二年五月号)

SMプレイというところ、プレイは遊び、遊戯、たわむれ、勝負だよ。それで割切っていると思うのさ。人生の表だけを追求する人に裏のこのプレイの味を知らない人は実に多い。だから夫婦のみで汲々として、挙句の果てに倦怠期となって、離婚だの、というさわざになるのさ。冷たい夫婦、真に相手を理解しない夫婦にプレイは介在しない。所詮はうわべだけの、ごくつまらない牝と牡との寄合世帯で終わってしまうのさ。お互いに相手を信じあってこそ、夫婦のプレイは成立するんだと思う。

これらの例を一読して感ぜられるのはプレイの基礎をプレイヤー相互の愛情に置いてい

るということである。形の上では、緊縛、猿轡、拷問にも似た責めと非情な道具立てが揃っているが、相手のエゴを傷つけたり、踏みにじったりする事実は少しもない。能動的プレイヤーの夫は緊縛フォトに、愛妻の名称を冠して提供するのである。(新田英雄氏「愛妻ゆうこのプレイ・ポーズ」第一連の緊縛フォト参照) 受動的プレイヤーも鞭の下で夫の愛を信じ、二人の愛の世界を創造するために苦痛を甘受しようとするのである。このプレイヤーが若し夫以外の男性から鞭の洗礼を受けたとしたら、それは残酷な拷問となるに違いない。ずい分、昔の奇クではあるが、吾妻新氏の夜光島(最終回)には孤島に夫と二人の愛の巣をつくった登枝が夫の不在中、男に緊縛、猿轡され、鞭による尻打ちをされる場面が描写されている中に「この獣になにがわからう。登枝は建次郎(登枝の夫)を思い浮べた。鞭一つにこれほどの歓喜と苦痛のへだたりがあるのは奇蹟だった。私はあの人に愛されている! その愛が私の目を開いたのだ——いまは、ただひとりの男にのみ私はマゾヒストなのだ」という登枝の詞がある。マゾヒストと自認していた妻が、よそ人から責めを受けて、突然、捨て去ったはずのエゴが健在なのを知らされるのである。真のマゾヒストならエゴを完全に捨て去って置かねばならない。不特定多数の人間の共有物となって鞭

の激痛の中にさえも歓喜を見出せるように、ロワシイ館で調教された、マドモアゼルOこそ真のマゾヒストである。安井夫人をはじめ奇クに所載されたプレイヤーの大多数は己れ自身をマゾヒストと思ひ、マゾヒストになろうと努力するなかにも、エゴを放棄した姿はどこにも見当たらない。それができない所にプレイのノーマル性があり、プレイの本質的にもつ限界がある。

辻村氏のもつプレイ観、プレイ哲学は前出の例に見られる如く、筆者の持論をズバリと喝破している。更につけ加えることもない。

寺宇治久美氏の「憎縄の記」(四二年一月号)は筆者の結論を裏側から支持してくれていて。即ち、この告白での夫のエゴは妻のエゴを認めようとはしない。エゴの闘争あるのみである。相互のエゴの理解、共同の創造がない所にプレイは破壊され、消滅してゆくことを立証している。

ともあれ、プレイは世界的な性の開放——性革命——という大きな潮流の流れの一つであることに間違いはない。

本文を書くに当たって資料を得た、参考図書は次の二書である。

沢登佳人、他 性倒錯の世界 荒地出版社

H. Jones Spanking: sex or sadism?

Brandon House Book

連載・時代S小説

紫

蘭

の

門

(36)

カット・岡 たかし



正覚坊の首

「この男の詮議は、あとにせい。それよりも

奇妙な機織り台のような責め道具に手足を
 拡げて「土」の字の形で、はりつけられてい
 る操は、一騒動のあと連れこまれてきたのが
 次郎吉であるのを知ると、いったんはフラ、

ほれ、タイマイが、早う早
 うと、せがんでおるではな
 いか」
 十重二十重に縛りあげら
 れ、猿ぐつわまで噛まされ
 て部屋の柱に縛りつけられ
 ている鼠小僧次郎吉にはチ
 ラツと目をやっただけで水
 野出羽は、正面の操を、ま
 じまじと眺めた。

風 流 極 道 軒

ここで、

総ては事もなし——と言うか
 それとも、国家大乱、天の命の
 革^{あらた}まるのを待つか——四十歳
 四十歳、この天と地の岐^{わか}れ路

フラツと気を失った。

気を失ったままのほうで、どれほど幸福で
 あったろうか——。

即座に介抱されて意識は回復したものの紅
 蓮の炎につつまれたように全身が燃えた。
 こともあろうに、このようなところへ、次
 郎吉さんが、しかも、どうやら小吉を掠おう
 としたらしいことも水野たちの会話から察し
 がついた。

(次、次郎吉さん！ ど、どうしてこんな所
 へやってきたのよう！)

心の中で何度、絶叫したことであろう。
 が、その操の、もの狂おしいまでの嘆きも
 「水野さま。では、このタイマイを」

という肥田の言葉でたちまち中断された。眼の前に、二尺の長さの甲羅をもつタイマイが、のそのそと歩みよってくる。

「ア、アアアウ……」

スッポン責めのときより一層に凄愴な、地獄の底から洩れるような呻きであった。

（地獄……まったくここは地獄にちがいない……こ、このようなことが、この世にあるはずがない）

高田の馬場で次郎吉とすごした三日間の天国のような生活が臉をよこぎる。

（ど、どうすればよいのよう、次郎吉さん。あなたのまえで、こんな姿をさらすなんて、いったい妾は、どうすればよいのよう！）

透明な黄色のところどころに暗褐色の雲彩をうかべたタイマイの甲羅が迫り、扁平の足

前号まで——戌夜のロザリオはどこにあるのか。天保四年の春、鼠小僧次郎吉が逮捕され鈴ヶ森でお仕置をうけようとしているが、次郎吉の初恋の女・操は、夫のために水野出羽たちに献上されて、タイマイや正覚坊を使って責め罵られてゐる。はたして朱鞘の浪人は、二人を救い出すことができるであろうか。一方、その頃、元禄屋は、貴子を春の雨の中で責め始めていた。

に、バサツと左腿をたたかれた操は、身を縮めた。いや、縮めたつもりであったが、横にのばされた両手も、ほぼ一直線になるくらいに伸ばれている両脚も、どうにもなりはしなかった。

「ア、アッ！」

タイマイの鼻のさきが内股にふれた。

「ヒ、ヒアッ！」

濡れたその感触は、形容できないおぞましさに操の産毛の一筋一筋をうち震えさせた。

三味線糸で口の上下を括られているとはいうものの首の動きは自由である。しかもその黄色い糸のまわりには、なにかの軟骨でできていると思われる一寸ほどの突起が、いくつもつけられていた。

径一寸、尖太りの中細みというのであろう付根に行くほど細くなっている首が、太腿のつけねのあちこちに触れて、そのたびに操はヒク、ヒクツと肩を上下させ咽喉を、のけぞらせた。

「まさしく、ほどよいものじゃな、肥田」

「そのつもりで選んできたのではございますが。それ、それ！」

けしかけられたタイマイは、張子の虎のように振っていた首を、どこに進めるべきか、

やっと覚ったように、前肢で青畳を、ひとかきすると、ス、スウーッ……と前にでた。

鈍い陰気な音とともに操の紅唇から湧きおこった悲鳴は、なんに例えようすべもない。

つづいて、

ギリ、ギリッ——という響きがしたのは、全身を貫く疼痛を耐えるために操が必死で奥歯をかみしめた、せいであつた。

乳首のほうにいくに従って、いくらか上にそった豊かな乳房が、脇腹が太腿が、大理石の彫刻像のように硬直し、うごくものは、ただ下腹の黒々としたものだけであつた。

眼前に、恋しい女のアまりにも無残な姿を眺めさせられて、次郎吉の五臓六腑は煮えくりかえった。よりによって、このような邸へ忍びこんだ自分を、どれほど恨めしく思ったことだろう。

（操……許してくれ！）

しっかりと閉ざしたはずの眼蓋が、操の呻きとともに、どうしても開く。

（操……操！）

地獄の責めが血走った目にうつる。ム、ムムム……猿ぐつわのなかで呻いて眼蓋を閉ざす。と、ふたたび聞えてくる悲鳴に、いたたまれなくなって目を開く。

そんな動作を次郎吉が狂ったように何度かくり返したときであった。

あきらかに操の叫びの調子が変わってきたのである。あれほど苦悩にみちていた響きに嬌めいた調べが加わり、それが、すすり泣くような鳴咽に移る。と、次の刹那、我が身をふるいたたせるように声高く「お、お許しを！どうか、許して下さいまし！」と叫んだかとおもうと、次には、ながくながく尾を引く忍び音にもどる。

操は、耐えていたのである。最愛の人である次郎吉の前でだけは、せめて女の痴態を見せまいと齒を喰いしばって戦ったのである。しかし、所詮は、操も女。タイマイの首だけでなく一寸はあろう軟骨の突起のついている輪にまで責められては、意志ではどうにもならない官能の炎が、めらめらと足の爪先から胸もとへと、つきあげてくるのを防ぐことは出来なかった。

「ア、ア——、ウ、ウウ……ウ！」

その変化をみてとった水野は、いよいよアオウミガメの出動を肥田に命じた。

アオウミガメ——体長はときとして八尺はこえると云われるが、いまタイマイに代って操のまえにひき出されたのは五尺ほどの緑色

の甲羅に黄色い斑点をうかべ、ながい首と短い尾をもった精気あふれるやつであった。

「酒をそそいでつかわせ」

満足そうに云う水野の声に応じて林大学頭がアオウミガメの頭の上で徳利を傾けようとする、

「おろかな、そこへかけて何とするのじゃ」

「す、すると、どこへ……」

「昌平坂学問所では、このようなことを教えぬとは思われぬぞ、林。クッククツ、あそこじゃ。いまから正覚坊殿が、そこへ飲みに参られるのよ」

ハッと気がついた林は、

「これは、これは私としましたことが」

と頭をかくと、「操殿。酒をのませてさしあげよう。ただし、口からではのうて、下の方へな。たっぷり、しみとおらせて進みましょうぞ」

生きた心地もなく、ぐったりと、うなだれている操の黒髪を驚づかみにして、いよいよ羞恥心をあおると、やおら、縮めることもできない操の内股のあわいへと徳利の酒を何本となく注ぎこんでいくのであった。

「土」の字に、はりつけられた女体のすみずみが酒の芳香につつまれると、肥田がアオウ

ミガメの甲羅を、たたいた。

この亀は、さきほど水野が正覚坊とよんだとおり酒が大好きである。三味線系でタイマイと同じように口を括られて開くことは出来ないが、鼻はすぐに、その匂いに感づくであろう。そして、女体のどこに一番、その匂いがしみこんでいるかを、かぎとるであろう。

「さあ、行くのじゃ。正覚坊！」

声をかけられると、もそつと前肢が、うごいた。

「フッフッフ……」

ついでしたがた操の精気を吸いとったスツポンが、早速、料理されて大きな皿に盛りあげられているのをつつきながら水野は、面白くてたまらぬというふうに含み笑った。

もそつ……もそつ……と正覚坊が大きな首をふりたてて前に進む。首廻りの太さ、その長さ——はたして操は、その攻撃に耐えぬことが出来るであろうか。

タイマイによって点された官能の疼きのうえに、正覚坊の巨大さに対する恐怖がまじりあって、操は、ただ、うちふるえていた。齒の根が、ひとりでにカチカチと鳴った。両足の指が、内側にギューツと押し縮められた。と、正覚坊の首がニューツと、のびる。

「ヒ、ヒイ……」

あとは生唾とともに咽喉のおくへとのみこまれてしまったと思われた絶叫であったが、

それも束の間、もう一度、正覚坊の頭部がもちあげられ、斜め上へと突進したとき、つんざくような悲鳴となって、よみがえった。

部屋のなかがシーンと静まりかえり、さすがの水野までが、口にはこぼうとしていた盃を途中でとめた。

「ウ、ウウウウ……」

甲羅をビクともさせず、ただ首だけを左右に振りたてる正覚坊の淫らとも形容したいような動作――。

悲鳴が、急激に嗚咽にかわり、あとはもう操は、なんのためらいも見せず、官能の渦巻きのままに、のたうち廻るのであった。

見世物として

襖のすきまからいままでの一部仔細を眺めていた操の夫の四郎兵衛が、やっと姿を見せたのは、それからまもなくの事であった。

三尾の亀に、女のあさましさを限りを見せた妻を見おろしたあと、なにやら水野と耳打ちをしていたが、徳利と盃を手にして進みよ

り、

「操。気分はどうじゃな。随分と楽しませてもらったようじゃが」

「あ、あなた……」

「御苦労じゃった。水野さまも大変に喜んでおられる。さあ、いっぱい」

盃の酒を強引に妻の唇にながしこんだ四郎兵衛は、

「これで許してやりたいが事態が変わってな。

あらたまって尋ねたいのじゃ」

ジロリと冷たい視線を次郎吉に注ぎ、

「この男とどんなかわりあいがあるのか。

いったいこの男は、誰なのじゃ」

十数年ぶりに四郎兵衛をみたとき次郎吉がまさか、この男が――と思ったのと同様に、四郎兵衛も、また忍び装束のまま縛りあげられ猿ぐつわまでかまされているのが、幼い頃操をめぐって争った小田原在は飯能村の次郎吉であるのに気づいていないらしい。

「存じま……せぬ……」

「ならば、なぜ、小吉を盗み出そうとしたのじゃな。儂とお前との間の一粒種じゃというのに」

次郎吉の胸に疑惑が走った。あのこどもは俺のこどもではなかったのか。

が、その瞬間、わが身の恥かしさも忘れてこちらを見つめる操の瞳には必死の願いがこめられているではないか。

やはり、俺の子――俺と操との愛の結晶なのだ。ただ、操はそれを夫の四郎兵衛に隠しつけているらしい。よし、それならば――次郎吉は、たとえどんなことがあろうとも操との関係を隠しとおす覚悟をきめた。

（大丈夫だ、操。安心してくれ……）

なにが大丈夫なのか、なにが安心してくれなのか。このようなザマは、いったい何だ。鼠小僧！ と別の声が自分を叱咤したが、この場合、せめて、そう誓うことだけが、ただひとつの慰めでなくてなんであろう。

次郎吉は、それでよかった。八つ裂きにされても白状しないと決意すればそれでよい。

しかし、操はそうはいかない。

「あくまでも知らないといい張るのだね。そうかい、そうかい」

どうやら水野に、いままでのカメラ責め以上の見世物を見せることによって、より自分の立身出世を企んでいるのだろう四郎兵衛は、酒のせいで、ほんのりと色づいてきた操の頬を指でつつきながら、

「ここには、水野さま、肥田さま、林さま。

それにあの盗賊とこの私と五人の男がいるのだけどねえ。そのまえで、フッフッフ、騷りものにされてもいいのかえ、操」

「な、な、なぶりもの……」

「そうだよ」

操はなんと答えてよいのか、わからなかった。夫の目のまえで赤裸にされた身を多くの男たちに曝していることだけで、なぶりものにされているといつてよいのに、そのうえ、スッポン、タイマイ、正覚坊と三尾のカメにまで騷りものにされたというのに、これ以上どんな騷りかたがあるというのだろう。

「あ、あなた！　あ、あなた……」

ひどい夫だとはわかっていたが、喜悅にのたうったばかりの妻を、さらに、いたぶろうとは何という外道なのか。

「そう怒った顔をするものではない。どんなことがあっても私はお前を離縁などしないからね。まだまだ、仕事をしてもらわなくちゃあならないし……フッフッフ、ただし私はお前のほかにも女はつくるつもりだがね」

「もうつくっていらっしゃるくせに……」

相手が夫であるだけに、つい話を合わせてしまった操は、ハッと顔をそめた。

こんな男に返事などしてやる必要がどこに

あるのか！

「もう一杯、どうじゃ。これからの責めは、酒でも飲んでいなくては、とてもとても」

今度は、操の鼻をつまみあげて、思わず開いた唇のなかへ徳利の口からドク、ドクッとまる一本の酒を、ながしこんでしまった四郎兵衛は、むせかえる操の背をさすってやり、

「このお邸のお侍さまたちがの」

と、いったん言葉をきってから、

「お前を是非、抱かせて欲しいと仰言っておられるのじゃ」

「な、なんでございますって！」

「相手はお侍。おことわりもできんじやろ」

あつけにとられて夫の顔を見つめていた操は、やがて、

「外道……外道でございまするか！」

血を吐くように抗った。

「なんじゃと、もう一度、申してみい。外道とは妻たるものが主人に向って吐く言葉か」

「こ、これが外道でなくて、これが地獄でなくて、どこに地獄がございましょう」

「フッフッフ、地獄じゃと。さっきは極楽浄土をさまようようなうっとりした顔をしておったではないか。一部始終みておったわ」

操は、唇をかみしめた。姿が見えないと思

い、せめてもそれを救いとしていたのに盗見されていたのか。

パァーッと思わず唾を吐きかけたのも酒の酔いにたすけられてのことであろう。ふだんなら、とてもそのように、はしたないことのできる女ではなかった。

「フッフッフ……」

冷たく笑って額にかかった唾を拭った四郎兵衛は、赤裸で「土」の字型に縛りつけられている妻の姿をひとわたり見廻してから水野たちのほうを振り返り、

「ぶざまなところを、お目にかけました」

「いやいや。経世家として名の高い四郎兵衛殿でもお内儀には頭があがらぬと見えるの」

林が、たからかに笑ったが、そのとき、襖

の外に、ひしひしと侍たちが、つめよせる気配がした。それを知った四郎兵衛は、

「さあ、操。よい機会じゃ、存分に、かわいがってもらうがよい」

と操の耳元で、ささやいたかと思うと、懷から手拭いを取り出し、口中深く押しこんだのは、万に一つ、舌を噛まれては——という配慮からであろう。

「ム、ムムッ……」

激しく首を振りたてたが、手首足首を縛っ

た縄が、ただギシ、ギシッと鳴るだけで、操には、なにひとつ、逃げのびる方法はなかった。

林が襖を開く。

「殿。およびでござりまするか」

十数人の侍たちが、いっせいに平伏した。

「ハッハッハッ……」

破顔大笑した水野は、

「さきほど、この盗賊を捕えた褒美じゃ。あの女を存分に抱くがよからう」

「ありがたき幸せ」

いっせいにあげられた顔が、獲物に向けられると、「おう……」というどよめきが湧きおこった。女を抱かせると通知されてはいたもののこのように無残な恰好にされていようとは。だが、乱れた黒髪のかかる肩の肉といい、脇腹といい、豊かな乳房のふくらみといい、稀にみる美形である事は、すぐ知れた。

「よいな、無礼講じゃ。余に遠慮せず自由狼藉に振るまうがよい」

「ハ、ハッ！」
もう一度、平伏した侍たちは、われがちに操にとりつくと、機織り台に似た責め具から解放し、必死の抵抗をかるくあしらいつつながらたちまち部屋のまんなかに大の字なりに押え

こんでしまった。

「散々、翫ってください。骨の髄まで責め苛んで二度とこの私に口答えなどできないようにして下され」

四郎兵衛の言葉など耳に入ろうはずもなく数本の、いや数十本の手が同時にのびて、操の裸身がぐねった。

せめて外道のような夫が見ているだけならば救われるかも知れない操であった。

次郎吉がいた。

心から愛している次郎吉の眼下で、操は、犯されつづけていったのである。

鼠小僧が八人

鈴ヶ森のお仕置場——北町奉行所の与力黒尻善内の太刀が春陽のなかで閃いた。

呻きひとつたてない次郎吉の胸のあたりがみるみる真紅にそまった。

かたわらに控えていた忘八者たちが、そのあたりの囚衣をむしりとると手にした塩を傷口に、なすりつけた。

「ム、ムウ！」

四天王の縄掛けに縛られた軀を僅かに右によせたのが次郎吉のたったひとつの身ぶりで

あった。

（な、なんのこれしき。伝馬町の拷問に較べれば、たいしたことではないわ！）

確実に十五人の侍たちに犯された操が、意識があるのかないのか恍惚とした表情でよこたわっているのを目のまえに、伝馬町の牢獄へと引たてられた次郎吉は、ここで厳しい詮議の一年あまりを過したのである。

忍びこんだ札差・蔵元・大名屋敷九十八カ所、盗んだ黄金二万四千五百九十両については白状したものの、二宮四郎兵衛並びにその妻・操との関係は遂に何ひとつ、しゃべらなかった。

二の太刀が肩口にとび、ピューッと噴出した血潮をあびながら忘八者たちが塩を塗る。その塩が、またたくまに赤く染まった。

木っ端役人が、黒尻に代ってすすみでると三の太刀、四の太刀と斬りつけていく。

御定書百ヶ条にもない残酷な処刑をうけながら次郎吉は、あのととき、あの旦那が話してくれた中国は明の方孝儒という男がなぜ一族一門の死を賭けてまで「義」を選んだのかわかったような気がした。

俺は、自分のためには生きなかった。俺に与えられた運命のままに、せいっぱい人々

イメージギャラリー

『殺したい程可愛い女房』

岡 たかし



のために尽した。そして、操のためにも少しは役に立ったかも知れぬ。

「節操なんてものは男が生命をかけるほど大切なものじゃあない。ただ自分自身のためにだけ生きて行けばよい」

というあのときのあの旦那の言葉は、逆説だったのだ。地獄をこの目でみた男が、とき

に奏でる素晴らしい「逆説」だったのだ。

傷口に次々と塗られる塩のいたみが、次郎吉を次第次第に痛めつけていく。

な、なんのこれしき！

クワーツと見開いた両眼に、飯能在での幼頃の生活がうかんだ。

第五の太刀が今度は太腿にきた。

クソッ！

歯を喰いしげると耳元で操の声がした。

(あなたのお嫁さんになるの、わたし)

あのときは、桜の花びらを煮つけて食べた。飯能から酒匂川を下って三里二町——海まで必死で走り、荒塩をつくり、操に食べさせてやったっけ。

息をひそめて見守っている数百人の群衆の頭上にも、そして全身、蘇芳のようにそまった次郎吉の躰にも、ひらひらと桜の花びらが舞い散っていた。

黒尻善内が顔をひきつらせて六太刀めを浴びせるために身構えた。今度はどうやら脇腹を狙っているらしい。

と、そのとき、次郎吉は、誰かが爛漫と咲き匂う桜の下枝をゆすったのではないかと訝った。それにしても、

まるであたり一面が、方四町余が、桜吹雪に包まれてしまったとなると——

突如、「ギューオオ！」という動物の悲鳴と「咄！咄！」という凜とした懸声を耳にした次郎吉は、

「ア、あ、あの旦那だ！ あの旦那が助けにきて下すった！」

淡い桜色の吹雪のまにまに、見えかくれす

る朱鞘をみとめ、あとは、まるで七彩の虹に
つまれたように意識がもうろうとしてしま
ったのであった。

翌々日――

稀世の大泥棒・鼠小僧次郎吉が、鈴ヶ森で
御処刑を受けたという瓦板が江戸の町々にひ
ろめられていった。

天下のお尋ね者がお仕置場から誰とも判ら
ぬ浪人に奪いさられていったなどどうして
公表できよう。まして与力がその身代りにさ
れて死亡したなどと云えば北町の奉行・矢部
駿河守正綱の首がとぶ。

「お前さん、みごとだったわねえ。妾しやハ
ラハラしていたよ」

「甲賀忍法・桜吹雪。そのなかで次郎吉と黒
尻善内をとりかえたのは、まあまああってとこ
ろだろうよ」

虹の陣兵と洗い髪のお妻であった。

救い出した次郎吉を、湯島の隠れ家で待た
せてあった操と逢わせたのち、西国へ旅立つ
次郎吉を見送っての帰りであった。

「あの二人、結局、結ばれなかったのだねえ
お前さん」

あの旦那と尊敬措く能わざりし虹の陣兵に
救われた飯能生れの鼠小僧次郎吉は、同行を

願いつづける操を夫・四郎兵衛のもとに帰し
小吉の養育を頼んだあと、六郷の渡しをこえ
て箱根から西へ、四国へと旅立っていった。

生命はすでに捨てていた。天下の謀叛人であ
る以上、安穏な生活はのぞむべくもない。
同行しても操や小吉に苦難をかけるだけであ
る――男一人、とことんまであの旦那のため
に、そして世直しのために働く。次郎吉は
胸裡深く、誓って出発して行った。

「お前さんも忙しいからだだよねえ、鼠小僧
が八人もいてごらんよ。大坂に一人、熊本に
ひとり、蝦夷地にひとり、京都にひとりに、
それに奈良に、仙台に越後の柏崎に、そして
いま伊予の宇和島とかへ一人おくりこんで」
「ハッハッハッハッ、鼠小僧次郎吉が八人も
いちゃあ、なかの一人や二人が死んだところ
で、どうってことあるめえ」

陣兵、得意の逆説であった。勿論、お妻、
これを見ごとにくける。

「そうだとおねえ、お前さん。人間の生命な
んてチリアクタのようなものだよねえ。死に
たいやつは死なしておくがいいのよ、ねえ」
「そうだとお。弱肉強食、強いやつが弱いや
つの肉を喰う何の不思議があるものか。とこ
ろで、お妻。あの二宮四郎兵衛という男」

あとは云わせなかった。

「いい男だよねえ。立身出世のためにあらゆ
るものを犠牲にする、まったく立派だねえ。」

操とかいう女のひとはバカだよねえ」

「バカ。操のどこがバカなのだ。バカ」

「お前さん。いやだよ、そうムキになっち
やあ。妾しや、鉛（しず）を付けてる女じゃ
あないか。わかっておくれよう」

鉛（しず）とは、微風にきものの裾がめく
れても女の身を守る最後の布だけはと、湯文
字の裾に縫いこむ八つの鉛のことであった。

「バカ」

陣兵は一言いうと、さっさと海の香の匂う
浜辺から街道へと戻っていった。

「お、お前さん。お前さんったらア。紫蘭の
門には桜の花びらがよく似合うって、ほんと
かしら。ねえ、お前さんったらア。妾じゃあ
駄目なのかええ」

桜の花が、はるかに、かすむ富士の山裾に
たなびき、春雷が轟いた。

その春雷を徳夜叉は、富士は宝永山、いま
を去る百五十年前、時の政治正しからざるに
よりて、天怒り、地叫んだときに噴出した、
山の頂で聞く。

「闘いこそ我が生命なるか」

白綸子の着流しに献上博多の帯をしめ、無造作に荒縄でつつんだ黒鞘の大小を落し差しにした徳夜叉は、ゆっくりと火山泥岩の道を駿河湾へと下っていった。

春の雨

その同じ春雷を元禄屋も聞いていた。

それは、確かに戦闘への前触れのように感じ、そして悟りはしたが、表情には何の変化も起ってはいない。

「貴子や。『穴』という字には、まだほど遠いと思うがの」

日本橋の本宅で、元禄屋は、貴子を相手に「漢字責め」に興じながら、忙中の閑を久しぶりに味わっている風情である。

甲・乙・丙・丁と豊太閤の遺した五夜のロザリオのうち四つまで手に入れたものの、あとひとつは、どこにいるのかわからぬ徳夜叉の手中。のんびりと「人生夢幻」の一時を楽しむべく、昭吉と和吉を介添えに貴子を次々と「漢字」にかたどらせていた。

品川のお仕置場——俗にいう鈴ヶ森の処刑場で、突如、湧き起って数百人の見物人たちを押しつつんだという「桜吹雪」の話を、い

くら昭吉からきいても、ただ、（それは面白かったのう）というだけで、いっこう驚いた気配も見せない。その元禄屋が、

「昭吉どん。それでは、まだ左脚の開かせかたが少ないのではないかな」

と、白蘭の花の精が、女となって生れてきたような貴子の裸身に向うと、いきいきと驚のような眼を閃かせる。閃かせるといっても獲物をみつけたときのそれではなく、まるでこどもが貴重な玩具を得たときのような雑念のない喜びにみちた顔であった。

「旦那さま。もうこれ以上、お開かせになりますと、はり裂けてしまいます」

「なんの、なんの、昭吉さんや。まだまだ貴子の太腿は開くはずですよ」

坪庭というのであろうか。一方を母屋の壁に、左右を高い建仁寺垣にかこまれた三坪ほどの小さな庭であった。何をかたどったものであろうか一面に敷き詰められた白砂に大小五つの青石が置かれ、サルスベリの老木が鄙びた風情を、ただよわせている。

貴子は、いまそのサルスベリの下枝を利用して「穴」の字のように縛られつつあった。背負わされた青竹に沿って横に伸ばされた両腕は、手首のあたりから下に垂れて、美し

い顔とあわせて「穴」の字の上部に見えたが問題は、ウ冠の下の方の字であった。

昭吉がひらかせはしたものの、大股開きになることは、かたくなに拒みつけていた。

「フッフッ、貴子や。そうかたくならんでよいのではないかな。昭吉さんとは満更、知らぬ仲でもあるまいに」

濡縁からおりた元禄屋は、紫色の湯文字の乱れをなおしてやりながら、

「いままで昭吉さんには、いろいろと世話になったはずじゃ。和吉さんと二人に木馬責めにあつたのは、いつじゃったかの」

「旦那さま。それを仰せられませぬように……」

「恥かしいのかい。フッフッフッ、ついこの間は、縛られたままで、ひとつの駕籠にのったばかり。フッフッフッ、のう、昭吉」

「ハイ、御主人さまのおいつけでしたのでつい、つい」

「ついもないわ。二人とも裸じゃったはず。駕籠のなかで何をしていたのかな」

昭吉が口をひらこうとしたものだから、

「昭吉さん。ダメ、ダメですわ。そのようなことを申しあげては」

顔を赫くした貴子が、あわてた。

「御主人さま。御内儀さまに叱られますのでお許しくださいませ」

「どうやら深い仲になったらしいの」

昭吉が幸せそうな微笑みをうかべ、貴子の顔が、いっそう赫くなってきた。

この三人、主従の間柄でありながら羨ましくなるくらいの仲睦まじさと云えよう。

「さあ、もっと開いて、貴子や」

元禄屋の手が湯文字をわけて右膝をつかむと、昭吉が「御内儀さま、さあ、お開きなさいませ」と、白砂を踏みしめている左足首をギューッと握りしめた。

さきほどの春雷が雨をよぶのであろうか。生温い一陣の風が吹きこんできて貴子の丈なす黒髪が、さやさやと青竹に鳴った。

もうこれ以上はと思われる位置まで両脚を開かせた二人は、足首をそれぞれ、かねて用意された二本の杭に縛りつけおわると、

「穴という字に、まぎれもございません、御主人さま」

「さあてな、もう少し、このあたりが伸びておらんようじゃ」

八の字はできたが今度は、ウ冠の左右の伸びが気に入らぬのか元禄屋は、そばにあった二箇の関守石を見つけると、

「ちょっと重いかも知れないよ」

と石を括った黒い縄を青竹から垂れている両手首に連結した。

関守石とは茶室に通じる道を示すための石（時と所によって大きさは違うが、普通は約四・五寸径の花崗岩）であり、縦横を十字に縛り、持ち運びのできるようにしてあるので貴子の手首に吊り下げるのに何の造作もいらなかったし、また、耐えられぬほどの重さでもない。

——この石を木馬責めにした御内儀さまの足首につけたら、さぞ面白いだろう。

あらぬことを考える昭吉の目に、元禄屋が湯文字の紐に手をかけるのが見えた。

「御主人さま。それは私に、お願いです」

「フッフッフ、貴子や。昭吉がああいつにけるけど、どうする。昭吉にとって貰うかな」

「旦、旦那……さま」

怨ずるように瞳をあげたものの、あと口をつぐんでしまったところをみると、観念したものと思つてよかった。

「御内儀さま。有難う存じます」

一步前にでた昭吉が、元禄屋に代って紫色の布を腰でとめる純白の紐に手をのばす。女の身を護る最後の布をひっぱがすという

のは何度やってもゾクゾクするほどの興奮を誘い出すものらしい。蒼白い顔をいっそう青くした昭吉は、膝を白砂におろして中腰になると、前から、下半身を抱きかかえるようにして紐をといていった。

貴子だけの香りである蘭麝の匂いが優雅にただよってくるのを、鼻をひろげて吸いこみながら、

「御内儀さま。では……」

と、羞恥にゆがむ顔を見上げながら、解きおわった紐を指先から離れた。

衣きぬずれの音というのであろうか。いや、衣と衣とが擦れあうのではなく、肌と綸子の布がすれるのだから「肌ずれ」というのが、より正しいのだろうか。ともかくもかそけきもおととともに紫色の布がおちていく。

腰から足もとまで、ほんのまたたく間のことなのだが、昭吉にとって、それはながいながい間のことのように思われる。現代風に云えば映画のスローモーション・フィルムをみているとでもいうのであろう。

紫色の布が柔らかく崩れ、生え際が見え、へそが見えたかと思うと、やがて逆さ富士の全貌があらわれて貴子が「アッ……」と低く喘ぎ、ついで、八の字にひらかれた太腿の向

う側へ、スリッと温かい空気を、ただよわせながら舞いおちていく。

「お、お、御内儀さま！」

ゴクツと生唾をのみこんだ昭吉の眼前、三寸（約十センチ）のところに、なにおおうものとなない貴子のなめらかな八の字にひらかれた内股があった。

まず、馥郁として匂ってくる香りに昭吉はわれを忘れた。

「お、御内儀さま……」

と、もう一度、まえよりも低く、呻くように言った昭吉は、白と黒との織りなす妖しい雰囲気圧倒され、次は絶句した。が、逆さ富士が、幽かにゆらいだ刹那、その頂へと思わず指をのばし、つづいて顔をうずめてしまったのである。

「ア、アッ！ 昭……昭吉！ な、なにをするのです！」

貴子は、せつない声をあげた。

「御主人さまの、お、お許しがでておりまするぞ、御内儀さま。お見せ下さいまし！」

「イ、イヤ！ イヤです！」

前正二位右大臣菊亭政房の娘にもどったかのような凜とした声であったが、まごうことなく、その調べには嬌とした響きがあった。

「御内儀さま。ひとつ駕籠に乗った仲ではありませぬか。それ、それ！」

昭吉の右手の指は、やすみなく小刻みに、うごめいていく。

無論、貴子の豊かな腰を抱えこんだ左手の指々は、背後に廻って双臀の翳りに触れ、あるいは鋭く、あるいは優しく天鵞絨（ビロード）のような内股の奥処を、まさぐり続けていた。

「アウ、昭、昭吉！ お、おやめなさい……」

おやめったら！」

「や、やめませぬ。な、なんでやめられましようか。こ、これほどの……」

あと、これほどの楽しみをと言おうとしたのか、それとも、これほどの麗しい秘苑を、と言いたかったのかは、わからないが、昭吉は、縛られた貴子を、まさぐりつづけるのであった。

そこへ、ポツツと一滴、大粒の雨が落ちてきた。

ポツンと二滴目を紅真珠のような右乳首にうけた貴子がハッと身を縮める。雨滴は石をも穿つという。一滴の雨でも数千丈の高さから落下すれば強い力をもつものである。まして三滴、四滴と、女体の二番目に敏感な部分

である乳首にうけて貴子は、昭吉のいたぶりににより、悶えとは別の反応を示した。

五滴、六滴、七滴……と次第に早くなってきた雨足に、やっと気づいたのか昭吉が顔をあげた。

いくらか上に反った乳首におちた雨滴が、乳暈をひとまわりすると、なめらかな乳房にそって、すうーッと胸もとへと糸をひく光景は、大輪の白蘭の花びらが、ほんのりと濡れていくのに似ていた。

「御主人さま、雨が……」

いわいでものことを云った昭吉が、濡れる着物を気にするような素振りを見せたのも、一番々頭としては当然のことであったかも知れない。と、

「ほれ、これがありますよ、昭吉さん」
坪庭のすみに置いてあった蛇の目傘を元禄屋にさし出されて、

「有難うございました、御主人さま」
両手でうけとり、開こうとすると、

「昭吉さん。傘は、そのようにして使うものかえ」

奇妙なことを尋ねられて昭吉がキョトンとした。傘は雨を防ぐために使うものではないのか。そのためには開かなければならぬ。

「フッフッフッ、着物が濡れることなど、いまは心配せずとも、よいですよ。元禄屋の一番々頭ともあろうものが、なんです」
不審顔の昭吉に笑いかけた元禄屋は、昭吉の手から蛇の目を取りあげると、

「傘はな、ほれ、このようにして使うのが、ほんとうの使いかたなのじゃ。覚えておきなされや」
手もとでなく尖端のほうを握った元禄屋はシューッと小気味よく、ひと振りすると、
「貴子や。ちょうどよいときに雨が降って来て、思いだしましたのじゃ。フッフッフ」



イメージギャラリ―『白豚旦那嫉妬に狂う、目下詰問中』岡たかし

傘の柄は一般に黒うるしを塗ってあるが、いま、元禄屋が貴子に向けてさし出した柄の部分は、ぴったりと籐で巻かれてあった。しかも並みの蛇の目よりも太く、握りが鉤状にまがっていた。

ハッと昭吉が気付いたが、もうそのときは遅かった。

「だ、だんな……さ……まア！」

鋭い叫びがあがって貴子の咽喉がのけぞりハの字にひらかれきった双脚が硬直した。

——ジ、ジリ、ジッ……ジャリ

白砂を強く踏みしめる素足の奏でる音であった。

「だ、だんなさま！ ア、アレッ、ム、ムウウ、ゆ、ゆるして。アッ、アウ！」

「なにか用なのかい、貴子や」

いいながら元禄屋が、ギューッと蛇の目をひとひねりすると、貴子の紅い唇が、いっそう開いて舌が、せわしなく動くのが見えた。

「昭吉さんや。おわかりかな」

「ハ、ハイ、御主人さま。よく、よく」
「そりゃあよかった。では、お前もいっしょにやりなされ。傘はもう一本あるはずじゃ」

喜んだ昭吉がとりあげたのは、同じ蛇の目傘でも元禄屋が、いまつかっている黒蛇の目

とはちがつて、傘の中央と廻りに^{しぶ}渋をぬった骨が十二本もある男性専用の渋蛇の目であった。

「フッフッフ、それくらいが、ちょうど頃合いじゃろうて。さあ、貴子。始めますぞ」

元禄屋が斜め上へと黒蛇の目を押し上げると、その右よこから昭吉の渋蛇の目が迫っていった。

雨に打たれた顔で、チラッと新しい「責め具」を眺めた貴子は、

「ア……ア……だ、だんなさま！」

口早に叫んだ。

「驚くことはない。二ついっしょでは無理だろうから、ほれ、こうして道をあけてある」

「だ、だんなさま！ ア、アッ！」

熱い吐息が頬にかかるのを感じながら昭吉は、渋蛇の目を前へ、四、五寸も前へと、つき出した。

「アレッ！ 昭、昭吉さんったらア！ ウ、

ウウッ……お、おやめったらア！」

尻上りの悲鳴とともに黒髪がバサッ、バサッと鳴った。

「ヒ、ヒアアアッ……だ、だめ！ だめですよう！ ム、ムムム……」

「貴子や。そんなあられもない声を出すもの

じゃあないよ。楽しいときには喜びの声をあげるものさ。ね、そうだろ」

鉤状の握りが深く沈むと、悲鳴がいつそう高まってきた。

「昭吉さんや。さあ、動かしましよう。いいかい、それ！ 一、二。一、二！ それ！」

チラッと元禄屋の竜文のあわせが、雨に濡れているのに気がついたが、昭吉は自分の着物と同じく、それを無視した。

そして、主人の懸声にあわせて^{しぶ}渋の塗られた傘を前後左右に、うごかしていった。

二本の蛇の目傘のうごきに繰られるように貴子の裸身が悶えた。

両手首に括られた関守石が揺れ、乳房に脇腹に降りそそぐ雨が、逆さ富士に迷いこみ、静脈をうかべた太股から股の内側へと流れ、ポタ、ポタッと白砂に垂れていく。

「一、二！ 一、二！ 左へ、右へ。一、二一二！ 上へ、下へ。一、二！ 一二！」

反応の遅い貴子ではあったが、こうも愛撫されては花開かざるを得ない。呻きが喘ぎに変わり、やがて濡れそぼった黒髪が、べつとりと、くつついた肩から二の腕を大きく波立たせて、こらえきれないような嗚咽を洩らし始める。

「貴子や。どうじゃ。一、二！ どうじゃ、よい気持になったろう。それ！」

「だ、だんなさまア！ ア、アアア……」のけぞるたびに柳の葉を、たてにしたようなへそにたまっていた雨滴が、ホロ、ホロッと下腹へと、ながれおち、昭吉が、

「御、御内儀さま！」

と激しい一撃を加えたとき、

「アッ！ ウウッ、昭、吉……昭吉さん」

ひらかれきった四肢を、力いっぱい緊張させたのが、どうやら最後だったらしく、次の刹那、貴子は、がっくりと首を折ってしまった。

顔を見合わせた男二人が、手もとにひいた蛇の目の簾巻きの柄がキラキラと濡れてひかっているのは、あながち雨のせいだけではあるまい。

「御主人さま。傘をどうぞ」

昭吉が、さっそく蛇の目をひらこうとするのを、さえぎった元禄屋は、

「濡れてこそ香りもよしや春の雨——ってな。フッフッフ、昭吉さんや、シャボンを、もってきなされや」

「あのシャボンをでございますか」

「さよう。貴子を洗ってやろうと思ひますの

じゃ」

シャボン——イスパニア語である。起源は古く古代ローマにさかのぼると言われるが日本にもたらされたのは十六世紀末。一部の諸大名、豪商たちの間で珍重されていたが鎖国とともに輸入杜絶し、年に数十箇がわずかにオランダ人の手によって長崎に、もたらされるにすぎない。

昭吉が、その貴重なシャボンをとりについているあいだ元禄屋は、ゆったりと雨に濡れるサルスベリの木肌と、そこに縛られている貴子の姿を見較べていた。

かわいい女になったものじゃ。江戸についたばかりのときには恨めしうに儂を睨みつけてばかりおったものじゃが——。

考えてみると昨年夏、前夫の押小路中納言高明が勅使として下ってきたとき、その目のまえで貴子をスッ裸にして責めつけ、悦淫の声をあげさせたが、神妙になったのは、あのとき以後のことのようにも思われる。すると貴子は、まだ、あの高明に心では惚れておるのやも知れぬ。

苦笑した元禄屋が「貴子や」とよびかけたとき、部屋の登鯉尺時計が正午を告げた。

時計の愛好者である彦根の井伊侯から寄贈

された和時計の逸品で、細長い箱の中に吊り下げられた重りが上下するにつれて針が時刻の目盛りを示し時を打つ。登鯉とこれをよぶのは、瀑布を昇ろうとしている鯉が、重りの役割をつとめているからであった。

高明をいまでも好いておるのか——と貴子に尋ねる愚かさを悟った元禄屋は、尺時計が最後の時を打ち終ったとき、いそいそでもどってきた昭吉の手からシャボンを受けとると、「清らかな雨じゃのう。まるで真清水のようじゃわ。私たちも、いっしょに浴びるとしましょう」

昭和四十九年の汚濁しきった春雨とちがって、天保四年の雨は、透きとおるほど清潔であった。もちろん飲料にもしたし、洗濯にも銭湯の湯にも、つかった。

まだ寒い季節であったが、貴子でさえ一糸まとわぬ素裸で、しかも燃えているではないか。

元禄屋よりも先に着物を脱ぎすてた昭吉は下帯一本の姿で貴子にぴったりと寄りそうと手拭いで肩から背を、こすっていく。

「これを使いなされ」

貴子の肩ごしにシャボンを昭吉にわたす元禄屋もまたキリリッと締めあげた六尺褌一本

であった。降りそそぐ雨を隆々ともりあがった筋骨で弾き返すこの元禄屋は、いったい何才なのであろうか。精悍そのものの鬚から春雨を飛沫かせながら、シャボンをたっぷりと含ませた手拭いで、せつせと貴子の裸身を洗っていく。

「後身は、昭吉。任せたよ」

「ハイ。御主人さま」

シャボンをぬりおわった手拭いで、白蘭のような肩から背柱に沿ってスウーッと撫でおろしていきながら昭吉が答える。

「だ、だんなさま！」

昭吉の手が双臀へふれた時、貴子が唇を、わななかせた。

「御内儀さま。な、なにか、私めが……」

昭吉が、あわてて手の動きをとめたが、それには何の関わりもない言葉が聞えてきた。

「だ、だ、だんなさま。もったいのうござりまする。妾が、妾が……洗ってさしあげるのがつとめというものでござりまするのに」

元禄屋の大驚のような眸がキラリと光り、

「ほんとにそう思うのか、貴子」

「ハ、ハイ……もったいのうて。ア、ア、旦那さまに身を洗っていただくなんて……ア、アレッ！ だ、だんなさまア」

「フッフッフ……」

低く笑った元禄屋は、先刻、愚問を発しようとして登鯉尺時計の音にさえぎられたことを、よかった——と感じた。

「貴子や、もっともって洗ってやろう。過去のすべてを洗いながしてやろうわ」

大たぶさから足の爪先まで、しとどに濡らしながら元禄屋は高らかに笑う。

「御主人さま。いったい、何がそんなに、おかしくて」

尋ねながらも昭吉の手は小休みもなく御内儀さまの後身を這いつづけていた。

乳房からへそへと、ゆっくりと洗ってやりながら元禄屋は云った。

「剃毛の儀式など、やらねばなるまいのう」

瞬間、貴子の春雨に濡れそぼった顔が、サア—と紅くなつたのに昭吉は気づいたが、

「そりげのぎしき」というのが、蛇の目のときと同じく、まだ、わからなかった。

「その儀式には、多くの人々を招かずばなるまい。お前は何人の客が所望かな」

「ま、まア、だんなさま！ そのようなことをどうして妾の口から……」

「何の遠慮があるものか、云うて見なされ」

「このまえも申しあげましたとおり、妾は、

妾は……ア、アレッ！ 旦那さま！」

中断されたのは昭吉が、双臀へシャボンをつけようとして、手もとが滑ったせいであった。

「旦那さま。妾は、すべて、すべてお云いつけに従います。貴、貴子の躰は、すべてが旦那さまのものでござりまする！」

「フッフッフ……かわいいことをいってくれるが……」

元禄屋の手拭いを握った指々に力がこもった。

「貴子や。フッフッフ、じゃあ、儀式の招待客は僕にまかしてくれんとして」

含み笑いは、つづいた。

「ここで、今日、ほんの少し、剃^そらして貰うとしようかの。万物胎動する春の雨のなかで初剃りをさせてもらいたいのじゃ」

「そ、そんな、旦那さま。貴子は、まだ心の準備がよくはできて……」

「おらぬというのじゃろう。よくわかっておる。がの」

関守石を取りのぞいた元禄屋は

「僕は、いま、やりたいのじゃ！」

と、貴子の雨に濡れた睫毛のしたで、人知れぬ深山幽谷の湖のように燦めいている瞳を

見つめた。

「旦那さまの……仰言ること……ならば」

「なんでも、きくと申すのじゃな」

「ハ、ハイ……」

御内儀さまの裸身——特に後身を洗うことに熱中していた昭吉であったが、「剃る」とか「初剃り」とかいう言葉で、「そりげのぎしき」の意味がわかった。それとともに、たかが、ひとつ駕籠に乗っただけでは、とうていわからぬ日本一の御主人さま元禄屋と、貴子姫との「閨の秘事」を、かいまみる思いであった。

「御主人さま。小柄^{こづか}にいたしましょうか。それとも「レイザー」にいたしましょうか」

レイザーは、シャボンとともに元禄屋が長崎からとりよせている南蛮のこづかにあたるもので、その切れ味たるや凄^{こわ}いほどのものであった。が、

「小柄じゃ。日本の女には、やはり日本の刃ものが、ふさわしかろう。のう、貴子」

「ハ、ハイ……」

縁側にかけあがった昭吉に、

「昭吉さんや。右の戸棚じゃわ」

隆々と盛りあがった胸に春雨を飛沫^{しぶ}かせながら元禄屋が、ゆったりと声をかけた。

稲妻が光った。
春雷が鳴った。

あたかもそれは、妻が夫に従うようなものだ
だと元禄屋は思った。

「貴子や」

昭吉が捧げる小柄をとってよびかけると

「だ、だんなさま。お、お好きなようになさ
りて下さいませ」

お好きなように——といった貴子の言葉で
「好」という字が、「女」と「子」という漢
字の組み合わせであることに、あらためて気
づいた元禄屋は、無言で、つめよった。

すでにシャボンのは、たっぷり塗られてま
れである。あとは小柄の刃をサーッと、ふり
おろすだけでよかった。

☆ SM画稿 募集!! ☆

☆ SM雑誌の草分けとして、二十数年の
輝やかしい歴史を誇る本誌にふさわしい
SM画稿を読者の方々から募ります。

☆ 画材は、女体責め、女体緊縛を初めと
して、女王様や女御主人の狂暴ぶりでも
結構ですし、女体切腹の悲愴美は勿論、
下着などのフェチズムに関係したもの
でも、本誌の内容にマッチするものでし
たら、お好みのものを、お寄せ下さい。

蘭麝の香りのただようその秘苑の、どこへ
いったい刃をおつけになるのだろうか——と
昭吉が見守るなかで、右手にもった小柄を元
禄屋は、スウーッと横に、はわせた。

「ア、アッ、旦那さま」

雨のために微かな音は、かき消されて、た
だ貴子の喘ぎだけが、きこえた。その唇にも
鼻にも乳房にも、しのつくような雨が降り注
ぐ。

キラリッ——と光った稲妻が、銀色の小柄
の刃の黒い翳りを、うかびあがらせたが、そ
の黒い翳りも、すぐ洗いがされるように、
白砂におちていった。

「フッフッフ、よい切味じゃわ。さすがは
菊一文字の名刀よ。貴子、期待して待つがよ

☆ 必ず自作の未発表の作品を御投稿願
います。白い画用紙に黒色のペン又は毛筆
を御利用下さい。大きさは御自由ですが
本誌の雑誌大位までが適当です。カット
的なものは半分大でいいと思います。

☆ 掲載作品につきましては、作品の出来
に相当した画料をお支払致します。アイ
デアだけの時は、鉛筆画にても構いませ
ん。奮て御応募下さるよう期待します。

△ 奇譚クラブ編集部 △

かろうぞ、剃毛の儀式を！」

仁王立った元禄屋の耳に、稲妻にともなう
春雷が、陣太鼓のように響いてきた。

「夜明けには、まだ、まもあろう。しばし、
胎蕩とした春日を楽しむとするか」

貴子の縛めをといった元禄屋は、かるがると
その裸身を抱えあげると大股に湯殿へ向って
いった。

夜明には、まだ、まもあろう——とは、い
ったい何のことであろう。夜ならば、その意
味もわかるが、まだ夕暮れに、ほど遠い午下
りではないか。うちの御主人さまは、ちよい
ちよい、わからないことを申される——白砂
におちた貴子のを拾いあげた昭吉は、そ
れを大切そうに手拭いにくるむと、ちらばっ
ている縄や青竹、蛇の目、関守石と、坪庭の
後始末をすませて、あたらしい責め場をつ
くために離れへと急いだ。

湯殿に向うとき元禄屋が耳打ちしたのであ
る——雅子も連れ出せ、久しぶりで二人を責
めてみたい——と。

黒い雲に裂目が見えて西の空が、いつしか
ほんのりと白く色づき始めていた。

——(つづく)——

エス エム かい げん

〔告白〕

S M 開 眼



中村恵美子

△奇ク愛読者Tとの貴重な一夜。通り魔

のように現われ、そして去っていったT▽

青山へ引っ越して、荷物もまだ充分に片づかないまま、どこから手をつけたらいいだろうかと、迷っていた或日のこと。突然、奇クのファンの「T」と名のる男の方が、奇ク編

集部の紹介状を持って現われたのです。どうして、ここを知ったのだろうかと、私は一瞬、びっくりしました。ここへ引っ越してきて、まだ二日とたっていないからです。

奇クの編集部へも、勿論のこと、この転居先は知らせていなかったのです。

私が奇クの「読者通信」に投稿して載せてもらったのは、47年の10月号でした。

その頃、私は夫と一年程前に協議離婚して一人暮らしの淋しさもあって、書店でふと見た奇クにひかれて、投書したのです。私のMの性格にぴったりの内容。そして、何かしら、信用の持てそうな真面目な編集内容。長く続いて発行されていることも私に安心感を持たせてくれました。それと、もう一つ。大阪に発行所があるということが、私に距離的な安心をもたせました。

私は、その頃、荒川区に住んでいました。東京に発行所のある雑誌社でしたら、厚かましい男が、すぐにでも、訪ねてきそうに思えて、心もとなかったのです。横浜より西へ行った事のない私にとって、大阪といえば、異境にも近い遠く離れた感じの土地だったのです。

私の投書は、すぐに10月号に載せてもらえました。反響もありました。そして、私の二度目の投書は、48年の2月号に、再び載せて下さいました。でも、私が希望しました奇クのモデルにしてほしいというお願いは、どうやら聞いてもらえませんでした。

27才という年齢のこと。それに、子供はな

いといつても、一度は結婚生活を経験した女であること。そして、大阪まで出向くことの出来ない私がモデルになるためには、東京まで来て頂かなくてはならないということが、困難だったようでした。

それで私は、もし、編集部の方で、この人なら私に適當していると思われる信用のおける方がございましたら、是非、ご紹介下さいませ——と、お願いしておいたのです。

そのうち、私は、お仕事の関係で、荒川区から、青山へ移転したのです。Tが奇巧の編集部から聞いてきた住所というのも、勿論、私が以前に住んでいた荒川区のものです。

それが、どうして、この青山の引っ越し先がわかったのか、私には不思議でした。

彼に、そのことを訊ねますと、以前の住所の近くの運送屋を六軒、歩いて、とうとう、私の荷物を運んだ運送屋をつきとめ、遂に、ここを探し当てたとのことでした。

私は、先ず、その熱心さと、Tの自分の性癖に忠実な執念に驚かされました。それに、彼は、どういういきさつで、編集部の方とコネをつけたのか存じませんが、わざわざ大阪まで出かけて、私に対する紹介状を貰ってきているのでした。

Tは平凡な容姿の、一見温和そうな紳士でした。彼は東京の下町で工場を経営している

者だと言うだけで、はっきり住所は申しませんでした。話しかけてみますと、常識もあり、SMに関しては深い造詣を持っているように見受けられ、私に彼とのプレイの申し出に応じてよいという気持を起させました。

至極平凡で、これといって取りたてて特長がなく、それだけに一見して善良そうな童顔の彼の眼鏡の奥に、話しかけている間も、キラリと時折り光る眼が、私には何か、サジスチックなものを匂わせるのでした。

私は、なんとなく、彼のその眼の光に魅せられて行きました。Tは熱意をこめて、私に説得するように、語りかけるのでした。

「僕は生まれつきのゴムフェチなんです。相手の女性がゴムをいやがり、その冷たい感触の中で身もだえする姿を眺めると、たまらなくなるんです。ゴムこそ、僕にS傾向を目覚まして呉れ、男の充実感を覚えさせてくれるのです。僕が女を責める時は、ゴムはどうしても欠かす事は出来ないんです」

私は別れた夫との間にも、SMプレイなんてしたことありませんし、勿論、他の男の方と交際したこともありませんでした。

自分がMの性格の持主だという自覚も、すべて空想の上でだけでした。その事は、読者通信のお便りにも詳しく書きました。夜の寝床の中で、私の頭の中に浮かんでまいります

男性にいじめられたいという妄想にも、不思議に、ゴムに密着したという想像は一度も持った事はありませんでした。しかし、彼の熱のこもった話をきいているうちに、次第に、ゴムを使って責められる事に、ある種の期待を持つ事は出来ました。

Tは、私とプレイをするのだと言って、どうしても聞きいれません。私も彼の熱意にほだされたのと、話を聞いているうちに好奇心が湧いてきて、「彼に責められてみよう」という気持になってしまいました。それで、二日後の夕刻、プレイを共にする約束を、とうとう、彼としてしまったのです。

場所は、高田馬場近くの或ホテルを指定しました。そこで待っているからTと言って訪ねて来てくれと言うのです。

その日の約束の時間が近づいてきますと、緊張のため、私の胸は息苦しいまでに高鳴ってくるのでした。Tと初めてプレイ出来るという楽しさも心の隅には、たしかにありました。でも、気心も知れないS傾向の男と二人きりで一緒になるという不安の方が、もっと大きかったです。そんな心もとなさを押して、私の足をしてホテルへ向わせたのは、やはり私のM性のしからしむる所でした。

言われたホテルを訪ねますと、やはりTは先に来ていました。二人きりで部屋に落ち着

きますと、眼のやり場に困って、私はいたたまれない気持でまごまごしました。生れて以来、こんな所へは来た事がなかったのです。彼が奥の部屋の境の唐紙を開けますと、私は、あっと声を思わず挙げてしまいました。

その部屋には、冷たい感じの生ゴムのシートが一面に敷きつめられてあったばかりではなく、数々のゴム製品が所狭ましと並べられてあったからです。ゴムの雨合羽、レインコート、フード、海水帽子、ゴム靴、ゴム紐、ゴムの管、ゴムマニス、オシメカバーなどが私の目に入りました。

そればかりではありません。私には今までに見た事もなく名前も知らない責め道具が、揃っていました。ゴム製の棒状をしたものが三種類ありました。黒い棒状の太いもの、堅そうなもの、ギザギザのついたものが大事そうに置かれてあります。それにゴム製の浣腸器、婦人科の医者を使う子宮を見る金属製の鳥の口ばしのような器具（何という名か私にはわかりません）などが見えました。

私のびっくりしたような顔を覗き込んで、にたにたとしたTは、ボストンバッグを重そうに持ってきて私に言うのでした。

「これで足りなきゃ、まだまだ、この鞆の中に沢山あるんだよ。見せてやろうか」

その好色そうな眼は、手中に入った獲物を

狙う様な残忍さが感じられ、私は思わず身ぶるいをし、ここへ来てしまった事に後悔を感じ、逃げだしてしまいたくなりました。二日前に逢った時の、あの温和そうな紳士的な目つきとは、すっかり違うのです。

そんな私の心の動きを、まるで、すっかり見通した様に、Tは「ホラ」と、私の膝の上に一冊のアルバムを投げて寄こしました。

それはTが何年もかかって、苦勞して集めたというゴム関係の写真のコレクションでした。生ゴム製のレインコートを身にまとった可愛い女性の写真から始まり、最後まで、すべて、ゴムフェチの人だったら、涎の出そうな写真ばかりでした。

私は、わなわなとふるふる指先で、そのアルバムのページを、めくってゆきました。

ゴム布で荷物の様に、ぐるぐる巻きにされ更に、その上からゴム紐で、きつく縛られた女。首だけ出し、或は、お尻だけを出して、あとはゴム布で包まれ、まるで紙袋の中に入れた人形の様に口を結わかれて、もがいている女。ゴムの股引き、ゴムの上衣に、ゴムの手袋をはめられ、口にはゴムマリをくわえさせられ、ゴムの鉢巻をされて、犬の様に四つ這いになって背中を男に男を乗せて、その重さに喘いでいる美女の写真などなど。

私は、知らず知らず、体中が、かあっと熱

くなってまいりました。

殊に、その中でも、私の目をひきつけたのは、裸の上からゴムのフンドシをきつく締められ、鼻の先だけ、ちょっとのぞく奇妙な頭巾を、すっぽりとかぶせられ、首で締められた紐を乳首の先でセロテープで止められているといった写真です。

両手、両足を、それぞれゴム紐で固定されている、その太った女は、鼻の穴に挿し込ましたゴムの棒の苦しさに、今にもクシャミしそうにしています。もし、クシャミでもして乳首の上で止めたセロテープでもはずれたりしたら、あの痛そうなゴムのムチが、豊満なお尻に容赦なく響くのじゃないかと、私は、思わず、ぞくぞくとしました。

その太った女の傍らには、太くて逞しいゴム製の棒状のムチを手にした男の影が、はつきりと写真にうつっていて、それが私に妖しい連想をさそい、全身を朱に染めてしまおうのでした。そんな私の心の動揺を見越したTは勝ち誇った様に私に命令しました。

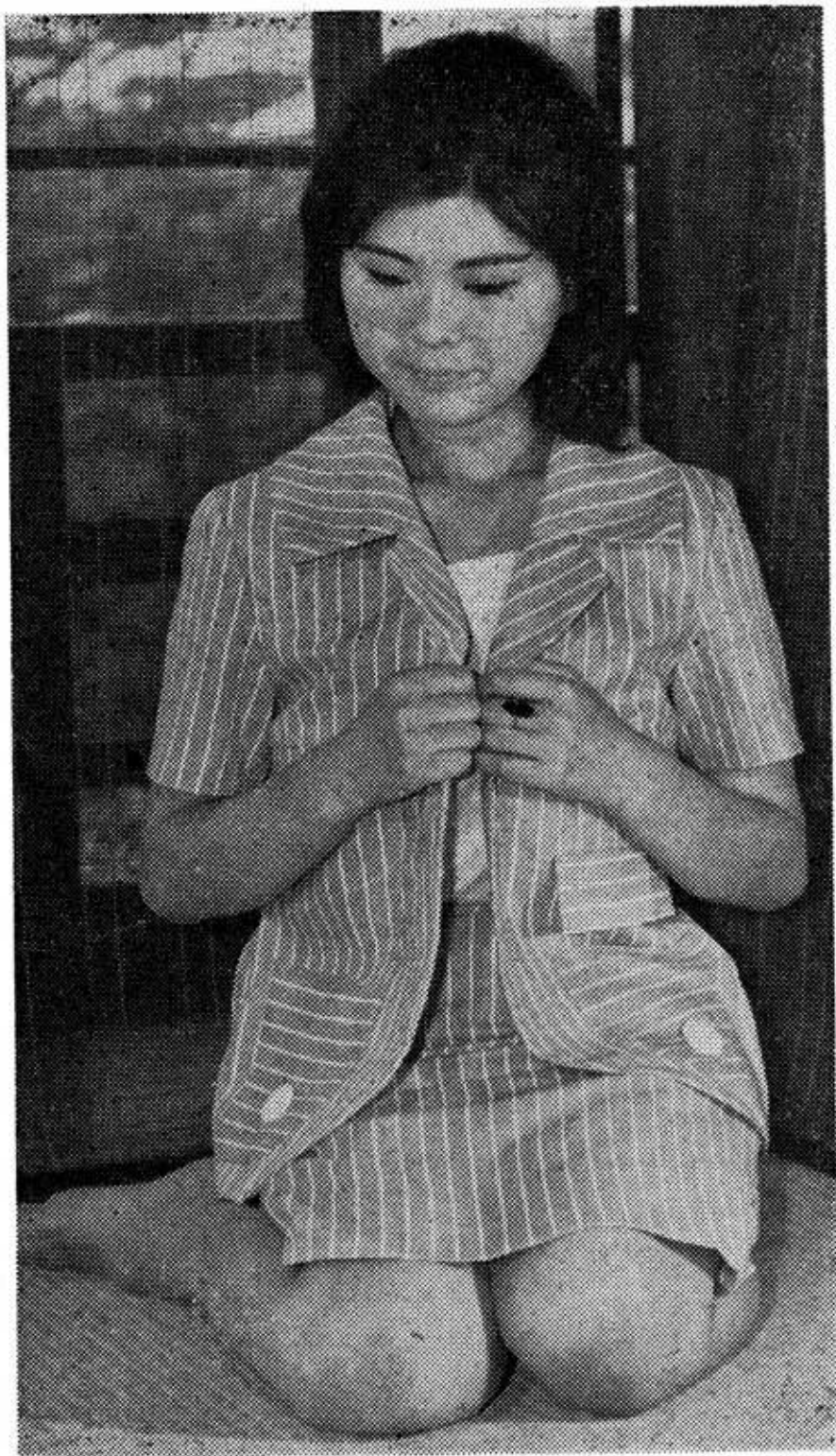
「さあ、裸になって、これを着るんだ」

私はTの指示に従って、素肌の上にゴムのレインコートをまとい、ゴム長をはき、ゴムの手袋をつけました。身体の内まで凍ってしまいそうなゴムのゾツとする冷たさ。私は、声も出さず、思わず、うっと呻きました。

Tは、そんな私の口に、ゴムの猿ぐつわを噛ませました。ああ、なんとというゴム臭い匂いでしょうか。ゴム臭いのです。

彼は、そんなゴムに包まれた私の姿を、スタンドを近づけて、ゆっくりと眺めながら、「ウフフフ」と薄気味わるく笑っています。その恥かしさに、私はいたたまれない気さえしました。着せられた時のゴムのあの冷たさは、今は少しも感じません。

Tは、素早く、私の右足と右手、右足と左



手とを、それぞれ片手片足ずつを、まるで荷物の様にゴム紐でくくってしまいました。くくられた時は、そうでもないのですが、ゴム紐というものは、段々と時間がたつに従って痛みが加わってくるのです。それにも増してヒキガエルが仰向けになった様なみじめな姿にされた私は、普段、運動をしていないため肩や脇腹は、ひきつる様に痛み、思わず涙がぼろぼろと流れました。

Tは、ゴム手袋をはめた手で、私の涙をぬ

ぐい乍ら、「これは、まだまだ前奏曲だ。こんな事ぐらいで弱音をはくな」と、情容赦ない無慈悲な言葉を浴びせかけてきます。

そのまま放置されているだけで、ゴム紐がふとった私の手足に喰い込んでくる痛さと、無格好な姿のみじめさで、噛まれたゴム臭い猿ぐつわの下で呻いていました。

Tは、私の両方の耳の穴に聴診器のゴムを挿し込んで、「自分の苦しみを、自分で、とくと、たしかめろ」と言うのと、聴診器を私の胸に当てました。ドッ、ドッ、ドッという自分の心臓の高鳴りが、切ないまでに私の耳に響いてきます。そればかりではありません。Tは、細いゴムの管を持ち出してきて、病人の様に、私の尿道に挿入したのです。

チクツとする痛み、私は又、涙を流さなければなりません。私の膀胱は刺戟されて耐えがたいまでになってきました。少しずつ、Tの捧げ持つ瓶の中へ尿がチョロチョロと、私の意志とは関係なく、流れたまっぴゃくではありませんか。私の心臓の高鳴りは聴診器を通して耳に伝わってきます。

私の心は波立ち、そのゴムの管の動きに、たまらない気持を味あわせられました。瓶に半分ほど尿がたまっただけは、もう出なくなりました。すると、ああ、どうでしょう。Tは、あの婦人科医の使う妙な器具を、私の体

の中へ入れてしまいました。

彼がネジを操作しますと、私の中で、それが、ふくらみ、ちぢみ、そして、ちぢんではふくらみました。私は、あまりの事に耐えがたいまでになってゆきました。そればかりではありません。二つの装置をつけさせたままの私のアヌスに、浣腸器の大きなビンの先についた黒いゴムの管が挿し込まれました。

「目を開けて、自分が一番美しい姿を、その目で、しっかりと見てみる」

Tは無情な言葉をかけてきます。Tの言葉に涙ぐもる目を開けますと、私の身体の穴という穴には、ゴムや器具が全部、挿し込まれた、みじめな姿が、目の前の三面鏡にうつし出されています。何のためと思う間もなく、ゴムの管をつたった浣腸液が私の体内に、どんどんと送り込まれてくるのです。

鏡にうつし出された、なんというみじめな私の姿でしょうか。鏡にうつる、そんな自分の浅間しい姿に、情ない気持を味わう間もなく、激しい便意が襲ってきて、下腹がきゅっとしめつけられる様に痛くなって、目を開けていられなくなってしまいました。

苦しみを訴えようにも、口にはゴムの猿ぐつわを噛まされていますので、ただ呻くばかりです。身体の外と内から、たえ間なく責められるので、私は間もなく、無我夢中の境地

に入ってしまった。

これがマゾの境地というのでしょうか。今までは空想でだけ味わっていた責めが、いや私の貧しい空想では、及びもつかなかった強烈な責めが私の身体という身体に加えられて私は猿ぐつわの下で泣きました。しかし、Tは、私を行くつく所まで行きつかせて下さいませんでした。やがて、両手両足のゴム紐がはずされ、すべての装置も、とりはずして、猿ぐつわも取ってしまいました。

便意だけは幾分、弱まったとはいえ、依然として、私を苦しめていました。

「やっ」と解放されたのだわVという安心で、ともすれば気がゆるんで洩れそうになるのを私は、△これだけは辛抱しなければ、とても恥かしいことになるVと、必死になって、我慢しておりました。

△トイレへ行かせてほしい。でも、そんな事を頼むのは恥かしい。なんとか、辛抱しなければ……いや、辛抱するのだわV

そんな悲しいまでの私の決心も、次のTの無情な言葉には、驚かされました。

「どうだ、トイレへ行きたいんだらう？ お前の顔に、そう書いてあるよ。今、ここで、私の目の前で排泄してみるかい」
「勘忍して。私には、そんな恥かしい事は出来ません。今までの責めだけでも、私にとっ

ては、生れて初めての大変な経験だったんです。ですから、このままトイレへ行かせて。ねえ、お願いです」

「じゃあ、そんなに頼むんだったら、トイレへ行かせてやろう。だが、そのかわりに、帰ってきたら、最後の楽しみに、うんと泣きわめいて貰うよ。大声で、うめき、泣くほど、この仕置は早くすむんだからな」

「さっきの様に、あれだけ恥かしい事を、私の身体にしておいて、まだ、もっと苦しい責めをするなんて、あんまりだわ。ああ、もう駄目。我慢出来ないわ。トイレへ行かせて。ねえ、ねえ、トイレへ……行かせて……」

私の声は悲鳴に近い哀れさでした。
「さあ、最後の仕置を、いさぎよく受ける覚悟だったら、トイレへ行っておいで」

私は浴衣を身にまとうと、あわてて、トイレへ走って行きました。思いっきり排泄した時の爽快さ。余り待たすと、彼が怒るかもしれないと思って、私は手を洗うのも、そこそこに、部屋へ戻りました。

驚いた事に、T自身も全身をゴム製品で包んで、まるでゴム人間みたいなのです。彼はそれで得意なのでしょうが、私には、なんだか、ゴムづくめで不気味に見えました。

「さあ、柱の前にくるんだ。ここで、うんと泣き喚いて貰う事にするかな」

Tはそう言って、私の浴衣をはぎ取るなり柱へ後手に縛りつけてしまいました。縛る道具は、やはりゴム紐です。とにかく、ゴムの好きなTです。そして、後手を括ったばかりではなく、事もあるうに、両足をも、大きく開けさせて、柱に括ってしまったのです。

さっきの、あの頭に血が昇る様な恥かしい責めの経験で、一種のマゾ的興奮を味わってしまった私は、このTの手で強行された無情なばかりの開股縛りにも、なんとも云えない期待を持って協力してしまいました。

勿論、羞かしさが、私の全身を朱に染めましたが、かたくなに抵抗する様な事は致しませんでした。マゾへの欲求と好奇心とが、私をして、そうさせてしまったのです。

私を、そんな風に柱に縛りつけてしまいましたと、Tの手が残忍に動いて太いゴムの棒、ギザギザのついたゴムの棒、硬くて真っ黒なゴムの棒など、何種類ものゴム製品が巧みに使い分けられて、私は彼の意のままに、呻き悶えました。彼は、そんな私の姿を鏡に映して見させようとするのです。

今や私は、目を開けて、そんな鏡に映った自分の姿を見る勇氣はありませんでした。柱に背を押つけて身をよじり、泣き叫んで、ケモノの様な吠声を発して、気狂いの様に大きな声を立てました。そうしなければならな

いようにTに操られてしまったのです。

Tの巧みな責め方によって、私はMの境地の素晴しさを身に泌みて味わいました。女にとって、こんな幸せは、またとありませんか。私は、Tにとことんまで責め抜かれて、遂に昇天してしまいました。

今となりましたは、只々、サディストの方のお情けを戴き、尊敬し、伏し拝み、自分は家畜の様に飼育され、奴隷の様にいじめられ汚い言葉で罵られたのでございます。

この私に『豚女、下司女』の境地を、思う存分、味あわせて頂きたいのでございます。

そういう仕打ちを、存分に受ける以外に、今の私の生きる望みはございません。あの遅いムチを、お尻に当てられましたら、私はそのムチに口づけして感謝の意を表したいと思えます。ムチを豊満なお尻におち当てられるたびに、私は思いつき大きな声で悲鳴を挙げて楽しみたいと願う今の私です。

住所すら告げずに、一夜で私の前から去って行ってしまったTの薄情さを恨むより、私を、この様に完全なMに仕立て上げてくれた彼に感謝すべきなのでしょう。

どうした事か、あれ以来、Tは二度と、私の目の前に姿を現わしません。もし、一身上に何か、起ったのでしょうか。私は心配いたしております。そして、許されるものならば

もう一度、マゾの私に、お情けを頂戴出来ないものかと、そのみ願っております。

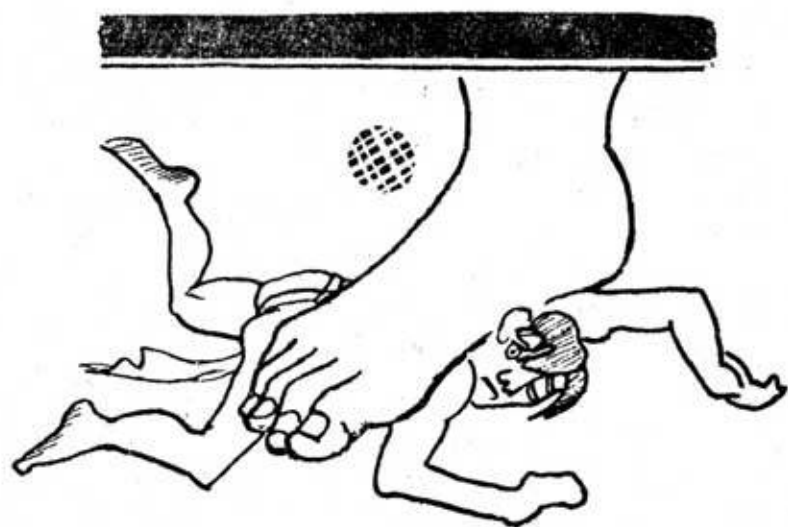
私の拙い経験を下手な文章で綴ってみましたが、奇巧の読者の皆さまのお目にとまれば幸いです。読者通信によって、T様のような素晴らしい男性をご紹介して頂きました、お礼と申しましては何ですが、このお手紙で、ご報告にかえたいと思います。

そして更に厚かましいお願いで恐縮でございますが、この様にマゾに目覚めさせられてしまいました私を、いじめてみたいと御思召しのSの方がございましたら、もう一度、ご紹介頂けませんでしょうか。

私の前に救世主が現われます様に、そののみを念じております。

S Mに、すっかり魅せられてしまった、この私を、どうか、T様のようにしていじめて下さい。Tは彼の好みによってゴムばかりを使われて責められましたが、私は別にゴム責めでなくてもいいのです。どのような責め方いじめ方でも、私は、この自分の体で経験してみたく思っております。それによって、私は、また新しいマゾの境地を味あわせて頂けるものと思っております。

私の年令、その他、一身上の詳しい事は72年10月号と73年2月号の読者通信に投稿して掲載して頂いております。



A

夜のエトランゼ

芳野眉美

石組みが見られる。

松や楓の景色も、すばらしい。

午後の日差しは、まだ強い。

汗を、かいたようだ。

八階の非常口は、あいていた。

廊下は無人であった。

靴音が自分でも、はっきりわかるように、

こつ、こつと、はね返る。

八〇七、八〇六……八〇一。

ポケットから、鍵を取り出した。

Aから書留で送られてきた、八〇一号室の

ドアの鍵である。

日時が指定したメモが一枚。それだけ。

鍵の音が潮騒しおさいのように胸をさわがせる。

中は暗い。

真昼から深夜へ。ここには時差がある。

奥の部屋から、かすかに、女の呻く声がした。

ドアに鍵をかける。

コルクのヒールが一足。男ものはAのに違

いない。

すでに、二人の行為は始まっている。

廊下に白いセーラー服とパンタロンが脱ぎ

捨ててある。マリルックの女なのだろう。

進行方向に、ビキニの水着を思わせるよう

な、花模様の、小さなブラジャーと、細くて

薄いパンティが、剥ぎ取られたように落ちて

いる。

丸まったままのパンティに手をのばす。ほ

のかな、ぬくもりは、まださめていない。

周囲に高層マンションがふえたのも、眼下に、旧大名屋敷あとの広大な池泉回遊式庭園が、ひろがっているからかもしれない。

静かな、たたずまいをみせていた古びた住宅街も、かなり様相を一変させていた。

非常階段から、大名庭園を見下ろしながらゆっくりと指定された部屋に上がっていく。

庭園の中心になる池はかなり雄大である。

緑泥片岩の板石を滝に見立てて、七五三の

女の甘い体臭にまじって尿の臭いがする。
ポケットにしまう。

「うう」

女の呻き声が大きくなる。

寢室のドアは、あいていた。

ベッドから、がくりと首を下に落としてい
る女と、視線が合った。女は全裸であった。

後手に縛られ、Aに足首をつかまれて、両
脚を裂かれている。女の、ひらいた両脚の間
に埋没しているAの顔は見えない。

女の口にゴム人形が差し込まれ、皮バンド
で固定されていた。ブロンズゴールドの長い
髪が、ベッドからカーペットに垂れている。

女の両脚の間から顔をもたげてAは、にや
りとした。

プロレスラーがかぶるような、目と鼻と口
があいている全頭式皮マスクが、Aの顔を包
んでいる。悪役のつもり。

「脱げ」

とAがいった。

私は赤いシャツにスラックス、それにブリ
ーフだけしか着ていない。脱ぐのは簡単だ。
全裸になって、ベッドの下にうずくまり、
ブロンズゴールドの長い髪を、指にからませ
る。

女は目を閉じている。

見知らぬ男が不意に現われたのである。内
心の羞恥は、かくせない。

「本物のほうがいいだろう。ユリ」

とAが女にいった。

「ユリ」とは可憐な名前だ。

「猿ぐつわをとって本物と交換してくれ」

贋物を本物と交換する、ということは……

ユリが深い溜息をついた。

ブロンズゴールドの長い髪を手を巻きつけ
首輪につけた鎖でも引っ張るように、手前に
ひきつける。

ユリの顔がゆがんで、目を開けた。

長い睫毛の下から、じっと見つめる。

濃いアイシャドウで、ふちどられた瞳が、

訴えるかのように、うるんでいる。

半開きの濡れた唇が、ひくひくと動いた。

そっと顔を近づけると、ユリが頭をもたげ
た。

唇が合わさると同時に、ユリの燃えるよう
な熱い舌が、勢いを増して挿入されてくる。

Aから私の話を聞いていたのに違いない。

ユリの積極的な行為がAのいいつけなのか
ユリ本来の性格なのか、それはわからない。

ユリのぼてっとした下唇は、やわらかい。

Aが立ち上った。

ユリの足首をつかんだまま、ユリの両脚の
間に体をあずける。

ユリの喘ぎは、舌を吸われて、私の口の中
に消える。

Aの唇と舌で、さんざん、なぶられていた
ユリの部分が、ふさがれる。

Aに背を向けて、ユリの顔を、またいだ。

完全にベッドから落ちたユリの頭を支え、
ゴム人形のかわりに本物で猿ぐつわをする。

「うっ」と、ユリが眉をひそめた。

ブロンズゴールドのしなやかな髪を、まる
で馬の手綱のように両側から分けて輪にし、

ユリの顔の上で、いいように反動をつける。

縛った女の調教は面白い。

ユリの舌は、つかれを知らない。

微妙な動きに腰が上がる。

女の舌の先にライターをのせるコマースャ
ルがある。

ひたひたとユリの顔を、それでたたく。

ユリの吐く息が荒くなった。

二人の男に同時に上と下を責められて、感
情が、ぐっと高ぶったのに違いない。

「足首を持っていてくれ」

とAがいった。

ユリの顔を、またがり直し、ユリの両足首をにぎって左右に裂く。

ユリの顔にべったりと坐ってしまった。

ユリの舌の先が、アヌスをさがしている。

顔を男の裸の尻で押し潰されても、ユリは逃げようとしなない。

「尻を舐めろ」と命令されたわけでもないのに、まさぐってくる。

「おかしい味がしても知らねえぞ」
思わず驚いて、そう叫んだ。

「いいの」

Aと顔を見合せた。

「ユリはMのほうが強い」

ユリを……させながら、Aはいった。

ユリの舌の先端が、こじあける。

「ちょっと」

足首をAに持たせ、ブロンズゴールドの長い髪をつかむと、左右に分けて腰にまわし、結べるところを腹で、まとめた。

ユリの顔は完全に尻の下に密着する。

ユリの足首を持ち直し、腰のあたりまで、ぐいと引きつける。

ユリの尻が天井を向いて露出された。
ユリの部分が、ひくひくと脈動して、ふわっと盛り上っているのに気がついた。

ユリはアヌスに性感を持っている。

Aに責められておぼえたのか？ それともそれがユリの性癖なのか？

Aはユリを責めている気配はない。

とすると……後手に縛ったユリの手を自由にしていたとしたら、ユリは顔を押し潰している男の尻を両手でひらくようにするかもしれないと思った。

Aが小型のバイブレーターの入った男の膣物を無造作に……した。

「あっ」と尻の下で、ユリは呻いた。

バイブレーターは小気味の良い音を立てている。

「感じる」

Aが、にやっとした。

ユリを、まさぐる舌の先が活発になった。

「そんなことしたら」

私はユリの顔にこすりつけながらいった。

「洩らしてしまうかもしれないぞ」

ユリの舌は、まるで排泄を促進させるのと同じ役目を果たしている。

それだけでなく、ユリは、男の排泄の残滓を、少しは舌に感じているはずであった。

いつもと逆であった。

ユリと私の位置が、あべこべであった。

「Mの女のほうが、責めるところを、よく知っている」

とAがいった。

「自分で責められてみたいと思うところを知っているから、男の興奮するところを、よく知っていて、上手に責めてくる」

そういう点は、たしかにある。

Mの心理は、やはり、Mの女でないとわからないのかもしれない。

バイブレーターの音が派手になる。

消え入りそうな喘ぎが、押し潰されたユリの顔から聞えた。

ユリの口に、小指ぐらいの可愛いものを思い切って排泄してみたい気になる。

私が、もしユリの立場だったら、顔を押し潰しているサディスティンの女王に

「ほしい」と、いつてしまうかもしれない。

その気になる……チャンスをつかむのは非常にむずかしい。

きたないものの代名詞のような行為を、美化する感覚に持ち込むのは困難なことに違いない。

羞恥の限界のような行為を、サディスティックな行為に転化させるのも、至難のわざだろう。

ユリが、もしそれを求めるならば、容易に実行に移してしまうのに違いない。

しかし、ユリが求めなければ、それ以上ユリを汚辱することはできない。

趣味の限界も、そこにある。

全頭式皮マスクの、プロレスラーの悪役のようなAが、顔を埋め、犬がミルクを飲むような官能的な音をあたりに振りまいた。

二人の男に責められているユリは、これまで、幾度か、エクスタシーに達していると思われた。

この点、女は男より、繰り返し性感を女体に受けていることになる。

「洩らしなよ、ユリ」

とAが顔をあげ、

「交代だ」

と私にいった。

「今なら、ユリは、自分の意志とは関係なくオシッコをしてしまう」

繰り返されるエクスタシーの波が、放尿という異常事態を引き起こしている。

排泄を制御する力が失われ、すべてが、ゆるんでしまうのだろうか。

盛り上りぎみのユリの部分は、噴火する寸前のように……いて、猥らな恰好を露呈し

ていた。

腹に巻いていたユリの長い髪をほどこき、ようやく私はユリの顔から尻を浮かせた。

ユリの顔をまたいだまま、ユリの顔を見下す。

ぎらぎらと輝くようなユリの視線に、たじたじとなる。

盛り上り、口をひらいたユリの部分に無造作に……れてみた。

「ああっ」

ユリは絶叫した。

人さし指が、すっと入る。

ユリのレクタムを人さし指で……す。

「ああっ」

人さし指に、ユリの……の壁が、ぴた

っと吸いついて、感情を高ぶらせる。

ユリの噴火口のように口をとがらす部分は人さし指と中指の二本も受け入れた。

バイブレーターと指と口の責めに、ユリの

天井に向かって高く突き出された尻が、やたらと、もがき始めた。

と、私の口に、ユリが洩らした、あたたかい尿が、まるで水鉄砲をうたれているように

びゅっ、びゅっと、飛び込んできた。

ユリの尿流は、すぐその太さを増し、勢い

をつけた。

私の口が、ぴたりと、吸いついているのが、ユリを安心させたのかもしれない。

B

バスタブに湯をため、汗を流して寝室に戻ったとき、Aとユリの立場が逆転していた。

後手股間縛りをされたAが、カーペットにひざまづいて、ベッドに腰掛けたユリの足の裏を舐めさせられていた。

Aの股間は、更に、皮の袋がついた奴隷帯で、すっぽりと包まれていたのである。

私はユリの腰を抱くような位置で、ベッドに横になった。

私の手がユリの体にのびたとき、ユリは、Aに片足をあずけたまま、ベッドに片膝を立て、私が容易に、さわれるようにしたのであった。

ブロンズゴールドの長い髪が汗ばんだ背中をかくし、ベッドに腰掛けたユリは、まるで妖精のように美しかった。

「痛い」とユリがいった。

ユリの素肌に爪を立ててしまったのかと私は、はっとして手を引っ込めた。

が、そうではなかった。

Aの歯が、ユリの足の裏にあたっただけらしいのである。

「下手ねえ」

とユリはAを見下していった。

「もう舐めさせてあげない」

皮の全頭式マスクをかぶったAの顔をユリは、けとばした。

Aは、だらしなく後ろにひっくり返った。

ユリが、ずっと私の胸に身体を、もたせてきた。

ユリのしなやかな指が私の体にのびた。

後手に縛られていたユリが、ようやく両手を自由にされたのだ。今度は、思うままに、男二人をあやつるつもりだった。

初対面の、コケテッシュなユリの指にさわられて、興奮しなかったらおかしい。

ユリが深い溜息をついた。

後手股間縛りに、奴隷帯をつけさせられたAが、ベッドの下に跪いて、あごをベッドに乗せ、じっと見つめている。

小型のバイブレーターを中に入れたゴム人形をユリはAの口に、ぐいと押し込んだ。

「これでも、しゃぶっておいで、ブタ」

私は上体を起こすと、私をまたいでいるユ

リを抱きしめ、ふっくらと可愛いく盛り上った乳房を吸った。

「ああ」

ユリが私の頭を抱きかかえた。

「うっ」

とベッドの下でAが呻いた。

「馬鹿だねえ」

とユリがAを振り返っていった。

「皮袋の奴隷帯をつけていることを忘れてはだめよ」

Aは、うなずいた。

「興奮すると、皮袋に締めつけられて、痛いよ」

と面白そうにユリは私にいった。

わかってるのだろうが、Aはかなり苦痛のようであった。

「二人きりだとそんなに痛がらないくせに」

とユリが、いった。

が、他人が一人、加わった今日はAも少々勝手が違うように見受けられた。

皮袋の奴隷帯をつけさせられても、いつもなら、そう痛がらないAが、今日は顔をゆが

めているのである。

第三者という刺戟剤の、せいであった。

私とユリは、抱き合ったまま、ゆっくりと

ベッドに倒れた。女上位である。

Aはゴム人形を吐き出して、

「がまんしろ」

と私にいった。

「ユリは学生なんだ」

私は、うなずいた。放出してしまえば、妊娠の危険性があるのは十分、承知のことだった。

妊娠から中絶と続く道は、その前で防止しておかなければならない。それが遊びのルールというものだろう。

「うるさいわねえ」

とユリがAにいった。

「だまっていらっしゃい」

「はい、女王様」

とAがいった。

Aに見せつけて、ユリと私は、ベッドの上を転がりまわった。

ユリの唇は、私の唇からはなれようとしなかった。

「いいのよ」

とユリが私に、ささやいた。

Aと反対のことをユリは、いっているのがある。

「大丈夫」

と私は、いった。
 「そのときになったら急いで逃げるから」
 「逃げなくてもいいわ」
 「身体のためには、そのほうがいい」
 「それなら」
 とユリがいった。

「そのときになったら教えて」
 「うん」
 「飲んであげるから」
 「えっ？」
 「飲みたい」
 「そんな」



イメージギャラリー

「アアこれが極楽だ」

岡 たかし

「いいの」
 「——」
 「ね」
 私は、うなずいた。
 「ユリ、お願いだ」
 とAがベッドの下でいった。
 「皮袋をとってくれないか」
 「うるさい」
 とユリが叫んだ。
 つと身体を起こすと、ベッドから下りた。
 「せっかくのムードが、めっちゃめっちゃだわ」
 どこまで本気か、演技かは、わからない。
 ユリは檣の棒を持って来ると、
 「足をひろげて」
 とAに命じた。
 おずおずとAが両脚をひろげた。
 ユリは、その檣の棒を膝の関節ではさみ、
 ぎりぎり縛りあげた。更に、檣の棒をはさんだまま、下肢を折りまげて、足首と太腿をくくりつけた。
 後手に縛られているAが、前につんのめった。Aの全体重を支えているのは、膝頭と肩であった。
 ユリは、先が数本にわかれている、短い皮の鞭をにぎると

「びしっ」

とAの裸の尻を打った。

「その恰好で、家中を這っておいで」

「そんな無茶な」

とAが呻いた。

「できないのかい？」

「――」

「女王様のいいつけが、きけないのかい？」

ユリの皮鞭が空を切った。

「びしっ」

「わかりました、女王様」

Aは悲鳴をあげた。

Aは、あまり鞭打ちが好きではない。

鞭の跡がつくのを極端にこわがっている。

それは、家に帰って、自宅の浴室に入ること

ともあろうか。下着をかえるとき、奥さんに

鞭のあとを発見されるのが、いやだからだと思

われる。

ここでは、皮鞭はサディスティクの飾りな

のである。いくら先が数本に分れている小さな

鞭でも、本気で打ったり、同じところを重

ねて打てば、傷はつく。

両膝の関節に檜の棒をはさんでAは、のろ

のろと這い始めた。

首を横にひねり、肩で上体を支え、両膝で

全体重を支える気持で、ユリの皮鞭に追い立

てられた。だが、いくら鞭で追われても、そ

う早く部屋を廻れるものではない。

膝と肩で進むことはかなり困難であった。

ユリは、Aが寝室から廊下に出るまで、鞭

を鳴らしていた。

「お許し下さい」

Aは鞭が肉体をはじけるたびに哀願した。

「そんなに打たないで下さい」

「早く行け」

しゃにむに、Aを寝室から追い出した。ユ

リが弾丸のようにベッドにダイビングした。

「ああ、やっと二人きりになれた」

「いいのですか、あんなことをして」

心配になって私はユリにきいた。

少々心配になってきたのである。

ユリは、Aの彼女なのである。

私は、あくまで、招待者であり、第三者な

のだ。

プレイのじゃまをするようなことがあって

は、まずい。

「いいのよ」

とユリはいつて、私の胸に倒れ込んだ。

「Aったら、とてもヤキモチ焼きなのよ」

Mの男は誰でも、そうだろう。

「上になって」

とユリがいった。

「ああっ」

とユリが呻いた。

ユリの体が微妙に動く。

「静かに」

と私はユリにいった。

「そのまま、じっとして」

この態位には弱いのである。それに、今ま

でに、さんざん遊んで、がまんをし続けてい

るのである。

二人きりになった正攻法では、とうてい、

がまんする気力もない。

すでに限界であった。

私は首を振った。

× × ×

荒い息を吐きながら、Aが寝室にもどって

きた。

ユリの命令通り、家の中を一周してきたの

だろう。まるで芋虫のように、くねくねと身

体を動かして、肩と膝で床を這っていた。

ユリはバルコニーのカーテンを開けた。

鎖のついた犬の首輪を、Aの首に、はめる

と、鎖を引っ張った。

「おいで」

無理にバルコニーまで引きずると、バルコニーの戸を開けた。

「二人きりでいたいからバルコニーに、いなさい」

「そんな無茶な」

とAが叫んだ。

「見られてしまう」

「誰も見ないわよ」

ユリは平気で答えた。

「それだけは許してくれ」

「許してくれとは何よ。女王様にむかって」

ユリはバルコニーに鎖をつなぐと、無理にAを追いつ出した。

上と下からは見られる心配はないが、両側のバルコニーに人が出て来たら、それで終りであった。

ユリがベッドから、ベッドカバーを持ち出し、バルコニーで小さくなっているAに、頭から、すっぽり、かぶせる。

「これなら、いいでしょう」

バルコニーの戸を閉め、更にカーテンも閉めた。

「これで安心」

とユリが笑った。

「あとで、いじめられるぞ」

「いいのよ、たまには刺戟的なことをしないと、飽きてしまう」

二人だけで、マンションの寝室でSMプレイにふけていても、やはりマンネリはあるものなのだろう。

Aの今度の招待の鍵にしても、刺戟を求めたかったからに、ほかならない。

「Aは、こんなことしないのだけど……」

とユリがキスをしながら私にいった。

「本当に食べられるものなの」

「えっ？」

「だって、食べたこと、あるでしょう」

「ああ」

私は、うなずいた。

ユリは、私の趣味のことをAから、かなりくわしく聞いているようであった。

「少しね」

「少し？」

「のどを通るぐらいの可愛いものならね」

「そう」

ユリは私の唇を指でつまんだり、はなしたりした。

「一度、食べさせてみたいのだけど……」

「えっ？」

女のほうから食べさせてみたい、という話

を持ってこられたのは始めてであった。

「今？」

ユリは、うなずいた。

「少し？」

「そうね」

「それなら」

「食べる？」

「喜んで」

ユリの噴火口のように盛り上がった部分がユリの願望を強烈に表現していた。

バルコニーの戸を、Aが、がたがたさせている。

「バスルームがいい」

ユリは、ブロンズゴールドの髪をなびかせて、ベッドから下り、私にむかって手を差しのべてきた。

私は這うようにして、ユリの方へ向った。

「さあ、入るのよ」

タイルの硬さが膝に痛い。

「なにを、ぐずぐずしてるのよ。早くう。食べたいんでしょ？」

ユリは、私をタイルの上に仰向けにしておいて、私の顔を跨いだ。

Aは、まだ、戸をがたがたさせていた。

——（おわり）——

カット・若江正史



(体験告白)

複婚の花嫁たち

プレイ妻

瞳 耀太郎

第一編 プレイ婚前

連絡を受けて私は彼の家を訪問することになった。電話なりペンの交流はあったけれども、訪問することの可否は礼を失しているように思われたが。瞳次郎氏御夫妻の御希望でもあるので思い切って訪問した。

彼は、まるで私を永年の知己のような気軽さで、喜んで迎えてくれ、心が和むのを感じ

られるのだった。彼の私室は美しくデザインされた若々しい事業家らしいインテリアルームだった。

夫人が現われたので私は軽く会釈を交わしたが、^{かもしか}羚羊のような強い腰バネの感じを与える温良しい麗人で、物腰は甘美な許りか瞳がうるんで素晴らしい美しさを描き出していた。黒耀石に似た輝きが私を捉えてしまった。夫人が退き、彼とは、いつ果てるともないSM談義に灯が、ともされた。

彼は自分の家庭や生活や愛情の捉え方について詳しく説明をしたので、私も自分の職業や家庭、生活背景などを語りつくし、話は次から次へと滾々と湧く水のように、絶える処を知らなかった。

彼は奇ク発刊からの読者であり、私もまた十四、五年來のファンであることを告げた。生活環境、趣味、夫婦の背後構成までも類似し、偶然とは言えない一元性を感じた。ペンネームといい、何か空間につながる生

命を感じ、急速な接近が運命づけられた。

精神的には距離を発見することは不可能だろう。驚きに似た親和感が拡がり始めた。

強いて差を求めるならば、彼が若いこと、ミリタリズム教育の中から生まれた私と、リベラルな育ちをした彼との差だけであり、愛を全うするためにリベラルな生き方をしていく妻への愛情。完全な燃焼を試みる愛のテクニク。SMを通して妻に求める愛のシンフォニーも同じ線上にあった。私達は彼達を、もっと早く知るべきだった。

組織の中核から逃れてリベラルを求める私にとって、徹底した彼のリベラリスト振りは正に希少価値のある存在であると思われた。私のためにナポレオンを切ってすすめた。通常はアルコール飲料を避ける私も、彼の素直な心に揺さぶられてグラスを傾け、厚意を率直に受け取った。

プレイに対する話が進み、私達が辿るプレイの話が次第に熱を帯びかけた。話が深くなり腕時計に目を走らせたとき、いつしか針は午後十時を過ぎていた。思わぬ長座に立ち上ろうとした時、彼は突然、言い出した。

「折角お越しになられたのですから、妻の身体を見てほしい」

軽く話をするだけと言おうとした時、彼が言葉を遮って席を立ち、室を出て夫人を呼びに行き、戻ってきた。彼は、彼の妻の環たまきさんについて細やかな話をして呉れた。僅かの間であったが、優しい物腰に私は魅かれるものを感じていた。

ドアを押して主人公の彼女が、入ってきた。夫人は「どうぞよろしく、お願い致します」と頭を垂れて、にこやかに微笑した。彼は立ち上るなり、環たまき夫人に服を脱ぐことを命じた。

「さあ、服を脱いで裸になれ。身体のすみずみまで見て頂くのだ」

彼女は、ためらい、顔を覆ってテレた。それが初々しく男心をくすぐり、私の胸は急に妖しく、ゆらめいた。

初対面から夫人の裸の艶姿を見ようとは予想もしていなかったからである、面くらったのは私だったかも知れない。打合せの下話が裸のお見合になろうとは……。

彼は隣の椅子に彼女を押しつけ、上衣を脱がせにかかり、ブラジャーが外され、腕で顔を覆う彼女の恥態に私は男としての感情が上りはじめたのを覚えている。胸もあらわになった彼女の乳房を、彼は乱暴に押しつかみ、

もみ上げ、私にも彼女の乳房を愛撫してくれようように求めて来た。

そこまで来た夫妻のもてなしに答えぬ訳には行かない。私は左手で彼女の右の乳房を軽く愛撫した。可愛いらしい乳首が私に愛の始まりを語りかけた。彼は彼女を起して私の膝へ押しつけた。両手でうけとめた彼女のしまった肉体が、私に膝から胸から指先から、彼女の女らしさが実感となって伝ってきた。

私は彼女を隣の椅子へ移したけれども、彼は彼の妻との何かを期待して照明あかりを消した。暗闇の中で彼と彼女、私の三人の呼吸が聞えていた。

会議の席から、ぬけ出して来た私の手にはカメラがあった。コスチュームをとって妻に見せてやりたいと思ったとき、彼は彼女の全裸をとった事がないのであってほしい。DPEをやるなら是非、という頼みが出された。

それは実にフランクな極く自然的な成行き経過で、何の抵抗もなく彼が熱望し、彼女もまた、それを望んだ。夫人の率直さが、私をまた魅せてしまった。

初めて素裸の写真を撮られるという夫人を前にして、手練れのカメラがフラッシュを伴って室内に走った。夫人の肉体のプロポー

シヨンは艶麗で、美しい肢態がフィルムの中に吸いとられ、光の筆が彼女の胸に腰に顔に花を咲かせた。

未だ経験のない夫人の彫像は私にとって女神であった、それは博物館の彫像ではない。生き生きとした赤い血の脈うつ成熟した女の恋にもだえる女の塑像が眼前に、眼下にあった。女の裸像には、いくら馴れた私でも、夫を前にしての妻のフィルムを収めとるのは初経験であった。心を落着けてフィルムに彼女を抱き取らせたのである。

彼のコスチューム姿の一枚をとり、麗花への見合写真にする準備にした。

「私達のお見合いは終わりましたね」

彼は、そう言って和やいだ話が投げかけられたが、私は妻の生理の都合もあるので、D日をデート日として辞去することにした。

「SM恋の処方箋、SM複婚への誘い」に示したように、プレイを通して私と彼との間には何一つ、遮るものはなくなるだろう。

双方が相対的にセカンドワイフ、セカンドハズを持ち、プレイ中はニューカップルとして契りがなされるであろう。

難点は妻の麗花である。初プレイは了解しているものの、いざとなったら、何を言い出

すかも知れないものを感じる。実行によって解決されることも、また、まぎれのない事実である。

彼の妻に送られて車の中に身体を沈めたと、車窓をうつ雨のビトーは、近づくデートへの秒読みに似ていた。

「プレイ日が待ち遠しいですね」と語った彼の次郎氏の声が、私の身体の中で、こだまして拡がって行く。

それは複婚が挙式されるときでもある。

第二編 プレイに花卉が開く時

一つの不安はやはり現実のものとなった。

頭で理解していても納得し切れない何か

麗花を言い知れぬ不安に包み込んだらしい。

十何年かの言葉を白紙に還すような発言さえ、した。

「あなたは、奥さんを熱愛していられるのですね。愛に対して、強い自信をもっていらっしゃる」

私は、どんな妻の怒りも、なだめ得る自信と、一貫した純愛の確信があった。麗花の発言は、それを疑っていると感じた。私は妻の麗花の、どんな我儘も無条件で許し得る心構

えは出来ていた。SMプレイの極致の樂園に共に入り、実施する必要が強く反作用した。身体を開いて蜜を吸いとらせることが、鋼鉄の意志の遂行が、私の熱愛を示す以外、何物でもないことを覚えた。ペンを夢にかえ、夢を事実に変える時は遂に来了。

私にとっても麗花にとっても、次郎氏夫妻にとっても、忘れ得ない記念すべき日となり私達は樂園に太陽を昇らせるだろう。しかし四人を一つとした混合プレイは、最初からは困難であることは明らかであった。ホテルのツインの部屋を二つ予約し、隣室続きを契約した。一つは私と彼の妻環の為であり、一つは彼と私の妻麗花の為であった。彼が私を信頼し切って、その妻も私に委ねることを了解したように。私は麗花を彼に委ねることを依頼し、プレイに入ることを、ためらいもなく実行することにした。

私は自室に麗花を入れて話し合った。これから彼の部屋で起るプレイについては全部、私の責任であることや、彼等夫妻の信望に応えるプレイを、くりひろげ、どんな求めにも応じてプレイを添い遂げることを求めた。

感情を押し殺して妻を説く私にとっては、嫁入りをする娘に、その夜の心得を教えるに

似ていた。

麗花が生まれて初めて、夫以外の男性の前で裸になり、プレイを展開し、最終的には彼に抱かれ、ポーズをつけられて秘果を与え、その夜の妻となるであろうことを告げた。

充分と心得を告げた上で、私は隣室をノックして、妻を彼のプライベートルームに連れて行った。

プライベートルームは、リラックスルーム・バスルーム・ベッドルームの三室から成り立っており、ベッドルームには、今日の麗花を迎えるプレイプランが十分となされている筈である。

妻が欲び燃え、或は泣きむせぶ準備は、なされている筈であった。そこから新しい幸せが立ち昇るように私は願った。

私のプライベートルームも同じである。やや構造が悪いが、彼の妻の愛号を受けるには充分であった。四人は二時間近く雑談をかわし、妻達に軽食をすすめた。腹ごしらえも終って、ようやく気分が和やいだときを見計らって、私は席を立った。

彼ら夫婦は麗花のために心を配って、麗花の安らぎを計ってくれ、呼吸は整った。次郎氏に妻とプレイに入るようにすすめ、私は彼

の妻をうながして私達は自室へ向った。

彼はその妻に、充分、私に応えてプレイをするようにすすめ、その身を私に託すのだった。

お互いが異なったカップルに組み合って、分れてのプレイに入ろうとしたのは、生まれて初めての初プレイの中で、心や体のシコリを一切、取り除いて、プレイに入ろうとする麗花への心遣いであった。妻の麗花が乱れに乱れて心からの豊かなプレイを、楽しんで貰おうとする私の心の配りでもあった。第二の初夜となる、その時の感激を妻達に味わせよう、満喫させようとする考慮でもあった。

お互いが同じように愛している最愛の妻を交歓の中で桃源境に導くことを念じていた。彼も又、私と同じ想いが去来していたのである。彼の妻を連れて室外へ出て外扉をしめた時、彼と麗花、私と環の二つの世界に引き裂かれ、新しい世界が誕生した。

彼の室で何が起ろうとも、私の知ることのできない内輪の宴であり、私の室で起ることも、また彼が知ることのできない、女蝶、男蝶の世界のことで、プレイに陶醉することが私達四人の課題であった。不安と期待、切なさや甘さが、それぞれにあった筈である。

彼と妻のプレイについては、次郎氏が筆で報告されることに期待しよう。彼と麗花とがそのベッドルームで繰り広げた愛の交歓は、後で断片的に語った麗花の言葉では、目を見はる鮮烈なものであったようだ。

引き続き濃厚なプレイの初夜体験を、私も喜んだのは当然のことであり、極めて自然なものだった。

彼の妻の環は実に魅力的だった。浴室に招き入れた彼女の背を私は流し、彼女もまた、私の背を流した。あの時に見た裸身を、今は遠慮なく鑑賞した。湯から上った私は、彼女をベッドルームに導き入れた。

彼女の浴衣の紐をとき、そのパンティを私がとり去った時、彼女が燃えた。羞恥に燃える彼女は美しかった。それは新鮮な感覚だった。環を羞恥責めすることにして肩口から乳房を責める。

柔らかく責める羞恥の乳房責めに彼女は首を左右へ振って、もだえた。膝に挟み込んだ花の素顔。私の体に廻した彼女の手が動きをとめる。自分でロックしたスタイルで責めにあえぐ。

彼女の息は荒々しくなり、私の手の中にある乳房や乳首を私は、ゆっくりと回転させ、

少しづつ脇腹を責める。彼女は目をつぶって責めに堪え、女の美しさを輝かせる。

どの位、たったのだろうか。私は一つの段階をすすめて次の羞恥責めに移る。指責の度に、彼女は真っ赤になって顔に紅葉を散らせ、陶酔の美を見せてくれた。小道具を使うまでもなく彼女はエキサイトして、女のいじらしさ美しさを余す処なく書き出した。

燃える女の美しさを記録したいと思ったが『今日だけは撮らないでほしい』という次郎氏の言葉を容れて、次の機会に譲ることにした。強いて写すことも可能であったが、彼の意志を尊重する私は、カメラは一切、使わなかった。次は燃える肢態をとるだろう、環と麗花の燃える女体を。

羞恥責めを通して、私達の心と肉体は、一つになりつつあった。彼の妻が、きつく私の胸をかみ、プレイの快さが走った。彼女の身体の間々まで私は磨き上げた。彼女は変ったプレイに驚いたろう。プレイが一段落をつける頃、彼女は女としての本能に、うめいた。彼女が激しく燃えるのを見届けて、私は身を返し、身体を開いた彼女の招客となった。彼女は蛇のように身体をからみつかせ、私の胸で哭いた。

むせび泣く彼女のいじらしさに、私は唇と乳房に接吻の雨をふらせた。何処かで彼女のたたくドラムの演奏を体で聞いた。

目を閉じて小鼻を動かし、途切れ途切れにむせび泣く快い彼女の歌が、私を甘く包み込んだ。

愛しい彼女、可愛い女、環よ！

波のうねりが、そこにあった。

約束の時間がやって来た。衣類をつけた私達が彼の部屋をノックしたが、ドアの内側は深海の底のように静かだった。作られている歴史の重みがあった。二、三度ノックを繰り返したとき、数分して遠い処で戸を開く音が二度して扉が小さく開かれ、次郎氏が顔を出した。

彼は一糸まとわぬ全裸であった。

『プレイの進行中です。御覧になりませんか。お入りなさい』

それだけ言うと彼は、あたふたと、また奥へ駆け込んで行った。間を置いてリラックスルームへ入ったとき、浴室の入口に彼の衣服があり、二、三尺、横に妻の衣服が全部、重ねてあった。

薄明りの中で、正面のベッドルームの戸が白々と光っていた。千金の重みをもって私達

と彼等との間を遮っていた。目を落した妻の衣服の上のブラジャーとパンティが、今、全裸で応えている妻の恥態を、雄弁に説明しているようだった。甘ずっぱい切なさ胸に、しみる。

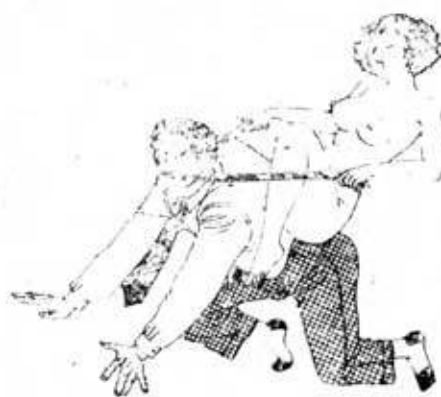
戸の向う側では彼と妻とが裸の女と男になって、在りのままの情熱を傾けているのだろう。麗花がベッドワイフとなったことは確定した事実となった。眺めてほしいとの彼の希望でもあったが、プレイの中で複婚の契りを遂げつつある妻が、さらに熱い思いをもって今は複婚を添い遂げてほしいと願った。自室へ戻ることを告げ、私は彼の妻を伴って自室へ戻った。

それから一時間近くたって、彼が迎えに来た。訪れた私達の前にプレイに殉じた妻の姿があった。四人は再び話はずませ、時間を計ってホテルを車で出た。

後で語った妻によれば、彼の……責めは精妙で、約一時間以上に及んだといい、体がふるえ、腿がケイレンを起したという。

次の機会には私は、それを見るだろう。

私達は四個の肉体を一つに融かして四つに分けた関係となった。羞恥責めは、やがて次郎氏から語られよう。私は差し控えたい。



私の女王像

平 原 誠 一

不敬を覚悟で

本誌「読者通信」を読むと、相変らず女王サマ求めのM男性が多いようだが、私のばあいの「女王サマ」は、すこし違うのである。性に飢えた男が吐け口のように飾り窓の女を求めるような、単純な気持で女王サマを求めることができぬ。どんな女王サマでもよいというのではなく、その資格、能力、条件、すべて私の要求するものが一つでも欠落している、もう駄目なのだ。

この「女王サマ不足時代」にゼイタクだという読者も多かるうが、そのへんの盛り場で遊び女を探すような安易な気持で、とうてい求めることはできないのである。だいいち、それでは女王サマに対してご不敬であるばか

りでなく、奴隷として、どこまで覚悟ができているか疑わしい。

では、どんな「女王サマ」でなければ駄目なのか。条件をいう前に一つの具体的な空想（ヘンな言葉だが）を述べよう。と、ここまですべて私の気持は不安で揺れるが、思い切って書く。私の「いきがい」は、こんなことを書くこと「不敬罪」になるかも知れぬが、今国民の間で、もっとも尊敬と親しみを受けておられる某妃殿下のお邸に、お履物掛りとして、ご奉仕することだ。

おそらく妃殿下のお履物は、外出用、お邸用、さまざまな高級靴が何十足、何百足とあることだろう。いったい誰が、この整理や清掃を担当しているのだろうか。まさか公務にご繁忙な妃殿下が、御自らお手をお汚しになることはあるまい。私は「お履物掛り」とし

て、それらの靴を丁寧に磨きあげ、整理しておく。

いざご外出というときは、織田信長における木下藤吉郎よろしく、懷中に暖めてご不快なきよう、ご用意する。妃殿下は、やさしいご満足の微笑を、優雅なお顔に浮べ、しかし私にお言葉をかけることなく、黙ってお履きになる。もっとも私はその床のすみに土下座して、ご玉体に視線をふれることなく、ただ恐惟して、それを見守るのである。ともかく少しでも失敗すれば、ご叱責を受ける。私は全身全霊を持って、こんなご奉仕を一生、つづけるのだ。もちろん「お履物掛り」の卑しい身分に、妃殿下へ私から、おはなしすることとはできない。この密封された真空状態こそ私の「具体的な空想」なのである。

本誌「読者通信」の奴隷志望者は、よく便

所掃除とか、お洗濯とか、はなはだしいときは、お鞭、人間馬、人間便器など勝手な要求をしているが、私にとって、そんな大それた願いは、まったくの具体性のない痴夢に過ぎぬのだ。だいいち、私の「女王サマ」はお美しく、やさしい方でないといけない。そんな尊厳なお方が、どうして下僕や使用人を、痛ぶったり責めたりすることを、好まれようか。

そうした「女王サマ」は、もっと下級の方であろう。そして私にとっての「女王サマ」は、全知、全能、神の如く完全で絶対的存在でなければならない。ところで私は、この某妃殿下のご真影を部屋の上に掲げて、毎朝夕うやうやしく遥拝している。ときに、あまりの高貴さ、あまりの威厳さに、からだが熱く内照り、感激の涙をこぼすことがある。ある夏、私は軽井沢で妃殿下が、ご家族の方とともに、気軽に草原を散策されているのを目撃した。

他の避暑客は、もの見高にお傍へあつまっていたが、私は、あまりの畏れおおさに、ただ遠くから、あの高山彦九郎のように土下座し、とうとう、お顔を拝むことさえ、できないでいた。そのとき私は、女王支配下における古代エジプトの奴隷、女帝時代のロシア農奴の幸福を、しみじみと羨み、ああ、この妃殿下が「帝王」となられたら？ と、また

また、ご不敬を覚悟で、とほうもない空想に酔ったことであった。

デビ夫人への憧れ

おなじMでも私のMは、どうも少し違うように思う。その違いの一つに、私は「女王サマ」の肉体的性を認めないことだ。女王サマに肉体的性があるとは、いけないのだ。かつて作家、南条範夫氏と村上元三氏のあいだに、ちよとした論争があった。たしか、『中央公論』誌上だったかと思うが、徳川封建制下における武士の忠君を、村上氏が武士道讃歌を捉えようとしたのに対し、南条氏は徳川支配下のマゾヒズムと規定しようというのが主旨だったように思う。つまり徳川体制のSに対し、被支配者のM的心情を、そのころ「残酷小説」を書いていた南条氏は咎めようとしていたわけだ。

このSM関係に肉体的性はない。あるのは醜郁とした精神性のみである。したがって、私は女王サマがあまり通俗的な肉性を所有しておられると困るのである。理想をいえば女王サマは、ノン・SEXでなければいけない。そして前記の妃殿下には、テレビや雑誌で拝論するかぎり、こんな通俗的な肉体的性は窺えないのである。当然のことだが、肉性の消去されたM的発想ほど純粋で鮮烈なものはない

のだ。

この点、団鬼六氏の大作「花と蛇」が、ムンムンする肉臭を感じさせるのと対照的といえよう。SとMの違いが、そこにある。むづかしいSM理論は私にはわからぬが、私流に言えばSが女性の肉体的性から発生するのに対し、Mはその精神性を条件とすることになるうか。

といっても、この論理に、大きな矛盾がある。第一、肉体的性のない女性なんて、あり得るだろうか。伊藤整の言葉ではないが、女性はある「あのセックスを下腹部に持って」いる。彼女らは「セックスや乳房や股や下腹部などが実在している」ことを二、三枚の布で蔽っただけで、「それが存在しないかのような仮の約束を皆で守り合って、しとやかに微笑したり、はにかんだり、気取ったりしている」(『氾濫』)のである。

どんな高貴な女帝、身分ある令夫人といえども、やはり彼女たちは肉体的属性から免れることはできぬ。私の「精神性M」に大きな嘘がひそんでいるのは否定できぬ。にもかかわらず私のM論は、肉をやはり霊の副次的存物と見ないかぎり、成立しないのだ。

さて、ここでもうおひとりの「女王サマ」への夢を告白したい。この方は前記の某妃殿下より、やや格が下がるので、「不敬罪」になっても、まさかギロチン台のおしおきを受

けぬと勝手に解釈し、実名をあげる。

それは、かの日本女性史上屈指の貴夫人、デビ夫人なのである。私はデビ夫人のスイスの宏壮なお邸に、下僕として生涯、お仕えする。ここでは「お履物掛け」より、やや昇格して、お洗濯、お掃除、お食事の世話、ご外出への付き添い、その他、日常性の雑事を受け持つ。デビ夫人はプライドが高く、気短かな面があつて、某妃殿下のごとく、ご寛容でないから、しばしば私は、ご叱責を受けるだろう。

ときには暴力を用いられるかも知れない。しかし、やはり日本の女性の中では五十年に一人、百年に一人のおやさしい貴夫人であることを私は信じる。どんなおしおき、責めを受けても、それは私が悪いに違いない。私のご奉仕できる稀有の女王サマの一人に違いないのだ。私は、たとえ家畜の如き待遇を受け、でも、生涯、変りなく忠勤できると、思うのだ。

「成り上り」の女王サマこそ理想

某妃殿下とデビ夫人、このお二人の出世、資質、環境はだいぶ異なっているようだ。しかし共通しているのは天性の美貌と、豊かな教養と、そして、もっとも女らしいおやさし

いご性格だろう。まったく正反対と見られるお二人に、もっとも共通しているのは、またお生れになった環境から、はるかに高い上流社会へ「成りあがつた」ということだ。「成りあがつた」という表現は卑俗で、いやだが仕方がない。

私にとって、さらに「女王サマ」の条件はこの「成りあがつた」経歴がないと、いけない。そこに、いっそうの親近感と畏怖感があるからだ。生れつきの上流社会、貴族階級ご出身の「女王サマ」には、私からいえば真の意味のS性に乏しい。冷たすぎるのである。しかし、私たちの世界から、まだ手の届きそうな階級出身の女王サマには、おなじ冷たさでも、ある種の虚構があり、SMにとってこの虚構こそ、いっそうその味わいと色艶を深めるのである。かつて女流作家林芙美子は下層社会出身だったが、功成り名遂げて「成りあがる」と、いつの間にか貴族社会に馴致して、過去に触れるのを、いやがった。反対に上流社会出身の宮本百合子は、文名馳せるにしたがつて、人民の中へ勇敢に埋没していった。百合子のプロレタリア文学がたとえ「お嬢サン芸」といわれても、その格調と香氣に定評があるのは、ご存知の通りだ。そして、どちらが「女王サマ」の素質があるかという

と、やはり「成りあがつた」あとの林芙美子だろう。百合子にない虚構の冷たさが、そこにあるからだ。こういう女王サマこそ、私の願うところである。

さて、もう少し格を下げて、日本におられる女王サマを探してみよう。これらの方は失礼ながらデビ夫人より、さらに格が下だから私はお鞭やお縄も、いただくことができるだろう。順位不動で並べてみると、美空ひばり、高峰秀子、曾野綾子、俵芽子、池坊保子、山下春江、佐藤愛子サマたちであろう。

犬飼道子、田辺聖子サマあたりは知性が豊かすぎ、山本リンダ、田中真理サマは肉体性がつよすぎて敬遠申しあげる。

ヤング歌手の中では、やはり、小柳ルミ子サマが、天地真理、アグネス・チャン、麻丘めぐみサマを抜いて、女王サマの資質十分。噂ではルミ子女王サマが、かなり、わがままで短気。年上の付人に靴下を洗わせると聞くが、できたら私を下僕として雇っていただけぬだろうか。

その他、私の女王サマとしては、高学歴のハイミスOL、高級官僚夫人、大手企業の重役夫人たちがよい。ホステス、トルコ娘、ヌードモデルなど、プロ的女王サマは、俗臭や打算があるようで、真からご奉仕できそうもないのである。